

拓殖大学大学院 言語教育研究科  
日本語教育学専攻 修士論文

〈所有〉の意味概念をもつ他動詞文の分析  
—語彙概念構造における「場所の焦点化」と「所有者の出来構造化」のプロセス—

Analysis on the Transitive Verb Sentences Having  
Conceptual Meaning of “Possession”  
—Processes of “Focusing on the Place” and “Restructuring of Possessor and Place”  
in the Lexical Conceptual Structure—

小柳 昇

指導教授：遠藤裕子教授

2009年1月

## 目次

1	はじめに.....	1
1.1	3つの疑問.....	1
1.1.1	意味論的には自動詞なのに他動詞文になっているのはなぜか？ .....	1
1.1.2	形態論的には自動詞なのに他動詞文になっているのはなぜか？ .....	3
1.1.3	実際の動作主を無視する他動詞文が成立するのはなぜか？ .....	5
1.2	本論文の目的とアプローチ.....	6
1.2.1	目的.....	6
1.2.2	語彙意味論からのアプローチ.....	6
1.2.3	他動詞文が生成される2つの動機付け.....	7
1.3	〈所有主体の他動詞文〉という見方.....	8
2	先行研究と問題提起.....	16
2.1	全体の概観と本論文の位置づけ（論点） .....	16
2.2	個別の研究と問題提起.....	20
2.2.1	A 〈自動詞的な他動詞文〉 .....	20
2.2.2	B 〈自動詞の形態をもつ他動詞文〉 .....	53
2.2.3	C 〈実際の動作主を無視する他動詞文〉 .....	61
2.3	まとめ.....	75
3	理論の枠組み .....	77
3.1	語彙概念構造と項構造.....	77
3.1.1	語彙概念構造.....	77
3.1.2	項構造.....	79
3.1.3	語彙概念構造と項構造の対応規則（linking rule） .....	81
3.2	BE と HAVE の関係.....	82
3.3	〈所有主体の他動詞文〉の基本.....	84
3.3.1	〈所有〉の概念構造と項構造、統語構造とのリンク .....	84
3.3.2	2つの内項と擬似的外項.....	86
3.3.3	Burzio の一般化について .....	87
3.3.4	〈所有主体の他動詞文〉の基本型と S 型・T 型の区別.....	89
3.3.5	〈所有主体の他動詞文〉の動詞の形態.....	98

3.3.6	〈所有主体の他動詞文〉としての解釈の問題.....	99
3.3.7	〈所有主体の他動詞文〉の受身化.....	101
3.4	〈所有主体の他動詞文〉の全体像.....	102
3.4.1	〈所有主体の他動詞文〉の範囲.....	102
3.4.2	展開（その1）：〈所有者の出来構造化〉と〈発生・消失〉の所有他動詞...	107
3.4.3	展開（その2）：〈変化〉の所有他動詞.....	116
3.4.4	展開（その3）：形態論的に見た所有主体の他動詞文.....	120
3.4.5	〈所有主体の他動詞文〉の全体像のまとめ.....	125
4	動詞と構文の分析.....	127
4.1	A 自動詞的な他動詞文.....	127
4.1.1	状態動詞の他動詞文の分析.....	127
4.1.2	「非対格他動詞」（影山 2002 b）の分析（「出す」と「～出す」）.....	153
4.1.3	「自発変化他動詞構文」（杉岡 2002）の分析.....	163
4.1.4	「状態変化主体の他動詞文」（天野 1987b）の分析.....	170
4.2	B 自動詞の形態をもつ他動詞文.....	180
4.2.1	両用動詞の位置づけ.....	180
4.2.2	有対自動詞の両用動詞化.....	186
4.2.3	3項述語と2項述語の関係と所有主体の他動詞文.....	202
4.3	C 実際の動作主を無視する他動詞文.....	212
4.3.1	「介在性の表現」（佐藤 1994）の分析（1）：分析の課題.....	212
4.3.2	「介在性の表現」の分析（2）：所有主体の他動詞文の拡張.....	217
4.4	分析のまとめ.....	224
5	結論.....	229
5.1	まとめ（本論文の意義）.....	229
5.2	今後の課題.....	230
註	.....	232
参考・引用文献	.....	240
謝辞	.....	244

## 図の目次

図 1 場所の焦点化	図 2 所有者の出来構造化.....	7
図 3 他動詞文を生成する動機付け [M1] [M2] .....		8
図 4 主語の意味役割の階層と M1、M2 の相互関係.....		11
図 5 語彙概念構造と動詞の分類 (影山 2002b : 120 より) .....		33
図 6 外界と文法の関係 (影山 1996 : 49) .....		77
図 7 場所の焦点化における図地反転.....		84
図 8 ベースとプロファイル (Langacker 1987:184 Fig.5.1 より) .....		91
図 9 他動詞文を生成する動機付けの M1 と M2 の相互関係.....		92
図 10 発生 2 と消失の概念.....		108
図 11 所有者の出来構造化 (=図 2) .....		110
図 12 参照点能力にかかわる認知プロセス .....		111
図 13 所有者の出来構造化と参照点の認知プロセス.....		112
図 14 メトニミーによる「入る」と「要る」のつながり .....		132
図 15 随伴と所有の関係.....		133
図 16 動きを表す「かかる」の概念.....		134
図 17 必要を意味する「かかる」の概念.....		134
図 18 「含む」のイメージ.....		138
図 19 「含む」「囲む」「覆う」のイメージ .....		147
図 20 三種の受身を作る動詞どうしの相互関係 (仁田 1997 : 234 より) .....		149
図 21 「はみ出る」と「はみ出す」(影山 2002b : 137 より) .....		162
図 22 「所有物の状態変化」と「所有者の位置変化」 .....		192
図 23 佐藤 (1994) が考える介在性の表現.....		216
図 24 介在性の表現の参与者と事態の局面の修正案.....		217

## 1 はじめに

本論文は、〈所有〉の意味概念をもつ他動詞文を分析したものである。第1節では、本論文の研究対象となる他動詞文を「3つの疑問」という形で提示し、それを踏まえて研究目的とアプローチを述べる。

### 1.1 3つの疑問

#### 1.1.1 意味論的には自動詞なのに他動詞文になっているのはなぜか？

ヲ格名詞句をとる文のすべてが他動詞文ではないという場合によく引き合いに出されるのが移動動詞である。「大通りを歩く」などのいわゆる経路を表す名詞句をとる移動動詞は、自動詞と見られるのが普通だが、他動性 (Hopper & Thompson 1980 など) という観点からすれば、同じヲ格をとる以上、何らかのつながりがあることは先行研究が示すとおりである<sup>1</sup>。

他動性とヲ格の付与について観察した場合に、もう1つの非常に興味深い事実がある。それは、(1)に挙げたような他動性が低い、つまり非意図的で自動詞的な事象を表しているにもかかわらず、ヲ格名詞を伴って他動詞文になっているものがあることである。自動詞と他動詞を区別する基準については、統語論的なものと意味論的なものがあるという考え方 (池上 1993) をとる。前者は「その動詞が目的語 (object) を伴わないかどうか、受動態化 (passivization) が可能かどうか」であり、後者は「<他動性> (transitivity) の程度に関わるもの」<sup>2</sup> (同書: 35) である。経路のヲ格をとる移動動詞は、その動詞の意味が完結する<sup>3</sup>のに最低限、移動する主体の存在があればよく、いわゆる一項述語であるのに対して、(1)の動詞は2項述語である。したがって、(1)の動詞は目的語にヲ格が付与されたと考え、統語論的には他動詞だとみる<sup>4</sup>。本論文が研究対象とするのはまず(1)のような、他動性が低く、非意図的な事象を表し、主語の意味役割を「動作主」とは解釈できない動詞文である。

(1) 意味論的に他動性が低い (=自動詞的な) 他動詞の文

- a. 二郎は転んで、骨を折った。(cf. 二郎は転んで、骨が折れた)
- b. 三郎は期末評価で成績を下げた。(cf. 三郎は期末評価で成績が下がった)
- c. 四郎は殴られて、骨を折った。(cf. 四郎は殴られて、骨が折れた)

- d. 四郎は空襲で、東京の家を焼いた。(cf. 四郎は空襲で、東京の家が焼けた)
- e. 台風は次第にスピードを速めた。(cf. 台風は次第にスピードが速まった)
- f. 相場は一気に値を上げた。(cf. 相場は、一気に値が上がった)
- g. 私はきのう財布をなくした。(cf. 私はきのう財布がなくなった)
- h. 妹はきのう熱を出した。(cf. 妹はきのう熱が出た)
- i. その会社は70年の歴史を持つ。(cf. その会社には70年の歴史がある)
- j. レモンはビタミンCを含む。(cf. レモンにはビタミンCがある)

括弧内の文が示しているように、自動詞文で表現される事象であるにもかかわらず、他動詞文で叙述できるのはなぜなのか。これが第一の疑問である。主語の意味役割が非動作主になっている(1)の文を、今後の議論のためにとりあえず次のように事象が表す意味特徴から5つに分類しておく。なお、次節の先行研究の紹介で取り上げるが、2)と3)はそれぞれ「状態変化主体の他動詞文」(天野 1987b)と「自発変化他動詞構文」(杉岡 2002)と呼ばれる構文と関係している。

## (2) 動詞が表す事象の意味から見た非動作主の主語をもつ他動詞文の分類

- 1) 主語の名詞句の動作が(結果的に)対象の変化を引き起こすことを表す。  
(つまり、主語の主体性が少なくとも認められる)
  - a. 二郎は転んで、骨を折った。(cf. 骨が折れる)
  - b. 三郎は期末評価で成績を下げた。(cf. 成績が下がる)
- 2) 主語の名詞句が変化を被ることを表す。  
(つまり、対象の変化を引き起こす動作主または原因がほかに存在する)
  - c. 四郎は殴られて、骨を折った。(cf. 骨が折れる)
  - d. 四郎は空襲で、東京の家を焼いた。(cf. 家が焼ける)
- 3) 主語名詞句が変化すること表している。
  - e. 台風は次第にスピードを速めた。(cf. スピードが速まった)
  - f. 相場は一気に値を上げた。(cf. 値が上がった)
- 4) 主語名詞句において対象が発生したり消滅したりすることを表す。
  - g. 私はきのう財布をなくした。(cf. 財布がなくなる)
  - h. 妹はきのう熱を出した。(cf. 熱が出る)

- 5) 主語名詞句が対象を所有していることを表す。
- i. その会社は70年の歴史を持つ。(cf. 70年の歴史がある)
  - j. レモンはビタミンCを含む。(cf. ビタミンCがある)

### 1.1.2 形態論的には自動詞なのに他動詞文になっているのはなぜか？

日本語は「開く－開ける」、「閉まる－閉める」のように、形態上、対をなす自動詞と他動詞が多いのが特徴である。有対自動詞は、対応する他動詞があるために、それが自動詞だと判断できる動詞だと言える。ヤコブセン (1989 : 221) はこれを「形態論上の他動性」と呼んだ。通常の有対自動詞は (3) に示すようにヲ格目的語をとらない。ところが、中には (4) のように目的語をとるユニークな自動詞が、少数ながらある。

- (3) a. \* ドアを閉まる。  
 b. \* 菓を溶ける。  
 c. \* ボタンを付く。

#### (4) 形態上の他動性が統語上の他動性とマッチしない動詞<sup>6</sup>

([A ⇔ B] はAとBが形態上対応する自他動詞であることを示している)

- a. 太郎が口をあいている。(cf. 太郎の口があいている)  
 [ヲあける ⇔ ガあく－ヲあく]
- b. 犬が尻尾を垂れている。(cf. 犬の尻尾が垂れている)  
 [ヲ垂らす ⇔ ガ垂れる－ヲ垂れる]
- c. 父は仕事を終わった。(cf. 父の仕事は終わった)  
 [ヲ終える ⇔ ガ終わる－ヲ終わる]

また、(5) のようないわゆる自他両用動詞と呼ばれる動詞も、(自他の意味のどちらが本来的かにかかわらず) 同じ形態に「～が」と「～を」が付くという点で (4) と同様のミスマッチが起きていると言える。そして (4) も (5) も、(1) と同様に同じ事象が自動詞を使っても表現できる点で共通している。

(5) 自他両用動詞で他動詞の場合でも同じ自動詞的な事象を表す動詞

- a. 川が水かさを増した。(cf. 川の水かさが増した) [ヲ増すーガ増す]
- b. エンジンが火を噴いた。(cf. エンジンから火が噴いた) [ヲ噴くーガ噴く]
- c. 干物が塩を吹いた。(cf. 干物に塩が吹いた) [ヲ吹くーガ吹く]

さらに、同様のミスマッチは「複他動詞」と「単他動詞」(奥津 1967) の関係にも認められる。奥津 (1967 : 60-61) では (6) の「教える」に対する「教わる」を「複他動詞の自動化」、(7) の「着る」に対する「着せる」を「単他動詞の他動化」と呼んだ。どちらも単他動詞のほうが2項述語で、複他動詞のほうが3項述語である。(8) も2項対3項述語という対立で、「含む」と「含める」に自他動詞の接辞の形態上の対立が認められるので、ここに入れておく<sup>7</sup>。これらの動詞は、自動詞の形態をもつ動詞がヲ格目的語をとり、統語上は他動詞になっている。

- (6) a. 山田さんは木村先生に英語を教わった。 [ヲ教わる ⇔ ヲ教える]
- b. 山田さんは友達から鍵を預かった。 [ヲ預かる ⇔ ヲ預ける]
- (7) a. 山田さんはぼうしを被った。 [ヲ被る ⇔ ヲ被せる]
- b. 山田さんはセーターを着た。 [ヲ着る ⇔ ヲ着せる]
- c. 山田さんは水を浴びた。 [ヲ浴びる ⇔ ヲ浴びせる]
- (8) レモンはビタミンCを含む。(= 1j) [ヲ含む ⇔ ヲ含める]

(6) の「教わる」「預かる」は自動詞化の接辞「-ar(u)」をもつので、形態上は自動詞だが<sup>8</sup>、目的語をとり、統語上は他動詞になっている。(7) (8) は、形態上自動詞であると認めることに違和感があるかもしれないが、(7) は自動詞「-ru」と他動詞「-su」(口語形「-seru」) の対応<sup>9</sup>、(8) は自動詞「-(u)」と他動詞「-er(u)」の対応になっている<sup>10</sup>。

(6) は授受の意味を表す動詞である。(7) の単他動詞は着点が自分自身に指定されている再帰動詞である。(8) の「含む」は二者の関係(所有)を表している。これらの他動詞文も本論文の研究対象である。なぜ(4)～(8)は形態上自動詞であるにもかかわらず、ヲ格名詞をとることができるのか、どのような動機付けがあつてヲ格をとるのか。これが第二の疑問点である。先に挙げた(1)との共通点は他動性のミスマッチであり、(9)のようにまとめられる。以後、それぞれ〈 〉に示した呼称を用いることにする。

(9) 他動性のミスマッチが認められる他動詞文

1) 意味論的には自動詞的だが、統語論上はヲ格を伴って他動詞になっている文で、同様の事態を自動詞で表現できる。

= 〈自動詞的な他動詞文〉・・・(1) の文

2) 形態論的には自動詞だが、統語論上はヲ格目的語を伴って他動詞になっている文で、同様の事態を「～ガ自動詞」で表現できる。

= 〈自動詞の形態をもつ他動詞文〉

・有対自動詞で、同じ形の自動詞がヲ格目的語をとる場合

= 〈有対自動詞がヲ格をとる他動詞文〉・・・(4) の文

・自他両用動詞で、同じ形の動詞がヲ格目的語をとる場合

= 〈両用動詞がヲ格をとる他動詞文〉・・・(5) の文

・複他動詞と単他動詞の関係にある動詞で単他動詞がヲ格目的語をとる場合

= 〈単他動詞がヲ格をとる他動詞文〉・・・(6) (7) (8) の文

1.1.3 実際の動作主を無視する他動詞文が成立するのはなぜか？

(10) は佐藤 (1994) が「介在性の表現」と呼んだものであるが、他動詞文としてはやや特殊である<sup>11</sup>。

(10) a. 田中さんは美容院で髪を切った。(「美容師に切ってもらった」の意味)

(cf. (田中さんが依頼して) だれか(美容師) が、田中さんの髪を切った)

↑使役者

↑実際の動作主 (=被使役者)

b. 田中さんは病院で注射をした。(「医師にしてもらった」の意味)

(cf. (田中さんが依頼して) だれか(医者) が、田中さんに注射をした)

c. 将軍は村人を皆殺しにした。(「部下にさせた」の意味)

(cf. (将軍が命令して) だれか(部下) が、将軍のために村人を皆殺しにした)

(10) は「話者が実際には存在する被使役者を無視して、あたかも主語自身がすべての過程を自分で行ったかのようにとらえている表現」(佐藤 1994 : 57) である。つまり、使役変化動詞を用いながら、実際の (使役) 動作主が主語になっていないという点で特殊な

他動詞文である。このような文を〈実際の主語を無視する他動詞文〉と呼ぶことにする。なぜこのような他動詞文が成立するのか。これが第三の疑問点である。

## 1.2 本論文の目的とアプローチ

### 1.2.1 目的

本論文の目的は、1.1 で示した3つの疑問を解決すべく統一的な理論を示して、問題とした他動詞文の生成メカニズムを明らかにすることである。一見別々の要因に支配されているかに見えるこの3つの疑問点は、問題となる他動詞文を、〈所有〉の意味概念をもつ他動詞文の生成とその拡張事例であるとみることによって統一的に説明できるというのが本論文の主張である。本論文の〈所有〉の意味概念をもつ他動詞文の分析は、認知主体の外界事象の把握の仕方へのかかわり方として、従来の他動性のスケールに基づいた他動詞対自動詞という対立だけでなく、〈存在〉対〈所有〉という対立に目を向けることである。

日本語は「BE型」言語（池上1981）と言われ、〈所有〉の概念が「ある」（いる）で表現されることを基本とするが、実は〈所有〉の意味概念をもつ他動詞（文）が数多く存在し、それが自動詞文、（使役）他動詞文との相互関係の中で日本語の表現を豊かにしていることを明らかにする。また、日本語は人間がもつ参照点能力によって形成される参照点構造（Langacker 1993）に対して敏感な言語で、それが言語形式に反映されやすいと考えられるが<sup>12</sup>、本論文が主張する〈所有〉の意味概念をもつ他動詞文が、それを示す1つの事例であることを示す。

### 1.2.2 語彙意味論からのアプローチ

語彙意味論的アプローチとは、「動詞の統語的用法はその語彙的意味によって決まる」という作業仮説に基づいたアプローチで、「レキシコンは文法の付録であり基本的な不規則形の一覧表に過ぎない」（Bloomfield 1933、訳は影山1996：5）というテーゼに対抗する形で、70年代の生成意味論（Generative Semantics）を経て、80年代以降に1つの理論的アプローチを形成した。（Jackendoff 1983, 1990、Levin & Rappaport Hovav 1995 など）本論文は、統語的な振る舞いは語彙の意味と深く結びついているという語彙意味論的な立場に立ち、語彙概念構造（LCS：Lexical Conceptual Structure）を通して、上述の3つの疑問の答えを導き出す。LCSを用いて分析するメリットは、「よく似た意味関係をあらかず動詞をいくつかのグループに分け、各々のグループに共通した統語的なふるまいを見

直（す）」（今泉 2003 : 25）ことによって、文の表層構造からは見えてこない部分を明らかにすることができるからである。

また「人間の言語の意味構造はかなりの程度まで普遍的であり、それをどのように語彙化するか（どのような語彙を用いてどのように表現するか）というパターンが個々の言語において異なっている」（影山 1996 : 6-7）という見方に立ち、日本語らしい語彙化のパターン、および拡張のパターンを〈所有〉の意味概念をもつ他動詞文の生成とその拡張事例によって示したい。本論文が重視するのは、外界認知と語彙化のインターフェースである語彙概念構造レベルでおこる変換である。中でも日本語の場合、「場所の焦点化」（図1）と「所有者の出来（しゅったい）構造化」<sup>13</sup>（図2）の2つが重要であると考えられる。

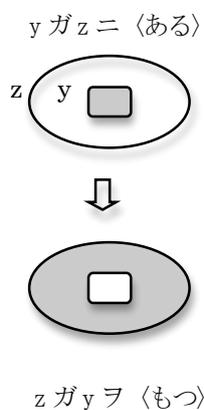


図 1 場所の焦点化

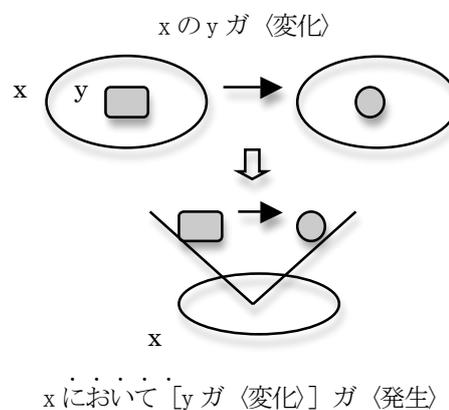


図 2 所有者の出来構造化

### 1.2.3 他動詞文が生成される2つの動機付け

〈所有〉の意味概念をもつ他動詞文の生成とその拡張事例を考察することは、これまであまり注目されてこなかった側面に注目することでもある。自動詞的な事象でありながら、または形態的に自動詞でありながら、ヲ格目的語をたてて統語的に他動詞であろうとする理由は何か。また、実際の動作主を無視した他動詞文が成立する理由は何か。それは、図3に示したように、対格のヲ格を付与するシステムが2つ、つまり他動詞のタイプが2つ存在する<sup>14</sup>ことによるとみるのが本論文の考え方である。

他動性の高低によって他動詞文または自動詞文を生成する動機付けを [Motivation 1] (以下 [M1] と略す) と呼ぶことにする。〈他動的な他動詞〉がヲ格を付与されるのは他動性の高さによって裏づけられている。一方、〈自動詞的な他動詞文〉および〈自動詞の形

態をもつ他動詞文)の生成にはこれとは異なる動機付けが関与していると考えられる。

[M1]が他動性と平行する形で働くとするなら、その異なる動機付けは自動詞側から垂直方向に他動詞を生成する方向に働く。このような自動詞的な事象を統語的に自動詞文または他動詞文として生成する動機付けを[Motivation 2] (以下[M2]と略す)と呼ぶことにする。この[M2]は具体的には図1、図2に示した「場所の焦点化」と「所有者の出来構造化」という認知的な事象の把握の有無だと考える。この[M2]によって生成される〈自動詞的な他動詞〉がいかにしてヲ格を付与されるのか。それは解決しなければならない課題であり、本論文で結論を出す。従来の研究では[M1]にのみ注意が向かい、[M2]からのアプローチはあまり注目されなかった。この[M2]にも焦点を当て、2つの動機付けの側面を視野に入れたところに本論文の意義がある<sup>15</sup>。

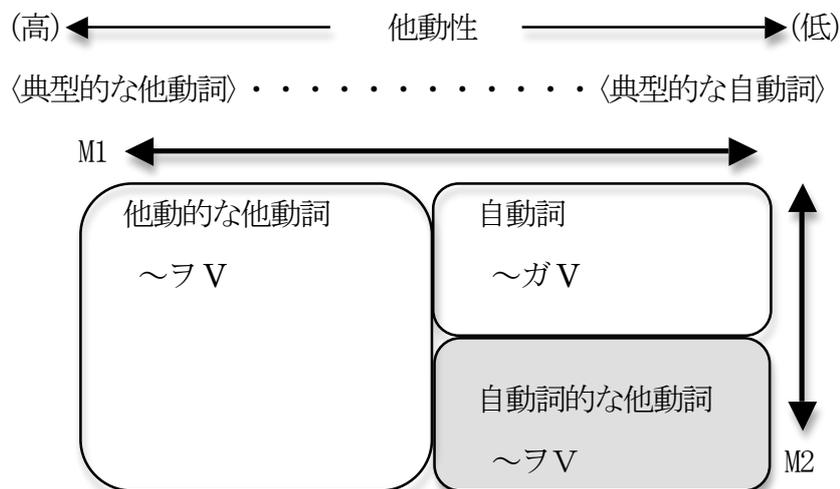


図3 他動詞文を生成する動機付け [M1] [M2]

### 1.3 〈所有主体の他動詞文〉という見方

ここで、1.1で提示した疑問点と1.2で示した目的とアプローチのまとめとして、本論文が研究対象とする自他動詞の構文の全体を概観しておく。問題とする他動詞文については、今後の議論のために、(11)に示したようにA~Cの記号をつけておく。

#### (11) 3つの疑問点と他動詞文

① 意味論的には自動詞なのに他動詞文になっているのはなぜか。

→ A 〈自動詞的な他動詞文〉・・・(1)の文

② 形態論的には自動詞なのに他動詞文になっているのはなぜか。

→ B 〈自動詞の形態をもつ他動詞文〉

B-1 〈有対自動詞がヲ格をとる他動詞文〉・・・(4)の文

B-2 〈両用動詞がヲ格をとる他動詞文〉・・・(5)の文

B-3 〈単他動詞がヲ格をとる他動詞文〉・・・(6)(7)(8)の文

③ 実際の動作主を無視する他動詞文が成立するのはなぜか。

→ C 〈実際の動作主を無視する他動詞文〉

「介在性の表現」(佐藤 1994、2005)・・・(10)の文

これらの疑問に答えるためには、まず図3に示したM2によって生成される他動詞文がどのようなものなのかを明らかにしなければならない。そこで、本論文が研究対象としてとりあげる自動詞・他動詞の構文を、主語の意味役割を考慮して(12)のように整理する。意味役割はほかにもあり、格との対応も一様ではないが、ここでは他動詞文でヲ格目的語をとるものだけを取り上げている<sup>16</sup>。「動作主」は意図的な行為を行う主体であり、「原因」は変件事象の原因となるものである。「経験者」の扱いは本論文で重要な意味をもつ。伝統的に経験者は「述語に表される感情や心的状態を経験する側」(長谷川 1999: 37)と考えられているが、本論文では、基本的に「心理・感情の持ち主」として「所有者」に含める立場をとる。また「経験者」は広く「非意図的に事象の成立に関与する(=経験する)立場の者」という意味で使われる場合もあるが(井上 1976 など)、そのような立場の者も「イベントの所有者」と考え、「所有者」の意味役割をもつと考える。しかし、狭義にろ広義にしる、制御可能性の有無という視点では他動性のスケール(M1)の低い方に位置している他動詞文と考えることができる。本論文はM1とM2は個別の独立したものとは考えず、認知主体の事態の把握の仕方による違いであり、それはつながりと重なりがあると考え。そこで本論文では、図4の下側に示したように、従来「経験者」と呼ばれていたものはM1のスケール上では右側に位置する一方で、M2によって生成される他動詞文の「所有者」と重なっていると考える<sup>17</sup>。

そして(12③)の「主語が所有者(モノ・心理・感情・知識・イベントなどの所有)の意味役割をもつ他動詞文」を〈所有〉の意味概念をもつ他動詞文と位置づけ、M2によって生成されるこの他動詞文を〈所有主体の他動詞文〉と呼ぶことにする。また、M1によってヲ格目的語を付与される使役変化(他)動詞と区別して、M2のよって所有主体の他

動詞文をつくる動詞を〈所有他動詞〉と呼ぶことにする。M1 と M2 について、その相互関係を図4に示す<sup>18</sup>。図中の①～④は(12)のそれと対応している。

(12) 主語の意味役割の階層と意味概念

※ 〈する〉 〈もつ〉 〈なる〉 〈ある〉 は動詞の意味概念を表す。

- ① 動作主 ガ 対象 ヲ 〈する〉
- ② 原因 ガ 対象 ヲ 〈する〉 (※ 「原因ガ経験者ヲ 〈する〉」を含む)
- ③ 所有者 ガ 対象 ヲ 〈もつ〉 (※ 「経験者」の意味役割を含む)
- ④ 対象 ガ 〈なる〉  
対象 ガ 〈ある〉

図4では左側が通常他動詞文で、右上段が自動詞文である。この二組は他動性の高低に対応しており、他動詞文はM1によって生成され、ヲ格を付与される。主語の意味役割は①～③/④の順番で他動性が低下していると考えられる。そして自動詞になると、主語は対象の意味役割を持つ。自動詞の意味概念は大きく2つ、〈なる〉と〈ある〉に分けられるが、図4では、左側の〈変化〉〈移動〉は限界性を持たない(atelicな)動詞で、右側の〈状態〉〈存在〉は、〈変化〉〈移動〉で限界性をもつ(telicな)動詞と状態性の動詞の2つを含んでいる。〈なる〉と〈ある〉の中間的な存在として「発生・消失」を真ん中に配置している。右下段の網掛けされている領域が〈所有主体の他動詞文〉である。自動詞のa～cと対応してa'～c'がある。〈所有〉の概念の詳細は第3節に譲るが、大きく「モノ所有」と「Event所有」(以下、「Ev所有」と略す)の2つに分けられる。

全体を概観するにあたり重要な点は、所有主体の他動詞文の生成には2つのタイプがあるということである。1つは「★」と実線の矢印で示されたパターンで(13a)、もう1つは点線と「・」の結びつき<sup>19</sup>、および実線の矢印で示されたパターンである(13b)。

(13) 〈所有主体の他動詞文〉の2つの生成パターン

- a. 自動詞からM2によって直接生成される。(★——→・)
- b. M1とM2の共演によって生成される。(……………・——→・)



使役変化動詞 1～3<sup>20</sup>と自動詞の領域の a～c が対応する点 ‘・’ を、それぞれ a1, a3, b2, c1, c3 とする<sup>21</sup>。これは形態上、対になっている自他動詞が該当する。それがさらに所有他動詞の領域の a'～c'にある点 ‘・’ と結び付いている場合、それぞれを a'1, a'3, b'2, c'1, c'3 とする。なお、自動詞の領域の ‘★’ から直接生成されているものは ‘0’ を付けて、a'0, b'0, c'0 とする。なお、図4には表示されていないが、a については ‘0’ 以外に ‘0\*’ ‘0+’ が存在する<sup>22</sup>。‘0’ は「存在」の意味概念を表し、‘0\*’ は「移動+存在」、‘0+’ は「変化+状態」で限界性をもつ変件事象を表す。したがって、‘a’ もそれに応じて ‘a'0’ と ‘a'0\*’ ‘a'0+’ の3つが存在する。‘★’ と ‘・’ にそれぞれ該当する動詞は次のとおりである。

(14) 図4の使役変化動詞、自動詞、所有他動詞の例と対応関係

〈使役変化動詞〉	〈自動詞〉	〈所有他動詞〉
0 : ー	a0 : (ビタミンが) ある	a'0 : (ビタミンを) 含む
	a0 : (危険が) 伴う	a'0 : (危険を) 伴う
0* : つける <sup>23</sup>	a0* : (手が) つく	a'0* : (手を) つく
0+ : 垂らす <sup>24</sup>	a0+ : (尻尾が) 垂れる	a'0+ : (尻尾を) 垂れる
1 : 持つ	a1 : (家が) ある	a'1 : (家を) 持つ
(人が x をトラックに)	(トラックに x が)	(トラックが x を)
載せる	a1 : ある	a'1 : 載せる <sup>25</sup>
3 : 折る	a3 : (骨が) 折れる	a'3 : (骨を) 折る
.....		
0 : ー	b0 : (火が) 噴く	b'0 : (火を) 噴く <sup>26</sup>
2 : 作る	b2 : (こぶが) できる	b'2 : (こぶを) 作る
.....		
0 : ー	c0 : (水が) 増す	c'0 : (水を) 増す <sup>27</sup>
1 : 流す	c1 : (血が) 流れる	c'1 : (血を) 流す
3 : 速める	c3 : (スピードが) 速まる	c'3 : (スピードを) 速める

以上、限られた動詞しか提示していないが、本論文の研究対象となる自動詞と他動詞の相互関係の概略が掴めたと思う。このような枠組みの中で (11) に示した A と B-1、B

ー2の疑問点を解決していく。なお、A〈自動詞的な他動詞文〉については、1つの事象が自動詞でも他動詞でも表現できるものを対象としており、自動詞ではなく形容詞述語になるものは取り上げていない。「山田さんは甘いお菓子が好きだ」に対する「山田さんは甘いお菓子を好む」、「山田さんは彼の死が悲しい」に対する「山田さんは彼の死を悲しむ」など、主語が経験者の意味役割をもつ他動詞文も、本論文が主張する所有主体の他動詞文の枠組みで分析可能だと考えるが、心理動詞の構文はまた稿を改めて論じることにする。

また、B-3の疑問に答えるには、所有主体の他動詞文をベースに、「脱使役化」または「反使役化」（影山1996）による自動詞化あるいは「使役主の付加」による他動詞化、あるいは「外項と場所項の同定」などの語彙概念構造における変換を考えなければならないことを、第4節で論じる。さらに、Cの疑問については、〈所有主体の他動詞文〉の拡張として捉えることで説明できることを示す。この拡張の詳細は第4節に譲るが、概略(15)のような「実際の動作主の脱焦点化」と所有主体の他動詞文の概念構造における「項の格上げ」という拡張を仮定する。

(15) 〈所有主体の他動詞文〉の拡張 → 「介在性の表現」（佐藤1994、2005）

「使役変化」の語彙概念構造における実際の〈動作主〉の脱焦点化と〈所有者〉主語の焦点化による主語の交替、つまり〈所有者〉主語から疑似的〈動作主〉主語への格上げが起こる。

このような語彙意味論的なアプローチと他動詞文を生成する2つの動機付けという側面からのアプローチによって、日本語における〈所有主体の他動詞文〉の存在とその拡張の重要性が認識されるものと考えられる。

なお、1.1.1で挙げた(1c, d)「状態変化主体の他動詞文」（天野1987b）は、「対象の変化を引き起こす動作主または原因がほかに存在する」と書いたが、これはCの〈実際の主語を無視する他動詞文〉とはやや性格を異にする。確かに(16)のように考えた場合には、その類似性からこれを〈実際の主語を無視する他動詞文〉と呼べるかもしれない。しかし、介在性の表現と状態変化主体の他動詞文は(17)の1)～3)の点で異なる。2)と3)は1)に起因する統語上の振る舞いである。

(16) a. 美容師が、(美容院で) 田中さんの髪を切った。  
→田中さんは(美容院で) 髪を切った。(介在性の表現) (=10a)

b. 友達が(殴って)、四郎の骨を折った。  
→四郎は(殴られて) 骨を折った。(状態変化主体の他動詞文)

(17) a. 介在性の表現：「田中さんは美容院で髪を切った」

1) 事態の成立において、主語にたつ人の主体的な関与が認められる。

(※主語にたつ人は〈受益者〉であると同時に〈使役者〉でもある)

2) 同じ主語を持つ自動詞文を作ると不自然である。

(または自動詞文ができない)

:? 田中さんは美容院で髪が切れた。

3) 同じ主語を持ち、同じような意味を表す受動文が存在しない。

:# 田中さんは美容院で(美容師に) 髪を切られた。

(※被害の受身の意味になる)

:# 田中さんの髪は美容院で田中さんによって切られた。

(※元の文とは意味が異なる)

b. 状態変化主体の他動詞文：「四郎は(殴られて) 骨を折った」

1) 事態の成立において、主語にたつ人の主体的な関与が全く認められない。

(※主語にたつ人は被害を被る〈受け手〉である)

2) 同じ主語を持つ自動詞文を作ることができる。

: 四郎は(殴られて)、骨が折れた。

3) 同じ主語を持ち、同じような意味を表す受動文が存在する。

: 四郎は(殴られて)、骨を折られた。

以上の相違点を踏まえて、本論文では「状態変化主体の他動詞文」は、見かけ上は実際の動作主を無視した他動詞文のように見えるが、(16b)のように、同じ事象を表す自動詞文と密接な関係がある構文だと考え、Cには含めず、A〈自動詞的な他動詞文〉の中で扱うことにする。ただし、類似点を考慮して、第4節の構文分析ではその点についても論じる。最終的には、「折る」には使役変化(他)動詞と所有他動詞の2つの側面があり、「折

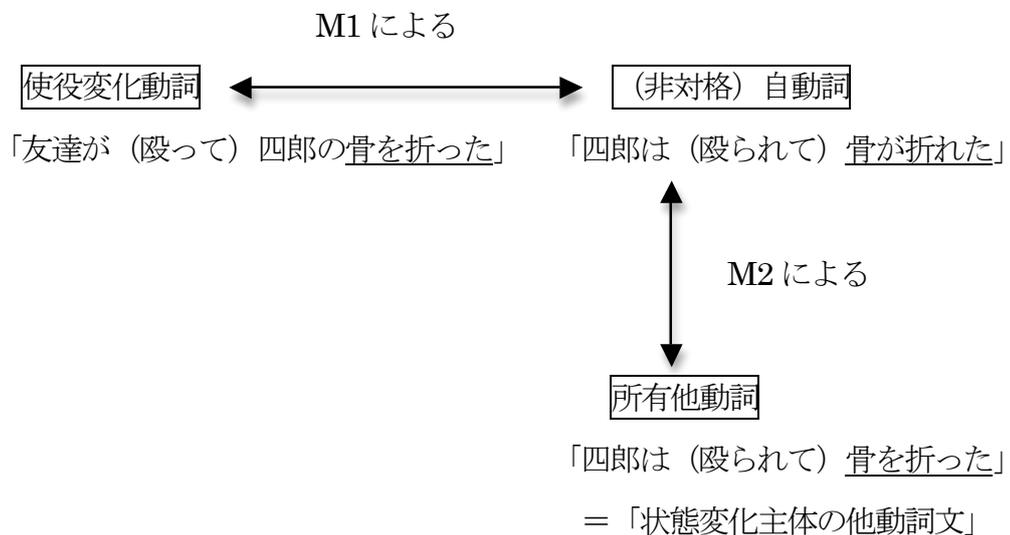
れる」という自動詞と (18b) に示したような語彙的なヴォイスの関係を形成していると考えられる。このヴォイスの対応関係は、図4に示した M1 による自他の対応と M2 による自他の対応関係になっていることが見て取れる。

(18) 「折る」と「折れる」と「折られる」の関係

a. 構文的なヴォイスの対立



b. 語彙的なヴォイスの対立



## 2 先行研究と問題提起

本論文の扱うA〈自動詞的な他動詞文〉、B〈自動詞の形態をもつ他動詞文〉、C〈実際の動作主を無視する他動詞文〉は、それぞれの共通点が指摘されることはあったが、全体をカバーして、統一的に生成のメカニズムを論じた研究はこれまでなかったと思われる。以下に、各分野および複数の分野にまたがる先行研究を紹介しながら問題を提起するとともに、本論文の論点を示しておく。

### 2.1 全体の概観と本論文の位置づけ（論点）

#### ■A〈自動詞的な他動詞文〉

他動性をもっとも低く、自動詞的であるのは状態を表す他動詞である。通常、状態はその対象のみを項にとる1項述語になるのだが、ヲ格名詞句を伴うのは2項述語である。この2項述語は2つの名詞の関係を叙述していることが多く、「関係の動詞」（工藤1987）、「関係動詞」（森山1988、工藤1995、山岡2000a、2000b）と呼ばれた。しかし、これらの動詞は「ル形」と「テイル形」でアスペクトの対立がないという点が注目され、なぜ状態を表しながらヲ格をとり他動詞文になるのについての分析のほうには関心が薄かった。また、2項述語については、角田（1991）が、格の現れ方によって他動性の階層を示している。これによると他動性の低いほうから「～に～が（動詞）」のパターン伸び、他動性の高いほうから「～が～を（動詞）」のパターンが伸びており、「関係」を表す動詞が両者の接点に位置している。このような構図は、本論文が想定する2つの方向からの「ヲ格付与の動機付け（M1とM2）」を考える上で、非常に示唆的な現象である。

意味が自動詞的であるにもかかわらず、統語的には他動詞文になっているという点で注目されたのは、非意図的な事象を表す、再帰的な用法の他動詞文である。主語の名詞句とヲ格名詞句の関係に注目した構文の先駆的な研究として、高橋（1975）がある。ここでは2つの名詞句が〈所属関係〉をもつ構文が広く取り扱われているが、その中に再帰用法の構文が取り上げられている。この中で「ヲ格名詞＋他動詞」の構文について、ひとかたまりとなって自動詞相当になっているという指摘があり、自動詞との接点に目を向けている。

生成文法による研究では、井上（1976）が他動詞文に表れる主語の深層格について非動作主の意味役割をもつ名詞句の格を分析している。その中で「経験者格」というものを設定し、「太郎は足を滑らせて、ころんだ」のような非意図的な再帰構文だけでなく、主語と

目的語が所有関係をもつ「花子はエプロンを焦がした」、さらには後に天野(1987b)が「状態変化主体の他動詞文」とよぶ「火事で太郎は辞書を焼いて困っている」などを包括的に扱っている。ただし「経験者」という名称からもわかるとおり主語が人に限定され、無生物が主語になる〈自動詞的な他動詞文〉が漏れてしまっている。その一方で、「彼は目が美しい」のような形容詞述語とそれに対応する他動詞文「彼は美しい目をしている」の主語も「経験者格」で括っている点が、状態性述語がヲ格名詞をとり他動詞文になっている理由を考える上で注目される。

再帰についてはその後、仁田(1982)が意味論的(語彙的)な特徴と統語構造(特にヴォイス)のつながりという視点で分析しているが、天野(1987a)は再帰性について批判的に検討し、再帰文は他動詞の一種として扱うべきだと結論づけた上で、自動詞的な他動詞文として真に問題なのは、「山田さんは戦争で家を焼いた」のような「状態変化主体の他動詞文」(天野 1987b)だと主張した。しかし、問題の他動詞文と、同じ事象を叙述する自動詞文「山田さんの家が戦争で焼けた」の対応関係が、「xがyを〜」と「xのyが〜」のように対応している点では再帰用法の他動詞文と同じであった。つまり、再帰という事象と重なる部分があるものの主語の名詞句とヲ格名詞句の関係を〈所有〉という意味関係で捉えることの重要性が認識されたと言える。天野(1987b)の「状態変化主体の他動詞文」については、その成立条件をより詳しく分析した児玉(1989)がある。また、再帰文の包括的な研究としては、高橋(1975)の「所属関係」を再帰文の定義に用い、豊富な実例をもとに再帰構文のパターンと意味特徴を詳細に分析した稲村(1995)があるが、その中で「状態変化主体の他動詞文」(天野 1987b)、「介在性の表現」(佐藤 1994)に相当する構文も取り上げられて分析されている。

これ以降、主語名詞とヲ格名詞の関係に注目した研究としては杉岡(2002)がある。杉岡は、主に形容詞から派生する「〜める」動詞の非意図的な事象を表す他動詞文を「自発変化他動詞構文」と呼び、その生成メカニズムを反使役化(影山 1996)によって成立する自発変化を表す「〜まる」とのつながりで分析を試みた。さらに大倉(2004)は、主語と目的語の〈所有〉の関係に焦点を当て、再帰的な用法の他動詞文のみならず、「状態変化主体の他動詞文」(天野 1987b)や「ポットが湯をわかした」のような道具が主語にたつ構文も含めて生成文法の統語論的アプローチによって、主語の意味役割に多様性が生じる理由を考察している。

天野(1987b)の「状態変化主体の他動詞文」は使役変化動詞を使いながら、実際の動

作主、原因が付加詞などで表現され、被害の受け手が主語に来るという統語的特徴がユニークなために、非意図的な再帰的他動詞文の中で注目されることが多かったようである。上に紹介した杉岡（2002）でも共通の論理基盤での分析の可能性を示唆しており、影山（2002c）および Kageyama（2002b）は、語彙意味論的アプローチから「クローン形成」という拡張パターンによって説明できると主張している。また、天野自身も天野（2002）において、Goldberg（1995）の「構文文法」と同様のアプローチで考察している。最近の研究では、佐藤（2005）が、メトニミーによって説明できると主張している。

このように再帰的な用法または主語名詞とヲ格名詞の関係を中心にした研究は、比較的多く見られるが、いずれも統語的な特徴および意味的な特徴は何か、または意味的な特徴がどのようにして生まれるのか、構文が成立する条件は何かを指摘するだけで、なぜそのような特徴をもつ事象が他動詞文として表現されるのかについて分析は不十分である。つまり、どのような条件のもとで〈自動詞的な他動詞文〉が生成されるかの分析はあるが、そもそもなぜそのような条件がそろると、他動詞文が生成されるかの分析が十分ではない。

A〈自動詞的な他動詞文〉とB〈自動詞の形態をもつ他動詞文〉について、その生成メカニズムの解明を、語彙意味論的なアプローチで試みたものとしては、影山（2002b）が注目される。ここでは外項をもたない、つまり下位事象を表しながらヲ格をとり、統語的に他動詞として振る舞う「非対格他動詞」という動詞クラスの存在が主張されている。「非対格仮説」（Perlmutter 1987 など）に基づいて自動詞を「非能格動詞」と「非対格動詞」に分類することは、現在では広く受け入れられているが、影山が「非対格自動詞」に対応する形で存在するとした「非対格他動詞」は本論文も基本的に支持する。また本論文の語彙意味論的なアプローチは影山（1996、2002b）に負うとことが大きい、「非対格他動詞」が比較的狭い範囲に限定されていること（：「噴く」「生じる」「出す」などの発生・湧出動詞および「教わる」「預かる」などの授受動詞）は、さらに検討されなければならない。さらに、語彙意味論的アプローチでは、語彙概念構造、項構造と統語構造のインターフェースをどのように規定するか、特に外項をもたない「非対格動詞」がなぜヲ格を目的語に付与できるのか（「Burzio の一般化」<sup>28</sup>への違反）という疑問に対してどう答えるかが重要な課題となるが、影山（2002b）では納得のいく説明が与えられているとは言えない。

影山（2002b）が主張する「非対格他動詞」についてはその後、坂野（2004）が三上（1953 復刊 1972）の「所動的他動詞」と同じものであると指摘し、三上の業績を再評価しているのが注目される。特に、影山の分析では比較的範囲が限定されていた「非対格他動詞」が、

生成文法の統語論的なアプローチによって分析され、整理されている点が重要である。坂野は、本論文のA〈自動詞的な他動詞〉、B〈自動詞の形態をもつ他動詞文〉を、「所動的他動詞」という動詞クラスでカバーしており、「状態変化主体の他動詞文」(天野 1987b)も「(能動的他動詞の) 所動的な用法」として射程範囲に入れている。さらに、「Burzioの一般化」を再定義し、矛盾しない考え方を提案している点も評価される。AとBについては、統語論と語彙意味論でアプローチこそ異なるが、本論文と基本的なスタンスは同じだと思われる。しかし、〈所有〉という意味概念に注目しているわけではなく、A、B、Cの各構文のつながりを分析しているわけでもない。

#### ■ B 〈自動詞の形態をもつ他動詞文〉

森田(1990、2000)は両用動詞について包括的に分析している。本論文の対象となる両用動詞については、主に「他動詞側から自動詞への接近」という考え方をとっており、本論文とは反対の立場である。また、〈有対自動詞でヲ格をとる動詞〉については、対象となる動詞が少数のためか、ほとんどが言葉のゆれの問題も含めて、「～を自動詞」と「～が自動詞」または「～を他動詞」の意味の違いの分析に焦点が当てられている。どちらにしても、なぜヲ格をとるのか、その生成メカニズムにまで言及したものはほとんどない。個別の語彙について取り上げたものとしては、水谷(1964)、須賀(1981、1990、1999)、鈴木(1985)、倉持(1986)、福島(1991)などがある。本論文では、両用動詞と有対自動詞でヲ格をとる動詞は、数は少ないながらも重要な位置を占めていることを、自動詞側からのアプローチによって示すが、特に〈有対自動詞がヲ格をとる他動詞〉については、「有対自動詞の両用動詞化」であるという独自の考え方を示す。これによってB〈自動詞の形態をもつ他動詞文〉がA〈自動詞的な他動詞〉とともに統一の理論のもとに、その生成メカニズムが説明できることを示す。

#### ■ C 〈実際の動作主を無視する他動詞文〉

佐藤(1994)は、実際の動作主を無視する他動詞文として「介在性の表現」というものが存在することを示し、その成立条件を分析している。「介在性の表現」についてはその後、稲村(1995)が再帰構文の枠組みで分析している。須賀(2000)は行為の主体に関する認識という視点で、介在性の表現を「再帰性」の有無で2つに分けて分析している点が注目される。なお、大倉(2004)は、構文の意味特徴は共通していても「介在性の表現」は「状

態変化主体の他動詞文」とは統語構造が異なるとして、分析対象からはずしており、メトニミーによる分析の可能性を示唆している。佐藤はその後、佐藤（2005）で「介在性の表現」を「状態変化主体の他動詞文」も含めてメトニミーによって分析している。本論文は、「介在性の表現」も〈所有主体の他動詞文〉拡張事例とし位置付けることによって統一的に説明できることを示す。

## 2.2 個別の研究と問題提起

以下、概ね 2.1 の概観の流れに沿って個別に先行研究を見ていくが、同じテーマのものをできるだけ1つにまとめるようにし、その中で年代順になるように配置した。

### 2.2.1 A 〈自動詞的な他動詞文〉

ここで取り上げる先行研究は、次のとおりである。（※同じ研究が2回取り上げられているものもあるが、取り上げた順番に列挙しておく。） 山岡（2000a、2000b）、角田（1991）、高橋（1975）、稲村（1995）、天野（1987b）、児玉（1989）、稲村（1995）、影山（1996、2002b）、川野（2000）、影山（1996、2002c）、Kageyama（2002b）、杉岡（2002）、三上（1953 復刊1972）、坂野（2004）、大倉（2004）、佐藤（2005）。

#### ■山岡（2000a、2000b）

金田一（1950）がアスペクトの観点から動詞を4つに分類して以降、状態動詞は主にアスペクトの観点から分析されることが多く、1項述語と2項述語の違い、およびヲ格をとるものとそうでないものの違いについてはほとんど注意が払われてこなかった<sup>29</sup>。その後、アスペクトによる動詞分類の研究において、金田一（1950）でほとんど取り上げられなかったタイプの動詞が注目された。状態動詞であるが、「ル形」でも「テイル形」でも使われる<sup>30</sup>、つまりアスペクトの対立がない動詞群で、「関係の動詞」（工藤1987）、「関係動詞」（森山1988、工藤1995、山岡2000a、2000b）と呼ばれた<sup>31</sup>。山岡（2000a）は、文機能論という視点から、従来のアスペクトによる分類では状態動詞に分類されていたものを、狭義の状態動詞（「いる」「ある」「要る」）とそれ以外の「叙述動詞」に範疇化し、後者をさらに「可能動詞」「属性動詞」「所要動詞」「価値動詞」「関係動詞」に下位分類した<sup>32</sup>。この中からヲ格名詞をとる動詞を拾い出してみる<sup>33</sup>。

(19) フ格をとる状態動詞の例

(山岡 2000a : 「第 5 章 叙述動詞文の機能論」 205-271 を参考に作成)

分類	下位分類	: 動詞例
【属性動詞】	[嗜好・欲求]	: 好む、欲する、嗜む
【所要動詞】		: 要する
【関係動詞】	[包含・所有関係]	: 含む、包含する、誇る、有する、 擁する、……
	[記号関係]	: 表す、意味する、含意する、示す、……
	[数量関係]	: 上回る、数える、越える、下る、 下回る、占める、……

フ格をとる動詞については、(20) のように記述をしているに留まっている。この記述は関係動詞にかぎらず、(19) にあげた動詞の多くにあてはまると考えられる。

(20) 山岡 (2000b : 47 ※下線は引用者による)

関係動詞は動作主名詞句を取ることがないという点ですべて「無意志動詞」であることも1つの特徴である。動作主名詞句を取らないのは、非対格動詞に共通する特徴でもあるが、関係動詞には構文上の目的語としてフ格名詞句をとるものもあり、今後の議論の重要な課題となるだろう。

次に、関係動詞と呼ばれる動詞の「包含・所有関係」に注目してみる。森山 (1988 : 280) も関係動詞に関して、「所有も一種の関係である。フ格をとる、持つ、所有する、有する のような動詞が所有を表す。」と記述している。しかし、フ格をとるグループの特徴に焦点を移したときに、区分された「包含・所有」という関係概念と、それ以外の「嗜好・欲求」「所要」「記号関係」の関係概念が、広く〈所有〉という概念で括れないか考えてみる必要があるだろう<sup>34</sup>。本論文では、第4節で〈存在〉と〈所有〉の意味概念で、「ル形」で状態を表せる状態動詞を分類して、フ格をとる状態動詞がどのように位置づけられるかをみることにする。

もう一点、注目したいところは、山岡 (2000a, 2000b) が関係動詞の分類に「位置関係

〈存在場所〉の項目を立てていることである。「x の位置を y との関係で叙述する」という見方である。そして森山（1988：280）も「所有とは、所有者のもとに所有物があるという関係であるから、存在の意味に連続している」と記述している。これは〈存在〉を表す2項述語が〈所有（包含）〉を表す2項述語と近接していることを示唆している。本論文もこのつながりに注目し、〈所有主体の他動詞文〉が〈存在〉の意味概念をベースに生まれることを示す。

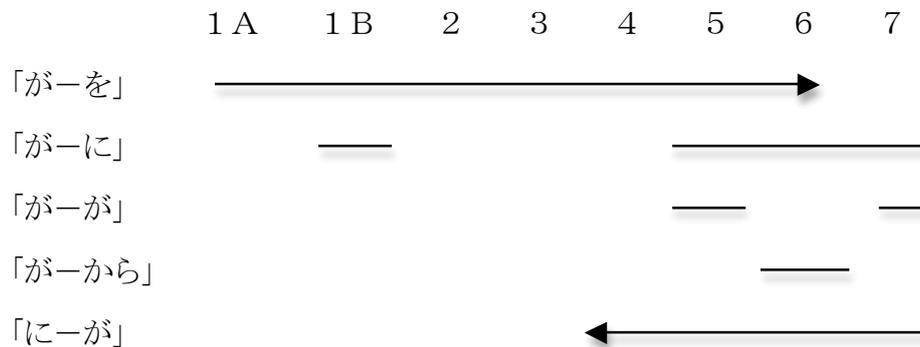
### ■角田（1991）

角田（1991）は、複数の言語と日本語とを対照して、2項述語の階層を論じている。この2項述語を（21）のような階層をもつ、7つに分類した場合、日本語の2項述語の格枠組みは（22）のようになるという。これは「状態性の他動詞文」の位置づけに重要な視点を与えてくれる。

#### （21）2項述語の分類と日本語の例（角田 1991：95 表5を参考に作成）

類	意味	下位類	意味	例
1	直接影響	1 A	変化	：殺す、壊す、温める
		1 B	無変化	：たたく、蹴る、ぶつかる
2	知覚	2 A		：見つける（see, hear）
		2 B		（look, listen）
3	追求			：待つ、捜す
4	知識			：知る、分かる、覚える、忘れる
5	感情			：愛す、惚れる、好き、嫌い、欲しい、要る、怒る、忘れる
6	関係			：持つ、ある、似る、欠ける、成る、含む、対応する
7	能力			：できる、得意、強い、苦手

(22) 角田 (1991 : 112 図6)



(21) は「意味の点でも形の点でも、2項述語の他動性の程度を示している」(同書：111) のだが、他動性の低い5「感情」と6「関係」が、(11) に示したA〈自動詞的な他動詞文〉と重なっていることが確認できる。そして、注目すべきは、(22) が示している「がーを」と「にーが」の矢印である。ヲ格が6の「関係」まで延びているのとは対照的に「にーが」は他動性が最も低いと考えられる7の「能力」から右から延びて行っている<sup>35</sup>。角田(1991)はこの2つの重なりの部分について分析はしていないが、「にーが」の最も基本構文として存在文「xにyがある」があると考えた場合、その「にーが」の格枠組みが、6の「関係」で接している、つまり最も他動性の低い他動詞構文「xがyをもつ」のところで接していることは、〈存在〉と〈所有〉が接点を持っていることを示唆していると考えられる。

■高橋(1975)、稲村(1995)

高橋(1975)は、2つの名詞句が〈所属関係〉にある構文の諸相をまとめたものだが、ここでは〈所属関係〉を「側面」「部分」「もちもの」「生産物」の4つの関係で捉えている。稲村(1995)はこの所属関係を再帰構文の定義<sup>36</sup>に用いるにあたって、具体例を整理して、(23)のようにまとめている<sup>37</sup>。この高橋(1975)が示した4つの分類は、再帰構文のみならず、主語と目的語が〈所有〉の関係をもつといった場合に、どのようなものを〈所有〉と呼ぶのかを考える上で指針となった。

(23) 稲村 (1995 : 57)

- ① 部分 : ひと — 身体部分 (手・足・頭・髪・爪など)  
もの — ものの部分 (木>葉・枝 / 船>スクリュー / 家>屋根、など)
- ② 側面 : ひと — 身長・体重・性質、など  
もの — 大きさ・かたち・色・属性、など
- ③ 所有物 : ひと — 所有物 (衣服・腕時計・バッグ、など)  
— 関係の密接なひと・動物  
(家族・親族・部下・ペット、など)  
— 仕事・興味など、その他の所有物  
もの — ものがふくむもの・もつもの  
(電車>乗客、など)
- ④ 生産物 : ひと — ことば・あせ・息・声・作品、など  
組織 — 組織・機関全体で生産するもの  
(電気メーカー>テレビ、など)

また、高橋 (1975) は〈存在〉と〈所有〉のつながりを (24) のように述べている。このような見方は、本論文が主張する〈所有主体の他動詞文〉の生成メカニズムの基本となる考え方であり、第3節で詳しく論じる。

(24) 高橋 (1975 : 3)

所有をあらわす場合、ふつうには、「所有する」をつかうより、存在動詞「ある」をつかった、つぎのタイプの文がつかわれる。

a 甲に (は) 乙が ある。

b 甲は 乙が ある。

b は、「ある」が所有をあらわすことによって生じた構文である。a 型の構文は、c や d のような存在構文と部分的にホモニムであり、存在構文から b 型の所有構文が分化する過程にあるものである。

c 場所に モノが ある。

d 場所に ヒトが いる。

また、高橋は所属関係をもつ (25a) のような、一見して能動構文に見える文を挙げ、実際は直接受動文が成立しない一方で、(25c) のように述部のみを受身形式にできる点を指して、「特筆に値する事実である」(同書：4) と述べている。

(25) 高橋 (1975 : 4) ○×は高橋の判断による)

- a. 一週間前の大嵐で、発動機船がスクリュを毀してしまった<sup>38</sup>。
- b. × スクリュが発動機船にこわされてしまった。
- c. ○一週間前の大嵐で発動機船がスクリュをこわされてしまった。

この文に限らず、再帰構文は直接受身が成立しにくい。それにしても、英語では、“My guitar broke a string.”と言えることと比べると、物を主語にして [全体一部分] の関係をもつ再帰構文は日本語ではあまり許容されないパターンのようなのである<sup>39</sup>。その一方で、(1 e, f) のように非情物が主語でも [物一側面] の場合には自然な文が成立する。また、[人一所有物] の関係をもつ (26) のほうが (25a) よりはるかに日本語らしい文という印象を与える。(所属関係) はその対象を広く捉えているため、統語的な振る舞いも一様ではないようである。

(26) (太郎が船長の場合)

一週間前の大嵐で、太郎は発動機船のスクリュを毀してしまった。

さらに高橋は、(27) のような句について、「構文論のレベルで主語との関係をみると、他に対するはたらきかけをあらわしているのではなく、主体である自分の状態をかえることをあらわしている。つまり、対格名詞と動詞の組み合わせが、ひとかたまりになって自動詞相当となり、合成述語をなしているのである」(同書：4) と述べ、この主の慣用句は数が多く、またそれが自動詞に言い換えられることから自動詞に近い性格をもっていることがわかるとしている。

(27) 高橋 (1975 : 5)

こしをおろす (=すわる)、身をおこす (=おきあがる)、あたまをたれる

(=うなだれる)、目をさます (=おきる)、はらをたてる (=おこる)

体の部位を使った、自動詞相当の他動詞句が日本語に多いことは確かである。また、再帰の統語的な視点から分析すれば、「対象物が語彙的に指定された再帰動詞」という存在にも注目しなければならない。(28) のリストは、細川 (1990 : 637) および、稲村 (1995 : 66) のリストを参考にまとめたものである。

(28) 語彙的に対象物が自分自身の一部に指定されている (再帰) 動詞

- a. 身体 : 病む、患う、擦り剥く
- b. 首・頭 : かしげる
- c. 顔 : 赤らめる、ほころばす、しかめる
- d. 目 : 泣きはらす
- e. 耳 : そばだてる
- f. 口 : つぐむ
- g. 首・肩 : すくめる
- h. 腰・身体 : かがめる

このような定型句が多いのは何に起因するのだろうか。自動詞で言い表せることをなぜわざわざ目的語を示して他動詞構文で分析的に表現するのだろうか。(27) (28) には意図的な動作と非意図的な動作の両方が交じっているが、非意図的なものは、〈所有主体の他動詞文〉とのつながりがあると考えられる。

■天野 (1987b)

天野 (1987b) は、井上 (1976) が示した他動詞文に表れる3つの深層格、「動作主」「原因」「経験者」を踏まえ、主語が「経験者」になる文を、さらに動詞が表す事態に関して (29) のように「主体が引き起こし手である」場合と (30) のように「主体が引き起こし手でない」場合の2つに分類し、後者を「状態変化主体の他動詞文」と呼んだ。つまり、「動作主」「原因」「経験者」は目的語に対する働きかけ (他動性) がこの順番で弱くなっていくのだが、天野はその延長として、動詞が表す事態の発生に関しては別に動作主 (原因) が存在する構文に注目したわけである。

(29) 天野 (1987b : 左 2)

- a. ジョンは、思わず窓に手をついて、窓をこわしてしまった。(=天野 (3))
- b. 岡村はぼんやりして煙草の灰をこぼしてしまった。(=同 (4))
- c. 母は買った品物をうっかり店に置いてきてしまった。(=同 (5))

(30) 天野 (1987b : 左 2)

- a. 私たちは、空襲で家財道具をみんな焼いてしまった。(=同 (1))
- b. 勇二は教師に殴られて前歯を折った。(=同 (2))
- c. 気の毒にも、田中さんは昨日の台風で屋根を飛ばしたそうだ。(=同 (3))

そして「状態変化主体の他動詞文」の成立条件として、次の2つを挙げている。

(31) 天野 (1987b : 左 5)

条件1 : 状態変化主体の他動詞文を作る他動詞は、主体の動きと客体の変化の2つの意味を含む他動詞である。

条件2 : 状態変化主体の他動詞文のガ格名詞とヲ格名詞は、全体部分の関係にある。

条件1は、次のような対象の変化を表さない他動詞は「状態変化主体の他動詞文」にはなれないことを意味している。

- (32) a. 勇二は前歯を叩いた。(=天野 (14))
- b. 田中さんは屋根を撫でた。(=同 (15))

条件2の「全体部分」という名称とその捉え方(定義)は、単に物理的な関係ではなく、外界の認知の仕方も関わっており重要である。

(33) 天野 (1987b : 左 8)

XはXを様々な側面から眺めることによって、様々な特徴付けられる。こうし

た特徴付けの総体Xを「全体」とし、特徴付けの側面を「部分」とする。Yが、総体Xの特徴付けの側面の1つであるとき、XとYは「全体部分の関係」にあるという。

そして、この名称は、(34a) に示したように「二重主格文（または二重主語構文）」と呼ばれる、「～は～が」構文との平行性を意識していると考えられる。この平行性は井上(1976)でも指摘されていたが、なぜ(34b～d)のように同じ事態を3つの形式で言い表せるのか。また意味の違いは何なのかは説明されなければならない事項であろう。

(34) 天野 (1987b : 左7)

a. 象は 鼻が長い。(=天野 (16))

N<sub>1</sub> N<sub>2</sub>

b. 私たちは、空襲で家財道具がみんな焼けてしまった。(=天野 (3ロ))

N<sub>1</sub> N<sub>2</sub>

c. 私たちは、空襲で家財道具をみんな焼いてしまった。(=天野 (3))

d. 空襲で、私たちの家財道具がみんな焼けてしまった。

しかし、天野は「両構文（引用者註：「状態変化主体の他動詞文」と「二重主格文」のことを指す）ともX（全体）の働きかけの意味がなく、Xの部分であるYについての叙述によって、Xの状態を表している点で同じである。状態変化主体の他動詞文は、形式上は他動詞文であるが、主体の引き起こした働きかけの意味を表さないのであるから、述語成分が自動詞である場合の全体部分二重主格文とは、ほとんど同じ意味を表すわけである。」(同書：左11)と述べるにとどまっている。

天野は、他動性が低下する((35)の①～④)にしたがって、主体の意味役割が「動き手（動作主・経験者 a）」>「原因」>「状態変化」のように変わると考え、「状態変化主体の他動詞文」の他動詞の意味((35)の④)について、「〈客体に起こった変化を所有する〉、〈ある事態を所有する〉というきわめて動作性の低い意味になるであろう」(同書：左9)と述べている。

## (35) 天野 (1987b : 左 9)

	他動詞の意味	主体の動きの側面	客体の変化の側面	主体
①	動き他動詞	実質的な動き	なし	動き手
②	動き変化他動詞	実質的な動き	あり	(動作主 経験者 a)
③	動き変化他動詞	事態を引き起こす	あり	原因
④	動き変化他動詞	事態を所有する	あり	状態変化

そして、(31) に示した2つの条件がそろふことによって、「〈他動性〉を〈働きかけ〉だけでなく〈所有する〉という意味にまで広げ(る)」(同書: 左 12) と結論づけている。つまり、「状態変化主体の他動詞文も、他動詞文の1つの用法として正しく位置づけることができる」(同書: 左 12) というのが天野の主張である。

この天野の主張は、まさに他動性の高いほうから低いほうへと目を向けた分析の典型であり、第2節で示した [M1] によって生成される他動詞文という単一のスケールによっている。“(他動詞として表現し得る) 他動性の低下の端” に「状態変化主体の他動詞文」を位置づけ、そのような“端”に位置することを支えているのが (31) の成立条件だという説明は、この構文の位置づけの1つの側面として正しいだろう。しかし、このような理論で説明されなければならないことは、自動詞を使った表現が可能であるにもかかわらず、そして実際の動作主・原因があるにもかかわらず、所有主体を主語に据えた他動詞文が生成されるのはなぜかということである。ただ「そうなり得る」ではなく、積極的にそのような他動詞文を生成するメカニズムが明らかにされていない。その点で、[M1] によるヲ格付与を〈所有〉という意味概念にまで広げるだけで済ませることは賛成できない。他動性が低下して、自動詞で表現できるようになった事象をなぜ他動詞文で表現するのか。

[M1] のみに基づいた分析では限界がある。それは自動詞的な事象であるにもかかわらず、2項述語の語彙概念構造が生まれるからであり、他動性の低下の結果だけによるものではなく、〈存在〉〈発生〉から〈所有〉の意味概念へという、[M2] によって生成される他動詞文になっているというのが本論文の主張である。なお、天野は、その後天野 (2002) で構文文法的なアプローチによって考察を発展させているが、これについては、別に項を立てずに、2.2.3 の「佐藤 (2005)」の中で触れることにする。

## ■児玉 (1989)

児玉 (1989) は、天野 (1987b) の出した (31) の2つの条件を再検討し、天野が見過ぎていた3つ目の条件を設定した点、そして天野 (1987b) では「ほぼ同じ」で済まされていた「状態変化主体の他動詞文」と対応する「～は～が〈自動詞〉」構文の意味の違いを考察した点が重要である。

児玉は天野の挙げた2つの条件だけでは、(36a, b) のような他動詞文が「状態変化主体の他動詞文」にはならないことを指摘し、(36c, d) との比較および (36e, f) との比較を通じて、3つ目の条件 (37) を追加した。

### (36) 児玉 (1989 : 71-73)

- a. 私は庭木の枝を折った。(=児玉 (1ア))
- b. 伯母は丹精こめた菊の花を枯らした。(=同 (7ア))
- c. 私は、大雪で庭木の枝を折った。(=同 (1ウ))
- d. 伯母は丹精こめた菊を霜で枯らした。(=同 (7ウ))
- e. 私は、きちんと雪囲いをしていなかったために、大雪で庭木の枝を折った。  
(=同 (1イ))
- f. 伯母は、霜よけを忘れたために、丹精こめた菊を (霜で) 枯らした。  
(=同 (7イ))

### (37) 児玉 (1989 : 75)

3つには、ガ格名詞句が、動きの引き起こし手でなく客体変化後の事態を所有するというほどの意味をもつものであるために、主体の「動き」に対する自立性を喪失させるべく、主体以外に、主体からなんらの制御も受けない独自の動きの現象が、述語事態に直接の引き起こし手として (明示あるいは暗示されて) 存在していること。

(36c, d) が主体の働きかけがまったくない「状態変化主体の他動詞文」と呼べる構文で、このような意味で解釈されるためには、下線部のような実際的な引き起こし手が明示されることが必要だと指摘した。しかしそれが明示されても (36e, f) の場合は下線部の表現によって「主体が事態を招いた原因として事態に関与する」ことが文脈から読み取れるため、主語の意味役割は「原因」に当たり、他動性の点では高くなると指摘したのである。

このように児玉（1989）は他動性の段階をより細かく分類し、どのような場合に「状態変化主体の他動詞文」が成立するのかを明らかにした。児玉は、この3つ目の条件を付け加えるにあたり、最初の2つの条件も含めて、「所詮は「ガ格名詞が動きの引き起こし手ではなく、他者の力によって客体におこった変化が主体の状態変化として特徴づけられるような文」にするための様々な条件を考えてきたにすぎない。」（同書：75）とまとめている。つまり、考え方としては天野（1987b）と同様、他動性が低下し、実際の動作主・原因ではなくなり、単に状態変化を所有する主体となった名詞句を主語にするような（特異な）文が成立するために、3つの条件がそろわなければならないということである。

児玉が指摘した3つ目の条件（37）は非常に意義のあるものだが、2つの解決すべき課題を抱えている。

- (38) a. 「主体の「動き」に対する自立性を喪失させる」のなら、自動詞文にすればいいのに、なぜ使役変化動詞を用いるのか。現に同じ事象を自動詞文でも表現できる。
- b. もし a の答えが、「客体変化後の事態の所有」という意味の文にするためであれば、なぜその目的のために、使役変化動詞がそのまま使われ、かつ「直接の引き起こし手」を明示または暗示する必要があるのか。

この課題を解決するには、[M1]による他動詞の生成メカニズムだけを見ていては難しい。第1節の図4で示したように、[M2]によって生成される〈所有主体の他動詞文〉は自動詞文と表裏一体であると言える。そして、同じく第1節の(13)に示したように、〈所有主体の他動詞文〉には、[M1]と[M2]の共演によって生成されるものがある。本論文は、このような2つの側面から(38)の課題を解決し、なぜ「原因」を明示または暗示する文脈が必要なのかを示す。

#### ■稲村（1995）

稲村（1995）は豊富な実例を用いて、再帰構文を詳細に分析しているが、ここで取り上げるのは、稲村が「③【主語が、外的な作用や他の行為者の行為を受けて、自分の状態を変える場合】」（同書：60）に分類した再帰構文についての考察である。これに分類された構文は、天野（1987b）の「状態変化主体の他動詞文」に相当する。

この構文を「主語は意図せず動作を加えず、出来事の結果的な状態のみを身に負う。主語は動作主ではなく「状態の主体」である」（同書：62）と分析している。この「状態の主体」という名称は変化結果（状態）を所有する主体を指していると思われるが、本論文の〈所有主体の他動詞文〉における〈所有主体〉とほぼ同じ意味概念を表していると考えられる。稲村（1995）の分析で特に注目しておきたいのは、「状態の主体」を主語とする文は、変化の過程の途中を表すことはできない。」（同書：62）という指摘である。「焼く」は使役変化動詞であり、対象物を焼いた結果、対象物が焼けた状態になる事象を表すが、日本語の場合は、使役動作と使役変化が必ずしも一致しない例が少なくない。「焼く」もそのような動詞の1つで、(39a)のように結果成立をキャンセルすることが可能である<sup>40</sup>。ところが、「状態変化主体の他動詞文」はその構文の定義から当然の帰結ではあるが、結果を所有することを表すので、このようなキャンセル文が成立しない(39b)。

(39) 稲村（1995：62）

- a. 芋を焼いたが、焼けなかった。
- b. \*宮地さんは、火事の焰で背中を焼いた。しかし、火勢が弱くて焼けなかった。

稲村は指摘していないが、このようなキャンセル文の可否は、他動性の低下の側面から見れば、動作の過程ではなく結果に焦点が当たっていることを示しており、先行研究（天野 1987b、児玉 1989 など）でもこの点に注目している。しかし、本論文は、もう一方の側面、すなわち「結果が成立したことしか表し得ない」のは、下位事象から語彙概念構造の変換によって生成される〈所有主体の他動詞文〉だからであり、対象の変化しか表さない自動詞文の裏返しだからであると考えられる。なお、稲村（1995）の「介在性の表現」（佐藤 1994）に相当する構文の分析については、2.2.3 で扱う。

■影山（1996、2002b）

影山（2002b）は、語彙意味論的アプローチによって、A〈自動詞的な他動詞〉とB〈自動詞の形態をもつ他動詞〉の生成メカニズムを示した研究である。研究の前提となっているのが、1つの動詞が表し得る事象の全体を示した語彙概念構造である（図5）。

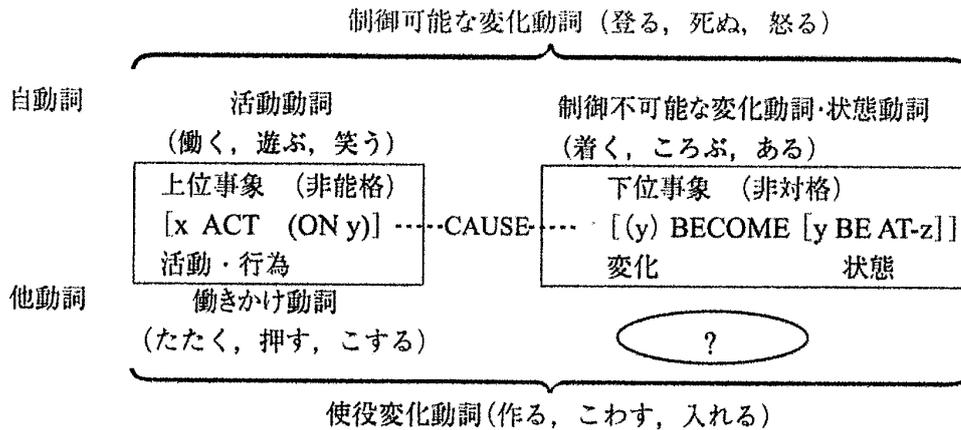


図 5 語彙概念構造と動詞の分類 (影山 2002b : 120 より)

この図では、上半分が自動詞で下半分が他動詞を表している。そして左半分が上位事象で、右半分が下位事象で、この2つが CAUSE という意味述語によって結ばれている。そこで自動詞と他動詞の上下の対応を見ると、(40) のようになっている。つまり、クエスチョン部分だけ自他の対応関係が欠落していることがわかる。影山はこの部分に相当する「他動詞」が存在するか、存在するならどのような自他の交替を示すのかを考察した。そしてクエスチョン部分の動詞を「非対格他動詞」と呼び、日本語にも英語にも存在することを示した。

(40) 動詞の分類と自他の対応

	自動詞		他動詞
1) 上位事象のみ	: <非能格動詞>		/ 働きかけ動詞
2) 下位事象のみ	: <非対格動詞>		/ <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; width: 40px; height: 40px; display: flex; align-items: center; justify-content: center;">?</div>
3) 上位+下位事象	: 制御可能な変化動詞		/ 使役変化動詞

影山は、(41) のような語彙概念構造と項構造との対応規則を想定している。そのため、クエスチョン部分の他動詞が存在するとしたら、下位事象のみで外項を持たないことになり、外項がないにもかかわらず対格目的語をとる他動詞ということになる。つまり、「Burzio の一般化」に違反する事例になるわけである。また、外項を持たないため、通常他動詞のような受身化ができない。

(41) 影山 (2000b : 120)

- a. 語彙概念構造における ‘ACT (ON)’ の主語 (x) が統語構造の外項に対応する。
- b. BE の主語 (y) が統語構造の内項に対応する。ただし、BE がなくて ‘ACT ON’ がある場合は、ON の対象が内項に対応する。

(42) Burzio の一般化 (Burzio 1986 : 178、日本語要約は影山 2002b : 123 より)

外項を取る動詞のみが目的語に対格を与えることができる。

影山はまず英語の湧出の意味を表す動詞についてその意味概念と自他の対応および受身化の可否を検討し、非対格他動詞に当たる動詞には、「場所主語の取り立てによる他動詞化」によるもの (gush, ooze) があるとし、次のような概念構造を示した。

(43) 影山 (2000b : 129 ※丸括弧内の説明は引用者による)

- a. 自動詞としての gush 動詞の語彙概念構造

[ BECOME [ y BE NOT-AT-z ] ] (「場所 z から物 y が出てくる」という発生)

↓                    ↓

Oil gushed from the tanker.

- b. 他動詞としての gush 動詞の語彙概念構造

[ z<sub>i</sub> BECOME [ y BE NOT-AT- z<sub>i</sub> ] ] (「場所 z がどうなったか」を叙述)

↓                    ↓                    ↓

The tanker gushed oil (from several cracks) .

そして「これらの湧出動詞は、元来は自動詞であり、何らかの操作で場所名詞を主語に立てて他動詞化していると考えられる」(同書 : 127) とし、その操作は (44) に示したように〈存在構文〉の語彙概念構造を〈所有構文〉に変換することであると述べている。

(44) 影山 (2000b : 132)

存在構文 [ y BE AT-z ]

→所有構文 [z<sub>i</sub> BE [ WITH-[ y BE AT-z<sub>i</sub> ]]]  
└──────────┘  
have

大文字の WITH という意味述語は「隣接関係、付随関係」を表し、BE WITH が ‘have’ に相当する。

日本語の場合、「発生」という〈変化〉を表す湧出動詞が場所名詞を取り立て他動詞化したものとして、「ミスを生じる」「芽を吹く」「汗をかく」「肉刺をつくる」を挙げ、状態を表す非対格他動詞として「伴う」を挙げている。そしていずれも〈存在〉から〈所有〉への意味構造レベルでの組み換えによって生成されると説明している。さらに「物の移動」を表す構造から「移動先における物の〈所有〉」を表す構造への変換、および「脱使役化」という外項抑制によって生成される非対格他動詞として、「教わる」のような〈授受〉を意味する動詞を挙げている。

このように、影山は「場所の取り立てによる他動詞化」を〈存在〉から〈所有〉への意味概念の変換によるものと考え、これによって非対格他動詞が存在することを主張したのであるが、これは本論文が主張する [M2] による所有主体の他動詞文の生成メカニズム、および語彙概念構造における「場所の焦点化」と同じものである。しかし、語彙概念構造の変換についての分析は不十分なところもあり、さらに検討する余地があると考えられる。

第一に〈発生〉の事象の捉え方と語彙概念構造の記述、および〈所有〉構文への変換についてである。影山は発生の自動詞、他動詞の語彙概念構造を (43) ように記述したが、これは影山 (1996) のものと異なる。

(45) 発生の概念を表す他動詞「ミスを生じる」「芽をふく」の語彙概念構造

※影山 (1996 : 115) でツリー構造で表示されているものを引用者が (43) に合わせて書き換えている。

[z<sub>i</sub> BECOME [ y BE AT- z<sub>i</sub> ]] (z が y [ミス/芽] を生じる/ふく)

(43b) と (45) の違いは、意味述語 ‘NOT’ の有無である。影山 (1996 : 51) で、前置詞の ‘from’ にあたる意味述語として ‘NOT-AT’ を規定している。従って、(43b) の概念構造は、[z が、y が z から外にある状態に変化する] ことを表し、(45) は、[z が、y

がzにある状態に変化する]ことを表している。つまり、同じ〈発生〉という枠で括られていても、前者の場合、発生物は発生母体から離れるのに対して、後者の場合は、発生物は発生母体に随伴しているのである。後者のように発生物が発生母体に随伴している場合を「発生1」、離れる場合を「発生2」と呼ぶことにする。このように2つの〈発生〉の事象を考慮すると、(46)に示したように、〈存在〉から〈所有〉構造への意味概念変換がそのまま適用されるのは、(45)の「発生1」のほうであって、(43)の「発生2」ではないことがわかる。なぜなら、(47)に示したように、もし〈存在〉と〈所有〉の関係と並行的に捉えようとする、NOTがあるために「場所zが、zから発生した(=離れた)yを所有する」という意味を表すことになり、‘have’の概念と矛盾するからである。影山(2002b)では、(43)を〈所有〉の概念構造に変換したものを示していないため、(46b) (47b)の「所有発生構文1, 2」の概念構造は、影山(1996, 2002b)の説明から本論文の筆者が推察したものである。

(46) 〈存在〉と〈発生1〉の語彙概念構造と〈所有〉構造への変換の対比

a と b は並行的に捉えられる。

a. 存在構文 [y BE AT-z] (=44)

→所有構文 [z<sub>i</sub> BE [WITH-[y BE AT-z<sub>i</sub>]]] (=44)

=have

b. 発生構文1 [BECOME [y BE AT-z]]

→所有発生構文1 [z<sub>i</sub> BECOME [z<sub>i</sub> BE [WITH-[y BE AT-z<sub>i</sub>]]]

=have

(47) 〈存在〉と〈発生2〉の語彙概念構造と〈所有〉構造への変換の対比

a と b は並行的に捉えられない。

a. 存在構文 [y BE AT-z] (=44)

→所有構文 [z<sub>i</sub> BE [WITH-[y BE AT-z<sub>i</sub>]]] (=44)

=have

b. 発生構文2 [BECOME [y BE NOT-AT-z]]

→? 所有発生構文2 [z<sub>i</sub> BECOME [z<sub>i</sub> BE [WITH-[y BE NOT-AT-z<sub>i</sub>]]]

=have

このように「発生」という変化事象を2つに分けた場合、「場所名詞の取り立てによる他動詞化」という原理は、「発生構文2」には直接働くわけではないことがわかる。本論文では、1.2.2で示したように、語彙概念構造における意味概念の変換として「場所の焦点化」だけでなく、「所有者の出来(しゅったい)構造化」を仮定する。これによって〈発生〉の変化事象が正しく捉えられるだけでなく、非意図的で再帰的用法の他動詞文とのつながりが見えてくると考える。

影山(2002b)は、発生構文における非対格他動詞の生成原理を、〈所有〉の概念構造そのものよりもむしろ語彙概念構造における「場所の項」の位置関係に注目し、(48)のようにzが両端に位置する「サンドイッチ構造による対格の認可」(同書:140)を提案している。

(48) 影山(2002b:140 = (77))

$$[z_i \text{ BE / BECOME } [y \dots z_i]]$$


このような図式を想定するのは、「Burzioの一般化」に違反する構造(:外項がないにもかかわらず対格目的語をとる構造)をうまく処理するためであり、次のように説明している。

(49) 影山(2002b:140)

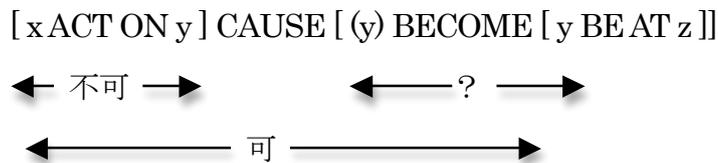
外項があれば、それが対格付与の絶対的な力を行使する。これを原型とすると、外項がないのに対格が与えられるというのは周辺的な状況である。そこでは、場所的な項が焦点化されて、BEないし BECOMEの主語に取り立てられる。その結果、2つのz項がy項をはさむというサンドイッチ構造が生まれ、間にはさまれたy項が対格目的語として認められる。外項が単独で対格を付与できるのに対して、(77)(引用者註:本論文の(48)を指す)の非対格構造では2つの場所表現が協力して初めて対格を認可することになる。

しかし、影山は上述のように提案していながら、対格を「構造格」と「固有格」の二種類にわけることについて、「Burzioの一般化によって保証される対格が構造格であるのに

対して、語彙概念構造の様式によって決まる非対格他動詞の対格は固有格である、とすることである。そうすると、話は単純明快に片づくのだが、実際のところ、そのような格の二分法が当てはまるかどうか定かではない」（同書：141）と述べている。つまり、課題は完全に解決されたわけではないということである。これが第二の問題点である。なぜ影山では〈所有〉の意味概念に基づいた語彙概念構造と項構造から対格付与の原理を導き出さなかったのかについては定かではないが、場所項 *z* の位置関係が“直接的に”にヲ格認可の鍵を握っているとは考えがたい。そこで本論文では、あくまでも語彙概念構造と項構造の仕組みによって、Burizo の一般化に違反しないような生成原理を提案することにする。

最後に、第三の問題点として自他交替における形態の対応関係について指摘しておく。影山（2002b）では、語彙的ヴォイス交替の可能性として、(50) のような図式を描き、クエスチョンマークの部分、つまり、下位事象の中での「非対格自動詞」と「非対格他動詞」がどのような自他交替をするのかを示した。

(50) 影山（2002b：122）



影山によれば、これまで判明している自他交替はすべて CAUSE をはさんで行われるもので、形態上の変化が起こるものである<sup>41</sup>。これに対して、クエスチョンマークにおける自他交替は、「～が生じる／～を生じる」「～がふく／～をふく」のように、「発生を表す動詞が同じ形態のまま自他交替を示す」（同書：130）ことを示した。この指摘は、「自他両用動詞」の存在理由を考える上で非常に示唆的であるが、影山自身はそのことについて触れていない。その一方で、上述した動詞以外に、「出す」にも非対格他動詞としての用法があることを、(51) の語彙概念構造で示している。

(51) a. 非対格自動詞としての「出る」

[ BECOME [y BE NOT-AT-z]] (=影山 (70))

↓

芽が 出る

b. 非対格他動詞としての「出す」

[z<sub>i</sub> BECOME [y BE NOT-AT z<sub>i</sub>]] (=影山 (71))

↓

芽を出す

このように結果として、非対格他動詞には、自他同形で交替するものと異なる形態で交替するものの2つが存在することになる。「出す」に非対格他動詞の用法があるという指摘は妥当性のあることだと考えられるが、影山 (2002b) では、なぜ下位事象における自他交替に、形態が変わらない場合と変わる場合があることについては十分な説明が与えられていない。これが第三の問題である。本論文では、第1節の図4および(13)に示したように非対格他動詞(本論文の〈所有他動詞〉に相当すると考えられる)は、その生成に2つのパターンがあり、それが他動詞の形態と深く結びついていると考える。そして自他同形で交替するのが基本的ではあるものの、形態が変わる場合があること、及びその理由を示す。

以上まとめると、影山 (2002b) は、「非対格他動詞」の存在を示したという点で、語彙意味論からのアプローチとして非常に重要な研究ではあるが、〈発生〉という変化を表す事象が中心であり、「非対格他動詞」が作る出す他動詞文の全体が明らかになったとは言えない。本論文は、〈所有〉の意味概念をもつ他動詞文という枠組みの中で、影山 (2002b) で十分解明されなかった部分に光を当てる。

#### ■川野 (2000)

川野 (2000) は、主体が何らかの変化を被り、アスペクト的に「~ている」が結果状態を表す構文に注目し、(52)のような3項述語の(主語が動作主の意味役割をもつ)再帰構文を分析している。

(52) 川野 (2000 : 42)

- a. 花子が顔に墨を付ける。(=川野 (9))
- b. 太郎が頭に帽子をかぶる。(=同 (10))
- c. 太郎が (顔から) 眼鏡をはずす。(=同 (11))

川野は (52) の「x が z に y を〜」の構文で主体 (x) が状態変化を被るという解釈になる理由を、x と z が〈全体・部分〉の関係にあることによって、実際に変化 (=位置変化) するのは y であるが、結果的に x と y が包含関係を結び、「x の z に y が存在する」という関係になるからだと説明している。(同書:44) これは簡単に言えば、3項述語において、「移動物が移動先において所有される状態になる」という事象を表している。再帰構文は、「移動先=動作主」なので、結果的に主体変化を表すことになると言える。そこで本論文では、このような他動詞文を、B-2〈単他動詞がヲ格をとる他動詞文〉の1つのタイプとし扱うことにする<sup>42</sup>。下に示したように (53b, c) の授受動詞も川野が示した3項述語の再帰構文と平行的に捉えられることがわかる。

(53) 3項述語の再帰構文と〈単他動詞がヲ格をとる他動詞文〉の平行性

- a. 花子が顔に墨を付ける。(=52a)
  - ⇒ [(墨が移動して) 花子の顔に墨が存在する状態になる]
  - = [花子が顔に墨を〈所有〉するようになる]
- b. 山田さんは (木村先生に) 英語を教わった。
  - ⇒ [(木村先生から英語が移動して) 山田さんに英語が存在する状態になる]
  - = [山田さんが英語を〈所有〉するようになる]
- c. 山田さんは (友達から) 鍵を預かった。
  - ⇒ [(友達から鍵が移動して) 山田さんに鍵が存在する状態になる]
  - = [山田さんは鍵を〈所有〉するようになる]

川野 (2000) は再帰構文を扱っているが、「移動物が移動先において所有される状態になる」という事象をもっと広く捉えることで、所有主体の他動詞文の広がりも同時に捉えることができる。第1節の図4および (14) で示した「a'1」がそれに該当する。そこで、本論文は、移動先が自分自身に指定される再帰も含めて、広く移動と移動先での所有の意味

構造と所有主体の他動詞文のつながりを見ることにする。

■影山 (1996、2002c)、Kageyama (2002 b)

影山 (1996 : 284-288) は、日本語の「ナル型」言語の視点を語彙概念構造と結びつけ、「ナルからスルへの拡大」という視点で日本語の構文の拡張を論じている点が注目される。ここで影山は、天野 (1987b) の「状態変化主体の他動詞文」、佐藤 (1994) の「介在性の表現」、および〈有対自動詞でヲ格をとる他動詞文〉の「～ヲあく」「～ヲ垂らす」などを、「上積みされた経験者主語」(同書 : 286) と呼んでいる。その後、上積みされる主語のメカニズムについては、影山 (2002c) および Kageyama (2002 b) で「概念構造のクローン形成」というメカニズムによって「状態変化主体の他動詞文」の生成が説明可能だと述べている。しかし、どのように適用されるのか、具体的な説明が乏しい。本論文では、影山 (1996) の示した日本語の「ナルからスルへの拡大」という見方を支持するが、下位事象のみで成立する〈所有主体の他動詞文〉をベースに語彙概念構造のレベルでの変換と拡張による「ナルからスルへの拡大」のあり方に焦点を当てる。

■杉岡 (2002)

杉岡 (2002) は、主に形容詞から派生する「～まる」「～める」の動詞について、その語彙概念構造を通じて構文の意味特徴を分析している。まず (54) のように「める」他動詞文がない「まる」動詞文を「自発変化の「まる」動詞」と呼び、そのような自動詞文が (55) のような構文で自他交替することを指摘した。このように「その変化をあたかも変化の対象が主体であるかのように他動詞で表現している」(同書 : 109) 他動詞文を「自発変化他動詞構文」と呼んだ。そして、それぞれ (56) のような語彙概念構造を想定している<sup>43</sup>。

(54) a. 風が弱まった。／\*太陽が風を弱めた (＝杉岡(34a))

b. 太陽が沈んで闇が深まった。／\*彼はローソクを消して闇を深めた。

(＝杉岡(34b))

(55) 風の勢いが強まる。／ 風が勢いを強める

(56) 杉岡 (2002 : 109 = (39a, b))

a. まる : [y CONTROL [y BECOME [y BE at-( [+Deg ] State) ] ] ]

例 : 風の勢い (y) が強まる。

b. める : [x CONTROL [y BECOME [y BE at-( [+Deg ] State) ] ] ]

x - y : 全体一部分 (x : 変化の主体 y : x の属性、部分)

例 : 風 (x) が勢い (y) を強める。

つまり杉岡は、「風の勢いが強まる」は下位事象しかもたない非対格自動詞ではなく、元々 CONTROL をもつ構造だと考え、反使役化 (影山 1996) によって外項と内項が同定され、自動詞文になっていると考えている (56a)。そして「風が勢いを強める」では、「変化の主体 (x) が取り立てられ変化の対象 (y) と分離される」と見て、結果的に外項をもつ使役変化動詞と同じ構造をもつと考えている。ただし、分離されるといっても、「x と y は「全体 - 部分」の関係にあり、事実上同じものなので、再帰的な他動詞の構造と同じになり、自動詞に近い意味を持つ」(同書 : 109) と考えている。

この杉岡の分析については、「～まる」の語彙概念構造にはもともと CONTROL が存在し、反使役化によって自動詞となるという点は支持するが、「～める」が外項をもち、再帰的な構造をもつという見方には賛成できない。このような考え方は他動詞が他動性の段階によって「動作主」 > 「原因」 > 「経験者」というようにその主語の意味役割を変えていくという考え方に立脚している。他動性が低いにもかかわらず、対象に起こる変化をあたかもその対象が主体的に自分自身に働き掛けているように捉え、他動性のスケールの (他動詞として表現し得る) 一番端の部分に位置する「経験者」をとる他動詞文として生成されるという考え方である。このような分析の問題は、自動詞を使った表現との「平行性」を正しく捉えられないことである。本論文は、「風の勢いが強まる」と「風が勢いを強める」の違いを、他動性のスケールの視点から、「風」をあたかも動作主のように働くとみる分析ではなく、同じ自動詞的な事象を表しているながら、事象の「把握」の違いによって、一方はそのまま自動詞文で、もう一方は他動詞文として表されると考える。この「把握」を本論文では〈所有〉の意味概念をもつ他動詞文が生成される認知プロセスとして分析する。

杉岡の分析の第二の問題点は、他動詞文の主語とヲ格目的語が「全体と部分」または「主体と側面」などの関係をもつ場合に、その二者を (56b) のように外項と内項にあてはめ、概念構造上は使役他動詞だが、意味的には二者の再帰的な関係が読み込まれて自動詞的に

なるという考え方をしていることである。このような考え方をとると、「太郎が手を上げた」のような意志行為も「太郎が（事故で）骨を折った」のような非意図的な出来事も区別できなくなる。後者は二者の再帰的な関係によって自動詞的になることは導き出せるが、前者は意図的であり、再帰構造であっても通常の使役変化動詞と変わらない。つまり、再帰構造をもついても自動詞的になるかどうかは一義的には決まらないのである。したがって「～める」を(56b)のような外項をもつ使役変化動詞の語彙概念構造にあてはめたのでは、正しく分析できないと考えられる。

また、杉岡は(57a)のような「状態変化主体の他動詞文」(天野 1987b)における自他交替、および(57b)のような場所を主語にして発生物を目的語にとる他動詞文における自他交替(影山 1996)が「自発変化他動詞構文」と同じ考え方で分析できる可能性を示唆している。

(57) a. 私は火事で家を焼いた。(杉岡 2002 : 110)

b. コンピュータがミスを生じた。(杉岡 2002 : 110/影山 1996 : 114)

いずれも対応する自動詞文（「私は火事で家が焼けた」「コンピュータにミスが生じた」）と意味がほとんど変わらないこと、および主語と目的とのあいだに全体と部分の関係が存在することが共通していると指摘している。これは本論文の考える〈所有〉の意味概念をもつ他動詞文の考え方と同じである。杉岡は「自発変化他動詞構文」と対応する「自発変化」の自動詞文との意味の違いを(58)のように「プロセスの焦点化」にあると結論づけている。しかし、その一方で、類似構文である「状態変化主体の他動詞文」の違いを(59)のように述べている。

(58) 杉岡 (2002 : 111)

自動詞の場合より他動詞文の方が変化がやや強調されている。(中略)

つまり、自発変化他動詞構文においては、変化のプロセスが強調されていると言える。

(59) 杉岡 (2002 : 113 脚注)

この変化プロセスの焦点化という考え方が、(42)(43)のような(※引用者注 :

本論文の(57a, b)の文を指す) 経験者や場所を主語とした非典型的な他動詞構文に延長できるかどうかは、さらに検討を要する。(42)(43)の場合は、程度変化ではなく終結性を持つからである。これらの他動詞文では、変化プロセスではなく事象の生起に焦点があると考えられるかもしれない。

ここに第三の問題点がある。同じ概念構造を持つとしたら、「プロセスの焦点化」と「結果の焦点化」はどこから生まれると考えるのか。これについては説明されていない。ここに他動性のスケールに依拠した他動詞と自動詞の分析の限界があると考えられる。詳細は第3節に譲るが、本論文では、所有主体の他動詞文の意味概念として「イベント (Ev) の所有」という概念構造を考える。このイベントの所有には第1節の図4に示したように「変化過程 Ev 所有」と「発生・消失 Ev 所有」「変化到達 Ev 所有」がある。最初の「変化過程 Ev 所有」が杉岡が言う「プロセスの焦点化」につながり、あとの2つが「結果の焦点化」につながる意味概念である。つまり、変化の「プロセス」であれ「結果状態」であれ、それに相当するイベントを所有するという概念構造をもつと考えることによって、どちらの焦点化も説明できるというのが本論文の主張である。

### ■三上 (1953 復刊 1972)、坂野 (2004)

坂野 (2004) は、影山 (2002b) とは別のアプローチで「非対格他動詞」の存在を考察したものである。坂野は、まず影山の言う「非対格他動詞」を三上 (1953 復刊 1972) の「所動的他動詞」と同じものであると指摘し、三上の業績を再評価している。そして、その所動的他動詞の枠組みを再確認した上で、生成文法の統語論的なアプローチで「所動的他動詞」(ヲ格をとる所動詞) がどのような動詞なのかを明らかにしている。

「非対格他動詞」は外項を持たず、したがって受身化できないという統語的特徴をもっているが、三上 (1953 復刊 1972) は、このような(直接・間接)受身化できない動詞を「所動詞」と呼び、ヲ格をとる所動詞があることを指摘し、それを「所動対格」と呼んだ。三上は3つの対格があると考えていた。

#### (60) 三上 (1972 : 258-260)

- a. 能動対格 : 他動詞に係る対格 (すなわち処置の対格)
- b. 場所の対格 : 「空ヲ飛ぶ」「三番線ヲ急行ガ通過イタシマス」

c. 所動対格 : 能動所動の対立において、助詞は必ずしも対立的にならない。

「金ヲ借(リ)ル」「金ヲ預カル」「物ヲ教ワル」

「三十分ヲ要スル」「英語ヲ話セル」

(60) に引用したとおり、三上が所動対格と考えたものには、1) 授受に関わる動詞(借りる; 預かる、教わる)、2) 状態を表す動詞(要する; 可能動詞(話せる))がある。坂野は、この所動対格の動詞の枠組みの中で、最終的に所動的他動詞に該当する動詞を、次のように整理してリストアップした。

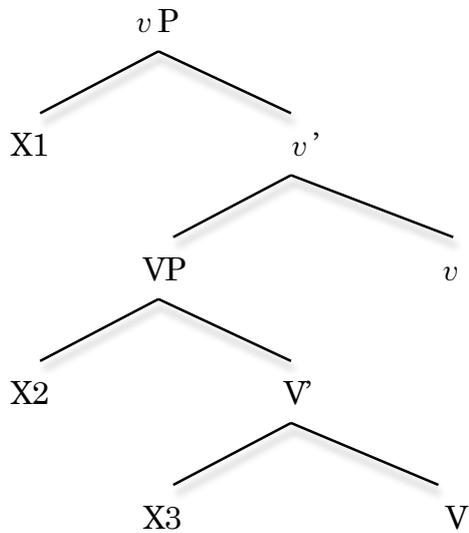
(61) 坂野 (2004 : 81)

- a. 教わる、授かる、預かる、借りる (受動動詞)
- b. 終わる、あく、当たる、換わる (対応する能動的他動詞を有する他動詞)
- c. 読める、書ける、話せる、できる (能動的他動詞に対する可能動詞)
- d. 生ずる、増す、帯びる、ふく (対応する能動的他動詞のない所動詞)

このリストからもわかるように、本論文が研究対象としている構文(AとB:1.3の(11)を参照)をほぼカバーしている。本論文は、〈所有〉の意味概念に焦点を当て、語彙概念構造と項構造の仕組みから所有主体の他動詞文の生成のメカニズムを明らかにするのだが、その対象となる構文がほぼ一致するということは、アプローチが異なるとはいえ、本質の部分は同じであることが窺える。坂野の統語論的なアプローチは、「動詞句内主語仮説」と「*v* P-shell 仮説」を前提にしており、特に*v* P-shell 仮説に基づいて、動詞句の構造を「内核のVP (inner core)」と「外殻の*v* P (outer shell)」の二層からなる構造をもつと考えることによって、結果的に、前者と後者がそれぞれ語彙概念構造の下位事象と上位事象の区分に対応することになり、共通点を持つことになったと考えられる<sup>44</sup>。そして、*v* P-shell 仮説に基づいて想定された最大構成の「基底項構造」において、内核のVPの指定部に投射される項が「外項に準じる振る舞いをする」と考え、通常他動詞の動作主になる「外項」と区別している点が注目される。なぜなら、これによって下位事象しかもたない2項述語の動詞が、外項と内項をもつことを導けるからである。坂野が示した基底項構造と項の内容(意味役割と表層構造における格付与など)を引用しておく。

(62) *v* P-shell 仮説に基づいて想定された最大構成の「基底項構造」

(坂野 2004 : 79)



(63) 3つの項 (X1~3) について (坂野 2004 : 80 ※下線は引用者による)

- ① X1 : *v* P (外殻動詞 *v* の最大投射) の指定部 (specifier) に生起し、項構造全体の外項であり、素性照合を求めて上位へ移動し表層で主語となる名詞句である。「動作主」 (agent) あるいは「行為者」 (performer) の意味役割 ( $\theta$ -role) を担う。
- ② X2 : VP (本動詞 V の最大投射) の指定文に生成し、X1 がない場合には主語に、そうではない場合には目的語などになる項である。意味役割は「経験者」 (experiencer)、「受動者」 (patient) などである。内核 VP の指定部に生起し、外項に準ずる振る舞いをするので「下位外項」と呼ぶことにする。
- ③ X3 : 動詞 V の (直接) 補語である。主に「対象」 (theme) の意味役割をもつ。

このように考えることによって、通常の外項 (=X1) を持たず、かつ下位事象において2つの項をもつ (=X2 と X3 をもつ) 動詞が「非対格他動詞」であることを導き出している<sup>45</sup>。またこれによって、非対格他動詞がヲ格目的語をもつにもかかわらず、X1 をもたないため、受身化ができないことも説明できることになる。

このように *v* P-shell 仮説に基づいた分析は非常に魅力的ではあるが、非対格他動詞がもつ「主語名詞句とヲ格名詞句を結びつける〈所有〉の意味概念」をうまく説明できない。つまり、非対格他動詞がどのようにして外項と内項を持ち、それが主語と目的語になるか

について理論的に示せても、そもそもなぜそのような動詞が生成されるのかが説明されなければならないと考える<sup>46</sup>。そのためには〈所有〉の意味概念が語彙概念構造において生成されることを示さなければならないというのが本論文の主張である。ただし、上述のように「外項に準ずる振る舞いをする」項を想定することは、Burzioの一般化に適合するように理論を組み立てる上で鍵となる考え方だと言える<sup>47</sup>。本論文でも語彙意味論からのアプローチで独自にBurzioの一般化の再定義を提案する。

## ■大倉 (2004)

大倉 (2004) は、上で紹介した坂野 (2004) と同様、*v*P-shell 構造による分析であるが、大きな違いは主語と目的語の間にみられる所有関係に注目している点である。主語の意味役割が非動作主の構文において、主語と目的語が広い意味で所有関係がみられる構文を「所有関係構文」と呼び、非動作主の主語の意味役割が、次に示すように様々であること示した。

### (64) 大倉 (2004 : 44-45)

- ・経験者主語構文 (=大倉 (8) (9))
  - a. 太郎が腕を折った。(=腕を骨折した)
  - b. 山田さんが胃を切った。(=胃の手術を受けた)
- ・受益者主語構文 (=大倉 (10) (11))
  - c. 花子が (美容院で) 髪を染めた。(=髪をカラーリングしてもらった)
  - d. 田中さんが虫歯を抜いた (=虫歯を抜いてもらった)
- ・間接被害主語構文 (=大倉 (12) (13))
  - e. 私は、落雷で家を焼いた。(=天野 1991 : 196)
  - f. 田中さんは、昨日の台風で屋根を飛ばした (=天野 1991 : 196)
- ・再帰構文 (=大倉 (14) (15))
  - g. 朝顔がつるを伸ばした。
  - h. 太郎が目腫らしている。
- ・無生物主語再帰構文 (=大倉 (16) (17))
  - i. 昨日の嵐で、クルーザーがスクリューを毀した。(高橋 1975 : 4 一部改変)
  - j. スイッチを切り忘れたら、電熱器がヒューズを飛ばした。

「間接被害主語構文」は天野（1987b）の「状態変化主体の他動詞文」のことで「経験者主語構文」「再帰構文」「無生物主語再帰構文」とあわせて、本論文がA〈自動詞的な他動詞〉と呼ぶ構文にあたる。また、「受益者主語構文」は佐藤（1994）の「介在性の表現」にあたり、本論のC〈実際の動作主を無視する他動詞〉に当たる。B〈自動詞の形態をもつ他動詞文〉は、形態上の分類で、事象そのものはAと重なるところもあることを考慮すれば、大倉（2004）も本論文とほぼ同じ構文を分析対象としていると言える。事実、大倉のいう「所有関係構文」は本論文の〈所有主体の他動詞文〉とほぼ重なると考えられる。大倉（2004）の目的は、(64)に示したような意味役割の多様性をvP-shell構造を用いて生成文法の統語論で説明することにあるのだが、そのような意味解釈の問題はさておき、「所有関係」をもつ名詞句が基底構造からどのようなプロセスを経て他動詞文として生成されるかについては、本論文の分析と重なるところがあるので、その点を取り上げて問題提起をしておきたい。まず大倉は、「所有関係構文」が成立するための条件として次の2つを挙げている。

- (65) a. 主語と目的語の間に所有関係がなければならない。（同書：46、48）
- b. 使われる動詞が達成動詞（Vendler 1967）でなければならない。（同書：47）

この2つの条件は、表現は異なるが、天野（1987b）が挙げた条件とほぼ同じことを述べていると考えられる。(65a)は構文の定義から導き出せる当然の帰結であり、大倉は指摘していないが、(64)は広く捉えれば、すべて「再帰」の用法になっており、したがって、主語と目的語に所有関係が認められなければ、それはすなわち第三者への働きかけを意味することになるわけである。(65b)の「達成動詞」とは、Vendler（1967）が動詞をアスペクトの観点から4つに分類したもののうち‘accomplishments’と呼んだもので、「～ている」が動作中を表す「活動動詞」と「～時間で」と共起できる「到達動詞」の両方の特徴を備えている動詞のことである。語彙概念構造で言えば、上位事象と下位事象の両方をもつ「使役変化動詞」相当する（図5を参照）。対象が変化を表す事象でなければ成立しないということは、天野（1987b）をはじめ、たびたび指摘されてきたことだが、大倉（2004）は、上の2つの成立条件を踏まえて、次のように構文の特徴を一般化している。

(66) 大倉 (2004 : 48 ※下線は引用者による)

所有関係構文が成立する条件として、主語と目的語の間に所有関係がなくてはならないこと、そして動詞のタイプとして、達成動詞が使われなくてはならないことを観察した。これらのことから、この構文が表す意味を考えると、  
「動作の影響を受けて状態変化をこうむった結果物を、主語が所有している」  
というように一般化することができるのではないだろうか。

大倉がまとめた (66) の一般化は、「結果物を主語が所有する」点に注目した点は評価できるが、「動作の影響を受けて状態変化をこうむった結果物」という見方は、他動詞の側からのアプローチである。最初に大倉あげた (64) の構文のうち、(64c, d) 「受益者主語構文」、(64e, f) 「間接被害主語構文」は、確かに (文の主語としては現れない) 「動作主」または「原因」が存在し、その動作を受けて、変化を被った者が主語になっている。しかし、(64g~j) の「再帰」になっている構文はどうだろうか。これはそもそも「動作主」が存在しない、自然発生的な事象を表している。つまり、主語と目的語が「所有関係」になっている点は同じだとしても、表している事象は一樣ではないということである。これが第一の問題点である。

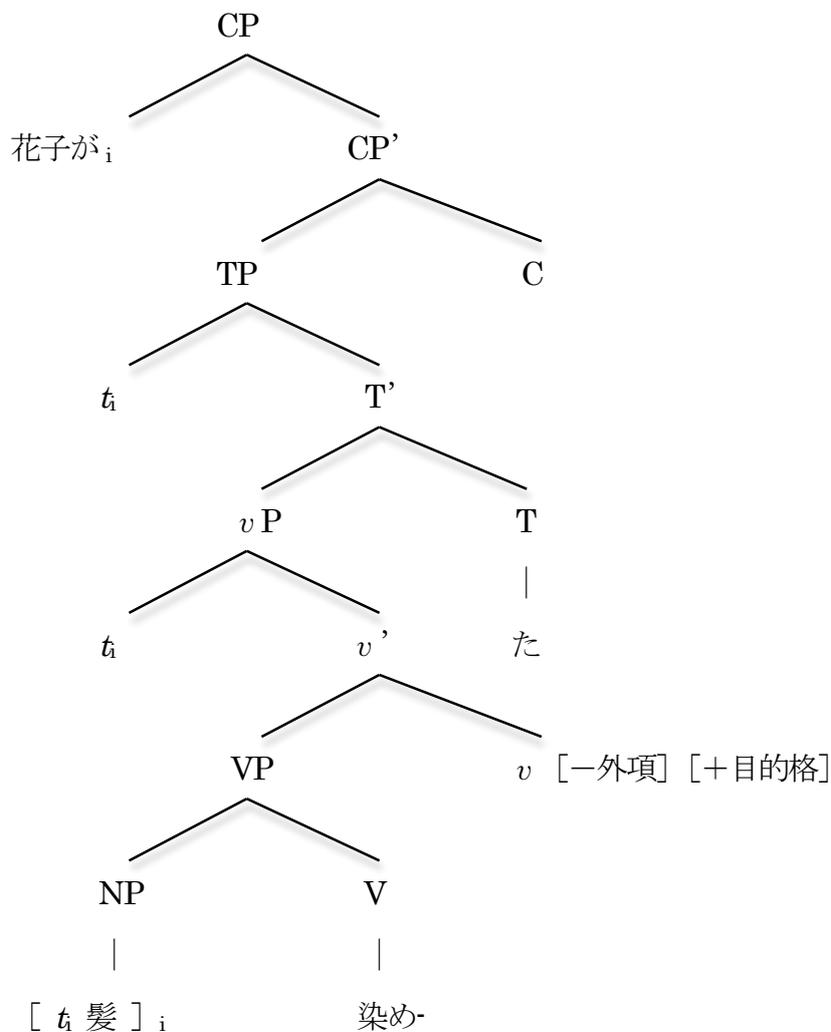
既に何度も指摘しているように、[M1] による他動詞側からのアプローチ (1.2.3 および 1.3 を参照) では (64) の諸構文の成立プロセスは十分に解明できなと考える。[M1] による他動詞側からのアプローチの視点では「達成動詞」が使われることの本質は、「上位事象」と「下位事象」の両方をもつことになるのだが、第1節の (13) に示したように、それは〈所有〉の概念をもつ他動詞文生成の一側面に過ぎない。〈所有〉の概念をもつ他動詞文は、「下位事象」しかもたない自動詞文から [M2] によって生成されのが基本で、[M1] と [M2] の共演によって生成される場合もあるというのが本論文の主張である。[M2] が基本というのは、下位事象しかもたない動詞からも〈所有〉の概念をもつ他動詞文が生成されることから裏づけられると考える。

大倉 (2004) でも、(64a) のような経験者主語構文が、典型的な「経験者」という意味役割をもつ心理・感情述語とは「直感的に性格が違うように思われる」(同書 : 49) と述べているのだが、ただ単に「所有関係」から派生的に解釈されるからだとしている。本論文では、図4に示したように、これまで「経験者」と呼ばれていたものを含めて「所有者」という意味役割を設定し、〈所有〉の意味概念をもつ他動詞文が [M2] または [M1] と

[M2] の共演によって成立することを示す。

本論文では、この「所有者」という意味役割をもつ他動詞文が最終的にどのような意味に解釈されるか、つまり、恩恵の受け手なのか被害の受け手なのか単なる再帰の状態変化主なのかについては、扱わない。従って、このような主語の意味役割の多用性を生み出す要因の考察としての大倉 (2004) のアプローチを否定するものではない。ただ1点、本論文の理論との関係で、指摘しておきたいことがある。それは、「所有者上昇」という移動操作である。大倉は、一般的にその指定部が主語となる TP のさらに上に CP という機能範疇をおき、VP 補部にあった所有関係をもつ名詞句の中の所有者が痕跡 ( $t_i$ ) を残しながら、最終的に CP の指定部にまで上がると仮定している。

(67) 所有関係構文「花子が髪を染めた」 (大倉 2004 : 50 = (31a))



大倉は、このように CP まで上昇した所有者が外界とのインターフェースによって意味

が解釈されると考えているのだが、このように「花子の髪」から所有者 [花子] が取り出され、移動している根拠として、特定の (specific) な名詞句から要素を取り出せないという「特定性条件 (Specificity condition)」を使って説明している。日本語の場合、数量詞が名詞の前にあるときに、(68) のように特定性条件の効果が認められるとした上で、通常他動詞文 (69a) と「所有関係構文」(69b) を対比して、後者は定名詞句の中から名詞句 (所有者) を取り出しているため、許容性が落ちると説明している。

(68) 大倉 (2004 : 52 = (35))

\*? 何個のりんごを買いますか?

(69) 大倉 (2004 : 53 = (37))

a. 太郎<sub>i</sub>は [3枚の pro<sub>i</sub>写真] を見た。

b. \*? 太郎<sub>i</sub>は (事故で) [3本の t<sub>i</sub>指] を切った。

そして、元々経験者という意味役割を述語から与えられる動詞「失う」と派生的に意味役割が与えられる「切る」では、(70) 示したように特定性条件によって許容性が異なると指摘している。つまり、「失う」では「所有者」の取り出しがないのに対して、「切る」では取り出しが起きているので不自然になるという。

(70) 大倉 (2004 : 53 = (38))

a. \*? 太郎は (事故で) 3本の指を切った。

b. 太郎は (事故で) 3本の指を失った。

生成文法に基づいた「所有者上昇」を否定するものではないが、大倉が (69) を理由に所有者が取り出されていると判断すること、そして (70) を理由にして2つの動詞は異なる生成メカニズムが働くと結論づけるのには疑問がある。(69b) については、そもそも「3本の指を切る」という言い方そのものに不自然さがある。したがって、(71a) のように「所有者」の取り出しがないはずの他者に働きかける使役変化動詞にしても不自然さはつきまとう。また、(69b) に「全部で」や「親指と中指と小指の」を付ければ (71b, c)、数量詞の「3本の」が入っていてもまったく自然な文になる。

- (71) a. \*? 太郎は二郎の三本の指を切った。  
 b. 太郎<sub>i</sub>は（事故で）全部で3本の<sub>t</sub>指を切った。  
 c. 太郎<sub>i</sub>は（事故で）親指と中指と小指の3本の<sub>t</sub>指を切った。

このことから、数量詞による特性条件を所有者の取り出しがあるかどうかの判断に使うことには問題があると言える。そして、それを前提した (70) の対比も根拠が薄いこととなる。「[数量詞+の+名詞] +動詞」の不自然さは、「まとまり性の認知」のような別の要因が絡んでいるようである。対象の移動または対象の発生・消失などの「位置変化」の意味概念と対象の状態変化を表す「状態変化」の意味概念とでは、[数量詞+の+名詞] という句の解釈が (72) に示したように異なることが原因だと考えられる。

- (72) a. 「位置変化」の場合は、[数量詞+の+名詞] が「名詞が [数量] ある」という存在の解釈が優先されるため、「[数量詞+の+名詞] +動詞」が自然になる。  
 1) 田中さんは鞆に3つのキーホルダーを下げている。  
 2) この宝くじ売り場は、3人の1等当せん者を出した。  
 b. 「状態変化」の場合は、[数量詞+の+名詞] が「名詞が [数量] である」という属性の解釈が優先される<sup>48</sup>ため、「[数量詞+の+名詞] +動詞」が不自然になる。  
 1) \*? 田中さん<sub>i</sub>は（事故で）3本のあばら骨<sub>i</sub>を折った。  
 2) \*? 田中さん<sub>i</sub>は（火事で）3冊の本<sub>i</sub>を燃やした。

つまり (72b) では、「3本のあばら骨」は「あばら骨が3本である」という属性解釈が優先され、そのような解釈が現実的でないため許容性が低下するのである。これは対象の状態変化の場合は、その対象がどういうものかという点が認知的に際立った特徴として捉えられるが、対象の位置変化の場合は、その対象がどういうものかよりもその数がどれくらいかが情報として優先的に解釈されることによると考えられる。

大倉の用いた判別方法には問題があると考えられるが、結果的に、「失う」と「切る」が異なる性質を有していると点では、本論文も同じ立場に立つ。第1節の図4および (13)

に示したように、「失う」は自動詞のみから [M2] によって生成される〈所有主体の他動詞文〉になり、「切る」は、[M1] と [M2] の共演によって生成される〈所有主体の他動詞文〉になるというのが、本論文の主張である。

(73) a. 太郎の指が3本切れた。〈自動詞文〉

[M2] ↓ [M1] <sup>49</sup>

太郎は指を3本切った。〈所有主体の他動詞文〉

b. 太郎の指が3本なくなった。〈自動詞文〉

[M2] ↓

太郎は指を3本なくした (=失った)。〈所有主体の他動詞文〉

以上、2つの問題提起をし、本論文の考え方を示した。なお、大倉 (2004) は「介在性の表現」(大倉「受益者主語構文」) についても考察しているが、これについては、2.2.3 で扱う。

#### ■佐藤 (2005)

佐藤 (2005) では、「状態変化主体の他動詞文」(天野 1987b、2000) と「介在性の表現」(佐藤 1994) をメトニミーによって分析しており、両構文を統一の原理によって説明しようとしている点で注目される。両構文にまたがる分析のため、この先行研究については、2.2.3 の「佐藤 (2005)」で扱う。

### 2.2.2 B 〈自動詞の形態をもつ他動詞文〉

ここで取り上げる先行研究は、森田 (1990)、須賀 (1981) の2つである。

#### ■森田 (1990)

森田 (1990 [森田 1994 所収]) は、語の意味について「従来の“文法的な意味や語彙的な意味を担う語”という位置づけから脱皮し、文の意味にかかわっていく“文型中に所を得た語”という視点に立つ」(同書: 234 ※ページは森田 1994 より。以下同じ) ことの必要性を説き、この観点から捉えられた語の意味を「表現的意味」と名付けた。その上で、

(74) のような自他動詞のペアについて「自動詞文と他動詞文とが表現意図において差がなくなる場合、右の「割る」「倒す」の例でもわかるように、むしろ他動詞に表現的意味が加算されて自動詞に歩み寄る例が圧倒的に多い」(同書：237) と指摘している。

(74) 茶碗を割ってしまった／茶碗が割れてしまった (同書：237)

花瓶を倒してしまった／花瓶が倒れてしまった (同書：237)

森田の考える「自動詞に歩み寄る」場合の自動詞文の現象とは「自然現象か、話者の意に反して自ずと推移していく不随意現象か、あるいはうっかりミス、または話者の意志の管轄を超えた客体界のあるがままの姿・態度」(同書：238) であり、他動詞がそのような「表現的意味」を帯びて自動詞に接近すると見ている。そして、森田は他動詞文が自動詞文に歩み寄っている例として (75a) を出した上で、このような自他異形のペアの動詞がない場合に (75b) のような自他両方の文型に同じ動詞が立ってしまうと考えている。このような他動詞の自動詞への歩み寄りが両用動詞を生み出す要因の1つになっていると指摘している。

(75) a. 鯰はヒゲを生やしている／鯰はヒゲが生えている。(同書：239)

b. この干し柿は粉を吹いている／この干し柿は粉が吹いている。(同書：239)

激しく火を噴く／激しく火が噴く。(同書：239)

このように森田は両用動詞を主に「他動詞の自動詞への歩み寄り」によって生まれたとしている。確かに、「他動詞の歩み寄り」(これは本論文の [M1] と関係する) は両用動詞の成立にかかわる要因の1つであることは否定できないが、本論文の立場は第1節で示したように、[M1] とは別の視点で、むしろ反対の方向の「自動詞から他動詞への歩み寄り」を説く。それが [M2] に動機付けられて自動詞から生成される〈所有主体の他動詞文〉である。「他動詞の自動詞への歩み寄り」と見られるものは、他動性低下の程度の問題であり、日本語に限らず世界の言語に見られることである(角田 1991 などを参照)。問題は、どの程度まで対格(ヲ格)が使われるのかである。

両用動詞の存在は「他動詞の自動詞への歩み寄り」だけでは説明できない。それは森田自身が挙げた例文(76)を見れば分かる。これらの事象は基本的に人の意図的な働きかけ

によって生じるものではない。つまり自発的な事象として捉えられるものである。したがって、他動詞が自動詞に歩みよるのではなく、自動詞のほうから他動詞へ拡張しているのを見るのが自然である。また、(75a) は自動詞化／他動詞化の接辞から考えれば、自動詞「生える」が元で他動詞化接辞によって「生やす」が生まれたと考えられる<sup>50</sup>。森田の説明では、「形態上対応する自他動詞がないものがある」ことが所与の条件として扱われているが、問題とすべきは、なぜ日本語には多くの有対動詞があるのに、ある限られた動詞が両用動詞として存在するのかということである。本論文では、第1節で示したように、自動詞的な事象を叙述するのに何らかの動機付けによって、ヲ格名詞をたてる他動詞文が生成されたと考える。これが「自動詞から他動詞への接近」である。他動性の観点からすれば、日本語も「他動詞の自動詞への歩み寄り」があり、他動詞性が減少して、自動詞的な意味になったにもかかわらず、ヲ格をとったまま他動詞として使われていることも確かだが、両用動詞の存在理由を考えるには、もう1つの要因である [M2] も考えなければならないだろう。

森田 (1994) は自他両用動詞の種類を全体で8つに分類して例を挙げているが、本論文の分析対象とするのは、概ね「(1)自他両文型が同じ表現的意味のグループ」に相当する<sup>51</sup>。

(76) 自他両文型が同じ表現的意味のグループ (森田 1994 : 239-240)

- |                    |                    |
|--------------------|--------------------|
| a. 子供を授かる／子供が授かる   | h. 緑青を嘔く／緑青が嘔く     |
| b. 迷いを去る／迷いが去る     | i. 火を嘔き出す／火が嘔き出す   |
| c. 手を着く／手が着く       | j. 渦を巻く／渦が巻く       |
| d. 目を閉じる／目が閉じる     | k. 川が水を増す／川の水が増す   |
| e. 危険を伴う／危険が伴う     | l. 実を結ぶ／実が結ぶ       |
| f. 蕾を開く／蕾が開く       | m. 眠気を催す／眠気が催す     |
| g. 水を嘔き上げる／水が嘔き上げる | n. 勢いを盛り返す／勢いが盛り返す |

森田は上のように句の形で例を挙げているだけで、他動詞文のほうの主語が省略されている。このことから主語の名詞句とヲ格名詞との関係には関心を払っていないことがうかがえる。ここで今後の議論のために、(76) の文を、それが表している事象の意味によって (77) のように分類しておく。(※引用者の判断で自他の文型の対応がはっきりわかるように、括弧内に主語または付加詞を補っておく)

- (77) 1) 所有（2つの名詞の関係）を表す
- e. (仕事<sup>が</sup>) 危険を伴う / (仕事<sup>に</sup>) 危険が伴う
- 2) 発生・消失を表す
- b. (人<sup>が</sup>) 迷いを去る / (人<sup>から</sup>) 迷いが去る
  - g. (噴水<sup>が</sup>) 水を噴き上げる / (噴水<sup>から</sup>) 水が噴き上げる
  - h. (金属板<sup>が</sup>) 緑青を噴く / (金属板 [の表面] <sup>に</sup>) 緑青が噴く
  - i. (火山<sup>が</sup>) 火を噴き出す / (火山<sup>から</sup>) 火が噴き出す
  - l. (木<sup>が</sup>) 実を結ぶ / (木<sup>に</sup>) 実が結ぶ
  - m. (人<sup>が</sup>) 眠気を催す / (人<sup>に</sup>) 眠気が催す
- 3) 非意図的で、再帰的な事象を表す<sup>52</sup>
- c. (人<sup>が</sup> [地面<sup>に</sup>]) 手を着く / ([地面<sup>に</sup>] 人<sup>の</sup>) 手がつく
  - d. (人<sup>が</sup>) 目を閉じる / (人<sup>の</sup>) 目が閉じる
  - f. (花<sup>が</sup>) 蕾を開く / (花<sup>の</sup>) 蕾が開く
  - j. (潮<sup>が</sup>) 渦を巻く / (潮<sup>の</sup>) 渦が巻く
  - k. (川<sup>が</sup>) 水を増す / (川<sup>の</sup>) 水が増す
- 4) 授受を表す
- a. 「(人<sup>が</sup>) 子供を授かる / (人<sup>に</sup>) 子供が授かる

このように自動詞的な事象を叙述する両用動詞が1)～4)の意味にわたって現れるという事実は何を物語っているのだろうか。詳細は第3節、4節に譲るが、両用動詞は自動詞側から他動詞への接近において重要な位置を占めていることが窺える。本論文では、〈所有主体の他動詞文〉の枠組みの中で両用動詞の存在意義が何かを示す。

ところで、森田はその後、森田(2000)で文の格支配の観点から「自他両用動詞」としてひと括りしていたものを「自他両用動詞」と「自他同形動詞」に分けて論じているが、「自他両用動詞」に分類されたものは、(77)に挙げたグループにはほぼ対応している<sup>53</sup>。

#### ■須賀(1981)

「終わる」は、形態上対応する他動詞「終える」がありながら、ヲ格名詞をとり「会議を終わる」のように使うことができる。このようなヲ格をとる自動詞があることは研究者

を悩ませてきたようである。須賀（1981）が、それまでの先行研究を（78）のように5つのパターンに分けていることからそれが窺える<sup>54</sup>。

（78）須賀（1981：547）

- （イ）自他の用法の誤りである。
- （ロ）他動詞が省略されている。
- （ハ）自動詞が臨時に他動詞化したものである。
- （ニ）語形が自動詞と共通する他動詞である。
- （ホ）自動詞の用法である。

須賀は（イ）～（ニ）を退け、自身は（ホ）の考え方をとると述べている。本論文の立場は（ニ）と（ホ）の両方にまたがっている。そこでこの2つを取り上げ、本論文の立場を明確にした上で、問題提起をしておく。

須賀は（ニ）の考え方をとる例として櫻井（1977）を挙げている。ここで櫻井は問題となる「ヲ〈自動詞〉」を、主語名詞とヲ格名詞の関係から「再帰的他動詞」と呼び、次のように定義している。

（79）櫻井（1977：68 ※下線は引用者による）、須賀（1981：551）

再帰的他動詞とは、語形が自動詞と共通する他動詞で、かつ目的語（対格に立つ体言）が何らかの意味で動作主体に所属する概念を表す語に限定されているものをいう。原則として、その自動詞に本来対応する他動詞が別個に存在する。

櫻井は、下線を引いた引用部分からもわかるとおり、「(人が自分の) 命を助かる」「(人が自分の) 口をあく」などの主語名詞とヲ格名詞の関係に注目して、「何らかの意味で動作主体に所属する概念を表す」ことから「再帰的」と名付けたと考えられる。これに対して須賀は、(80)のような例をあげて、文が成立する(80a, b)は目的語が「動作主体に所属する概念」として扱われ、文が成立しない(80c)は目的語がそのように扱われないことから、「動作主体に所属する概念」が何かははっきりとしない点が問題であると指摘している(同書：551)。

(80) 須賀 (1981 : 551)

- a. 一郎が宿題をおわって野球をしに行った。
- b. 父が釣り糸をたれている。
- c. \*花子はフライにレモンの汁をたれた。

これは須賀が「所属」という概念を物理的なものに限定して考えているからであって、先に紹介した高橋 (1975) の〈所属関係〉を見れば、もっと広く事象を切り取れる概念であることがわかる。また、ここでいう「関係」とは認知的な事態の把握と関係があり、それは天野 (1987b) の「全体と部分」の関係の定義に見て取れる (2.2.1 (33) を参照)。「再帰」という現象に注目するのがいいかどうかは別として、「ある限定された条件によって語形が自動詞と共通する他動詞が生成される」という見方は、それなりに根拠のある見方であり、本論文も基本的にこの立場をとる。櫻井は構文上の「再帰」の特徴に注目したが、本論文では、通常の自他交替を生成する動機付け [M1] とは異なる、別のレベルの他動詞化の動機付け [M2] に注目している。(M1、M2 については 1.2.3 および 1.3 を参照)

次に須賀 (1981) 自身の (ホ) の考え方を見ておく。須賀は同じ考え方をとるものとして水谷 (1964) と島田 (1979) を挙げ、その説明不足を指摘した上で、自身の考えを述べているが、簡単にまとめると次のように言えるだろう。

(81) 自動詞が (例外的に) ヲ格名詞をとり、通常他動詞とは異なる意味を表す。

ここで第一に指摘されなければいけないことは、須賀の分類 (ニ) と (ホ) は対立するものではなく、両立可能だということである。そしてまさに、それこそが本論文が研究対象とする〈自動詞的な他動詞文〉である。

水谷 (1964) も島田 (1979) も須賀 (1981) も「同じヲ格をとっていても、元々他動詞の文と元々自動詞の文では意味が違う」ということに焦点を当てて論じている。須賀 (1981) で「ヲ〈自動詞〉」と「ヲ〈他動詞〉」の意味の違いの分析を見ておく。「(口を) あくーあける」「(座席を) かわるーかえる」「(住所を) うつるーうつす」「(音程を) はずれるーはずす」「(尻尾を) たれるーたらす」「(仕事を) おわるーおえる」の6つのペアについて、ヲ格名詞にどんなものが来るが検証し、次のような結論を出した。

(82) 須賀 (1981 : 562 ※下線は引用者による)

- ① 「x が y を他動詞」の場合、x は y に対する変化の与え手であり、他動詞は y に変化を及ぼす意味を持つ。
- ② 「x が y を自動詞」の場合、x の行為が y においてなされるという点で、x の行為と y とは関係を持つが、自動詞は y に変化を及ぼさず、x は y に対する変化の与え手ではない。
- ③ 「x が y を他動詞」と「x が y を自動詞」のさす事柄が重なるのは、x が y に変化を与えることが同時に x の動作である場合に限られる。この場合、両用の表現が可能である。
- ④ x は原則として人間である。

①は使役変化を表す他動詞の説明である。②は表現が抽象的でわかりにくいだが、要は、(ヲ格をとってはいるが) 目的語と主語の関係が、(1)「対象とそれに働きかける動作主」ではなく、(2)「対象とその対象においてなされる行為の動作主」ということになる。そして、①と②の意味が重なるのは、(1)の動作主が同時に(2)の動作主でもある場合ということである。それにしても「対象においてなされる行為」といった場合に、それは主語と対象のどんな関係を表しているのだろうか。「対象においてなされる行為」というのは、「他動詞ではない動詞がヲ格を伴っている」ことを説明するために作り出された表現という印象をぬぐえない。須賀 (1981) には具体的な説明はないが、〈所属関係〉を広く解釈すれば、結局は、櫻井 (1977) が再帰的他動詞と呼んだ動詞の特徴と用語こそ違うが、同じことを指摘していると考えられる。違いはそれを自動詞と呼ぶか、他動詞と呼ぶかである。

(83) に示したような須賀の考え方によれば、結果的に「(口を) あく」の「あく」は自動詞ということになるだろう。しかし、典型的な他動詞の意味 (=対象に変化を及ぼす) でないからといって、それをただちに自動詞だと決めつけるわけにはいかない。

(83) 須賀 (1981 : 563)

たとえヲ格を伴っていても自動詞は対象に変化を及ぼさない行為を意味し、他動詞は対象に変化を及ぼす行為を意味する。それぞれの基本的な性質の範囲で使われているのである。はじめに提示した

太郎が大きな口をあいた

大きな口があいた

という対応は、いわば疑似的な構文論的自他対応であって、正しい対応は、

太郎が大きな口をあけた

大きな口があいた

であり、「太郎が大きな口をあいた」の「あく」は自動詞であると認めるべきである。

「ヲ終わる」が（「ガ終わる」とはやや異なるものの）「ヲ終える」に対して、相対的に低い他動性（＝自動詞的な意味）をもつことは現代語についての共通の認識だと考えられる。要は、意味論的な他動性および形態論的な他動性と統語的な他動性の間にズレが生じた場合に、それを自動詞と呼ぶのがいいのか他動詞と呼ぶのがいいのかということである。本論文は、自動詞的な“意味”にもかかわらずヲ格目的語をとって他動詞のように振る舞う動詞が生成される動機付け [M2] を仮定し、これも他動詞化の1つであり、したがって「ヲ終わる」の「終わる」、「ヲあく」の「あく」は他動詞だと見る。ただし、通常の自他交替を動機付ける [M1] とは異なるレベルの他動詞化であり、「ヲ終える」の「終える」は [M1] に動機づけられた使役変化（他）動詞で、「ヲ終わる」の「終わる」は [M2] に動機づけられた所有他動詞であるというのが本論文の主張である。須賀（1981）をはじめ（78ホ）の考え方に立つ研究者にとって、「ヲあく」の「あく」を他動詞として受け入れがたいのは、他動詞を一枚岩のように考えるからである。もしこれを上述のように2つのレベルの他動詞があると仮定したらどうだろうか。本論文は、「ヲあく」の「あく」を他動詞とみることは、状態動詞を含め、自動詞的な事象を叙述する他動詞文を統一的に捉えるために必要な視点だと考える。

しかし、なぜこのように他動詞というラベルを貼るほうがいいのかについては説明されなければならない。なぜなら、ただ単にヲ格をとるものは全て他動詞だと言ったのでは、「ヲ歩く」「ヲ出る」などの移動動詞も他動詞として扱わなければならない<sup>55</sup>。これは第3節、4節で詳しく論じる。なお、個別に動詞を扱った先行研究としては、「終える・終わる」を扱った須賀（1990）、「移す・移る」「終える・終わる」「あける・あく」を扱った福島（1991）、そして、福島の論文を受けて「かえる・かわる」を扱った須賀（1999）などがあるが、それぞれの分析は、第4節の構文分析で必要に応じて引用することにする。

### 2.2.3 C〈実際の動作主を無視する他動詞文〉

ここで取り上げる先行研究は、次のとおりである。佐藤（1994）、稲村（1995）、須賀（2000）、大倉（2004）、佐藤（2005）、天野（2002）。

#### ■佐藤（1994）

佐藤（1994）は、「述語のヴォイスの形態が無標であるにもかかわらず、主語が動詞の示す行為の主体ではないという解釈をも許すもの」（同書：53）を「介在性の表現」と呼んだ。通常、日本語ではヴォイスの形態が無標（：受身、使役の接辞がつかない）の場合は、述語動詞の示す行為の主体が主語になるので、(84a, b) (85a, b) の動作主はそれぞれ別々のはずだが、実際には、同じ事象を叙述することができる。このような特殊な意味特徴をもつ (84b) (85b) を「介在性の表現」と呼び、どのような条件のもとでこのような他動詞文が成立するのかを分析している。

(84) 佐藤（1994：54 = (2))

- a. 医者が患者に注射した。
- b. 患者が注射した。

(85) 佐藤（1994：54 = (3))

- a. 大工が（山田さんの）家を建てた。
- b. 山田さんが家を建てた。

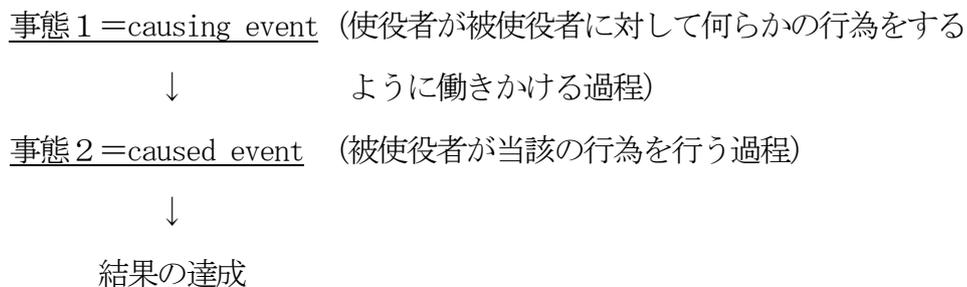
佐藤は、介在性の表現の基本的な性格として、「使役的状况」としての意味的特徴を有している一方で、「話者が実際には存在する被使役者を無視して、あたかも主語自身がすべての過程を自分で行ったかのようにとらえている」という特徴をもっているため、「表現する事態と言語形式の間に大きなずれがある」（同書：57）と述べている。そして、「使役的な状況」としての意味的特徴を有しているといっても、(86) が示すように、多くの場合はそのような特徴を有していても介在性の表現が成立するわけではないと指摘している。

(86) 佐藤 (1994 : 57-58)

- a. (患者が医師に依頼し、病気の診察を受けた場合)  
\*患者が診察した。 (介在性)
- b. (学生が教師に依頼し、推薦状を書いてもらった場合)  
\*学生が推薦状を書いた。 (介在性)

そして佐藤は、介在性の表現が成立するための条件として「事態のコントロール」と「動詞の意味的焦点」という要因が関わっていると結論づけている。佐藤は、介在性の表現が表す使役的状况を(87)のように考えた。「使役者」は「被使役者」に働きかけ(=事態1)、そして「被使役者」は実際に「対象」に対して動作を行い(=事態2)、結果が達成される。このような構図において介在性の表現が成立するには、被使役者(=実際の行為者)を無視して、あたかも使役者(=介在性の表現の主語)がすべての過程を自分で行ったかのように、話者が事態を把握しなければならないと考えた。そして、そのような事態把握には、使役者による「事態のコントロール」(88a)、「動詞の意味的焦点」(88b)の2つの要因が関わっていると述べている。(同書 : 58-61)

(87) 使役情況の過程 (佐藤 1994 : 57 = (10))



(88) a. 事態のコントロール

被使役者の[動作行為の過程(事態2)]を無視するということは、使役者が事態全体をコントロールしていると認知されなければならない。そのためには、使役者がコントロールできないような事態、つまり被使役の主観によって結果達成が左右されるような事態であってはいけない。

b. 動詞の意味的焦点

被使役者の[動作行為の過程(事態2)]を無視するということは、動詞が表

す意味がそのような過程のあり方に焦点を当てるようなものであってはいけない。

(89a, b) のように比較的意味が類似した動詞であっても、(89b) が介在性の表現として成立しないのは、「事態のコントロール」によるもので、写真屋に顔写真を依頼するのは違って、「Aという画家に依頼するか、Bという画家に依頼するかによって、大きく結果が異なってくると予想されやすい」(同書:59) からだと説明している。これが佐藤の言う「主観によって結果達成が左右されるような事態」である。

(89) 佐藤 (1994 : 58 = (16) (17))

- a. (浩が写真屋に依頼して、顔写真をとってもらった場合)  
浩が顔写真をとった。 (介在性)
- b. (浩が画家に依頼して、似顔絵をかいてもらった場合)  
\*浩が似顔絵をかいた。 (介在性)

これは、ある事態が私たちの日常生活の経験からどのように解釈されやすいかということと密接に関わっている。一方、「動詞の意味的焦点」は動詞がもつ意味特徴によるものである。同じ「生産」に関する動詞でも、「作る」と「編む」では介在性の表現の可否に差が出る。「作る」は生産の様態、方法などが指定されていないのに対して、「編む」はその方法が指定された動詞である。このため (90b) には介在性の解釈が成立しない。これが佐藤の言う「過程のあり方に焦点を当てる」動詞というわけである。

(90) 佐藤 (1994 : 60 = (27) (28))

- a. (花子が人に依頼して洋服を作ってもらった場合)  
花子が洋服をつくった。 (介在性)
- b. (花子が人に依頼してセーターを編んでもらった場合)  
\*花子がセーターを編んだ。 (介在性)

また、佐藤は最後に「再帰性」とのつながりについても少し触れている。(87) のような「事態全体をコントロールする」という把握がされやすくなる要因として、「結果を主語

が所有する」という再帰性も関わっていると指摘している。例えば、(91a) では、検査の結果を主語「太郎」が所有することになり、(91b) では、家屋に及んだ変化の結果を主語「山田さん」が所有することになるという解釈である。

(91) 佐藤 (1994 : 61 = (31) (32))

- a. (太郎が病院に依頼して、胃の検査をしてもらった場合)  
太郎が胃の検査をした。
- b. (山田さんが工務店に依頼し、家屋を取り壊してもらった場合)  
山田さんが家屋を取り壊した。

まず、佐藤 (1994) が示した「介在性の表現」の位置づけについて問題提起をしておきたい。佐藤は「介在性の表現」を「他動詞表現の意味的バリエーションの1つ」であると位置づけているが、その根拠として (92) のように「ボイス転換の面などでも受動化や使役化などが可能であり、通常他動詞表現と同じである。」(同書 : 56) という点を挙げている。

(92) 佐藤 (1994 : 56 = (8))

(将軍が部下の兵士に命令して村人を虐殺させた場合)

- a. 将軍が村人を虐殺した。 (介在性)
- b. 村人が将軍によって虐殺された。
- c. 軍司令部が将軍に村人を虐殺させた。

しかし、受動化について言えば、佐藤があげる唯一の例である (92b) は、たまたま動作の対象が主語名詞句とは〈所属関係〉(高橋 1975) をもたないため、つまり動作が他者に向けられているために受動化が自然に成立するのであって、佐藤 (1994) の他の多くの介在性の表現では自然さが落ちるか、元々の意味を保持しない。なぜなら多くの介在性の表現の多くは、主語名詞句と目的語がなんらかの〈所属関係〉にあり、その点で(再帰構文ではないが、) 再帰構文と似た性質を持っていると考えられるからである。

- (93) a. 山田さんは(自分の)手をたたいた。 (再帰構文)  
 b. ? (山田さんの)手が自分によって叩かれた。  
 c. (美容院で髪を切ってもらった場合)  
     山田さんは美容院で髪を切った。 (介在性の表現)  
 d. (美容院で髪を切ってもらった場合)  
     #美容院で(山田さんの)髪が自分によって切られた。(介在性ではない)

このような事実を踏まえれば、介在性は「再帰構文」ではないが、統語的な特徴として、主語名詞句と目的語とは〈所属関係〉によって結ばれているという、再帰と共通した特徴を持つことがもっと注目されているのではないだろうか。このような関係に注目することは、介在性の表現が「どんな場合に成立するのか」ではなく、「なぜこのような構文が生成されるのか」という根本的な問題に注目することである。佐藤(1994)ではこの点が十分ではない。これが第二の問題点である。本論文は(92a)のような他動詞文は再帰と類似した特徴をもつ典型的な介在性の表現とはやや性質を異にしており、複数のタイプの介在性の表現を認めることが必要だという見方に立つ。この問題については、後で取り上げる須賀(2000)がやはり介在性の表現を再帰性の関わりの有無で分けて論じているので、そこで改めて取り上げて、何が問題なのかを詳しく示すことにする。

なお佐藤は、後に佐藤(2005)でメトニミーの概念を用いて分析しているが、それはこの小節の下で改めて取り上げる。

#### ■稲村(1995)

稲村(1995)は2.2.1で「状態変化主体の他動詞文」についての先行研究として取り上げたが、ここで取り上げるのは、稲村が「④【主語が、他者に行為をさせ、その行為を自分の主導・主宰したこととして表現する場合】」(同書:61)に分類した再帰構文についての考察である。これに分類された構文は、佐藤(1994)の「介在性の表現」に相当する。稲村は「状態変化主体の他動詞文」も「介在性の表現」も「主語は変化の結果を身に負うのみであり、動作の実行者ではない」(同書:63)という点で共通していると指摘している。

稲村はあくまで再帰構文の枠組みで分析しているため、上の佐藤(1994)の最後に問題を保留しておいた(92a)のような文も、「補語を主語の関係するもの(支配下にある所属

物的な存在) とみなす」(同書: 63) 場合だとして、(94a) の用例を挙げて (94b) のように説明している。そして稲村は、「介在性の表現」にあたる構文を、「「主宰者的な主語による使役的再帰構文」と考えることができよう」(同書: 63) と結論づけている。

(94) a. 稲村 (1995 : 61 = (24))

荒木村重は尼崎城に逃げ、信長は村重の一族三十余人を京都六条河原で切り、  
婦女子百二十余人を尼崎ではりつけにし、ひ妾僕従五百余人を焼き殺した。

b. 稲村 (1995 : 63 ※下線は引用者による)

信長が「切る」という動作を実行していなくとも文は成立する。村重一族の命運が信長の支配下にあり、信長の所有物とみなせる存在である時、信長が実際の行為者に命じて一族を切らせたとしても、信長を主宰者的な主語として表現することが可能である。

稲村の「主宰者的な主語」とは、本論文が主張する〈所有主体の他動詞文〉の主語と共通する認識だと考えられる。(94b) の解説にある「所有物とみなせる存在」という見方は、あくまで主語と目的語に〈所属関係〉を認め、再帰構文の枠組みの中でこの構文を分析した結果だろうと思われるが、名詞句のレベルで〈所属関係〉をもつことにこだわりすぎていると考える。本論文は、〈所有〉の意味概念をもつ他動詞文をいくつかの段階に分けて分析するが、変化の事象については、「事態成立の履歴の所有」を想定している。つまり、上の例に当てはめれば、「信長」にとって「一族」が「所有物」とみなせる存在なのではなく、「信長」が「(実際の動作主が) 一族を切る」という事態の成立を (主宰者として) 所有していることを表している、という意味で〈所有主体の他動詞文〉になっているというのが、本論文の主張である。その一方で、「将軍が村人を皆殺しにした」のような事態を報告する文においては、将軍が事態の引き起こし手として強くイメージされ、「事態の成立の履歴を所有する」というような意味とは異なる見方もできる。これについては、後の「須賀 (2000)」において再度検討することにする。

## ■影山 (1996)

2.2.1 の「影山 (1996、2002c)、Kageyama (2002b)」を参照。

## ■須賀 (2000)

須賀 (2000) は、「行為の主体」がどのように認識され、どのような形式で表現されるかという視点から佐藤 (1994) の「介在性の表現」を分析している。須賀はおおむね佐藤 (1994) が示した介在性の表現の成立要因の妥当性を認めた上で、介在性の表現を「再帰性に関わる状況」と「再帰性に関わらない状況」の二種類に分けて分析した点が重要である。

須賀は、先に紹介した「佐藤 (1994)」で問題提起をした「将軍が村人を虐殺した」というような文を「再帰性に関わらない状況」を表し、「因果関係」によって成立する表現 (同書 : 29) であると述べている。具体的には、(95) の文における実際の行為者である「部下」は使役者の行為を〈代行〉していると考えられ、そのような〈代行者〉は (96) のような他動詞文における道具に近い存在として扱われているという考え方を示している。

(95) 須賀 (2000 : 24、28 = (9))

(マフィアのボスが部下に命令して、警備員を殺させた場合)  
マフィアのボスが警備員を殺した。

(96) 須賀 (2000 : 28)

- a. (社長が除雪機で駐車場の雪を掻いた場合)  
社長が駐車場の雪を掻いた。 (=須賀 (23))
- b. (料理人が皿洗い機で皿を洗った場合)  
料理人が皿を洗った。 (=須賀 (24))

つまり、結果として生じた事象の原因として関与していると認識される行為者が、その最終的責任者まで遡って表現されることによって、「ボス」が主語となったのが (95) の表現だというわけである。(同書 : 29)

本論文でも、基本的に須賀が指摘するように2つのタイプがあるという考え方をとるが、介在性の表現の全体の中での位置づけがやや異なる。また須賀は、「患者が注射をした」の

ような「再帰性が関わる状況」について、「「介在性の表現」の主体は、行為の主体であり、かつ状況の主体であるとも言える」（同書：29）と指摘した上で、「いわゆる他動詞文であっても、「原因－結果」という認識の枠組みだけでなく、〈受け手〉も行為者であるような、行為を中心とした認識の枠組みがあるのではないか」（同書：29）とまとめている。佐藤（1994）が〈仕手〉の視点から論じていたのに対して、〈受け手〉の視点で事態を把握することを指摘したのは重要である。しかし、須賀はその「〈受け手〉も行為者であるような枠組み」が具体的にどんなもので、どのように生成されるのかについては説明していない。

本論文は、須賀が提案するこの枠組みは、所有主体の他動詞文がベースになって生成されるのではないかと考える。そして、〈所有〉の意味概念のあり方に段階性があることを示し、再帰性の関与の有無はこの段階性の違いであると考え。これによって再帰性が関与しない場合も含め、介在性の表現は所有主体の他動詞文の拡張事例として統一的に説明できることを示す。

もう一点、注目すべき点は、再帰性が関わる介在性の表現と、「着る」「被る」といった再帰専用の2項述語と3項述語の「着せる」「被せる」の関連を指摘したことである。

(97) 須賀（2000：26 = (14) (15)）

- a. (洋子は美容院で振りそでを着せてもらった)  
洋子が振りそでを着た。(介在性)
- b. (一郎は買ってもらった野球帽を祖父に被せてもらった)  
一郎が野球帽を被った。(介在性)

本論文では、B〈自動詞の形態をもつ他動詞文〉の中の〈単他動詞がヲ格をとる他動詞〉として取り上げた構文であるが、(97)のような介在性の表現が成立することが示唆しているのは、〈所有〉という意味概念をもつ他動詞文という点ですべてに共通したものがあるということだと考える。

ちなみに、須賀（2000）では、「主体が事態の出現に対して非意図的であることにおいて「介在性の表現」とは異なっている。また、その成立要因も異なると考えられる」（同書：21）として、「状態変化主体の他動詞文」（天野 1987b）を考察対象から除外している。

## ■大倉 (2004)

大倉 (2004) では、2.2.1 で示したように、「所有関係構文」の中に佐藤 (1994) の「介在性の表現」にあたる「受益者主語構文」を入れているが、最終的には、(98a,c) と (98b, d) の対比を示し、「(介在性の表現は) 意味の上では所有関係構文と類似性がみられるが、別の所有者の介入を許すことから、統語的には所有関係構文と区別すべき構文である」(同書:55、下線は引用者による) と述べている。つまり、(98a, c) は介在性の表現であるが、(98b, d) のように他の所有者の介入を許すため、「所有関係構文」ではないことになるわけである。

- (98) a. 秀吉が大坂城を建てた。(=大倉 (45a))
- b. 秀吉が家来の城を建てた。(=同 (45b))
- c. 太郎が (テーラーで) スーツを仕立てた。(=同 (46a))
- d. 太郎が (テーラーで) 息子のスーツを仕立てた。(=同 (46b))

その一方で大倉は「所有関係構文は他の所有者の介入を許さない」ことを示す用例として (99a, c) を挙げているが、(99a) は介在性の表現である。

- (99) a. 花子が (美容院で) 髪を切った。(=大倉 (43a))
- b. \*花子が (美容院で) 娘の髪を切った。(=同 (43b))
- c. 山田さんが空襲で家を焼いた。(=同 (44a))
- d. \*山田さんが空襲で隣の家を焼いた。(=同 (44b))

つまり、介在性の表現のすべてが他の所有者の介入を許すのではなく、介入を許すもの (98a) と許さないもの (99a) があるのである。一部のタイプの介在性の表現が他の所有者の介入を許さないからといって、「所有関係構文」(本論文では「所有主体の他動詞文」と呼ぶ構文) と切り離す理由にはならないと考える。介在性の表現を所有主体の他動詞文の「拡張事例」と捉えることで、拡張の度合いに応じて構文成立の条件が緩くなる (=他の所有者の介入を許すようになる) というのが本論文の主張である。

詳細は第4節の構文分析に譲るが、以下に考え方の概略を示しておく。須賀 (2000) は、介在性の表現を再帰性の有無で2つのタイプにわけて考えたが、再帰性のないタイプは

(100c)のように他の所有者の介入を許すが、再帰性があるタイプは2つに分かれ、(100a)は他の所有者の介入を許さないが、(100b)は介入を許す。

(100) a. N1 と N2 の関係が再帰になっている場合：

「全体 (N1) - 部分 (N2)」の関係になっている。

花子が (美容院で) 髪を切った。(=99a) (介在性)

N1                      N2

= [花子が依頼して] 美容師が、(美容院で) 花子の髪を切った。

N1    N2

他の所有者の介入

⇒ \*花子が (美容院で) 娘の髪を切った。 (介在性)

b. N1 と N2 の関係が再帰になっている場合：

「所有者 (N1) - 所有物 (=N1 のための生産物) (N2)」の関係

秀吉が大坂城を建てた。(=98a) (介在性)

N1    N2

= [秀吉が命令して] 労働者が、秀吉のために大坂城を建てた。

N1                      N2

他の所有者の介入

⇒ 秀吉が家来の城を建てた。(=98b) (介在性)

c. N1 と N2 の関係が再帰になっていない場合

将軍が村人を皆殺しにした。 (介在性)

N1    N2

= [将軍が命令して] 家臣が、将軍のために村人を皆殺しにした。

N1                      N2

他の所有者の介入

⇒ 将軍が敵国の村人を皆殺しにした。 (介在性)

他の所有者の介入を許す (100b, c) の共通点を見ると、「実際の動作主 (=被使役者)

が N1 のために」ある動作を行うという意味になっている。(100b) は結果物が N1 の所有物になるという点で再帰の関係が認められるが、この「N1 のために」という意味を持つ点で (100a) とは異なる。このような違いが他の所有者の介入の許容性の差となって表れていると考えられる。つまり、(101a) に示したように、N2 の「大阪城」ところにそっくり「家来の城」が入っただけと考えれば、基本的な構造「所有者 (N1) - N1 のための生産物 (N2)」である点には何ら変化はないのである。

(101) a. [秀吉が命令して] 労働者が、秀吉のために大阪城を建てた。

N1                  N2

|                      |

秀吉のために家来の城を建てた。

b. 秀吉が大阪城を建てた。(=98a)      (介在性)

N1      N2

|          |

秀吉が家来の城を建てた。(=98b)      (介在性)

本論文では、(101) に示したような「N1 のために」という意味と〈所有〉の意味概念のつながりに注目し、介在性の表現を、他の所有者の介入を許す場合も含めて、〈所有主体の他動詞文〉の拡張事例という視点からその生成の仕組みを示す。

#### ■佐藤 (2005)、天野 (2002)

佐藤 (2005) は、認知言語学的なアプローチを取り入れ、「全体で部分を意味する」または「部分で全体を意味する」というメトニミー (隣接関係によって生じる意味のズレ) という概念を用いて天野 (1987b、2002) の「状態主体変化の他動詞文」と佐藤 (1994) の「介在性の表現」<sup>56</sup>を分析している。

具体的には、使役変化動詞の意味を (102) のように、「動作主の働きかけの事態」と「対象の変化の事態」の2つが隣接した状態にあると考え、「状態変化主体の他動詞文」は、(103a) のように、動詞の意味としては「全体」を表しているが、実際の状況 (103b) は「部分」を表しており、ここに「全体で部分を表す」というメトニミーが働いているというのが佐藤の考え方である。

(102) 使役変化動詞の意味

[AGENT:ACT] + [THEME:ACHIEVEMENT]

動作主の働きかけ 対象の変化

(103) 佐藤 (2005 : 111, 125)

私たちは、空襲で家財道具を焼いた。

a. 動詞の意味 :

[AGENT:ACT] + [THEME:ACHIEVEMENT]

b. 実際の状況 :

[THEME:ACHIEVEMENT]

このような考え方を「介在性の表現」にも用いると、今度は逆に、(104) に示したように「部分で全体を意味する」というメトニミーが働いていることになると述べている。つまり、動詞の意味においては、「動作主の働きかけ」と「対象の変化」を表すだけだが、実際の状況において、「使役者の行為 (AGENT (CAUSER) : ACT)」と「被使役者の行為 (AGENT (CAUSEE) : ACT)」と「対象の変化」の3つの事態を表しているというわけである。

(104) 佐藤 (2005 : 126-127)

(工務店に発注して家を建ててもらった場合)

山田さんは家を建てた。

a. 動詞の意味 :

[AGENT:ACT] + [THEME:ACHIEVEMENT]

b. 実際の状況 :

[AGENT (CAUSER) : ACT] + [AGENT (CAUSEE) : ACT]

+ [THEME:ACHIEVEMENT]

メトニミーは語の意味を考える上で欠かせない概念であるが、意味の構造に関してこのようなメトニミーを適用することは斬新なアイデアだと考えられる。語彙意味論で言え

ば、佐藤の変化他動詞の意味記述は「上位事象」と「下位事象」の組み合わせであり、それが実際の状況において、「下位事象」だけだったり、2つの事象のさらに上に「使役者による働きかけの事象」を加えたものだったりする点を、「意味のずれ」と考えれば、これもメトニミーと言えるのかもしれない。しかし、ここで2つの疑問を提起しておきたい。1つは「介在性の表現」についてで、もう1つは「状態変化主体の他動詞文」についてである。

メトニミーによる分析では、「山田さんは病院で注射した」は「山田さんが医者などに注射してもらった」という「実際の状況」を表すことができるのは、「注射する」がもともと持っている2項述語としての意味（注射する人と注射を受ける人を参与者にとる）で、使役構文の意味（注射を依頼する人と注射をする人と注射を受ける人を参与者にとる）を表すからということになるだろう。構成する事態を比べると、前者が後者に含まれる関係にあるので、「部分で全体を意味する」というメトニミーが起きていると考えるわけである。そして佐藤（2005）でも介在性の表現の生まれる要因については佐藤（1994）を踏襲しているので、メトニミーが働くのも同じ要因が働いていると考えていいだろう。

そこで、(105)の2つの文の違いについて考えてみたい。(105a)は、メトニミーが働く要因が存在し、かつ実際にそれが働いて、結果的に介在性の表現になった文である。(105b)は、メトニミーが働く要因が存在しているが、一種のヴォイスの形式である「～てもらおう」を使って（つまりあえてメトニミーを働かせずに）表現した文である。

(105) a. 山田さんは病院で注射した。(介在性)

b. 山田さんは病院で注射してもらった。

介在性の表現が成立する要因および意味解釈の原理はわかったとしても、(105a)ではなく、なぜ(105b)の表現形式が選ばれるのかについては、どう説明するだろうか。(105b)はメトニミーによって表現できる事態をわざわざボイス形式を選択して表現している冗長な表現なのだろうか。それとも明示しなくても了解される意味をわざわざ明示する表現なのだろうか。この答えにこそ、介在性の表現の本質があると考えられる。

本論文は、佐藤の考える介在性の成立要因を支持する。そして、メトニミーによる意味解釈の原理を否定するものではないが、上の問題の答えを出すには、介在性の表現のような他動詞文がどのような“動機付け”によって生成されるのかを説明する必要があると考

える。介在性の表現の生成が生まれるのは、話者が「(受益者が) 事態成立の履歴を所有している」という〈所有〉の意味概念をもつ事象として事態を切り取る(把握する)からだと考える。そのような把握によって生成される〈所有主体の他動詞文〉がベースとなり、実際の動作主が無視され、事態の所有者が擬似的な動作主の主語になるという拡張を起こしているというのが本論文の主張である。

「状態変化主体の他動詞文」についても同様の問題が提起される。それは 2.2.1 の「天野(1987b)」で問題提起したものと同じである。メトニミーによって主語名詞とヲ格名詞の関係が矛盾なく解釈できるようになると考えることは否定しないが、そもそも「空襲で家が焼けた」と自動詞文で言えることを、なぜ「全体で部分を表す」というメトニミーを働かせる構文が選択されるのか。やはりここでも「状態変化主体の他動詞文」が生成される“動機付け”が問題になるのである。佐藤(2005)は、天野(2002)における「状態変化主体の他動詞文」の構文文法的な分析について、自身の考え方と比較して次のように述べている。

(106) 佐藤(2005: 125)

天野(2002)の主張によれば、状態変化主体の他動詞文を基準的な意味<sup>57</sup>に近づけて理解するために、〈事態を所有する〉という文の意味が先に決まり、それに合わせて隣接性の解釈が必要とされることになる。これに対し、本書(※引用者註: 佐藤(2005)のこと)は、話者が当該の文を意味あるものとして理解するために主体と客体の関係性を隣接性の関係にもとづいて読み込まなければならず(つまり隣接性の解釈がまず先にあつて)、〈事態を所有する〉という文の意味事態はその結果としてえられるものという見方をしている。

天野(2002)では、「状態変化主体の他動詞文」についてその成立条件がほぼ同じ形で引き継がれているが Goldberg(1995)らが提唱する構文文法の理論と類似したアプローチをとっており、いわゆる「構文にも意味が存在する」という立場にをとっている。その意味を「事態を所有する」と考える点では、本論文の考え方と共通している。違いの1つは、本論文は「構文」からのアプローチではなく、語彙意味論からのアプローチであることである<sup>58</sup>。そしてもう1つの違いは、天野(2002)においても、天野(1987b)と同様に「状態変化主体の他動詞文」の「事態の所有」を“(他動詞として表現し得る)他動性の

低下の端”に位置づけているが、本論文はもう1つの側面として、自動詞の側から [M2] (「所有者の出来構造化」と「場所の焦点化」という認知主体の事態の把握によつての生まれる、〈所有〉の意味概念をもつ他動詞文を考える。佐藤 (2005) は、「意味の解釈」に重きを置いた分析なので、天野 (2002) の見方とは反対になるのだろうと思われるが、本質的になぜこのような特異な他動詞文が生成されるのか、その動機付けを考えれば、話者 (認知主体) の事態の把握の仕方とそれが言語形式に反映した構文という2つの面は独立して存在するものではなく、相互に関係があるとみるべきであろう。その中で外界の認知と言語形式のインターフェースを担っている語彙概念構造に焦点を当てて分析するのが、本論文のアプローチである。

### 2.3 まとめ

A 〈自動詞的な他動詞文〉、B 〈自動詞の形態をもつ他動詞文〉、C 〈実際の動作主を無視する他動詞文〉の順番で、先行研究を見てきた。一部の研究 (影山 1996、影山 2002b、坂野 2004、大倉 2004) で包括的に構文を分析しているものはあったが、〈所有〉の概念をもつ他動詞文の全体をカバーして、統一的に生成のメカニズムを論じた研究はなかった。

A 〈自動詞的な他動詞文〉について多くの研究から明らかになったことは、ヲ格名詞を伴っていても他動性が低く、主語が何らかを〈所有〉していることを表しているということである。しかし、そのような他動詞文がどのようにして生成され、なぜヲ格が付与されるのかについては、ほとんどの先行研究が、他動性の高低 (本論文で [M1] と呼ぶ動機付け) の視点で、他動性の低い他動詞文という位置づけで済ませている。その中で、影山 (2002b) の語彙意味論による分析は、下位事象のみで成立する他動詞 (=非対格他動詞) の存在を主張しており、その生成メカニズムを〈所有〉の意味概念と結びつけている。これは本論文の考え方と共通している。ただし、A、B、Cにまたがる構文のつながり (拡張) については分析が不十分である。また坂野 (2004) も影山のいう非対格他動詞に相当する動詞を三上 (1954 復刊 1972) の「所動的他動詞」だとして、生成文法の統語論的アプローチでその生成メカニズムを論じている。対象とする動詞 (構文) は広いが、〈所有〉の意味概念とのつながりについての分析がない。

A 〈自動詞的な他動詞文〉とC 〈実際の動作主を無視する他動詞文〉のつながりについては、特に天野 (1987b) の「状態変化主体の他動詞」と佐藤 (1994) の「介在性の表現」は、再帰性や所有の意味概念など類似点を指摘する研究は多いが、実際に統一的な理論で

分析しているものは、佐藤（2005）のメトニミーによる分析だけであった。

B〈自動詞の形態をもつ他動詞文〉については、積極的にAとのつながり、またはCとのつながりを論じているものはなかった。AとBは分類基準が異なり、両者が重なる部分があるのだが、Aの側からBを取り上げたのは、B-3〈単他動詞がヲ格をとる他動詞文〉とそれに類似する構文のみで、それ以外は、影山（1996、2002b）の「非対格他動詞は形態の変化を伴わないで自他交替する」という指摘が、B-2〈両用動詞がヲ格をとる他動詞文〉との接点を示唆するにとどまり、B-1〈有対自動詞がヲ格をとる他動詞文〉については、〈所有〉の意味概念をもつ他動詞文という視点から論じたものはないようである。

### 3 理論の枠組み

#### 3.1 語彙概念構造と項構造

##### 3.1.1 語彙概念構造

本論文では、語彙意味論的アプローチをとるが、その基盤となるのが語彙概念構造 (LCS) である。語彙概念構造とは、「動詞が表す概念的な意味を抽象的な述語概念で表示した構造」(影山 1996 : 47) であり、これが項構造を経て統語構造へ反映されると考える。つまり、(全てではないにしても) 動詞の意味概念がその動詞の統語的な振る舞いを決めることが多く、その構造によってクラス分けされた動詞は、同じような統語上の振る舞いをする事が説明できると考えられる。そして、この語彙概念構造は「基本的に個々の単語の概念的意味を示すのであるが、単にそのような静的な表示であるだけでなく、組み替えや合成といった動的な操作を受ける」(影山 1996 : 48) ものとする。

また、語彙概念構造は、「言語と外界認知のインターフェイスに位置する」(影山 1996 : 48) もので、話者 (認知主体) が事態をどのように把握し、切り取るかが語彙概念構造にも反映されると考える。外界と語彙概念構造、そして項構造、統語構造とのつながりは、次のようになっていると考える。(具体的な対応については後で述べる)

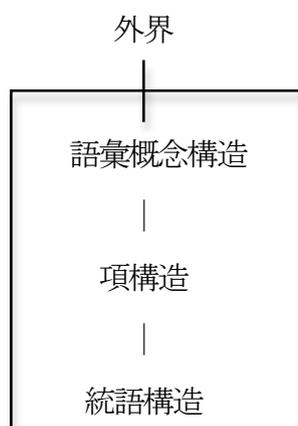


図 6 外界と文法の関係 (影山 1996 : 49)

語彙概念構造は、意味述語 (意味関数) と  $x, y, z$  などの変項によって表示される。意味述語の表記および概念構造の表示方法は研究者によって異なるが、ここでは基本的に影山 (1996) の表記、表示方法を採用する。意味述語は、状態をあらわす 'BE'、変化 (位置

変化、状態変化を含む)を表す‘BECOME’、活動を表す‘ACT’、そして上位事象と下位事象を結びつける使役を表す‘CAUSE’の4つを基本とする。厳密には影山(1996)では、日本語の他動詞化接辞の働きを考慮し、主語が出来事(人間名詞も含む)の場合に‘CAUSE’が使われ、動作主の場合には‘CONTROL’が使われ、両者を区別しているが(同書:197-198)、本論文では、特に必要がない限り、上位事象と下位事象を使役で結びつける意味述語として‘CAUSE’を使うことにする。変化については、アスペクトの違いによって‘BECOME’(瞬間相)と‘MOVE’(継続相)を使い分けるとしている(同書:59)。本論文でもその使い分けが必要な場合には‘MOVE’も用いることにする。基本的な語彙概念構造は(107)のように4つのパターンで示される。

(107) 語彙概念構造の基本的なパターン

- a. 状態 : [y BE AT-z]
  - b. 変化 : [y BECOME [y BE AT-z]]
  - c. 活動 : [x ACT (ON y)]
  - d. 使役変化 : [x ACT (ON y)] CUASE [y BECOME [y BE AT-z]]
- ⏟
⏟
- 上位事象
下位事象

上の基本パターンはアスペクトによる動詞の四分類(Vendler 1967)と対応している<sup>59</sup>。状態と変化の概念は、空間における「(物の)存在」「(物の)移動」がメタファーによって「(物の)状態」「(物の状態)変化」に拡張すると考えられるので、同じ概念構造によって表示される。また、活動の概念で、‘xACT’は自動詞を表し、‘xACT ON y’は「打撃・接触」の(対象yの変化が含意されない)他動詞を表す。「活動」からなる上位事象と「状態」「変化」または「変化+状態」からなる下位事象の2つを合わせたものが使役変化で、これが人間の言語が1つの述部で表し得る最大の概念構造であると考えられる(影山1996:204)。これらの概念構造の意味を記述すると(108)のようになる。〈〉の動詞は各意味概念を代表する動詞である。

(108) 語彙概念構造の基本パターンの意味

- a. 状態 : 存在 [y ガ z ニ 〈ある〉]  
属性 [y ガ z デ 〈ある〉]
- b. 変化 : 位置変化  
[y ガ [y ガ z ニ 〈ある〉] ニ 〈なる〉 ] = [y ガ z ニ 〈移動する〉]  
状態変化  
[y ガ [y ガ z デ 〈ある〉] ニ 〈なる〉 ] = [y ガ z ニ 〈変化する〉]
- c. 活動 : [x ガ (y ヲ) 〈する〉]
- d. 使役変化 : 位置変化  
[x ガ (y ヲ 〈する〉 ) ] が [y ガ z ニ 〈移動する〉] を 〈引き起こす〉  
状態変化  
[x ガ (y ヲ 〈する〉 ) ] が [y ガ z ニ 〈変化する〉] を 〈引き起こす〉

### 3.1.2 項構造

項(argument)とは「情報完結」<sup>60</sup>のために述語が要求する要素で(長谷川 1999:22-23)、項構造とは、述語が要求する項の構造である。項構造は最大で3つの項からなるが(長谷川 1999:24、外崎 2005:26)、表示方法については研究者によって異なる。本論文では内項と外項<sup>61</sup>、直接内項と間接内項を区別して表示する。全体を( )で囲み、内項を< >に入れて外項と区別し、直接内項には下線を引いて間接内項と区別する。そして、本論文では原則として外項を‘x’、内項を‘y’‘z’で表示し、意味役割は表示しない<sup>62</sup>。今後の議論で間接内項は重要な役割を担うので、Rappaport and Levin (1988)にならって、英語の「場所の前置詞句」を意味する‘P<sub>loc</sub>’を付けておく。主要な動詞のタイプとその項構造を、上述の語彙概念構造を付けて下に示す。(両者の対応規則は後で示す)

(109) a. 1項述語

1) 働く : ( x < > )

[xACT]

「太郎 (x) が働く」

2) 死ぬ : ( < y > )

[y BECOME [y BE AT-DEAD]]

「虫 (y) が死ぬ」

b. 2項述語

3) ある : ( < y P<sub>loc</sub> z > )

[y BE AT-z]

「リンゴ (y) がテーブル (z) にある」

4) 入る : ( < y P<sub>loc</sub> z > )

[y BECOME [y BE AT-z]]

「ボール (y) が穴 (z) に入る」

5) 食べる : ( x < y > )

[x ACT ON y]

「太郎 (x) がリンゴ (y) を食べる」

6) 壊す : ( x < y > )

[x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT-BROKEN]]

「太郎 (x) が箱 (y) を壊す」

c. 3項述語

7) 置く : ( x < y P<sub>loc</sub> z > )

[x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT-z]]

「太郎 (x) がリンゴ (y) をテーブル (z) に置く」

(109a) の1項述語は自動詞であるが、「働く」は上位事象のみで、外項 x だけをもつ。一方「死ぬ」は下位事象のみで、内項 y だけをもつ。このように自動詞を二分する考え方は、「非対格仮説」(Perlmutter 1978, Burzio 1986) によるもので、現在では広く受け入れられている考え方である。「働く」のように上位事象のみで動作主の活動を表す動詞を「非能格動詞」、「死ぬ」<sup>63</sup>のように下位事象のみで対象の変化を表す動詞を「非対格動詞」と呼ぶ。非対格動詞の主語は非対格仮説にしたがって、基底構造で目的語に相当するものとして規定されるため、( < y > ) のように記述される。そして図6に示したように、統語構造と語彙概念構造との間をとりもつのが項構造であり、生成文法 (GB 理論) では、両者は次のように対応していると考えられる。

- (110) 外項 (x) は主語に投射され、内項 (y) は目的語に投射される。そして内項 (z) は場所の前置詞句の目的語に投射される（：日本語の場合は、場所を示す（必須／準必須）補語となる）。ただし、非対格動詞は外項をもたず、格フィルタ<sup>64</sup>によって内項は主語の位置に納まる。

### 3.1.3 語彙概念構造と項構造の対応規則 (linking rule)

語彙概念構造と項構造はともにレキシコン（心的辞書）に記載される情報で、両者は次のような対応規則によって結びつけられると考える。影山（1996）は（111）のような対応規則を示し、（112）のような構造間のリンクを考えているが、間接内項の対応については触れていない。本論文では、間接内項を含めた（113）のような構造間のリンクを考えておく（外崎 2005：26-29 なども参考）。なお、（113）の構造間のリンクは今後の議論で修正されることになり、それに伴って影山による（111）の対応規則も修正する。

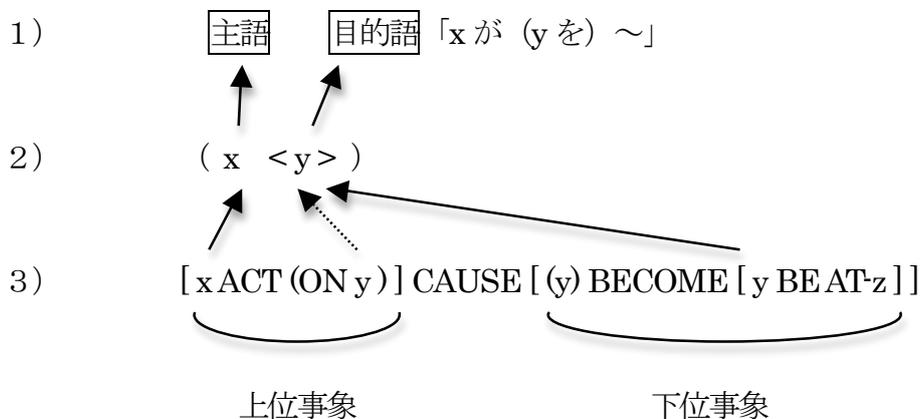
- (111) 概念構造と項構造の結び付け（影山 1996：92 = (97)）

外項規則：上位事象の主語が外項になる。

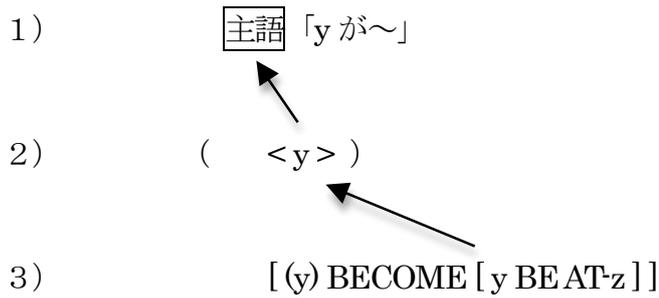
内項規則：下位事象がある場合は BE の主語が、また、下位事象がない場合は ACT ON の対象が、内項になる。

- (112) 構造間のリンク（影山 1996：91-92 を参考に作成）

- 1) 統語構造 2) 項構造 3) 語彙概念構造  
a. 上位事象のみ、または上位事象＋下位事象の場合

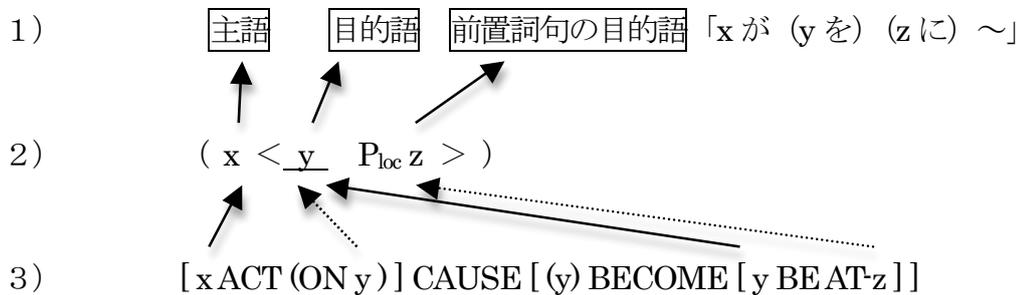


b. 下位事象のみの場合（上位事象がない場合）

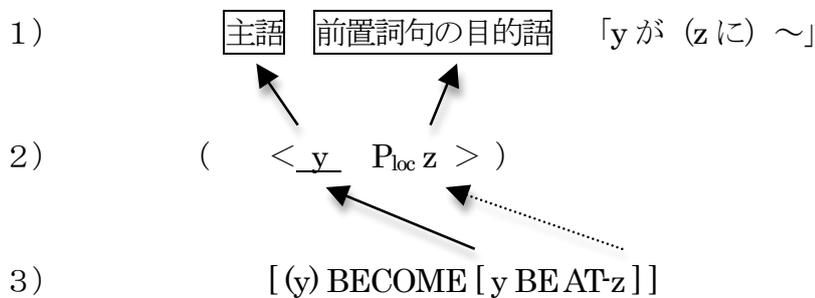


(113) 直接内項と間接内項を含めた構造間のリンク

a. 上位事象のみ、または上位事象+下位事象の場合



b. 下位事象のみの場合（上位事象がない場合）



### 3.2 BE と HAVE の関係

〈所有〉の概念をどのような動詞で表すかという視点でみると、世界の言語には、主に‘BE’に相当する動詞で表す「BE 言語」と主に‘HAVE’に相当する動詞で表す「HAVE 言語」があり、(114) の例文が示すように、「いる／ある」を主に用いる日本語は前者で、英語は後者に入ると言われている。(池上 1981 : 69-70)

(114) 日本語：山田さん (に) は、子供が二人いる／ある。

英語：Mr. Yamada has two children.

このことは、〈存在〉と〈所有〉とが接近した概念であることを示している。言語を歴史的な発展過程でみた場合、‘HAVE’にあたる言葉を持たない言語（活格型言語<sup>65</sup>、能格型言語）がそれを持つ言語（対格型言語）に先行しており、‘HAVE’を持たない言語においては、所有の概念を所有の接辞と存在動詞を用いた「yのxがある」という表現か、「xがyのところにある」あるいは「xがyと一緒にいる」という表現を用いると言われている（山口 2003 : 31、ヒンディー語については高橋 2003 など）。つまり、〈存在〉の概念から〈所有〉の概念とそれを表す形式が生まれたと考えられる。認知言語学的に見ても、具体物の〈存在〉から抽象的な二者の関係を表す〈所有〉の概念へと拡張していったと考えるほうが自然である（Heine 1997 : 45）。Heine（1997）はそのような視点から、〈所有〉の表現形式につながるイベント・スキーマを8つ設定しているが、その中に〈存在〉と関わるものが複数ある。

(115) 〈所有〉の表現形式につながるイベント・スキーマとその原型

(Heine 1997 : 47 table 2.1 より)

<u>Formula</u>	<u>Label of event schema</u>
X takes Y	Action
Y is located at X	Location
X is with Y	Companion
X's Y exists	Genitive
Y exists for/to X	Goal
Y exists from X	Source
As for X, Y exists	Topic
Y is X's (property)	Equation

両者のこのような関係を踏まえて、本論文でも〈存在〉から〈所有〉の概念が派生したと考え、両者は同じ「状態」（意味述語‘BE’をもつ）を表しているが、〈存在〉の語彙概念構造において、場所の項 (z)が焦点化され、‘BE’の主語になることによって〈所有〉の概念構造が生まれると考える（影山 1996 : 53-56）。〈所有〉の概念は、‘BE’に「隣接関係・付随関係」を示す‘WITH’を付けた‘BE WITH’によって表され、これが‘have’

に相当する（影山 2002b : 132）。本論文では、この変換を「場所の焦点化」と呼ぶことにする。

(116) 〈存在〉から〈所有〉への概念構造の変換：場所の焦点化

〈存在〉 [y BE AT-z] (y が z にある)

↓

→ 〈所有〉 [z<sub>i</sub> BE [WITH-[y BE AT-z<sub>i</sub>]]] (z が、y が z にあることを  
=have 伴った状態にある)

この「場所の焦点化」は、〈所有主体の他動詞文〉が生成されるメカニズムで重要な役割を果たしていると考えられるが、いわゆる知覚心理学および認知言語学でいう「図と地の反転」<sup>66</sup>であると言える。背景として存在していた「場所」が焦点化され前景になると同時に「(存在)物」が背景となる。

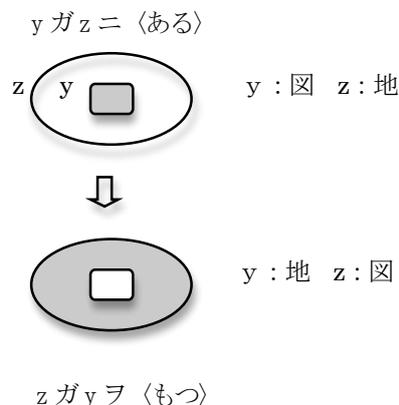


図 7 場所の焦点化における図地反転

### 3.3 〈所有主体の他動詞文〉の基本

#### 3.3.1 〈所有〉の概念構造と項構造、統語構造とのリンク

3.2 で概念構造における「場所の焦点化」によって〈存在〉の概念から〈所有〉の概念が生まれることを示したが、この〈所有〉の概念構造と項構造、そして統語構造とどのように結びついていると考えればいだろうか。本論文では、語彙概念構造における場所の焦点化は、項構造にも影響を及ぼし、最終的に統語構造にも影響すると考える。

具体的には、(116) を見て分かるように、〈所有〉の概念には2つの‘BE’があり、y が主語になっている‘BE’は、z が主語になっている‘BE’に含まれている。この包含関係と場所 z が焦点化されているということから、(111) の結び付け規則を (117) のように一部修正し、構造間のリンクを (119) のようになっていると考える。比較のために通常の下位事象のみの場合 (118) も示しておく。

(117) 概念構造と項構造の結び付け規則 (修正案)

外項規則：上位事象の主語が外項になる。

ただし、上位事象がない場合でも、下位事象に BE WITH がある場合 (つまり、〈所有〉の構造をもつ場合) には、BE WITH の主語 (つまり、2つの BE の主語のうち、焦点化された外側の BE の主語) が疑似的な外項となる。

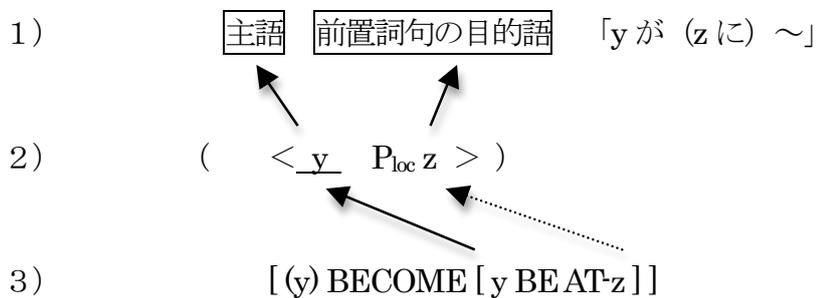
内項規則：下位事象の BE の主語が内項になる。

ただし、下位事象がない場合でも、上位事象に ACT ON がある場合には、ACT ON の対象が内項になる。

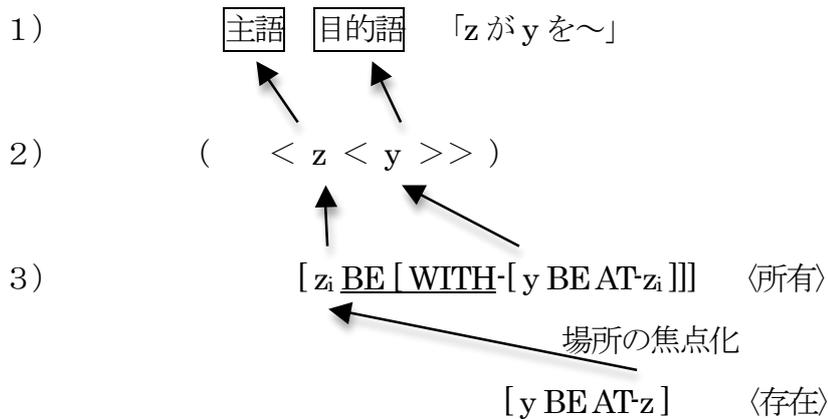
また、下位事象に2つの BE の主語がある場合、焦点化されていない (つまり、内側の) BE の主語が内項になる。

(118) 通常の下位事象のみの場合 (=113b)

- 1) 統語構造 2) 項構造 3) 語彙概念構造



(119) 下位事象のみで、〈所有〉の概念構造をもつ場合



### 3.3.2 2つの内項と擬似的外項

(119) に示した〈所有〉の概念をもつ動詞についての構造で重要な点が2つある。1つは、項構造において場所項の‘P<sub>loc</sub> z’は焦点化されることによって‘z’となり、二重括弧内の“外側”に位置していることである。この内項を二重括弧で表示することは、3項述語がとる2つの内項を区別して表示する際に用いられることがあるが(影山 1991 : 49 など)、外項がないにもかかわらずヲ格を伴う動詞の項構造の表示として想定されたこともある(影山 1991 : 51-52、三宅 1996 : 160-163 など)<sup>67</sup>。しかし、あくまでも内項として処理されている。本論文では、上述のように、〈所有〉の概念構造では、BE WITHの主語は焦点化された項であることに注目して、内項の中でも特別の地位を与えられると考える。三宅(1996 : 160)ではこれを指して「階層差を持った複数の内項が存在する」と述べているが、本論文では、基本的にこの考え方を支持しつつも、特別の地位を与えられた内項は「擬似的な外項」となり、上位事象が存在しない(つまり、通常の外項(x)が存在しない)場合には統語上、主語となり、焦点化されない通常のBEの主語が目的語になると考える。このように内項でありながら特別な地位が与えられ、擬似的な外項になることを意味するのが、(119) - 2) の二重の山括弧である。

この考え方は、坂野(1994)のvP-shell 仮説に基づいて想定された最大構成の「基底項構造」の考え方を語彙意味論に適用したものとも言える<sup>68</sup>。坂野はvP-shell 構造における内核VPの指定部に生起し、外項に準ずる振る舞いをする名詞句を「下位外項」と呼んだが(同書 : 80)、本論文では、項構造における二重の山括弧内の外側に位置する内項を「擬似的な外項」と呼ぶ。

### 3.3.3 Burzio の一般化について

2つ目の重要な点は、既に (119) の統語構造に示したように、〈所有〉の概念をもつ動詞は目的語をとり、統語上は他動詞となることである。これまでは、下位事象しかもたない動詞は (113b) のような構造をもつと考えられ、外項 (x) をもたない動詞が目的語をとりヲ格を付与することはできないと考えられていた。これは生成文法の統語理論で「Burzio の一般化」と呼ばれるものである。

#### (120) Burzio の一般化

外項をもつ動詞のみが、目的語に対格を付与することができる<sup>69</sup>。

ところが、〈所有〉の概念をもつ動詞は下位事象しかもたず、外項を持たないにもかかわらず、目的語に対格を付与している。これは英語でも日本語でも状態動詞の中で2項述語になる動詞として存在している。(日本語については第4節で詳しく論じる)

(121) 英語<sup>70</sup> : have, know, resemble, believe, feel, smell, taste, cost, weigh, last

日本語 : 欠く、要する、含む、有する、など

このような動詞は、これまで非対格動詞であっても、動詞の意味(二者の関係を表すこと)から主語と目的語をとるというだけで済まされてきた。Burzio の一般化については、これまで反例が見つかっているという指摘もあるが(影山 1996 : 115-116)、これによって合理的に説明される統語現象も多いことも事実である。英語については、(122) のように非能格(自)動詞が疑似的な目的語をとって結果構文が成立するのは、非能格動詞が外項をもつからだと説明することができる。

(122) 影山 (1996 : 212 = (8))

a. Bill talked himself hoarse.

b. He ran his sneakers thredbare.

また、日本語では、(123) のように移動動詞に現れるヲ格が、主語が無生物の場合には

成立しないという現象も、無生物の場合は非対格（自）動詞のため外項がないからだと言明できるし<sup>71</sup>、(124)のように漢語名詞がサ変動詞として使われる場合に、ヲ格が入るかどうかの判断にも有効だと言われている。このように Burzio の一般化は、非対格仮説と組み合わせることで、表層では主語として現れていても、基底構造で目的語相当の内項しかもたない非対格動詞が、外項をもつ非能格動詞と異なり、対格（ヲ格）を取れないことを説明できるのである<sup>72</sup>。

- (123) a. 太郎が家を出る。  
b. 太郎が家から出る。  
c. \*煙が煙突を出る。  
d. 煙が煙突から出る。

(124) 影山 (1996 : 212-213 = (9))

a. 非能格 VN

居酒屋で酔っ払いが喧嘩をしている。

毎朝、運動をすることは良いことだ。

b. 非対格 VN

\*社長が突然、死去をした。

\*けさ、思いもかけない事件が発生をした。

生成文法の統語論では、Burzio の一般化を修正し、新たな一般化を目指す流れもあるが、本論文では、Burzio の一般化を一部修正する形で、(125)のような一般化を提案し、下位事象のみの〈所有〉の概念をもつ動詞が目的語に対格を与えると考える。

(125) 目的語への対格付与に関する一般化

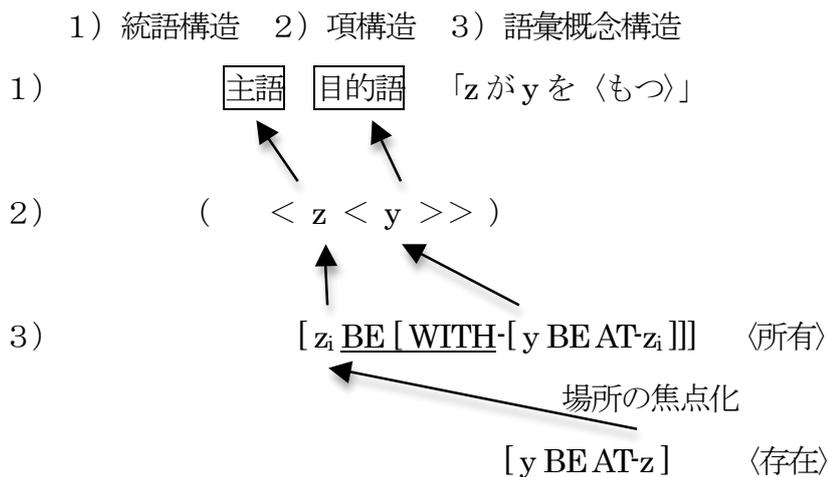
外項をもつ動詞のみが、目的語に対格を付与することができる。ただし、外項がない場合でも、内項が2つあり、一方が擬似的な外項になる場合は目的語に対格を付与することができる。

### 3.3.4 〈所有主体の他動詞文〉の基本型とS型・T型の区別

#### ■S型の所有主体の他動詞文

(119) に示したように、〈存在〉の意味概念から、場所の焦点化によって変換された〈所有〉の意味概念をもち、擬似的な外項にあたる内項 (z) が主語に、内項 (y) が目的語になった文が〈所有主体の他動詞文〉の基本型であるが、ここで第1節の図4および(13)で示した所有主体の他動詞文の2つの生成パターンを考える(図4は一部情報を追加して図9として再掲)。1つは、自動詞文から [M2] によって直接生成されるもので、これが(119)に示したような生成プロセスに相当する。これを [M2] 単独 (Single) で生成されるという意味で「S型」と呼ぶことにする。したがって(119)はS型であり、「基本S型」ということになる。

#### (126) 所有主体の他動詞文：基本S型 (=119)



この基本S型に属する〈もつ〉の意味概念をもつ他動詞は多くない。それは日本語では〈もつ〉の意味概念は「持つ」ではなく、「ある(いる)」で表現されるからである。つまり〈存在〉の「ある」から〈所有〉の「ある」が生まれるのである。この〈所有〉の「ある」はヲ格をとる他動詞文ではなく「～に～が」構文(与格主語構文)か「～が～が」(二重主語構文)を作る<sup>73</sup>。所有主体の他動詞文の「基本S型」としては、日常語では「伴う」「要する」(含む)<sup>74</sup>くらいである。英語の‘have’と違って、日本語は基本的に「ある(いる)」で所有を表すため、「持つ」という動詞が担う役割は相対的に小さいと言える。

〈所有〉の「ある」は、「何を」「どのように」という情報に関しては透明であり、その点で所有を表す基本的な動詞であると言える。それに対して上に挙げた所有他動詞の「伴

う」「要する」「含む」は、〈所有〉の「ある」に随伴関係、所要、包含関係という情報が付加された所有他動詞である。一方、所有他動詞としての「持つ」は、「ある」と比べてその使用範囲は限定されている<sup>75</sup>とはいえ、かなり透明性が高い基本的な動詞の1つだと言える。所有他動詞としての「持つ（持っている）」は、どのような概念構造から生成されるのだろうか。

それは「位置変化+存在」の概念構造からだと考えられる。「存在（状態）」は位置変化（状態変化）によって生じた結果であるとみる傾向が強いのが、「ナル型」言語である日本語の特徴である。これは〈所有〉の意味概念をもつ他動詞の多くが「ル形」だけでなく「テイル形」で状態の意味を表すことからわかる。実際に目に見える移動しとして観察されるかどうかにかかわらず、「存在」には“原因としてモノの移動がある”とみる点が重要である。このような視点から、〈もつ〉の意味概念を有する「持つ」について考えてみる。

#### ■ 「持つ」の意味概念：再帰構造

「持つ」という動詞は、語彙的に自分自身が着点としてを指定されている再帰動詞の用法が基本である。所有他動詞の「持つ」をみる前にこの再帰動詞としての用法を見ておく。この「持つ」は「xがモノ(y)を手に取り、モノ(y)が自分自身(x)のところへ移動し、それが自分自身(x)のところにある状態を保持する」ことを意味する。その概念構造は(127a)で示されるが、重要なことは、上位事象(ACT:活動)が具体的な物を「手に取る」というだけでなく、抽象的なモノにも拡張し、広く「獲得するための働きかけ」という活動を意味するようになっていることである。上位事象の活動に焦点が当たると、(127b)のような主語の意図的な動作を表現することができる。しかし、「テイル形」では上位事象の活動の進行中という意味を表せない(127c)。つまり「持つ」は使役変化動詞ではあるが、上位事象は過程のアスペクトを持たず、「テイル形」は下位事象の「変化の結果・状態(の維持の最中)」を表すと考えられる<sup>76</sup>。

#### (127) 使役変化動詞「持つ」について

##### a. 語彙概念構造（再帰構造）

[ $x_i$  ACT (ON y)] CAUSE [y BECOME [y BE AT- $x_i$ ]]



使役動作主 (x)

- b. 1) その箱をちょっと持ってみて。
- 2) 幸せな家庭を持ちたいなあ。
- 3) もっと自信を持とうよ。
- c. 1) # 彼はその箱を持っている。(「持つ」動作の最中の意味)
- 2) # 彼女は幸せな家庭を持っている。(「持つ」動作の最中の意味)
- 3) # 田中さんは自信を持っている。(「持つ」動作の最中の意味)

次に、この使役変化動詞としての「持つ」と所有他動詞としての「持つ」のつながりを考える。

■T型の所有主体の他動詞文

本論文では、所有他動詞の「持つ」は上に示した [M2] 単独で生成される S 型ではなく、[M1] と [M2] の共演によって生成されるタイプに属すると考える。2つの動機付け (Twin) で生成されるという意味で、これを「T型」と呼ぶ。この2つの動機付けの共演のあり方については、認知文法のベース (作用域) とプロフィールという概念を用いる。

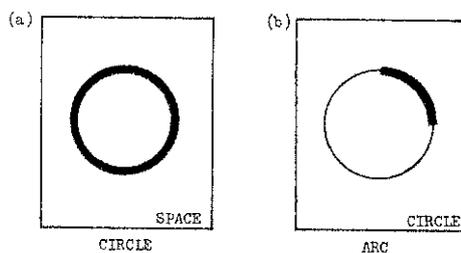


図 8 ベースとプロフィール (Langacker 1987:184 Fig.5.1 より)

Langacker (1987 : 183-184) では、この2つの概念の相互関係を「弧」の定義の例を用いて説明している (図8)。弧を定義しようとしたら、必ずそのイメージの中に「円」の概念があり、この「円」をベースにして、焦点を当てられる、つまりプロフィールされるのが「弧」というわけである。これを語彙概念構造に応用して、S型とT型を (128) のように規定する。このT型の特徴を示すために図4に「原因イベント」を組み込んだものが図9である。

(128) S型とT型の定義

S型：

下位事象のみの自動詞の語彙概念構造から「場所の焦点化」（または「所有者の出来構造化」と「場所の焦点化」77）を受け、項構造を経て統語構造へ投射される。

T型：

下位事象のみの自動詞の語彙概念構造が、原因を表すイベントを上位事象に付加することによって使役変化の概念構造となる。これがベースとなり、その下位事象がプロファイルされ、「場所の焦点化」（または「所有者の出来構造化」と「場所の焦点化」）を受け、項構造を経て統語構造へ投射される。

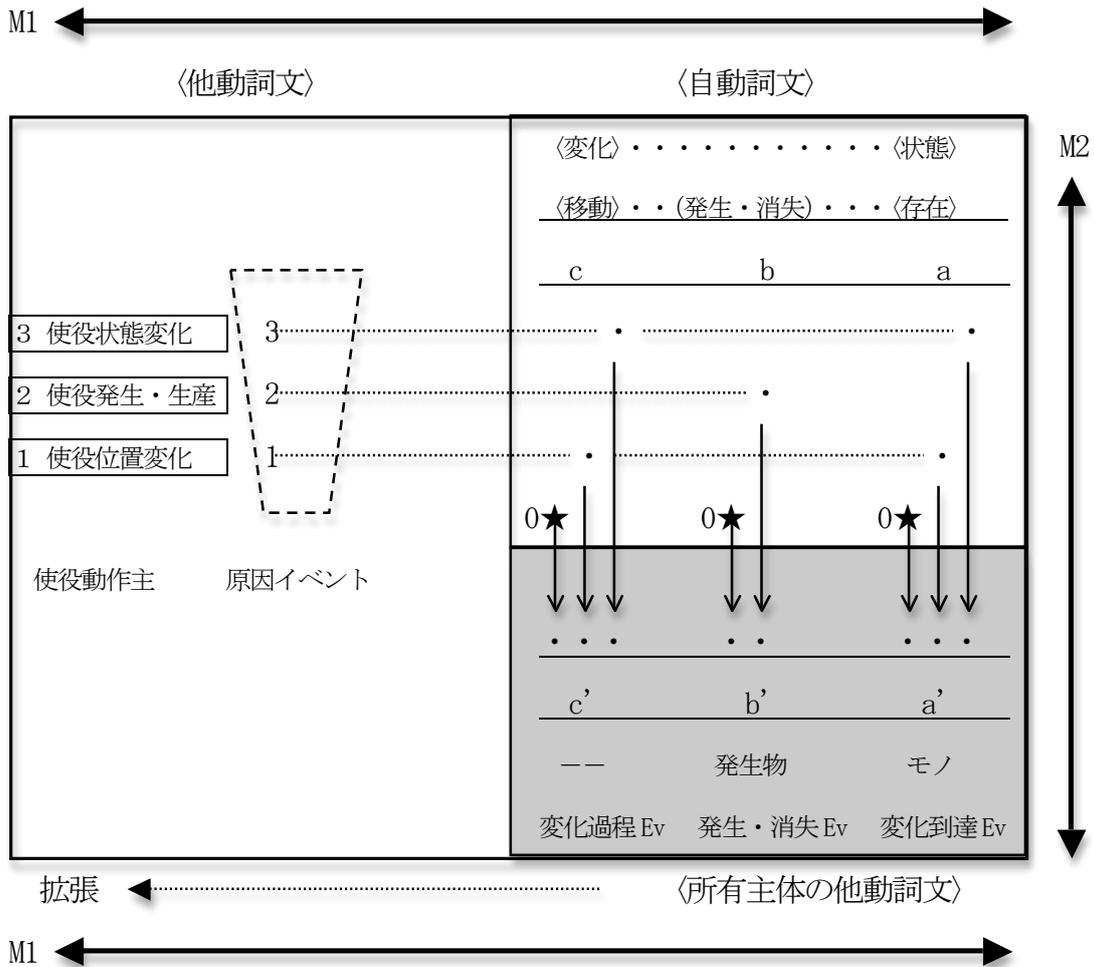


図 9 他動詞文を生成する動機付けの M1 と M2 の相互関係

本論文の理論で重要な点の1つは、1.2.3で示したように「場所の焦点化」と「所有者の出来構造化」という認知的な把握(= [M2] という動機付け)で、これによって〈存在〉の意味概念をもつ自動詞文から〈所有〉の意味概念をもつ他動詞文が生成されるということであった。これがS型の〈所有主体の他動詞文〉である。もう1つの重要な点は、(128)で規定したT型の生成プロセスにかかわる概念構造のベースとプロフィールという認知的な把握である。規定の前半部分(下線部)が[M1]にかかわるもので、後半部分が[M2]にかかわるものである。この二者が共演することによって所有主体の他動詞文が生成されるのがT型である。

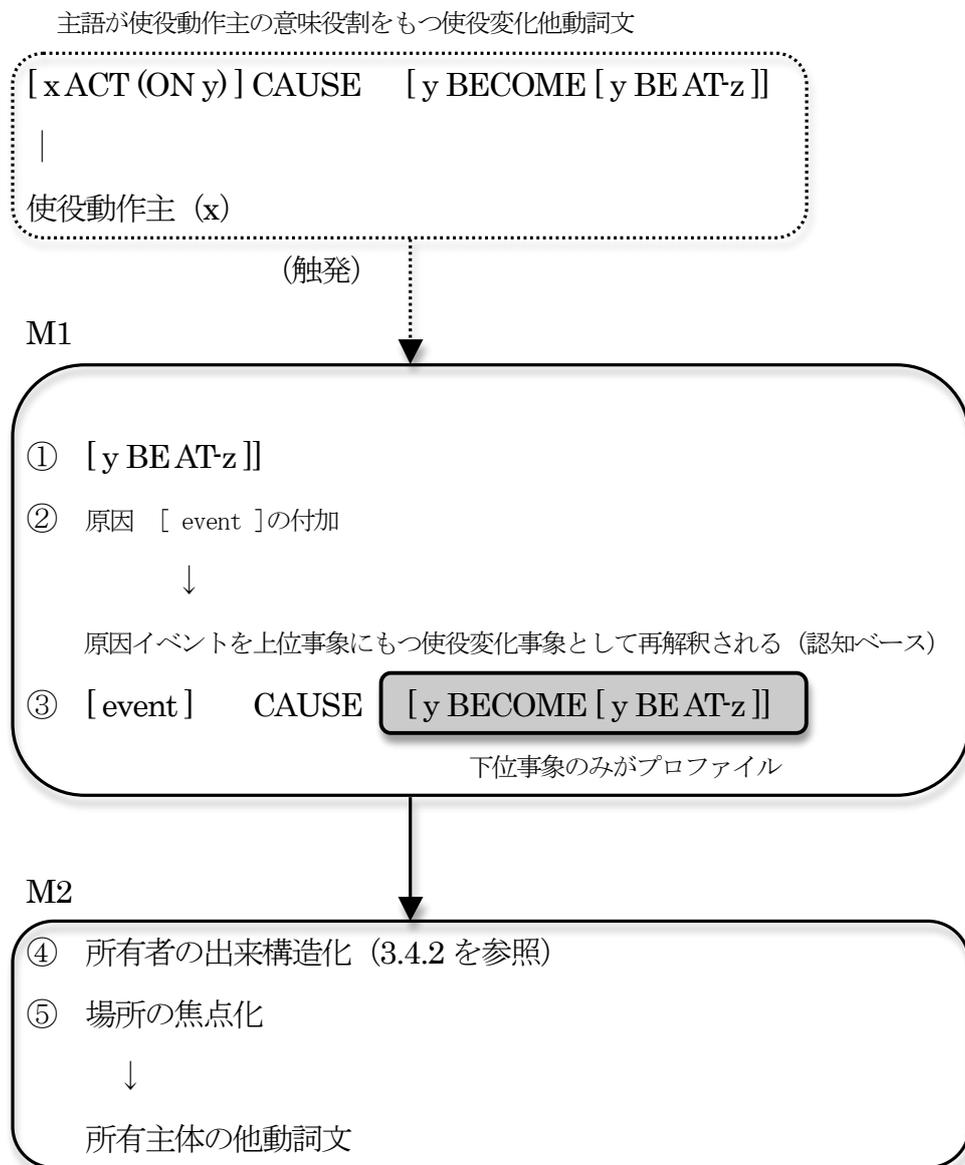
T型の生成プロセスに見られる認知的な把握はこれまでほとんど注目されてこなかった視点である。第2節で先行研究の問題点として提起したが、「山田さんは、火事で家が焼けてしまった」のように自動詞文で表現できる事象を、なぜ「家を焼いてしまった」と他動詞文で表現するのか。これを単に他動性の低下によって「そのように表現できるようになった」というだけでは済まされない。ここには話者(認知主体)の事態の把握の仕方が言語形式に反映していると考えべきだというのが本論文の主張である。この把握の仕方が(128)で定義したT型のベースとプロフィールである。M1に関わる部分(下線部)は、下位事象しかもたない自動詞的な事象を、因果関係をもつ使役変件事象として捉え直すことを意味している。つまり、所有主体の他動詞文は、主語が使役動作主という意味役割を持つ使役変換動詞文と接点を持つが<sup>78</sup>、その生成の鍵を握っているのは、あくまでも自動詞的な事象を、因果関係をもつ使役変件事象として捉え直す認知主体の把握の仕方がベースになっていると考える。このような視点からT型の生成プロセスを具体的に示したのが(129)である。T型におけるM1の関与を(129①~③)のように規定し、それは使役変換動詞の「触発」<sup>79</sup>によると考える。

(129)のM1をどのように位置づけるべきか。(129③)は、主語の意味役割が使役動作主から原因へ下がったこと、つまり他動性の低下だと見るべきか。それとも上述のように下位事象に原因のイベントを上位事象として付加したと見るべきか。本論文は両方の要因が関係しており、接点をもつと考えるが、所有主体の他動詞文の生成プロセスの側面では、後者の見方を取り、基本はあくまでも自動詞側から語彙概念構造における変換を経て生成されると考える。

このように考える根拠は、第一にS型のように自動詞文のみから生成される所有主体の

他動詞文が存在することである。第二に、後で示すように所有主体の他動詞文としての解釈がされるための条件を合理的に説明できることである。そして第三に、原因イベントを上位事象にもつ語彙概念構造がベースになるという見方をすることによって、「状態変化主体の他動詞文」(天野 1987b) などが、所有主体の他動詞文という枠組みの中で合理的に説明できるからである。(具体的な分析は 4.1.4 を参照)

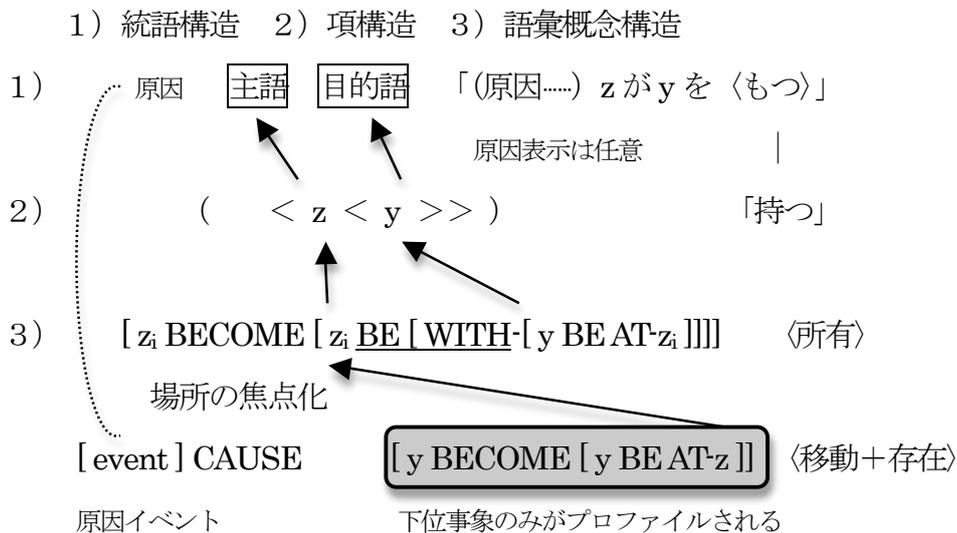
(129) T型における M1 と M2 の共演



■所有他動詞としての「持つ」

以上のT型に関する分析を踏まえて、「基本T型」の「～ヲ持つ」の生成プロセスを考える。ここで再度、〈所有〉の「ある」およびS型との違いを確認しておきたい。〈存在〉の「ある」から〈所有〉の「ある」が生まれる。これはヲ格目的語をとる他動詞構文ではないが、対象を表すガ格は目的語に相当するとみることができる。所有主体の他動詞文の枠組みで考えれば〈所有〉の「～に～がある」はS型だと言える。それに対して〈移動+存在〉の「ある」にその移動の原因となるイベントを上位事象に付加したのが〈所有〉の「持つ」の語彙概念構造であり、それをベースにしてプロファイルされた下位事象が概念構造の変換を経て生成されるのが「～を持つ」というT型の所有主体の他動詞文である。

(130) 所有主体の他動詞文：基本T型「～ヲ持つ」



例えば、山田さんがAという自動車の所有者である場合、これはまず「山田さんのところに自動車がある」という〈存在〉の事象として把握される(=129①)。このまま「ある」が〈所有〉の「ある」になれば「山田さん(に)は自動車がある」という所有構文が生まれる。一方、「自動車がある」ことを引き起こした原因イベントが想起されると(=129②)、(130)-3)の下段の〈移動+存在〉を下位事象にもつ使役変化動詞の語彙概念構造が生まれる(=129③)。この概念構造が所有他動詞の「持つ」のベースである。これが上述の「因果関係をもつ使役変化事象として捉え直す」ことを意味している。このベースは全体として「持つ」の語彙概念構造をもち、プロファイルされた下位事象が「場所の焦点化」を経て(=129⑤)、「持つ」の所有主体の他動詞文(「山田さんはAという自動車を持つ」)

が生成されるのである。(原因イベントの統語上の表示については、3.3.6を参照)

このように「持つ」をT型に属する他動詞と考えると、下位事象に変化を表すBECOMEがあるので、「テイル形」で所有という結果状態を表すことが説明される。その一方で「ル形」の「持つ」でも所有を表すことができるのは、モノの移動後の結果状態のみがプロファイルされているからだと考えられる。

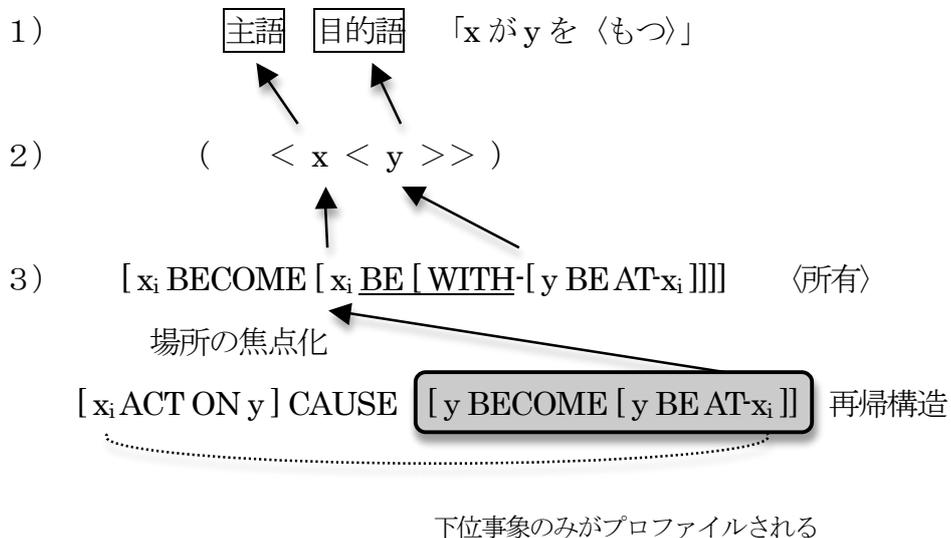
上の例では「自動車を持つ」という物理的な所有だったが、非物理的な所有、親族関係を含めて、〈所有〉を表す「持つ」は具体的な〈移動〉およびメタファーとしての〈移動〉と〈存在〉が結び付いていると考えられる。つまり、「何らかの原因イベントが、それがそこに存在することを引き起こした」という事象の把握になっているのである。これがT型である「持つ/持っている」の特徴である。逆の視点から見れば、純粹に〈存在〉だけから生成されているわけではないために、ル形で未来を表すこともできるわけである<sup>80</sup>。

- (131) a. 10年以内にそんな財産を持つのは無理だろう。  
 b. \*10年以内にそんな財産があるのは無理だろう。

■ 「再帰構造」から所有主体の他動詞文が生成されると考えない理由

「持つ」には使役変化動詞と所有他動詞の2つの側面があることを見たが、ここで素朴な疑問が起こるはずである。使役変化動詞としての側面、つまり(132)のように再帰構造をベースにして所有主体の他動詞文が生成されると考えないのはなぜかである。

(132) 再帰構造をベースにした所有主体の他動詞文の生成プロセス



(130) との違いは、再帰動詞なので語彙概念構造で「 $x=z$ 」となり場所項が動作主と同一になる ( $x_i$ ) ことである。そのため、項構造が (  $\langle x \langle y \rangle \rangle$  ) となり、「 $x$  が  $y$  を持つ」の使役変化動詞の語彙概念構造から、「 $x$  が  $y$  を〈もつ〉」という所有主体の他動詞文が生成される。しかし、この生成プロセスを基本とするには問題がある。それは他の〈移動+存在〉の意味概念をもつ3項述語に適用できないからである。例えば、「積む」は「作業員がトラックに荷物を積む」で表されるように、対象の移動と移動先における対象の存在という意味概念をもつ3項述語である。しかし「持つ(着る、かぶる)」と違って再帰構造を持たない。そのため、使役動作主と場所(移動先)は一致しない。それにもかかわらず「そのトラックは(荷台に)荷物を積んでいる」という場所を主語にした所有主体の他動詞文が成立する。このような他動詞文の生成プロセスは(132)のような考え方では説明できない。つまり、たまたま「持つ」は再帰構造をもつために(132)のような見方が可能になるが、〈移動+存在〉という意味構造をもつ動詞について統一的に説明するには、(132)のような見方が必要だということである。(3項述語に関する分析は4.2.3を参照)

#### ■基本S型とT型の他動詞

(133) に基本S型と基本T型に属する他動詞を挙げておく。「持つ」以外の基本T型の他動詞には「有する」「擁する」「誇る」「表す」「示す」「知る」などがある。これらの動詞は第4節で個別に分析するが、意味的に透明性をもつ「ある」「持つ」の意味概念を基本としてそれ以外の意味情報が付加されていると考えられる。

(133) 所有主体の他動詞文の「基本型」の他動詞

- a. 基本S型: 「伴う」「要する」(含む)<sup>81</sup>
- b. 基本T型: 「持つ」「有する」「擁する」「誇る」「表す」「示す」「知る」  
「欠く」<sup>82</sup>

基本S型と基本T型を図9の相互関係図と照合し、所有主体の他動詞文のどこに位置づけられるか確認しておく。基本S型は自動詞の意味概念構造から直接生成されるもので、「a'0」に当たる。基本T型は「使役位置変化」の他動詞の意味概念をベースにして、その

下位事象のみがプロファイルされて生成されたもので、「a'1」に相当する。いずれも図9で「モノ所有」に該当する。(タイプの全体については3.3.7を参照)

### 3.3.5 〈所有主体の他動詞文〉の動詞の形態

前小節で所有主体の他動詞文には、S型とT型の2つがあることを示したが、ここではこの2つを区別することが、所有主体の他動詞文の枠組み全体に関わる、2つの重要な意味をもっていることを具体的に示す。1つは他動詞の形態についてで、もう1つは解釈についてである。まず動詞の形態については(134)の規則を仮定し、第4節で検証する。

#### (134) 〈所有主体の他動詞文〉の動詞の形態に関する規則

a. S型(=自動詞の概念構造から直接生成される)の場合は、固有の他動詞の形態をもつ。

ただし、自動詞と同じ形態のまま使われるようになった動詞もある。

(つまり自他同形の「両用動詞」は原則としてS型の場合に現れる。)

b. T型(=使役変化の概念構造をベースに、下位事象がプロファイルされて生成される)の場合は、使役変化動詞と同じ形態をもつ。

つまり、所有主体の他動詞文の他動詞の形態は、自動詞と形態上の対応をもつ場合と持たない場合があり、S型の場合にはもたないが、T型の場合には対応をもつということである。

「ある」という自動詞の語彙概念構造から、所有の様態に応じて「伴う」「要する」「含む」などの固有の形態をもつ他動詞が生成される。(状態動詞の詳細は4.1.1を参照) 影山(2002b)では、原則として「非対格他動詞」は形態の対立を伴う自他の交替を起こさないとしているが、これはS型にのみ注目した結果であり、T型の場合は、使役変化(他)動詞と同じ形態をもつため、使役変化動詞と形態上対応する自動詞(図9のa1, a3, b2, c1, c3)とは見かけ上、形態の変化を伴う自他交替を起こすことになる。(131)に挙げた状態の他動詞の中では「欠く」対「欠ける」がそれに該当する。また、後で取り上げる所有主体の他動詞文の展開型では、「山田さんの頭から血が流れた」と「山田さんは頭から血を流した」、「山田さんは骨が折れた」と「山田さんは骨を折った」のような自他の交替が見られる。

また(134a)の但し書きは、いわゆる「両用動詞」のことを意味しているが、(133)の

動詞の中では「伴う」が「危険が伴う」「危険を伴う」のように同じ形態のまま他動詞として使われている。(両用動詞の詳細は 4.2.1 を参照)

### 3.3.6 〈所有主体の他動詞文〉としての解釈の問題

T 型と S 型の 2 つに区分するもう 1 つの重要な意味は、T 型に関するものである。使役変化動詞の概念構造をベースにして、その下位事象がプロファイルされるのであるが、プロファイルされなかった上位事象は統語構造でどのように現れるだろうか。これについては (135) のつながりを仮定し、第 4 節で検証する。

(135) T 型の LCS のベース、プロファイルと統語構造とのつながりについて

- a. プロファイルされた下位事象は、項構造とリンクし、〈所有主体の他動詞文〉として統語構造に投射される。
- b. プロファイルされなかった上位事象は、「原因」を表すイベントとして認知されており、語彙概念構造全体が使役変化の構造を持つことが保証される。
- c. プロファイルされなかった上位事象は、項構造とはリンクしないが、「原因のイベント」の際立ちの程度に応じて統語構造に付加詞または従属節という形で投射される。

(135a) は (130) の構造間リンクで示したとおりである。(135b) は T 型の動詞が使役変化の他動詞と同じ形態になる理由である (134b も参照)。(135c) は、所有主体の他動詞文が「使役変化の他動詞文」と同じ形態の動詞を使いながら、「使役変化の他動詞文」の解釈を免れるための条件になる。第 2 節で紹介したように、「状態変化主体の他動詞文」(天野 1987b) は、児玉 (1989) など、成立条件として文中に直接の原因となるものを明示または暗示することが挙げられている。本論文では、個別の構文に限定することなく、所有主体の他動詞文という枠組みの中でその成立条件の本質を考える。

(135b) と (135c) は裏表の関係で、原因のイベントの際立ちの程度に応じて、〈所有主体の他動詞文〉として解釈されるために、統語上への表示が強く求められるのか、任意になるかが決まると考える。図 9 に示した [M1] と [M2] の相関関係に基づいてその段階性を考えてみる。まず、〈使役変化動詞文〉の 1~3 と 〈自動詞文〉の a~c、そして 〈所有主体の他動詞文〉の a'~c' の対応を確認しておく。「モノ (物) 所有」は、その名のとおり

りモノの所有を指す。「Ev 所有 (Event 所有)」については、3.4.2 で具体的に説明するが、モノ (物) の所有に対して、所有者にあたる主体が自身にかかわるイベントを経験するという意味で「Ev 所有」と呼んでいる。

(136) 使役変化動詞文と自動詞文と〈所有主体の他動詞文〉の対応関係

※対比のために使役変化動詞とは関係しない「a'0」「b'0」「c'0」も入れておく。

使役変化動詞文	自動詞文	所有主体の他動詞文
0 — — —	a0 存在	a'0 ..... 基本 S 型
1 使役位置変化	a1 移動+存在	a'1 ..... 基本 T 型
0* — — —	a0* 移動+存在	a'0+
0+ — — —	a0+ 変化+状態	a'0+
3 使役状態変化	a3 変化+状態	a'3
.....		
0 — — —	b0 発生+存在	b'0 ..... モノ (発生物) 所有
2 使役発生・生産	b2 発生+存在	b'2
0 — — —	b0 発生/消失	b'0
2 使役発生・生産	b2 発生/消失	b'2 ..... 発生/消失 Ev 所有
.....		
0 — — —	c0 移動/変化	c'0
1 使役位置変化	c1 移動	c'1 ..... 変化過程 Ev 所有
3 使役状態変化	c'3 変化	c'3

この「Ev 所有」は a'~c' の3つがあるが、それぞれ自動詞の意味概念の a~c と対応している。「変化過程 Ev 所有」とは非限界性の自動詞 (「流れる」「(上方へ) 上がる」「飛ぶ」など) に対応する Ev 所有の意味概念で、「変化到達 Ev 所有」とは、到達動詞 (「Vendler の動詞の四分類」 (Vendler 1967) の1つで限界性をもつ自動詞: 「折れる」「壊れる」「焼



る。なお、(131) に挙げた動詞のうち「含む」「伴う」「表す」「示す」は受身化が許容される場合があるが、これは通常の直接受身とは異なることを 4.1.1 で論じる。

- (138) a. このテープはあとを残さずにはがせるという特徴を持つ。  
b. \*あとを残さずにはがせるという特徴はこのテープに（よって）持たれる。  
c. あの選手は集中力を欠く。  
d. \*集中力があの選手に（よって）欠かれる。  
e. （彼らは）準備にあと3日を要す。  
f. \*準備にあと3日が（彼らによって）要される。

### 3.4 〈所有主体の他動詞文〉の全体像

#### 3.4.1 〈所有主体の他動詞文〉の範囲

最初に 3.3 で示した S 型と T 型が、図 9 に示した所有主体の他動詞文の分類とどのように対応しているのか全体像を示す。次に「非対格動詞」との対応および、第 1 節で挙げた用例との対応を確認し、所有主体の他動詞文の全体をより具体的に示す。

#### ■ 〈所有主体の他動詞文〉のタイプの全体

3.3 では、所有主体の他動詞文の基本型をもとにして、S 型と T 型の 2 つがあることを示した。全体の対応関係を示すと、(139) のようになる<sup>84</sup>。自動詞のみから生成される「a'0」「a'0\*」「a'0+」「b'0」「c'0」が S 型になる。そして使役変件事象の 1～3 と関連するのが T 型である。それぞれの意味概念に合わせて「基本型」「発生型」「変化型」の 3 つがある。基本型は自動詞文の「存在」または「移動+存在」に対応する「モノ所有」である。発生型は、自動詞の「発生」に対応しており、S 型も T 型も「モノ所有」と「Ev 所有」の 2 つのタイプがある。変化型は 2 つの領域にまたがっているが、非限界性をもつ変件事象の場合はすべて「変化過程 Ev 所有」に対応し、これはさらに「位置変化過程型」(c'1) と「状態変化過程型」(c'3) に区分される。一方、限界性をもつ変件事象はモノ所有かイベント (Ev) 所有かで型が異なる。モノ所有の場合は「基本型」になり、Ev 所有の場合は「変化型」になる。これはさらに「位置変化到達型」(a'0\*) と「状態変化到達型」(a'0+) (a'3) に区分される。「a'0\*」「a'0+」の変化 S 型は特殊なタイプで、第 4 節の構文分析「有対自動詞の両用動詞化 (4.2.2) で詳しく論じることにし、理論の枠組みでは「a'0」のみ扱う。

(139) 〈所有主体の他動詞文〉のS型とT型の全体

使役変化動詞文	自動詞文	所有主体の他動詞文	型
0 — — —	a0 存在	a'0	: 基本 S
1 使役位置変化	a1 移動+存在	a'1	: 基本 T
0* — — —	a0* 移動+存在	a'0*	: 変化 S
0+ — — —	a0+ 変化+状態	a'0+	: 変化 S
3 使役状態変化	a3 変化+状態	a'3	: 変化 T
.....			
0 — — —	b0 発生+存在	b'0	: 発生 S
2 使役発生・生産	b2 発生+存在	b'2	: 発生 T
0 — — —	b0 発生/消失	b'0	: 発生 S
2 使役発生・生産	b2 発生/消失	b'2	: 発生 T
.....			
0 — — —	c0 移動/変化	c'0	: 変化 S
1 使役位置変化	c1 移動	c'1	: 変化 T
3 使役状態変化	c'3 変化	c'3	: 変化 T

(139) に示した所有主体の他動詞文の全体を型別に整理すると、(140) のようになる。右端に示した所有のタイプからわかるように、発生型はモノ所有になるものと Ev 所有になるものに分かれる。このことから発生型は基本型と変化型の中間に位置するタイプであることがわかる。(この2つの区分については3.4.2 で具体的に論じる) なお、①～③の「基本型」「発生型」「変化型」の所有主体の他動詞文については、場合に応じて【 】の名称を使う場合もある。

(140) 〈所有主体の他動詞文〉の全体 (型別)

所有主体の他動詞文の型	対応する自動詞の意味概念	所有のタイプ
① 基本型 → 【〈存在〉の所有主体の他動詞文】		モノ 所有
S型 . . . . . 「存在」		
T型 . . . . . 「移動+存在」		
② 発生型 → 【〈発生・消失〉の所有主体の他動詞文】		
S型/T型 . . . . . 「発生+存在」		Ev 所有
	「発生・消失」	
③ 変化型 → 【〈変化〉の所有主体の他動詞文】		
1) 変化過程型 . . . . . (限界性がない変化)		
・位置変化過程型 S型/T型 . . . 「位置変化」		
・状態変化過程型 S型/T型 . . . 「状態変化」		
2) 変化到達型 . . . . . (限界性がある変化)		
・位置変化到達型 S型 . . . . . 「移動+存在」		
・状態変化到達型 S型/T型 . . . 「変化+状態」		

■非対格動詞との対応関係

次に視点を変えて、(140) に示した「対応する自動詞の意味概念」と非対格動詞との対応関係を確認しておく。本論文では所有主体の他動詞文を、下位事象しかもたないにもかかわらずヲ格の目的語をとる文と考える。下位事象しかもたない動詞は非対格性仮説に基づく自動詞の二分法により、非対格動詞と呼ばれる動詞クラスに相当する。Perlmutter (1978) および Perlmutter & Postal (1984) は非対格性を示す述語を (141) のように分類した。形容詞や動詞句を含む述語の分類ではあるが、実質的には自動詞の分類であり、非対格性をもつ自動詞の分類と言える。

(141) 非対格性を示す述語 (非対格動詞)

(Perlmutter & Postal 1984 : 98-99 より 動詞は一部のみ抜粋)

※ ( ) の日本語訳は影山 (1996 : 20-21) [ ] の日本語は引用者による

- a. Predicates expressed by adjectives in English.....including predicates describing sizes, shapes, wight, colors, smells, states of mind, etc.

(形容詞ないしそれに相当する状態動詞)

- b. Predicates whose initial nuclear term is semantically a Patient

(対象物をとる動詞)

burn, fall, drop, sink, float, slide, slip, flow, tremble, boil,

[inchoatives 起動相をもつ動詞]

freeze, melt, evaporate, open, close, break, explode

- c. Predicates of existing and happening (存在ないし出現を表す動詞)

exist, happen, occur

[inchoatives 起動相をもつ動詞]

arise, vanish, disappear

- d. Involuntary emission of stimuli that impinge on the senses (light, noise, smell, etc.) (五感に作用する非意図的な現象)

shine, sparkle, glitter, smell, stink, jingle, click

- e. Aspectual predicates (アスペクト動詞)

begin, start, stop, cease, continue, end

- f. Duratives<sup>85</sup> [期間を表す動詞]

last, remain, stay, survive

この非対格自動詞の分類については、非能格自動詞との区別が言語によって異なる動詞が存在すること、また同じ言語内でも意志性の有無で異なる動詞があることが指摘されているが<sup>86</sup>、日英語の比較で言えば、上の動詞はおおむね日本語の非対格自動詞と対応していると考えられる。(140) に示した「対応する自動詞の意味概念」は、(141) の a, b, c, e にほぼ対応することがわかる。

次に、第1節で示した、本論文が研究対象とする、A〈自動詞的な他動詞文〉の用例と B〈自動詞の形態をもつ他動詞文〉の用例が、(140) に示した①～③のどれに該当するか

確認しておく。(※他動詞文の後ろの番号は 1.1.1、1.1.2 で示した例文の番号。例文を一部追加しておく。)

(142) 非対格自動詞に対応する他動詞

A 〈自動詞的な他動詞文〉 および

B 〈自動詞の形態をもつ他動詞文〉 【対応する非対格自動詞の文】

① 〈存在〉の所有主体の他動詞文	〈存在〉の自動詞文
[z が y を 〈もつ/もたない〉]	[z に y が 〈ある/ない〉]
・その会社は <u>70 年の歴史を持つ</u> 。(1i)	・その会社に <u>70 年の歴史がある</u> 。
・レモンはビタミンCを <u>含む</u> 。(1j)	・レモンにビタミンCが <u>ある</u> 。
・山田さんは <u>積極性を欠く</u> 。(追加)	・山田さんに <u>積極性がない</u> 。
② 〈発生・消失〉の所有主体の他動詞文	〈発生・消失〉の自動詞文
[z が y を 〈発生/消失〉]	[z にから y が 〈発生/消失〉]
・私はきのう財布を <u>なくした</u> 。(1g)	・私から財布が <u>なくなる</u> 。
・妹はきのう熱を <u>出した</u> 。(1h)	・妹に/から熱が <u>出る</u> 。
・エンジンが火を <u>噴いた</u> 。(5b)	・エンジンから火が <u>噴く</u> 。
・干物が粉を <u>吹いた</u> 。(5c)	・干物(の表面)に粉が <u>吹く</u> 。
③ 〈変化〉の所有主体の他動詞文	〈変化〉の自動詞文
[x が y を 〈変化〉]	[x の y が 〈変化〉]
・二郎は <u>転んで</u> 、骨を <u>折った</u> 。(1a)	・二郎の骨が <u>折れる</u> 。
・三郎は期末評価で <u>成績を下げた</u> 。(1b)	・三郎の <u>成績が下がる</u> 。
・四郎は <u>殴られて</u> 、骨を <u>折った</u> 。(1c)	・四郎の骨が <u>折れる</u> 。
・四郎は空襲で、東京の家を <u>焼いた</u> 。(1d)	・四郎の家が <u>焼ける</u> 。
・台風は次第に <u>スピードを速めた</u> 。(1e)	・台風の <u>スピードが速まる</u> 。
・相場は <u>一気に値を上げた</u> 。(1f)	・相場の <u>値が上がる</u> 。
・太郎が口を <u>あいている</u> 。(4a)	・太郎の口が <u>あく</u> 。
・犬が尻尾を <u>垂れている</u> 。(4b)	・犬の尻尾が <u>垂れる</u> 。
・父は仕事を <u>終わった</u> 。(4c)	・父の仕事が <u>終わる</u> 。
・川が水かさを <u>増した</u> 。(5a)	・川の水かさが <u>増す</u> 。

①の〈存在〉の所有主体の他動詞文は、所有主体の他動詞文の基本型として、すでにその生成プロセスを示したので、以下では、②の〈発生・消失〉の所有主体の他動詞文と③の〈変化〉の所有主体の他動詞文を、基本型の展開型として見ていく。その後で、上では漏れているB-3〈単他動詞がヲ格をとる他動詞文〉とその周辺の構文がどこに位置づけられるのかを示す。

#### ■非意図的な再帰構文

具体的に見ていく前に、(140③)の「変化型」の所有主体の他動詞文の構文的な特徴を確認しておく。既に第2節の先行研究でも触れたが、変化の事象を表す他動詞文の主語名詞(x)と目的語(y)は、同じ事象を表す自動詞文の主語名詞において「xのy」という形で現れる。これは他動詞文における主語と目的語が、高橋(1975)のいう「所属関係」(①全体と部分 ②主体とその側面 ③所有者と所有物 ④生産者と生産物の関係のこと。具体的な内容は2.2.1の「高橋(1975)」を参照)になっていると言える。つまり、「変化型」の所有主体の他動詞文は〈非意図的な再帰構文〉とすることができる。

再帰構文という名称を用いるにあたり、「再帰」の定義を独自にたてることはしない。天野(1987b)が「状態変化主体の他動詞文」における主語と目的語の関係について「全体部分」という用語で括った考え方(同書:左8)を踏襲し、次のように規定しておく。

(143) 〈非意図的な再帰構文〉における主語(x)と目的語(y)の関係

yはxを特徴づける要素として、xと密接な関係にあり、具体的か抽象的かを問わず、また直接的か間接的かを問わず、yの変化がxの変化であると認知できるような一体性をもつ関係にある。通常は、対応する自動詞文の主語において「xのy」のように表示される関係にある。

### 3.4.2 展開(その1):〈所有者の出来構造化〉と〈発生・消失〉の所有他動詞

#### ■発生・消失の語彙概念構造

「発生」の意味概念を表す非対格動詞の語彙概念構造は、影山(1996)では金水(1994)の提案を採用して(144a)の構造をもつとしている。本論文でもBECOMEの主語のyの有無によって「発生」(144a)と「対象変化」(144b)を区別する<sup>87</sup>。

(144) a. 「発生」(非対格動詞)の語彙概念構造

(※影山 1996 : 109 のツリー図を概念式に変換)

[ BECOME [y BE-AT-z] ] [ [y ガ z ニ <ある> ] ニ <なる> ]  
= [y ガ z ニ <発生> ]

b. 「対象変化」(非対格動詞)の語彙概念構造

[y BECOME [y BE-AT-z] ] [y ガ [y ガ z デ <ある> ] ニ <なる> ]  
= [y ガ z ニ <なる> ]

一方、影山 (2002b) では (144a) とは多少異なる (145) を、発生を意味する英語の動詞 ‘gush’ の概念構造として示している。違いは意味述語の ‘NOT’ の有無である。

(145) [ BECOME [y BE NOT-AT-z] ] [ [y ガ z ノ外ニ <ある> ] ニ <なる> ]<sup>88</sup>  
= [y ガ z カラ <発生> ]

影山 (1996、2002b) では言及されていないが、語彙概念構造を示している例文から判断して、(144a) は発生物が発生母体に付随している場合で、(145) は発生物が発生母体から離れていく場合だと考えられる<sup>89</sup>。本論文では、このような事象の違いから、前者を「発生1」、後者を「発生2」と呼び区別する。なお、「消失」は ‘BE AT-z’ を否定する概念で、‘NOT BE AT-z’ となり、「発生2」の ‘NOT’ とは位置が異なるが、この2つは「母体側から見る」のか「母体の外側から見る」のかという視点の違いであり、事象そのものには違いがないと考えられる<sup>90</sup> (図 10)。

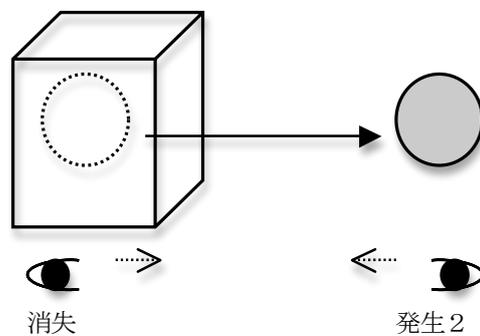


図 10 発生2と消失の概念

(146) 非対格自動詞としての「発生・消失」の語彙概念構造の3つのタイプ

a. 発生1：発生物が母体に付随する場合

[BECOME [y BE AT z]]

「干物 (の表面) に粉が吹く」「桜の木に芽が吹く」「計算にミスが生じる」

「山田さんに事故が起こる」<sup>91</sup>「山田さんの額にこぶができる」「熱が出る」<sup>92</sup>

b. 発生2：発生物が母体から離れる場合 (※外側からの視点)

[BECOME [y BE NOT AT z]]

「エンジンから火が噴く」「間欠泉から蒸気が噴き上げる」

「(この学校から) 政治家が出る」<sup>93</sup>

c. 消 失：発生物が母体から離れる場合 (※母体側からの視点)

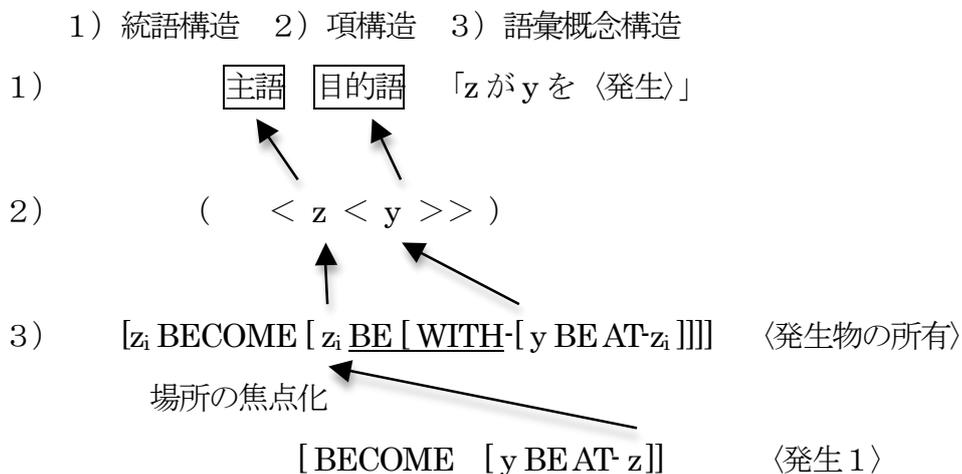
[BECOME [y NOT BE -AT z]]

「(事故で) 左足がなくなる」「(失敗して) やる気がなくなる」

■ 〈発生・消失〉の所有主体の他動詞文：発生1 (S型)

次に (146) の各概念構造に対応する所有他動詞の概念構造を示す。発生1は意味述語の 'BECOME' があるだけで、変換は〈存在〉から〈所有〉への変換と同じで「場所の焦点化」によってのみ行われる。発生物を母体が所有することから、これを〈発生物の所有〉と呼ぶ。場所が焦点化されることで、事象は「対象(=場所)変化」となり、zはBECOMEの主語にもなる。発生1のS型を(147)に示す。

(147) 発生1S型



例えば、「コンピュータ (z) に狂い (y) が生じる」という発生事象の場合、場所の焦点化によってコンピュータ (z) がどのように変化したのかという把握の仕方に変換される。BECOME の主語に z がつくことがそれを示している。そして疑似的な外項となったコンピュータ (z) を主語にした「コンピュータが狂いを生じる」という所有主体の他動詞文が生成されるのである。

### ■所有者の出来構造化について

発生2は発生1と異なり、〈発生〉から「場所の焦点化」によって直接〈所有〉の概念に変換されるのではない。なぜなら発生2は発生物が母体から離れることを意味するので、直接変換した場合には、「母体が、そこから離れた発生物を所有する」という矛盾した解釈になってしまうからである。そこで、〈所有〉の概念構造化に変換されるにあたって、まず「所有者の出来 (しゅったい) 構造化」が起こると仮定する。

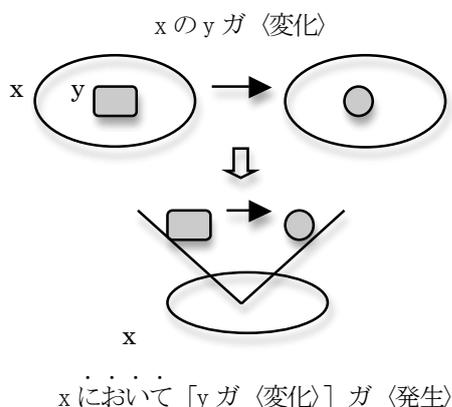


図 11 所有者の出来構造化 (=図 2)

「所有者の出来構造化」とは、話者 (認知主体) が所有者を事象が出来る「場」と捉えることを指す。つまり、図 11 に示したように、「x の y が変化する」という事象において、所有者の「x」を変化事象の発生する場と捉えて、同じ事象を「x において [y が変化する] が発生する」と認知的に捉え直すことである。所有者の出来構造化は「所有者を出来の場と見立てた発生構文化」と呼んでもいいだろう。

「出来 (しゅったい)」という用語は、尾上 (1998~1999) の「出来文」という考え方

を語彙概念構造に適用したものである。概念構造において、この出来という概念を応用するのは、語彙概念構造が外界とのインターフェースになっており、事態をどう把握するかが概念構造のあり方に影響を与えていると考えられるからである。この考え方を認知文法の観点から見ると、人間が持っている参照点能力が参照点構造として言語形式に反映されているからだと考えられる (Langacker 1993, 1995 など)。参照点能力にかかわる認知プロセスは、図 12 のように規定される。Cは認知主体で、Rが参照点、Tがターゲット、大きな楕円のDが参照点によって限定されるターゲットの支配領域である。破線の矢印はメンタル・コンタクト (心的接触) を示している。

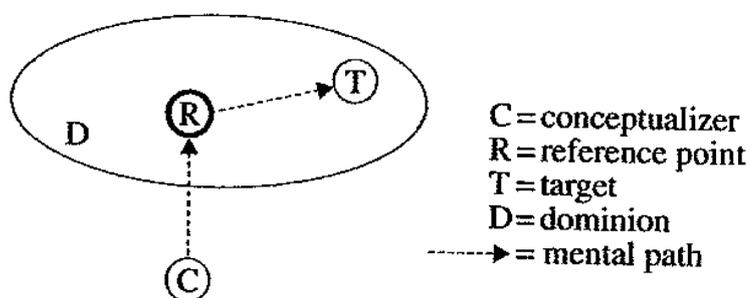


図 12 参照点能力にかかわる認知プロセス

(Langacker 1993 : 6, Figure2 より)

Langacker (1993) によれば、参照点能力とは「ある事物 (entity) の概念を想起して、それを手がかりにして別の事物とのメンタル・コンタクトを確立し、意識化する」<sup>94</sup> (同書:5) という人間がもつ基本的な認知能力の1つである。所有関係「xのy」においては、所有者のxが参照点(R)となりターゲット(T)である所有物のyにメンタルコンタクトすると述べている(同書:7-11)。本論文が主張する「所有者の出来構造化」とは、このような参照点能力によって、変件事象においてもまず「どこにおいてその事象がおこったのか」という事態の把握がされると考える。その「どこ」が変化対象の所有者であり、参照点になるのである(図13)。

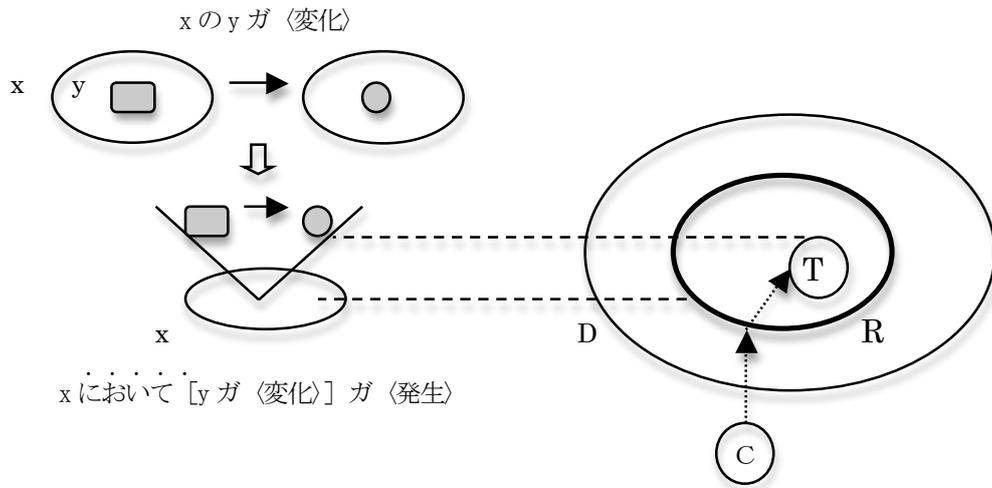


図 13 所有者の出来構造化と参照点の認知プロセス

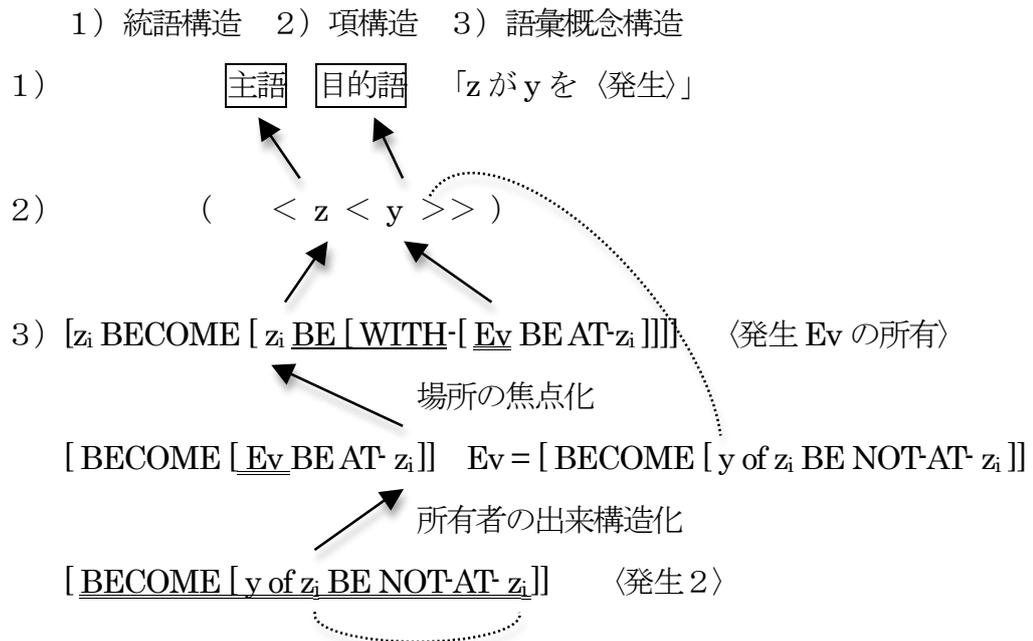
■所有者の出来構造化と発生2

所有者の出来構造化をもつ発生2のS型を(148)に示す。この場合の〈所有〉は、発生というEvent(以下、Evと略す)を所有する、つまり発生という出来事の履歴を所有することを意味するので、〈発生Evの所有〉と呼ぶことにする。

例えば、「間欠泉(z<sub>i</sub>)の蒸気(y)が間欠泉(z<sub>i</sub>)から噴き上げる」という発生事象の場合、所有者の出来構造化によって「間欠泉(z<sub>i</sub>)において、蒸気(y)が間欠泉(z<sub>i</sub>)から噴き上げるというEvが発生する」と把握され、場所の焦点化によって「間欠泉(z<sub>i</sub>)が、蒸気(y)が間欠泉(z<sub>i</sub>)から噴き上げるというEvを所有する」と把握され、最終的に「間欠泉(z)が蒸気(y)を噴き上げる」という所有主体の他動詞文が生成される。

(148)-3)の破線が示すように、発生2では、「所有者の出来構造化」といっても元々「yの所有者(z)」=「場所/母体(z)」という関係を持っており、(149)にも示したように、「〈発生〉というイベントが〈発生〉する」という冗長な構造を持っている。このようなくどい変換は不要と見られるかもしれないが、次に示す〈変化〉の所有主体の他動詞文につながる段階として、このような変換の段階を理論的に仮定することには意義があると考えられる。

(148) 発生 2S 型



「E<sub>v</sub> の所有」の場合、内項 (y) はどのように項構造にリンクされるのかについてだが、リンクに当たっては、イベントの中身が参照され、BE の主語である y と動詞の意味概念の情報が反映されると考える。以上、語彙概念構造における変換のプロセスをまとめると (149) のようになる。発生 S 型に分類される動詞を (150) に挙げておく。

(149) 「発生 2S 型」の生成プロセス

- ① 非対格動詞の「発生 2」の意味概念  
[z<sub>i</sub> の y が z<sub>i</sub> から 〈発生〉]
- ② 所有者の出来構造化  
[z<sub>i</sub> において、E<sub>v</sub> (=z<sub>i</sub> の y が z<sub>i</sub> から 〈発生〉) が 〈発生〉]
- ③ 場所の焦点化  
[z<sub>i</sub> が E<sub>v</sub> (=z<sub>i</sub> の y が z<sub>i</sub> から 〈発生〉) を 〈もつ〉]

(150) 発生 S 型の他動詞 ((146) も参照)

- a. 発生 1S 型 : 「(粉を) 吹く」「(芽を) 吹く」「(ミス)を 生じる/発生する」  
「(眠気を) 催す」
- b. 発生 2S 型 : 「(火を) 噴く」「(蒸気を) 噴き上げる」  
「(事故で左足を) 失う」

■発生・消失の所有主体の他動詞文：T型

最後に、発生のT型がどのような生成プロセスをもつのかを見ておく。T型は、自動詞の意味概念に原因のイベントを上位事象に付加した使役変化の語彙概念構造をベースにして、下位事象をプロファイルすることによって生成されるタイプである（S型とT型の区別については3.3.4（128）を参照）。まず発生1のT型のプロセスを示す。

(151) 発生1T型



例えば、山田さんが自動車を運転していて、脇見運転で事故が起きた場合、ここにはまず発生の事象として「山田さん (z) において事故 (y) が起こった」という事態の把握の仕方がある。また、それとは別に因果関係がベースに読み込まれ「山田さんが脇見運転をしたことが、山田さん (z) において事故 (y) が起こることを引き起こした」、つまり「山田さんが脇見運転をしたことが、事故を (引き) 起こした」という事態の把握の仕方がある。これが (151) - 3) の〈発生1〉の語彙概念構造である。ここに現れる「起こす」という動詞は、T型の動詞の形態に関する規則 (3.3.5 (134b) を参照) によって使役変化動詞と同じ形態をもつ。これは原因イベントを上位事象にもつ使役変化動詞になっているからである。

しかし、ここで注意しなければならないのは、これは原因イベントであって、使役変化動詞の動作主ではない。全体として「起こす」の語彙概念構造をベースにして、プロファイルされた下位事象が場所の焦点化を経て「起こす」の所有主体の他動詞文が生成される



彙概念構造である。全体として「なくす」の語彙概念構造をベースにして、プロフィールされた下位事象が所有者の出来構造化（「山田さんに (z<sub>i</sub>) おいて、山田さん (z<sub>i</sub>) のやる気 (y) をなくすという Ev が発生する」という把握）と場所の焦点化（「山田さん (z<sub>i</sub>) は、山田さん (z<sub>i</sub>) のやる気 (y) をなくすという Ev の発生を所有する」という把握）を経て「なくす」の所有主体の他動詞文（「山田さん (z) はやる気 (y) をなくした」）が生成されるのである。最後に、発生 T 型に分類される動詞を (153) に挙げておく。

(153) 発生 T 型の他動詞 ((146) も参照)

- a. 発生 1T 型：「(事故を) 起こす」「こぶをつくる」「(熱を) 出す」
- b. 発生 2T 型：「(ため息を) もらす」「(この学校が政治家を) 出す」<sup>96</sup>  
「(失敗してやる気を) なくす」

### 3.4.3 展開 (その 2) : 〈変化〉の所有他動詞

3.4.2 でも少し触れたが、語彙概念構造における変換という点では、「発生 1 型」は「基本型」と近く、「発生 2 型」はイベント (Ev) を所有しているという意味概念を持つ点で、ここで取り上げる「変化型」に近い。つまり、その生成プロセスの流れは、発生 2 型で示したものと同じで、「所有者の出来構造化」と「場所の焦点化」を経て、所有主体の他動詞文が生成される。この場合の〈所有〉は、変化のイベントなので〈変化 Ev の所有〉と呼ぶことにする。最初に発生 2 型と類似する「変化到達」事象から所有主体の他動詞文が生成されるプロセスを見てみる。

#### ■変化到達型 (T 型)

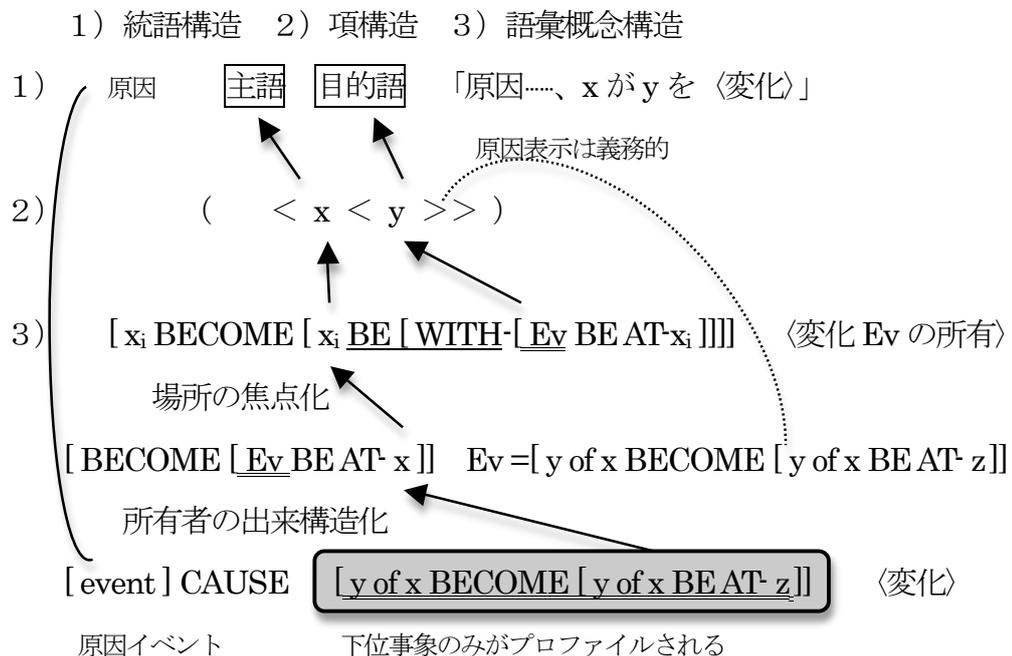
変化到達型の T 型を (154) に示す。生成されるプロセスの流れは「発生 2」と同じだが、変化到達の事象の場合、変項の z は変化後の状態を表し、場所の項ではないという点で異なる。変化事象の出来する場として、場所に見立てられた所有者 (x) が焦点化され、他動詞文の主語になる。

たとえば、初心者の山田さんがスキーをしていて、転んで足の骨を折った場合、ここにはまず変化の事象として「山田さん (x) の骨 (y) が折れた」という把握の仕方がある。また、それとは別に因果関係がベースに読み込まれ「山田さんが転んだことが、山田さん (x) の骨 (y) を折った」という事態の把握の仕方がある。これが (154) -3) 下段の語

彙概念構造である。全体として「折る」の語彙概念構造をベースにして、プロフィールされた下位事象が所有者の出来構造化（「山田さん (x) において、山田さん (x) の骨 (y) を折るといふ Ev が発生する」といふ把握）と場所の焦点化（「山田さん (x) は、山田さん (x) の骨 (y) を折るといふ Ev の発生を所有する」といふ把握）を経て「折る」の所有主体の他動詞文（「山田さん (x) は骨 (y) を折る」）が生成されるのである。

(154) 変化到達型 (T型)

(=非意図的な再帰の他動詞文)



「状態変化」の場合はベースにあった原因イベントの統語上への表示が強く求められる (3.3.6 (137) を参照)。文脈において明示または暗示しなければ、所有主体の他動詞文としての解釈が確実にならないため、通常は「山田さんスキーで転んで、骨を折った」と表現される。つまり、「山田さんは骨を折った」だけでは、「折る」の通常の使役変化動詞の解釈（「他人の骨を折る」または「意図的に自身の骨を折る」という解釈）が排除できないため、原因イベントの統語上への表示が義務的になるというわけである。ただし、この義務的というものにも段階性が認められ、自分自身が原因にかかわっている場合は、語用論的に再帰の解釈が優先され、原因の表示がなくても解釈に混乱を引き起こさない場合が多い。一方、原因に自分自身がかわっていない場合は、原因の表示が文字通り義務的になると考えられる。これについては次節の構文分析の「状態変化主体の他動詞文」（天野

1987b) のところ (4.1.4) で詳しく論じる。

なお、変化到達型はここで取り上げた T 型になるのが普通で、S 型はやや特殊なタイプである。これは「有対自動詞の両用動詞化」とかかわるタイプで、理論の枠組みの 3.4.4 と構文の分析 4.2.2 で取り上げる。最後に、変化到達型に分類される動詞を (155) に挙げておく。(※変化到達 S 型については、3.4.4 と 4.2.2 で取り上げる)

#### (155) 変化到達型の他動詞

変化到達 T 型：「(骨を) 折る」「(指を) 切る」「(家を) 焼く」  
「(肉刺を) つぶす」など

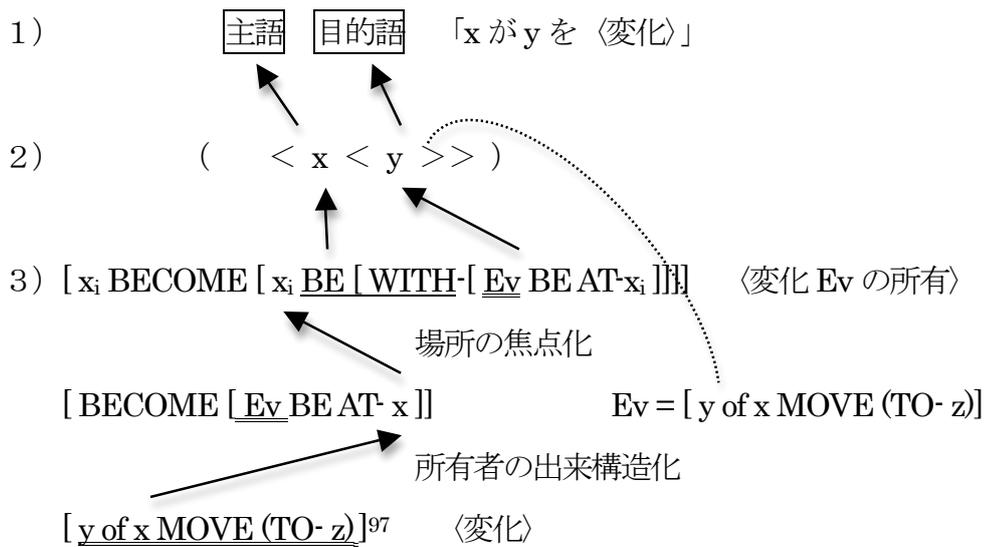
#### ■変化過程型

次に「変化過程」の事象から生成されるプロセスを見てみる。「変化過程」は限界性を持たない事象に対応している。変化到達が語彙概念構造で BECOME という意味述語で表示されたのに対して、変化過程は MOVE という意味述語で表示される (3.1.1 を参照)。場所の焦点化および所有者の出来構造化などの生成プロセスをもつことは共通している。なお、変化過程の事象には「位置変化」と「状態変化」があるが、どちらも限界性をもたない点で共通しているため意味述語は MOVE を用いる。細かくみれば「位置変化過程 S 型 / T 型」と「状態変化過程 S 型 / T 型」の合計 4 つの型があることになるが、実際にはメタファーの問題もからみ、位置変化と状態変化の 2 つがはっきりと区別されるわけではない。さらにこの型に分類される動詞は数が少ないこともあり、位置変化と状態変化は区別せずに「変化過程 S 型」と「変化過程 T 型」の生成プロセスを示す。

#### ■変化過程 S 型

(156) では、例えば「雨が降り続いて川の水位が上昇する」という事象の場合、これはまず「川 (x) の水 (y) が増す」という変件事象として捉えられる。この事象を「川 (x) において水 (y) が増すというイベントが発生した」と捉えるのが「所有者の出来構造化」である。そして場所の焦点化によって川を主語にした「川 (x) が水 (y) を増す」という所有主体の他動詞文が生成されるのである。S 型の所有他動詞は、動詞の形態に関する規定 (3.3.5 (134a)) に示したように、固有の形態か自動詞と同じ形態をもつ。変化過程型ではそれに該当する動詞は「増す」だけのようである。

(156) 変化過程 S 型



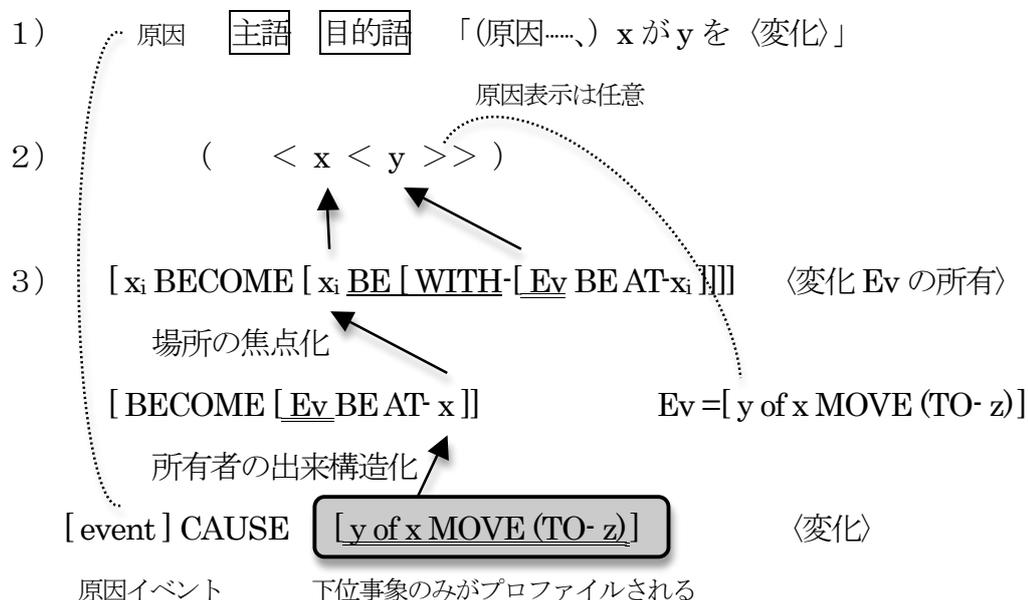
■変化過程 T 型

(157) では、例えば「山田さんの額が切れて出血した」という事象の場合、ここにはまず変化の事象として「山田さん (x) の額から血 (y) が流れた」という事態の把握の仕方がある。これとは別に因果関係がベースに読み込まれ「額が切れたことが、山田さん (x) の額から血 (y) が流れることを引き起こした」、つまり「額が切れたことが、山田さんの額から血を流した」という事態の把握の仕方がある。これが (157) -3) 下段の語彙概念構造である。全体として「流す」の語彙概念構造をベースにして、プロフィールされた下位事象が所有者の出来構造化（「山田さん (x) において、山田さんの額から血 (y) を流すという  $E_v$  が発生する」という把握）と場所の焦点化（「山田さん (x) は、山田さんの額から血 (y) を流すという  $E_v$  の発生を所有する」という把握）を経て「流す」の所有主体の他動詞文（「山田さんは額から血を流した」）が生成されるのである。

この変化過程 T 型に属する所有他動詞については、上に挙げた「(血を) 流す」のように人について「全体 (x) と部分 (y)」の関係にあるものは数が少ないが、非情物が主語になり「主体 (x) と側面 (y)」の関係にあるものは比較的数量が多い。前者は発生型と共通する部分があり、主語名詞は発生物の「起点」として捉えられる。また、後者は杉岡 (2002) が示した「自発変化他動詞構文」の「～める」という形態をもつ動詞に該当する。いずれにしてもこの変化過程 T 型に属する所有他動詞は、基本的に下に示したように T 型の生成プロセスをもつのだが、他の T 型と多少異なる面がある。本論文では S 型と T 型を基本とした上で、後の議論で変種として ST 型というのを設定する。（これについては 4.1.1 の

「含む」の分析および4.1.3の「自発変化他動詞構文」の分析を参照)

(157) 変化過程 T 型



最後に、変化過程型に分類される動詞を (158) に挙げておく。

(158) 変化過程型他動詞

a. 変化過程 S 型 : 「(水位が) 増す」

b. 変化過程 T 型<sup>98</sup> :

1) 有情の主語と目的語が「全体と部分」の関係になっているもの

※発生型と共通点がある

「(血・汗・涙を) 流す」「(涙・愚痴を) こぼす」

2) 非情物の主語と目的語が「主体と側面」の関係になっているもの

※「自発変化他動詞構文」の「～める」動詞など

「(スピードを) 速める」「(勢い) を強める」など

「(相場が値を) 上げる」

3.4.4 展開 (その3) : 形態論的に見た所有主体他動詞文

ここまで所有主体他動詞文の骨格である S 型と T 型の生成プロセスをタイプ別に示してきたが、最後に形態論的に見た所有主体他動詞文の全体像を示す。(142) で示しよう

に、本論文がB〈自動詞の形態をもつ他動詞文〉と呼ぶもののうち、B-1〈有対自動詞がヲ格をとる他動詞文〉とB-2〈両用動詞がヲ格をとる他動詞文〉はこれまで説明してきた骨格の中におさまるのだが、B-3〈単他動詞がヲ格をとる他動詞文〉と呼んだもの、つまり単他動詞と複他動詞の関係をもつものはここにおさまらない。どちらも統語上は他動詞であるため、対応する非対格（自）動詞がないためである。まず形態論的な視点からB-1とB-2について本論文の理論的な枠組みを示し、次いでB-3と基本型とのつながりを示す。

### ■両用動詞と有対自動詞の両用動詞化

3.3.5の(134)に示したように、ヲ格をとる両用動詞はS型に見られる所有他動詞である。T型には見られず、S型にのみ見られるということは、両用動詞の他動詞文は下位事象しかもたない自動詞が[M2]（場所の焦点化と所有者出来構造化）という動機付けによって所有主体の他動詞文になったということである。下位事象のみで自他交替する場合は形態上の対立をもたないことは、影山（1996、2002b）でも指摘されていることだが、認知言語学的に見て、形態の変換を必要だと判断する要因を「事象間の距離」<sup>99</sup>に求めた場合、「上位事象+下位事象」対「下位事象」では自他交替は形態の対立を引き起こし、下位事象のみで自他交替する場合は形態の対立を引き起こさないと考えることができる。

(159) a.	<u>下位事象</u>	→	<u>上位事象+下位事象</u>	[他動詞化]
	・燃える		・燃やす	
	・続く		・続ける	
b.	<u>上位事象+下位事象</u>	→	<u>下位事象</u>	[自動詞化]
	・決める		・決まる	
	・切る		・切れる	
c.	<u>下位事象</u>	→	<u>下位事象</u>	[所有他動詞化]
	・噴く		・噴く	
	・増す		・増す	

両用動詞を(159c)のように位置づけた場合、有対自動詞でヲ格をとる他動詞は「両用動詞化」と呼ぶべき変化が起きたと考えることができる。有対自動詞が形態上、対になる

他動詞を持っているながら、ヲ格目的語を伴って使われることを、(159) の延長で (160a, b) のような対応にあると考えれば、これを「有対自動詞の両用動詞化」と呼ぶことには十分根拠のあることだと考える。

(160) a. 下位事象 → 上位事象+下位事象 [他動詞化] <sup>100</sup>  
 ・垂れる → ・(ヲ) 垂らす  
 両用動詞化 ↓ 下位事象 [所有他動詞化]

・(ヲ) 垂れる

下位事象 → 上位事象+下位事象 [他動詞化] <sup>101</sup>  
 ・開く → ・(ヲ) 開ける  
 両用動詞化 ↓ 下位事象 [所有他動詞化]

・(ヲ) 開く

b. 上位事象+下位事象 → 下位事象 [自動詞化] <sup>102</sup>  
 ・(ヲ) 終える → ・終わる  
 両用動詞化 ← 下位事象 [所有他動詞化]

・(ヲ) 終わる

c. 下位事象 → 下位事象 [所有他動詞化]  
 ・噴く → ・(ヲ) 噴く 両用動詞  
 ・増す → ・(ヲ) 増す 両用動詞

### ■単他動詞と複他動詞の3つのタイプ

単他動詞と複他動詞の関係として、最初に (161) に示した「教える」「預ける」のグループを見る。これらの3項述語の場合は、抽象的なモノか具体的なモノかの違いはあるが、「xがyをzにV」で「モノ(y)のzへの移動」と「zにおけるyの存在」という意味概念をもつ。



いうことである。「持つ」と同じ意味概念をもつのであれば、「着る」「かぶる」も使役変化動詞としての意味概念(164a)と所有他動詞としての意味概念(164b)の両方を持っていると考えるのは十分根拠のあることである。つまり、着点が語彙的に自分自身に指定されているだけで、下位事象には〈移動+存在〉の意味概念をもち、そこから所有主体の他動詞文が生成されるわけである。

- (164) a. 山田さんはセーターを着るのに1時間かかった。
- b. 山田さんは(いま)赤いセーターを着ている。
- c. 山田さんは自分の家を持つのに10年かかった。
- d. 山田さんは(いま)立派な家を持っている。

このように考えれば、「着る」対「着せる」、「かぶる」対「かぶせる」は、「預かる」対「預ける」と同様に、どちらもヲ格目的語をとるものの、前者は所有他動詞であり、後者は使役変化を表す他動詞だと見ることができる。

次に、「含む」と「含める」を取り上げる。従来の研究ではこれを単他動詞と複他動詞とすることはなかったようだが、「含む」が下位事象に〈移動+存在〉の意味概念をもち、〈存在〉の所有主体の他動詞文を作るとなれば、「含む」と「含める」のペアもまた所有他動詞と使役変化を表す他動詞だと見ることができる。実際にそうであることを「含む」の動詞分析(4.1.1)で示す。

以上、大雑把ではあるが、単他動詞と複他動詞の関係が実は所有他動詞と使役変化の他動詞という対立として捉えることができることを示した。具体的にこれらの3つのタイプの動詞がどのような原理によって自他の形態の対立を生むのかについては4.2.3で明らかにする。

### ■ 3項述語と所有主体の他動詞文のもう1つのつながり

「教える」「預ける」はモノの移動先は人であるが、3項述語には移動先が場所の場合もある。位置変化の使役動詞は多いが、その中で所有主体の他動詞文とのつながりが窺える動詞がある。(165b)(166b)の構文は、モノの移動先(場所)が主語になっている点が重要である。もし移動するモノが主語であれば、(165c)(166c)のように自他交替をするか受身文が用いられることになる。本論文では(165b)(166b)も所有主体の他動詞文であ

ると考え、4.2.3 で具体的に論じる。

- (165) a. 作業員がトラックに荷物を積んだ／載せた。  
b. (その) トラックは (荷台に) 荷物を積んでいる／載せている。  
c. 荷物がトラック (の荷台) に積まれている。
- (166) a. 花子は鞆にかわいいネコのマスコットを付けた／下げた。  
b. 花子の鞆はかわいいネコのマスコットを付けている／下げている。  
c. かわいいネコのマスコットが花子の鞆に付いている／下がっている。  
付けられている／下げられている。

なお、影山 (1996) は、所有をあらわす「た」(形容詞的「た」) に関する記述において、「～た名詞」は語彙概念構造の BE の主語でも AT-z の部分でも叙述できることを指摘している (同書 : 130-134)。これは所有主体の他動詞文が連体修飾節となる場合、被修飾名詞が動詞の語彙概念構造にあった「対象」でも「場所」でも成立することを意味している。影山のあげた例文のうち、ここで取り上げた 3 項述語と所有主体の他動詞文の関係になっていると考えられるものには次のような文がある。

(167) 影山 (1986 : 132 = (87b)) より

- a. 犯人を載せた護送車  
b. 花を飾った玄関

### 3.4.5 〈所有主体の他動詞文〉の全体像のまとめ

最後に全体像のまとめとして、第 1 節で示した 3 つの疑問とそれを解くカギとなる所有主体の他動詞文の型とのつながりを示す。A が所有主体の他動詞文の骨格をなし、それを形態論的な視点でみた場合に B の切り口が生まれる。C は A の拡張だと位置づけられる。なお、A～C 〈 〉の名称は所有主体の他動詞文の分類に使う呼称で、【 】の名称は、所有主体の他動詞文の各タイプの名称として本論文で使用する呼称である。また、所有主体の他動詞文を作る他動詞はこれまでどおり「所有他動詞」と呼ぶが、そのタイプを明示する場合には、「〈存在〉の所有他動詞」のように呼ぶことにする。

① 意味論的には自動詞なのに他動詞文になっているのはなぜか

A 〈自動詞的な他動詞文〉

(1) 【〈存在〉の所有主体の他動詞文】	プロフィールされる下位事象	所有タイプ
基本型 S型	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	「存在」
T型	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	「移動+存在」
(2) 【〈発生・消失〉の所有主体の他動詞文】		
発生型 S型/T型	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	「発生+存在」
S型/T型	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	「発生・消失」
(3) 【〈変化〉の所有主体の他動詞文】 または 【非意図的な再帰構文】		
1) 変化過程型 ※限界性なし		
・位置変化過程型 S型/T型	・・・・・・・・・・・・・・・・	「位置変化」
・状態変化過程型 S型/T型	・・・・・・・・・・・・・・・・	「状態変化」
2) 変化到達型 ※限界性あり		
・位置変化到達型 S型	・・・・・・・・・・・・・・・・	「移動+存在」
・状態変化到達型 S型/T型	・・・・・・・・・・・・・・・・	「変化+状態」

モノ  
所有  
Ev  
所有

② 形態論的には自動詞なのに他動詞文になっているのはなぜか

B 〈自動詞の形態をもつ他動詞文〉

B-1 〈有対自動詞がヲ格をとる他動詞文〉

⇒ 有対自動詞の「両用動詞化」で「変化到達型」の「S型」の所有他動詞

B-2 〈両用動詞がヲ格をとる他動詞文〉

とみなせる

⇒ 自他の交替で形態の変化が起きない「S型」の所有他動詞である

B-3 〈単他動詞がヲ格をとる他動詞文〉とその周辺

⇒ 下位事象が「移動+存在」の「基本T型」のバリエーションである

③ 実際の動作主を無視する他動詞文が成立するのはなぜか

→ C 〈実際の動作主を無視する他動詞文〉「介在性の表現」(佐藤 1994、2005)

⇒ Aの拡張と考えられる

## 4 動詞と構文の分析

第2節で提起した問題を中心に、第3節で示した理論の枠組みに基づいて、所有主体の他動詞文になっていると考えられる構文およびその動詞を分析する。

### 4.1 A 自動詞的な他動詞文

#### 4.1.1 状態動詞の他動詞文の分析

ここでは 3.4.5 で所有主体の他動詞文の基本型に分類した〈存在〉の所有主体の他動詞文を具体的に論じる。その中心となるのは、2項述語でヲ格をとる状態動詞の構文である。2.2.1 で山岡 (2000a、2000b) を取り上げ、「属性動詞」「所要動詞」「関係動詞」に分類された中からヲ格をとる状態動詞を拾い出してみた。「関係動詞」の下位分類<sup>103</sup> (「包含・所有関係」「記号関係」) を含めて、複数に区分されたこれらの動詞を、〈所有〉の意味概念をもつ動詞という視点で捉え直してみる。

#### ■所有を表す基本動詞：ある (いる)

所有の意味概念をもつ動詞がすべてヲ格を伴う構文を作るわけではない。所有を表す基本動詞は「ある」(いる) である。この動詞はいわゆる与格主語構文「z に y がある (いる)」<sup>104</sup>の形で現れ、「z が y を〈もつ〉」ことを意味する。与格名詞の「〜に」が主語かどうか、また主格名詞の「〜が」が主語か目的語かについては、これまで生成文法の統語論を中心に議論されているが、本論文では、「z に」と「y が」はそれぞれ主語と目的語になり、「z が y を〈もつ〉」という〈所有〉の意味概念を表すと考える。ここでは「〜に〜が」および主語にあたる「〜に」が主格で表示された「〜が〜が」で所有関係を示す構文があることを確認することが重要なので、これ以上統語論の問題には立ち入らない。

- (168) a. 森さんには車がある。  
b. 高橋さんは兄弟が3人いる。  
c. 彼がお金がないことをどうして知っているの？

「ある (いる) 型」の所有構文に対して、本論文が主張する所有主体の他動詞文は「もつ型」の所有構文だと言える。どちらの場合もベースとなる〈ある〉をコアにして様々な

存在（所有）の様態の情報を付け加えることで所有を表す動詞を豊かにしている。ここでは「もつ型」の所有構文の分析が中心だが、比較のために「ある（いる）型」の所有構文も取り上げる。

一例を挙げると、「足りる」という動詞は、通常同一文中に所有者が明示されることが少ないが、与格主語構文を作る。〈ある〉という概念に、その所有物の量が「必要なだけ十分に」という情報が付加していると考えられ、「ある」との連続性が認められる。「欠ける」も与格主語構文を作るが、これについては下で改めて取り上げる。

(169) a. それを買うだけなら、千円で足りる。

b. 彼女に足りないのは忍耐力だ。

■所有関係を表す他動詞：「持つ」を中心に（：「擁する」「誇る」「欠く」「知る」）

次に所有関係を表す他動詞を見てみる。所有を表す他動詞は、基本S型と基本T型がある（3.3.4を参照）。日本語は「ナル型」言語の特徴を反映して、所有でさえも「移動した結果の存在」という捉え方をする傾向が強い。そのため所有を表す基本的な他動詞の「持つ」は基本T型になる。まずこのT型の動詞を見ていく。

主語は人、ものの両方があるが、いずれの場合も「yがzに〈ある〉」という〈存在〉の概念構造 [y BE-AT z] から、場所の焦点化によって「zがyを〈もつ〉」という〈所有〉の概念構造 [z<sub>i</sub> BE [WITH-[y BE AT-z<sub>i</sub>]]] に変換され、所有主体の他動詞文が生成されている。〈もつ〉という意味概念が示すように、基本的な動詞は「持つ」で、その漢語的表現である「有する」もここに入る。（基本T型の「持つ」の生成プロセスについては3.3.4 (130)を参照）

(170) a. 最近では小学生でも携帯電話を持つようになった。

b. 彼は人をひきつける力を持っている。

c. 何事にも興味を持つことが大切だ。

d. すべての人が自由に発言する権利を有する。

「擁する」と「誇る」<sup>105</sup>は〈ある〉という意味概念に何らかの情報が付加している。「擁する」は「自分の指揮（勢力）の下に」（『新明解国語辞典』の定義より）という情報が、

「誇る」は〈ある〉に「長所として認められるもの」(『明鏡国語辞典』の定義より)という情報が付加される。このような〈ある〉をベースにした意味の広がり、(171)のように示すことができる。T型のプロセスを使って示すが、S型でも考え方は同じである。

(171) 〈もつ〉の広がり ( : 「擁する」「誇る」)

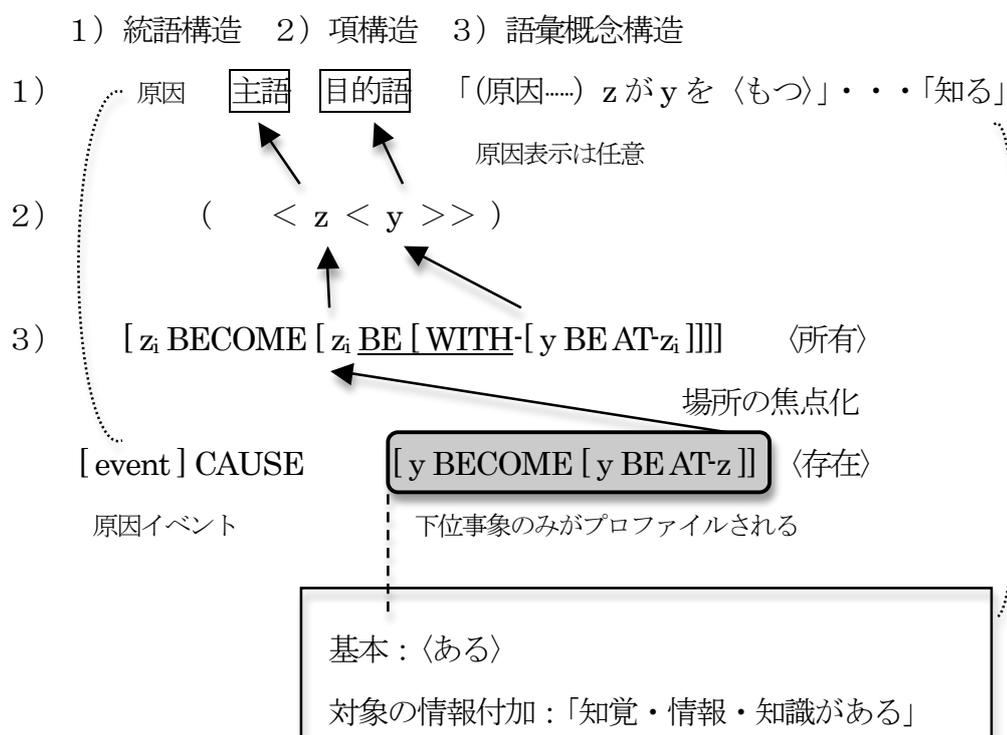


「欠く」は使役変化動詞として「(太郎が) 茶碗を欠く」などの用法をもつが、現代語としてはむしろ状態動詞として〈非存在〉の「yがzに〈ない〉」という意味で使われることが多い。その場合の「~を欠く」は〈非存在〉「yがzに〈ない〉」の意味概念である[y NOT BE AT-z]に、「なければならぬものやあるべきはずのものがない」(『明鏡国語辞典』の定義より)という情報が付加され、〈非所有〉の「zがyを〈もたない〉」という意味概念である[z<sub>i</sub> NOT BE [ WITH-[ y BE AT-z<sub>i</sub> ] ]]に変換していると考えられる。

- (172) a. 強大な権力を擁する君主に齒向かう者はなかった。  
b. これは日本が世界に誇る技術だ。  
c. 政府の財政再建策は決め手を欠いた。  
d. 配慮を欠く対応にいらだちを覚えた。

「知る」も「持つ」と同様に使役変化動詞の側面と所有他動詞の側面をもつと考えられる。使役変化動詞では再帰構造（着点が語彙的に自分自身に指定されている）になっているところも同じである。タイプも「持つ」と同じ基本T型である。所有他動詞としての「知る」の基本は、〈ある〉の意味概念に「知覚・情報・知識」という語彙情報が付加していると考えられる。

(173) 所有他動詞としての「知る」(基本T型)



「持つ」がそうであったように、「知る」も語彙概念構造に BECOME があり〈移動+存在〉の意味概念をもつので、「テイル形」(知っている)で現在の状態を表す。また原因イベントの表示は任意だが「山田さんに聞いて、それを知った」のように表示することもできる。ところで「知る」が他の状態変化動詞と異なり否定形が「知っていない」よりも「知らない」が普通の形になっている点がユニークである。これは原因イベントが想起される文脈においては「(まだ) 知っていない」が使われうるが、デフォルトでは原因イベントを想起しない、つまりS型の生成プロセスになってしまっていると考えられる。簡単に言えば、「知る」ことには〈移動+存在〉を引き起こす原因イベントが必ず想起されるが、「知覚・情報・知識がない」ということに対しては、〈移動+存在〉を引き起こす原因イベント

を想起する必要がなく、単に〈存在〉を否定するだけでいいからだと考えられる。したがって、S型の生成プロセスで、「知覚・情報・知識が〈ない〉」から「～を〈もたない〉」が生成されて「知らない」という形になると考える。

■形容詞とのつながり（「～が～に」の格配列をもつ動詞：「富む」「欠ける」）

(168) (169) では、与格主語構文で目的語をガ格で示す動詞を、(170) ～ (173) では、所有主体の他動詞文で、ヲ格で目的語を示す動詞を示した。ここでは、目的語に相当する語をニ格で表示する動詞を見ておく。このニ格は「山田さんは歴史に強い」のような観点を表すニ格と共通しており、状態を表す動詞が形容詞と接点をもつことが窺える。

「富む」「欠ける」は (174a) (174b) に示したように、所有主体を主語にした構文を作れるが、ニ格名詞が観点を示すことで述語が表す意味を完結させている。つまり、ニ格名詞は必須補語だということである。この構文は〈所有〉の意味概念を持つものの、(174a) (174b) の語彙概念構造が示すように、状態を表す形容詞文（「～が豊富だ」「～がない」）に非常に近いと言える。「欠ける」は与格主語構文で所有関係を示すこともできる (174c)。そして、その「場所」に相当する与格主語 'z' を焦点化したのが「欠く」の所有主体の他動詞文である (174d)。

(174) a. 彼は、機知に富む。(z が y に富む)

[z BE-AT-ABUNDANT -IN y] cf. (z が y が豊富だ)

b. 彼は、独創性に欠ける。(z が y に欠ける)

[z BE-AT-LACKING -IN y] cf. (z が y がない)

(彼は、独創性という観点において、あるべきものがない状態である)

c. 彼に (は)、独創性が欠ける。(与格主語構文：z に y が欠ける)

[y NOT BE-AT z]

(彼に (は)、あるべきはずの独創性がない)

d. 彼は、独創性を欠く。(所有主体の他動詞文：z が y を欠く)

[z<sub>i</sub> NOT BE [WITH- [y BE AT-z<sub>i</sub> ]]]

=have

(彼は、あるべきはずの独創性をもたない)

■ 「ある」の2つの拡張と所有を表す他動詞（「要る」「要する」「かかる」「伴う」）

次に基本S型の所有他動詞を分析する。「要る」「要する」「かかる」はいずれも「必要」という概念をもつ動詞である。山岡（2000a）では、「テイル形」を持たない「要る」を他と区別して「狭義の状態動詞」として「ある」「いる」と同列に扱っており、「要する」「かかる」は「関係動詞」ではなく「所要動詞」として別に分類しているが、本論文ではアスペクトによる分類が目的ではないので、意味概念で共通するものを1つに括ることとする。

「要する」が漢語的表現として使われることを除けば、この3つは類似した意味を持つと考えられるが、「要る」「かかる」は目的語に「～が」が、「要する」は「～を」が使われる。これについて山岡（2000a : 237）は「「要する」はヲ格を取る点で、他の2つと異なっているし、全くガ格をとらない動詞というのも不自然である」と述べているが、この2つの統語上の違いは、〈所有主体の他動詞文〉として生成されるか否かにあるというのが本論文の考え方である。「要る」と「かかる」の目的語がガ格で示されるのは、(175)に示した〈存在〉概念の2つの拡張の仕方と関係している。

- (175) a. 充足されるべきモノ（＝必要なモノ）が〈ある〉  
 b. 必要なモノが随伴して〈ある〉

(175a)の「充足されるべきモノ（＝必要なモノ）が〈ある〉」というのは、発話時点においてそのモノは〈ない〉という意味である。つまり、「ない」モノが「ある」ということである<sup>106</sup>。「要る」は「入る」と同源だと見られており、『日本国語大辞典』（小学館）も「いる」の見出しで「入る」と「要る」の両方を扱っている。しかし、「いる」の語誌欄では、別の語である可能性も指摘している<sup>107</sup>。本論文は同源と考え、(175a)の意味概念が、因果関係に基づくメトニミーによって「入る」とつながっており、「要る（いる）」は「入る（いる）」の拡張であると考えられる。

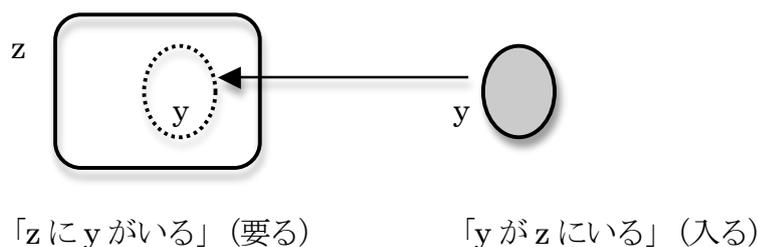


図 14 メトニミーによる「入る」と「要る」のつながり

図14に示したように、「yがzに入る」ということは、「zにyが必要である」ことを前提としており、欠けている部分に必要なものが「入る」という因果関係になっていると考える。つまり、「(zにおいて) yが欠けている」ことの裏返しは「(zにおいて) yが要る」ということである。zが所有主体になった文が(176)で、与格主語構文で表現される。また、所有主体が一般人称化され、目的が二格で示されたのが(177)である。

- (176) a. 彼にはあなたの助けが要るんだよ。  
 b. あなたにはこんなもの要らないでしょう。

- (177) a. 90日以上滞在にはビザが要るそうだ。  
 b. 施設の利用には先生の許可が要る。

次に(175b)の拡張を見てみる。これは所有関係を図15のように「随伴」とみることによって成立する。随伴の意味概念を表す代表的な動詞は「伴う」である。「伴う」は(178)に示したような〈存在〉から生成される「～が～に伴う」と、(179)に示したような〈存在〉から〈所有〉への概念構造の変換によって生成される「～が～を伴う」という所有主体の他動詞文の2つの構文がある。

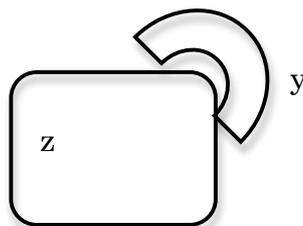


図 15 随伴と所有の関係

(178) 「yがzに伴う」の生成

〈存在〉	[y BE-WITH z]	[yがzに付随して〈ある〉]
	yが	zに伴う
	「危険が この仕事に伴う」	

(179) 「zがyを伴う」の生成

〈存在〉 [y BE-WITH z] [yがzに付随して〈ある〉]

〈所有〉 [z<sub>i</sub> BE [WITH-[y BE WITH-z<sub>i</sub>]]] [zがyを付随して〈もつ〉]

zが yを伴う  
「この仕事は 危険を伴う」

(180) a. やはり初めてのことには不安が伴うものだ。

b. この病気は発症すると下痢を伴うことが多い。

随伴関係というのを上のように考えた場合、必要という概念をもつ「かかる」は、動きを表す「かかる」(図16)の結果状態部分がプロファイルされたもの(図17)だと考えられる。つまり、「コスト・時間・手間が伴う」という意味概念をもつと見るわけである。

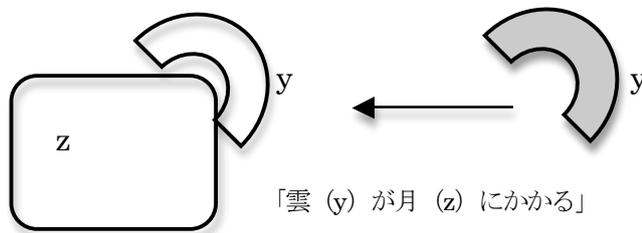


図 16 動きを表す「かかる」の概念

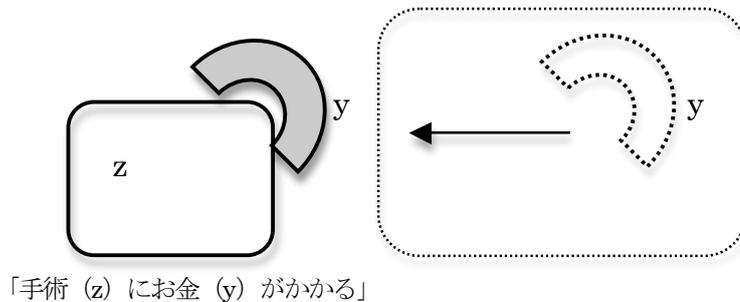


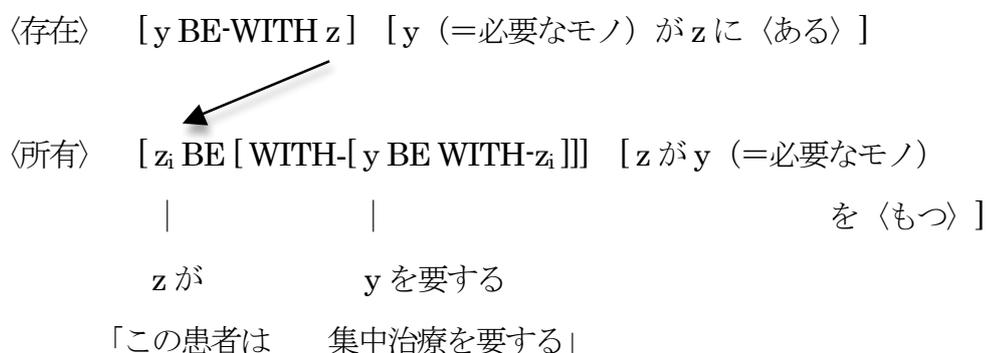
図 17 必要を意味する「かかる」の概念

そして、元々の格配列である「yがzに(かかる)」が、所有関係を表す場合にも保たれ、「zにyが(かかる)」となると考えられる。

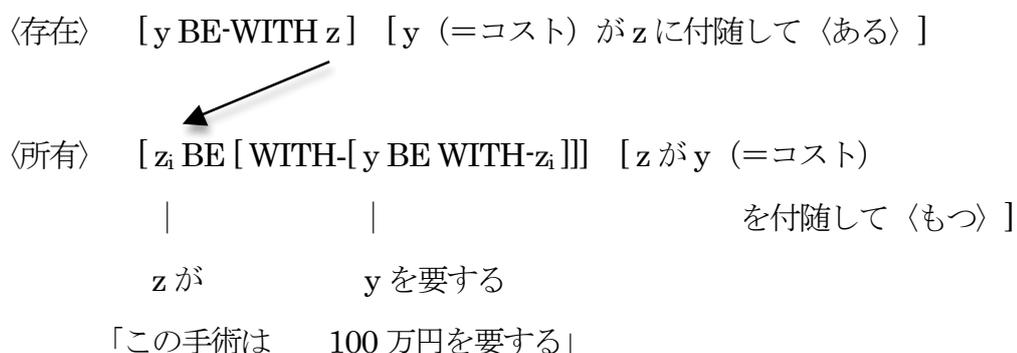
- (181) a. 完成にはまだ時間とお金がかかる。  
 b. 休日のATMの利用には手数料がかかる。

最後にヲ格目的語をとる「要する」について考えてみる。「要する」は「要る」と同じ「要」という漢字が使われるが、「入る」のメトニミーとは直接関係がない。そこで「～を要する」は、(175a)「充足されるべきモノ(=必要なモノ)が〈ある〉」と(175b)「必要なモノが随伴して〈ある〉」の両方の拡張があると考えられる。(175b)の随伴関係の場合は、「zにy(=コスト・時間・手間)が伴う」から「zがy(=コスト・時間・手間)を伴う」に変換されたのが「zがyを要する」である。

(182) 「zがyを要する」の生成1・・・(175a)の場合



(183) 「zがyを要する」の生成2・・・(175b)の場合



いずれの拡張であっても「要する」は、基本S型の所有主体の他動詞文として生成される。これは、見方を変えれば、「いる」「かかる」のように元々の動詞の意味の格配列の影響を受けない漢語的な表現だったからだとも言える。また、「要する」の場合、特定の人が所有主体になるよりも一般人称化され、出来事が主語になることが多く、それが目的として二格名詞となって現れることも多い。

- (184) a. この作業は早さよりも正確さを要する。  
b. 急を要する事態が発生した。  
c. 町は壊滅的な打撃を受け、復興にはなお時間を要した。

以上、必要を意味する「要る」「要する」「かかる」を〈ある〉の拡張として、また「伴う」とのつながりで考察した。目的語にガ格をとるかヲ格をとるかの違いは次のようにまとめられる。

(185) 「要る」「要する」「かかる」の比較

必要の意味をもつ「要る」「要する」「かかる」は次の2つのいずれか一方、または両方の〈存在〉概念の拡張である。

① 充足されるべきモノ (=必要なモノ) が〈ある〉 (=175a)

② 必要なモノが随伴して〈ある〉 (=175b)

「要る」は①の拡張で、そこには「入る」のメトニミーが関わっている。そのため、「入る」の格配列が保たれ、「～に～が要る」となる。「かかる」は②の拡張で、動きをあらわす「かかる」が状態動詞化したものである。そのため「かかる」の格配列が保たれ、「～に～がかかる」となる。「要する」は①と②の両方が考えられる。①の場合「入る」のメトニミーとは直接関係がなく、場所の焦点化によって所有主体の他動詞文が生成される。また②の場合も「伴う」と同様に、所有主体の他動詞文が生成され、いずれの場合も「～を要する」となる。

必要または所要をあらわす場合、英語では、‘you need more money.’ ‘he takes two hours to...’ ‘it costs ten dollars...’ と他動詞が使われる。日本語は日常語の「要る」と

「かかる」は自動詞扱いで、目的語はガ格で示される。「必要」の意味を表す動詞の2項がどのような格で示されるかは、言語によっていくつかのパターンに分かれるが、「～に～が」のように「与格」と「主格」（または絶対格）の組み合わせとなるのは決して特異なことではない。角田（1991：95、107-108）では、「要る」が所属する「感情」のカテゴリー（「好き」「欲しい」などを含む）について、「与格＋主格」の組み合わせが現れる言語として、ロシア語、アルバ語、スペイン語、カナダ語（インド）などを紹介している。

「要る」がもつ意味概念が「～に～が」で表現されることは、〈所有〉の概念が〈存在〉とつながっており、一方では自動詞の構文で「～に～が〈ある〉」で表現され、他方では他動詞の構文（＝本論文で〈所有主体の他動詞文〉と呼ぶもの）で「～が～を〈もつ〉」で表現されることを意味している。日本語の「要る」「かかる」に見られたような「入る」のメトニミーや動きを表す「かかる」の格配列によって与格が選択されるようなことが、他の言語の「必要」の意味を表す動詞にも観察されるかどうかについては、また稿を改めて論じたいと思う。

#### ■アスペクト形式について

ここでアスペクトの形式について触れておく。「持つ」の分析の項でも少し触れたが、日本語の所有の動詞は純粋に状態性をもつものよりも「変化（移動＋存在）」の意味概念をもつ動詞から生まれたもののほうが多い。「必要」の意味概念をもつ動詞であっても、それは所有の概念とつながっており、やはり移動の意味概念をもつ「入る（いる）」「かかる」から生まれている。このような事情もあり、所有を表す自動詞文も他動詞文も「ル形」と「テイル形」でアスペクトの違いが生じないものが多い。もともと「関係動詞」というのも、そのようなアスペクトの対立がない動詞ということで注目された。

そして、より根本的には〈ある〉の意味概念をもつ動詞でさえも「ナル型」言語の特性から「いまここにyがあるのは、yがここに移動／発生したからだ」という因果関係が読み込まれ、「非存在→存在」の変化事象、つまり意味述語にBECOMEを持つ事象として捉える傾向が強い。その結果、「ある」「いる」「要る」などのごく一部の純粋な状態動詞を除いては、「ル形」と「テイル形」がアスペクトの対立を示さないということになる。

#### ■二者の位置関係を表す他動詞：基本ST型・発生ST型（「含む」）

次に二者の位置関係を表す他動詞を取り上げる。これらは二者の位置関係<sup>108</sup>を表す〈存

在) の概念が、場所の焦点化によって〈所有〉の概念に変換されたものである。二者の位置関係が〈所有〉の概念に変換されるには、二者が「包含関係」にあるか、そのような関係にあると認知的に把握される場合である。「含む」は「一方が他方の内部にある」という位置関係によって包含関係をもつ。

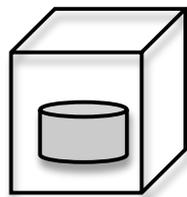
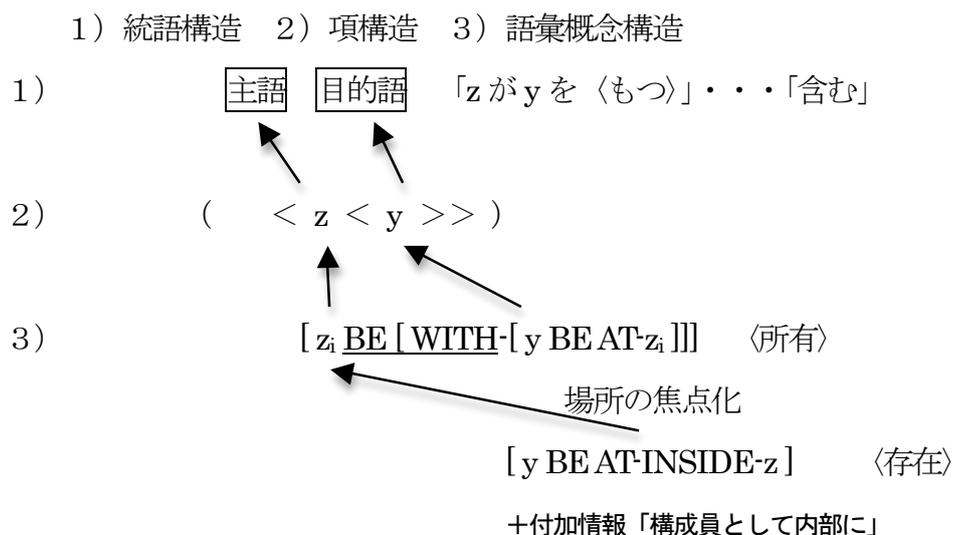


図 18 「含む」のイメージ

第3節では「含む」を基本S型に分類したが(3.3.4の(133))、それは(186)に示したような生成プロセスがあると考えられるからである。ここでは「含む」の意味のプロトタイプは、〈存在〉の意味概念に「一方が他方の内部に構成員として〈ある〉」という情報が付加しているとみる。例えば「ミネラルが(栄養の)構成員としてこの食材に〈ある〉」という場合は、下に示したプロセスを経て、「この食材はミネラルを含む」という所有主体の他動詞文が生成される。

(186) 「含む」基本S型



本論文では「含む」は下位事象のみをもつ所有主体の他動詞であるということを前提に第3節で理論的な枠組みを示したが、次に示した統語現象をみると、「含む」は単純に下位

事象のみをもつとは言い切れないことがわかる。そこでS型、T型の分類を見直し、一部修正する。「含む」には形態的に対応する他動詞「含める」がある。そして、「含む」は使役動作主を主語にした他動詞文も作る。しかし、形態上対応するものの、意味の上では一部のみが対応するだけである。現代語の主な用法では、(187)も(188)も「含む」に対応するのは使役態の「含ませる」であって、他動詞の「含める」ではない<sup>109</sup>。「含める」を使った(187b)(188b)の許容度は下がる。「含む」と「含める」が意味上でも対応するのは(189)の場合で、ここでは逆に「含ませる」が不自然になる。

- (187) a. スポンジが水をたっぷり含む。  
b. ?お母さんがスポンジに水をたっぷり含めた。  
c. お母さんがスポンジに水をたっぷり含ませた。

- (188) a. 田中さんがゼリーを1つ口に含んだ。  
b. ?友達が田中さんにゼリーを1つ口に含めた。  
c. 友達が田中さんにゼリーを1つ口に含ませた。

- (189) a. 料金は手数料を含む。  
b. (担当者が) 料金に手数料を含めて請求する。  
c. ? (担当者が) 料金に手数料を含ませて請求する。

このような「含む」「含める」「含ませる」の統語的な振る舞いはどのように説明できるだろうか。ここでは影山(1996)の「固まる」「固める」の分析を応用して、「含む」は使役変化の語彙概念構造をベースに持ち、反使役化によって外項と内項が同定され、下位事象のみが項構造へリンクし、所有主体の他動詞文が生成され则认为。影山(1996)は「地面が固まる」と「コンクリートが固まる」では「固まる」の語彙概念構造が異なると考えている。

- (190) 影山(1996:182 = (96))より  
a. 地面が固まる: y BECOME [y BE AT-SOLID]  
b. コンクリートが固まる: y CONTROL [y BECOME [y BE AT-SOLID]]

つまり、「地面が固まる」の「固まる」は状態変化だけの非対格構造をもつが、コンクリートのほうは、CONTROL という意味述語をもち、外項と内項が同じ ‘y’ で同定されている。この同定の意味は、コンクリートは内在する性質によって自分が自分自身に働きかけて変化を引き起こすということである。このように CONTROL が存在すると考えれば、「その上にもう 1 つ CONTROL を重層させて語彙的な他動詞を作ることはできない」(同書: 182-183) ため「コンクリートを固まらせる/\*固める」(同書: (97a)) のように統語的な使役構造を利用するしかないのである。一方、地面のほうは、CONTROL がないので、上位事象に使役主を付加することができるため「地面を(踏み) 固める/\*固まらせる」(同書: (97b)) のように他動詞を使って表現できるのである。

(190b) の「固まる」の語彙概念構造を「含む」にも当てはめてみる。「スポンジが水を含む」に対して「スポンジに水を含ませる/?含める」のように「含ませる」「含める」で許容に差が出るのは、「含む」が既に CONTROL を持ち、反使役化が起きているために下位事象しかもたない動詞が生まれると考えられる。この「含む」のように反使役化によって下位事象しかもたない場合と同じ振る舞いをするものを、S 型と T 型の両方の要素があるタイプということで、「ST 型」と呼び、(191) のように定義する。(※本論文では CONTROL の概念も合わせて、CAUSE を用いることにする。) (192) に ST 型の「含む」の例文を、(193) にその生成プロセスを示す。

#### (191) 所有主体の他動詞文「ST 型」の定義

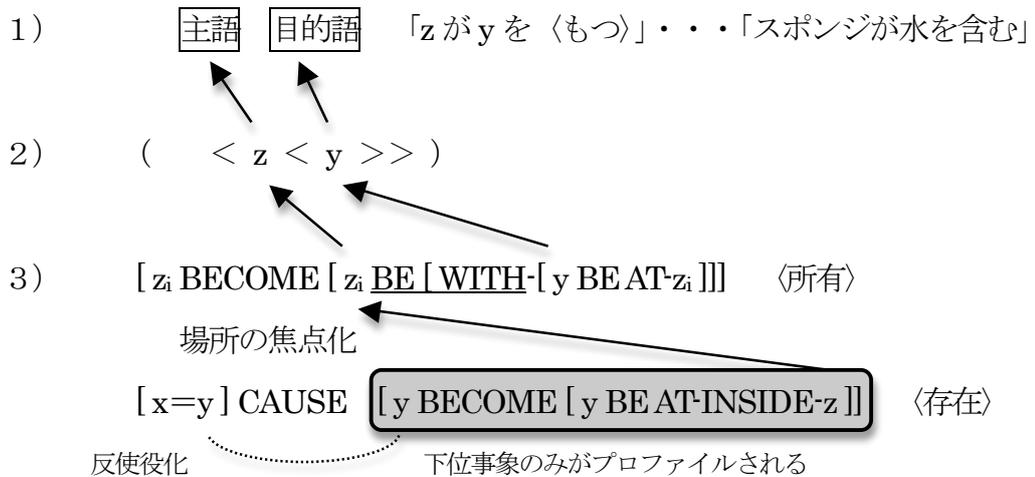
T 型のようにベースの語彙概念構造には、上位事象として「原因イベント」をもつが、外項と内項が同定されること(反使役化)によって、S 型のようにベースの語彙概念構造に下位事象しかもたない場合と同じ振る舞いをする。

#### (192) 基本 ST 型の「含む」

- a. アルコールを含む一切の飲料水の販売が禁止されている。
- b. 事故を起こした原子力発電所周辺では、高濃度の放射能を含む植物が確認された。

(193) 基本 ST 型 : 「含む」 (スポンジが水を含む)

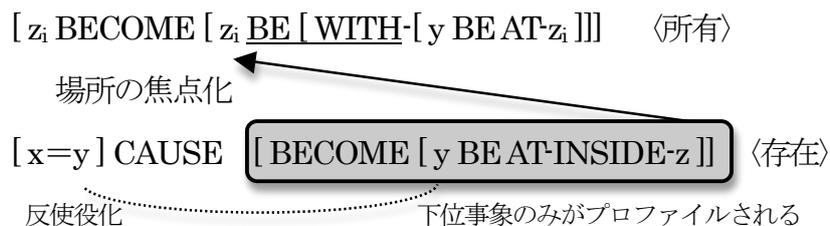
1) 統語構造 2) 項構造 3) 語彙概念構造



「水がその内在する性質によって移動して、スポンジの内部にある状態を自ら引き起こす」

(193) に示した「スポンジが水を含む (含んでいる)」は外部からモノが他者の内部に移動すると認められる場合だが、元々内部に存在すると認められる場合には、下位事象が「発生」の意味概念をもつ使役変化動詞の概念構造がベースになり、外項と内項が反使役化によって同定されると考えられる。この場合を「発生 ST 型」と呼ぶ。(193) - 3) に相当する部分だけが異なり、(194) のようになっている。発生は対象の (移動) 変化と異なり、BECOME の主語 (y) を持たないため (3.4.2 を参照)、項の同定は下位事象の BE の主語との間で起こる。基本 ST 型は二者が元々別々に存在していることが前提で、それが包含関係をもつようになったという把握の仕方だが、発生 ST 型は一方のところは他方が発生し、包含関係をもつようになったという把握の仕方である。ただし、この2つがいつも明確に区別されるわけではなく、把握の仕方としては連続していると考えられる。

(194) 発生 ST 型 : 「含む」 のベースの LCS (レモンがビタミン C を含む)



「ビタミン C がその内在する性質によって、レモンの内部に発生することを自ら引き起こす」

この発生 ST 型の「含む」においても、(187) の比較でみた「含める」と「含ませる」の許容度の差が観察されるので、「含む」が上位事象をもち、反使役化によって成立していることが確かめられる。

- (195) a. スポンジが水をたっぷり含む。 (=187a)  
b. ?お母さんがスポンジに水をたっぷり含めた。 (=187b)  
c. お母さんがスポンジに水をたっぷり含ませた。 (=187c)  
d. レモンがビタミンCを含む。  
e. ?品質改良によって、レモンにビタミンCを多量に含める。  
f. 品質改良によって、レモンにビタミンCを多量に含ませる。

(196) 発生 ST 型の「含む」

- a. 牙の根元から分泌される唾液は猛毒を含むことが知られている。  
b. 彼女は彼のとげを含む言葉に傷ついた。<sup>110</sup>

次に「含む」が外項（使役動作主）をとる場合について見ておく。「含む」は上に示したように、基本型であれ発生型であれ、反使役化によって外項と内項が同定されるため、項構造を経て統語構造へ投射されるのは下位事象のみである。しかし、語彙概念構造の拡張によって、外項（使役動作主）をとる場合がある。「田中さんがゼリーを1つ口に含んだ」 (=188a) がそれに当たる。上に示したように「含む」は使役動作主を付加する場合には「含ませる」という統語的な操作（使役態）を用いなければならないのに、なぜ「含む」の形態のまま使役動作主を取り付けることができるのだろうか。そして、同じように使役動作主をもつ「含める」とどう違うのかも説明されなければならない。その答えは「含む」「含める」の語彙概念構造に求めることができる。まず「含む」について見てみる。(197) にまとめたように「含む」は2種類の他動詞があり、所有主体の他動詞文（ST 型）から再帰的他動詞が拡張して生成されると考える。

(197) 「含む」（2種類の他動詞）

「含む」は元々使役変化動詞の語彙概念構造（※使役の意味述語 CAUSE）をもつが、外項と内項の同定の仕方でも2種類のタイプの他動詞が生成される。

① 所有主体の他動詞「含む」(基本ST型・発生ST型) :

外項 (x) と内項 (y) が同定され (反使役化によって) 下位事象のみがプロファイルされ、場所の焦点化を経て生成される。

② 再帰的他動詞「含む」:

①の基本ST型において外項 (x) と内項 (y) の同定が解除され、それに替わって外項 (x) と場所項 (=所有主体の項) (z) が同定される。この上位事象と下位事象での項の同定のために、形態上の変化が起こらない。

(197②) が「田中さんがゼリーを1つ口に含んだ」を生み出すのだが、重要なことは、「含む」が「持つ」「着る」「被る」と同様の再帰的な構造 (=語彙的に自分自身が移動先に指定されている構造) をもつようになることである。つまり、「持つ」が再帰的他動詞文 (「その箱を持ってちょうだい」など) と所有主体の他動詞文 (「彼は財産を持っている」など) とで形態が変わらないのと同じように、「含む」も同じ形態のまま再帰的他動詞として使えるということである。(4.2.3の構文分析の「単他動詞と複他動詞」のところでも再び取り上げる。) ただし、「含む」の再帰構造の下位事象には「口に」という意味が概念構造に組み込まれているため、意味は「自身の口に何かを移動させて、口の中にそれが存在する状態を引き起こす」という意味になる。(198b) にその生成プロセスを示す。

(198) 「含む」の外項と内項の同定、外項と場所の同定

a. 「x=y」の同定 (反使役化) で生成される「含む」

1) 主語 目的語 「zがyを〈もつ〉」・・・「スポンジが水を含む」

2) ( < z < y >> )

3) [z<sub>i</sub> BECOME [z<sub>i</sub> BE [WITH-[y BE AT-z<sub>i</sub>]]] (所有)

場所の焦点化

[x=y] CAUSE [y BECOME [y BE AT-INSIDE-z]]

水が

自ら

スポンジの内部に〈ある〉

状態を引き起こす





ここで重要なことは、この脱使役化によって生まれる「含む」は(198a)に示した反使役化によって生まれる「含む」とは異なることである。このような脱使役化によって「含む」が生まれていることの証拠として、この「含む」は人為的な操作が前提となっている状態にしか使えず、かつ他動詞化する際には「含ませる」ではなく「含める」が現れることが挙げられる。

(202) (=21 再掲)

- a. 料金は手数料を含む。
- b. (担当者が) 料金に手数料を含めて請求する。
- c. ? (担当者が) 料金に手数料を含ませて請求する。

そこで反使役化によって生まれる所有主体の他動詞文を「ST-a 型」と呼び(※ ST-a の‘a’は反使役化‘anti-causativization’の頭文字である)、脱使役化によって生まれる所有他動詞文を「ST-d 型」(※ ST-d の‘d’は脱使役化‘de-causativization’の頭文字である)と呼び、両者を区別しておく。(204)に基本 ST-d 型の「含む」の例を挙げておく。

(203) 所有主体の他動詞文「ST-a 型」と「ST-d 型」の定義

a. 「ST-a 型」 (=24)

T 型のようにベースの語彙概念構造には、上位事象として「原因イベント」をもつが、外項と内項が同定されること(反使役化)によって、S 型のようにベースの語彙概念構造に下位事象しかもたない場合と同じ振る舞いをする。

b. 「ST-d 型」

T 型のようにベースの語彙概念構造には、上位事象として「原因イベント」をもつが、外項が抑制されること(脱使役化)によって、S 型のようにベースの語彙概念構造に下位事象しかもたない場合と同じ振る舞いをする。

(204) a. レースには招待選手 8 名を含む、130 名のランナーが参加した。

b. 100 日未満といった場合には、100 日を含まない。

■二者の位置関係を表す他動詞：T型（「囲む」「覆う」）

「囲む」と「覆う」は包含関係ではないが、「一方が他方の内側にある」という位置関係が、認知的に包含関係にあるとみなされことによって、所有関係に捉え直されている。ただし、所有主体の他動詞文の生成プロセスは「含む」とは異なる。

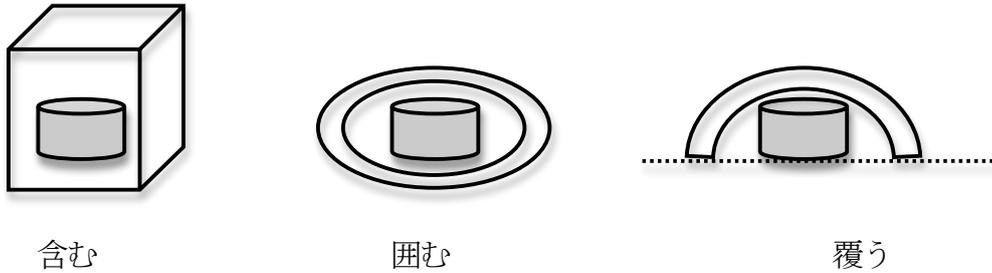


図 19 「含む」「囲む」「覆う」のイメージ

「囲む」と「覆う」が状態動詞として使われる場合、基本 T 型の生成プロセスを経て、所有主体の他動詞文になっていると考えられる。つまり、「(x が) z で y を囲む (覆う)」という使役変換事象に触発され、「原因イベント [= (x が) z で y を囲む (覆う) こと] が、y が z の内側にある状態を引き起こす」という概念構造がベースとなり、所有者の出来構造化と場所の焦点化を経て、所有主体の他動詞文が生成される。(T 型については、3.3.4 の (128) (129) を参照) この 2 つの他動詞文の生成プロセスを (205) に示す。

(205) 「囲む」「覆う」の所有主体の他動詞文 (基本 T 型)



ただし、他の所有を表す他動詞と異なり、(連体修飾では「ル形」が現れるが)文末では「テイル形」が使われる。これはおそらく、「囲む」「覆う」が「含む」と比べて対象の位置変化の意味が際立っているためだと考えられる。つまり、「含む」のように[y BE AT-z]だけがプロファイルされることがなく、BECOME が必ず付くからだと言える。また、対象への働きかけ(モノの移動)などが存在せず、元々二者が「囲む」「覆う」が表す位置関係にある状況であっても、「痕跡的認知」<sup>112)</sup>によって「テイル形」が使われるのだと考えられる。

- (206) a. おおぜいの記者が彼を囲んでマイクを向けていた。  
b. 2つの川が町を囲むように流れている。  
c. 鳶が壁一面を覆っていた。  
d. 空を覆っていた雨雲が少しずつ消えていった。

#### ■二者の位置関係を表す所有主体の他動詞文と受身文

所有主体の他動詞文は、下位事象のみをもつため、項構造では外項をもたないことは第3節で示した。したがって、内項を主語に格上げし、外項を格下げする受身文は成立しない(207)。ところが、上に紹介した二者の位置関係を表す「含む」「囲む」「覆う」は見かけ上、直接受身(まものの受身)を作ることができる(208)。これはどのように考えたらいいのだろうか。

- (207) a. \*あとを残さずにはがせるという特徴はこのテープに(よって)持たれる。  
b. \*集中力があの選手に(よって)欠かれる。  
c. \*準備にあと3日が(彼らによつて)要される。  
d. \*危険がその仕事に(よつて)伴われる。

- (208) a. このラーメンにはかなり塩分が含まれている。  
b. 高い山に囲まれた盆地にその村はあった。  
c. 辺り一面が霧に覆われてしまった。

仁田（1997）は語彙的統語論の中で、ヴォイスと動詞の下位類を論じている。受身を3つに分類し、3つの相互関係を次のように示している。この関係からすると、「まどもの受身」<sup>113</sup>を作る動詞は「第三者の受身」<sup>114</sup>を作る動詞でもあることになる。ところが、仁田自身が指摘しているように、「含む」はまどもの受身ができるのに、第三者の受身が作れない。仁田はこれを「例外」扱いにしている（同書：234）。

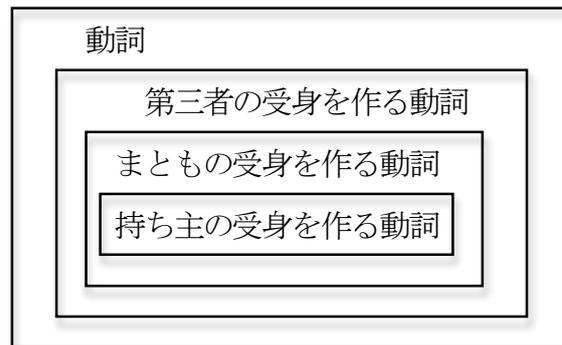


図 20 三種の受身を作る動詞どうしの相互関係（仁田 1997：234 より）

(209) 仁田（1997：234）より

- a. この鉱石にはたくさんの鉄分が含まれている。
- b. \*私はこの鉱石にたくさんの鉄分を含まれた。

本論文では、この「含む」は例外なのではなく、そもそも仁田（1997）が示した動詞の相互関係では捉えきれない動詞だと考える。つまり、「含む」はヲ格目的語をとるが、下位事象しかもたず、所有主体の他動詞文になるため、通常<sup>115</sup>の他動詞文とは同列には扱えないのである。ちなみに、「含む」が例外扱いとなり、「囲む」「覆う」が例外とはならないことは、「含む」がST型で、「囲む」と「覆う」がT型の所有主体の他動詞文を生成するという違いがあることの裏づけにもなっている。

もう1つ興味深い事実は、「含む」「囲む」「覆う」の受身文は二格名詞句を省略できないことである。もしこれが通常の直接受身であれば、格下げされた二格名詞句は(210)のように省略可能である。ところが、(211)の受身文はどれも示されるべき情報が欠けていて、文脈の助けなしには意味が取れない。

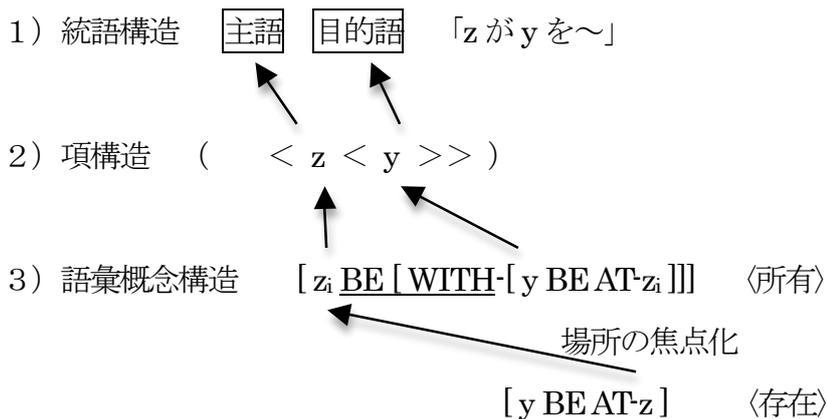
(210) a. 先日殺された山田さんの当日の足取りがわかった。

- b. 100年前に建てられたものが今でも使われている。(二格は付加詞である)  
 c. 弟は壊されたラジオを持って泣いていた。

- (211) a. ?含まれている毒を検査した。(キノコが毒を含んでいる)  
 b. \*囲まれている/囲まれた家の写真を撮った。(塀が家を囲んでいる)  
 c. \*覆われている/覆われたテーブルを片づけた。(布がテーブルを覆っている)

(211) は「何に」という情報が不足しており、不自然になる。それはそもそもこれらの動詞は“二者”の位置関係を表す他動詞文だからである。以上の比較でわかることは、「含む」「囲む」「覆う」は見かけ上は直接受身が成立するよう見えるが、これは通常の外項をもつ他動詞文の受身ではなく、下位事象しかもたない所有主体の他動詞文の受身だということである。(212) に示したように、所有主体の他動詞文は、( < z < y >> ) という項構造をもち、z も y も内項であるため、通常 he 動詞のような受身は成立しない。しかし、焦点化された z 項は内項でありがなら、際立ちを与えられ、「疑似的外項」の地位が与えられる (3.3.2 を参照)。この内項同士の際立ちの差が、ある条件のもとで受身化を許すと考える。その条件が「二者の位置関係」を表す他動詞文ということである。

(212) 〈所有主体の他動詞文〉の基本構造 (=119)



一度焦点化された場所の項 z を脱焦点化し、内項 y を焦点化することは「二者の位置関係」を表す他動詞文だからこそ意味があるのであって、通常 he 所有主体の他動詞文では、そのような把握の仕方は意味をなさないと考えられる。

■概念と記号の二者関係を表す他動詞（「表す」「示す」）

この小節の最後に「表す」「示す」を取り上げる。「表す」「示す」は外項（動作主）をとり、「xがyをzに～」または「xがyをzで～」という構文を作る。

- (213) a. 彼女を前にして、自分の気持ちを上手に言葉に表すことができなかった。  
 b. その時の考えをなんとか絵で表してみたいと思った。  
 c. 悪いと思っているなら、その気持ちを態度で示したらどうだ。

これらの動詞は、「抽象的な概念 (y) を記号 (z) (言葉だけでなく絵や音楽も含む) に込めて、この記号 (z) がその概念 (y) を所有する」という意味概念をもつと考えられる。つまり、この2つの動詞は、上で取り上げた「囲む」「覆う」と同様、基本T型の生成プロセスをもつと考えられる。この場合、「記号 (形式) = 容器」「意味=中身」というメタファーが働いていることになる<sup>115</sup>。

この2つの他動詞文の生成プロセスを (214) に示す。「(xが) zでyを表す (示す)」という使役変換事象に触発され、「原因イベント [= (xが) zでyを表す (示す) こと] が、yがzの内部にある状態を引き起こす」という概念構造がベースとなり、所有者の出来構造化と場所の焦点化を経て、所有主体の他動詞文が生成される。もちろん「囲む」「覆う」と同様、原因イベントが想起されず、元々そのような意味を持つという場合もある。

(214) 「表す」「示す」の所有主体の他動詞文 (基本T型)



- (215) a. この言葉はどんな意味を表しているのかわからない。  
 b. この絵は戦争で夫を亡くした妻の悲しみを表している。  
 c. その地図は宝の在りかを示していた。  
 d. 彼の顔は明らかに自信のなさを示していた。

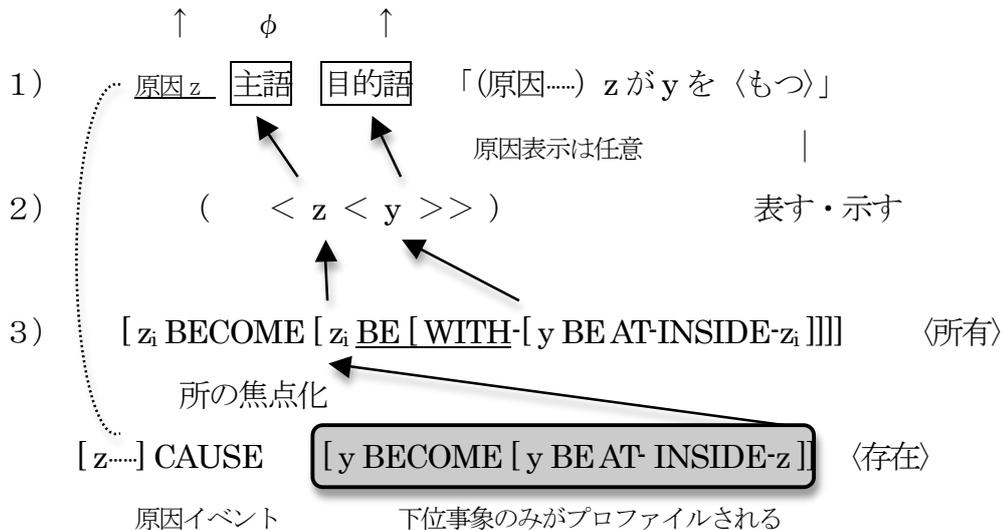
次に「表す」「示す」の受身文について見ておく。所有主体の他動詞文は下位事象のみで生成されるため外項を持たず、受身文は成立しないのだが、(216)のように「表す」「示す」は受身文が成立する。これをどのように説明したらいいだろうか。

- (216) a. 「進入禁止」はこのようなマークで／によって表される。  
 b. 誠意というものは態度で／によって示されるべきである。

すでに「含む」「囲む」「覆う」の受身文については上で分析したが、これとはやや性質を異にする。それは(216)の例文の下線文に示したように元の文で主語だった名詞句は受身文では、二格ではなく「～で」または「～によって」という手段(依拠するもの)を表す形式によって示される。そこで受身文の生成プロセスを(217)のように考える。

(217) 「表す」「示す」の受身文の生成

【受身文】「zによって yが 表される／示される」



受身文では、元々の所有主体の他動詞文で統語上に表示されていなかった原因イベント [y を z で表す (示す) こと] が顕在化し、「～で」「～によって」という形式で表示されていると考えられる。所有主体の他動詞文の主語は格下げされるが、同じ z 項のため実際には受身文の統語構造には現れない。

最後に (214) に示した「モノの移動+存在」の概念について補足しておく。この概念は3項述語に見られるものと共通している。(218) のような3項述語が2項述語になった場合に現れる所有主体の他動詞文については 4.2.3 で改めて分析する。

(218) a. 山田先生が太郎に英語を教えた。

→ 太郎が (山田先生に) 英語を教わった。

b. 従業員がトラックに大きな荷物を積んだ。

→ トラックが大きな荷物を積んでいる。

#### 4.1.2 「非対格他動詞」(影山 2002b) の分析(「出す」と「～出す」)

ここでは第2節の先行研究で取り上げた影山 (2002b) の「非対格他動詞」を取り上げる。まず、「非対格他動詞」と本論文の主張する「所有他動詞」とのつながりを確認し、影山 (2002b) では十分に説明されていなかった、所有の概念をもつ他動詞の形態について本論文の主張を示す。次に、非対格自動詞と非対格他動詞のペアとして「出る」と「出す」を取り上げる。「出す」の所有主体の他動詞文の例を挙げ、その生成プロセスを示すとともに、焦点化をうける「場所」の概念について考察する。最後に影山 (2002b) で取り上げられた複合動詞「～出す」の中から「はみ出す」と「はみ出る」を取り上げ、その意味の違いを本論文の理論によって分析し、その妥当性を検証する。

##### ■非対格他動詞という動詞クラスについて

影山 (2002b) では、語彙概念構造において2種類の自動詞、「非能格動詞」と「非対格動詞」に対応する他動詞を考えた場合に、前者は「働きかけの他動詞」が存在するが、後者に対応する他動詞の存在がこれまで考察されていなかったことに注目し、日本語・英語の双方にその「空白部分」を埋める他動詞が存在することを示した。これを影山は「非対格他動詞」と呼んだ。具体的には、発生・湧出の意味概念をもつ動詞 (219a) を中心に、状態を表す2項述語 (219b)、そして授受の意味概念をもち、3項述語と形態上の対応関

係がある2項述語(219c)を日本語の非対格他動詞として挙げている。

(219) 影山(2002b)が指摘した日本語の非対格他動詞

(※a.①～③の分類は引用者による)

- a. ① ミスを発生する、ミスを生じる、芽を吹く
- ② 汗をかく
- ③ 肉刺をつくる、芽を出す
- b. 危険を伴う
- c. 英語を教わる、貴重品を預かる

(219)に挙げた動詞(文)は本論文が所有主体の他動詞文として扱うものの一部である。(219a)は〈発生・消失〉の所有主体の他動詞文、(219b)は〈存在〉の所有主体の他動詞文、(219c)は〈単他動詞がヲ格をとる他動詞文〉にそれぞれ対応している(3.4.5を参照)。影山(2002b)は非対格他動詞の意味概念として〈所有〉が関係していることは指摘しているが、まず(219a①)のような「発生を表す動詞が同じ形態のまま自他交替を示す現象」(同書:130)に注目しており、形態の変化を伴う(219a③)(219c)を含めた非対格他動詞の全体像を示すに至っていないと考える。確かに影山が指摘するように、自他の交替で形態の対立が起こるのは、上位事象と下位事象にまたがる場合で、下位事象のみで自他交替する場合は形態の対立が起きないのが原則であると言える。これについては、3.3.4で次のような所有主体の他動詞文の動詞の形態に関する規則を示した。つまり、本論文でS型と呼ばれるものは、下位事象のみ(非対格自動詞)から直接生成されるため、固有の形態をもつか、自動詞と同じ形態をもつ。

(220) 〈所有主体の他動詞文〉の動詞の形態に関する規則 (=134)

- a. S型(=自動詞の概念構造から直接生成される)の場合は、固有の他動詞の形態をもつ。  
ただし、自動詞と同じ形態のまま使われるようになった動詞もある。  
(つまり自他同形の「両用動詞」は原則としてS型の場合に現れる。)
- b. T型(=使役変化の概念構造をベースに、下位事象がプロファイルされて生成される)の場合は、使役変化動詞と同じ形態をもつ。

しかし、影山自身も (219a③) の「芽を出す」と「芽が出る」のように形態の変化を伴う場合があることを認めているように、非対格他動詞は形態の変化を伴う場合もあると考えるべきである。なぜなら「出す」と「出る」の対応はたまたま例外的に存在するのではないからである。影山が注目した発生の意味概念をもつ動詞においてさえ、(219a③) の「肉刺をつくる」は「肉刺ができる」という（形態上の対応ではないが）対応する自動詞がある。また、「山田さんが現れる」という非対格（自）動詞に対して「山田さんが姿を現す」のような他動詞文もある。そして発生とは逆の視点で事態を捉えた「消失」の意味概念においても、「財布がなくなる」に対して「財布をなくす」という他動詞文が存在する。(219a②) の「汗をかく」にしても、類似の意味をもつ「汗を流す」のような非意図的な現象を表す他動詞が存在する。このように発生（または消失）の意味概念をもつ動詞においても、形態の対立を伴う非対格他動詞が存在することは明らかである。ところが、影山 (2002b) では、このような変化を伴う場合と伴わない場合の違いが何に起因するかについては言及していない。唯一 (219c) において脱使役化の概念操作において自他の形態上の対立が生まれることを主張しているのみである（同書：130-135）。

以上の事実を踏まえ、影山 (2002b) がその存在を主張した「非対格他動詞」という動詞クラスを支持するものの、状態を表す動詞から発生、そして変化を表す動詞まで、〈所有〉の意味概念をもつ他動詞文というより広い枠組みで捕らえ直すことが重要であると考え、また「非対格」という「対格を付与することができない」という意味を表す用語の使用を避け、本論文ではこれまでどおり〈所有主体の他動詞文〉、および〈所有他動詞〉という名称を使うことにする。

#### ■所有他動詞の形態について（S型とT型の2つをたてる意義）

本論文では、上の (220) に再掲したように所有主体の他動詞文にはS型とT型の2つがあると考え（※正確には4.1.1の「含む」の分析で示したST型の3つがある）、それぞれの形態がどのようにして決まるかを規定した。S型は所有主体の他動詞文のコアとなるタイプであり、形態論的に見た場合、なぜ自他両用動詞という動詞群が存在するのかを考える上で重要な意味をもつ（これについては4.2.1を参照）。そしてT型は通常の使役変化他動詞との接点をもつ点で重要である。なぜこのT型の存在を認める必要があるのか。これは日本語の「ナル型」言語の特徴と関連している。

所有主体の他動詞文の基本は〈存在〉の意味概念から〈所有〉の意味概念への変換である。つまり、コアの部分ではどこにも使役変化が入り込む余地はない。しかし、〈存在〉をどのように把握しているかを考えると、そこには次のような認知が働いていると考えられる。(221a) から生成される所有主体の他動詞文の数はそう多くない。(221b, c) の意味概念から生成されるもののほうが多い (3.4.1 の (140) も参照)。さらに、日本語では所有者の出来構造化 (3.4.2 を参照) によって、所有者においてイベントが〈発生〉〈存在〉するという捉え方もおこる (221d)。

- (221) a. (もともと) zにyが〈存在〉する ⇒ zがyを〈もつ〉  
 b. zにyが〈移動〉して、zにyが〈存在〉する ⇒ zがyを〈もつ〉  
 c. zにyが〈発生〉して、zにyが〈存在〉する ⇒ zがyを〈もつ〉  
 d. zに [yの変化イベント] が〈発生〉して、  
 zに [yの変化イベント] が〈存在〉する  
 ⇒ zが [yの変化イベント] を〈もつ〉

(221) からわかることは、日本語の所有主体の他動詞文はその多くが〈移動〉または〈発生〉に関連づけられた〈存在〉から生成されているということである。そしてこれらの〈移動〉〈発生〉〈変化イベント発生〉などは、非対格構造をもつものだけでなく、使役変化の構造をもつ事象も含むのである。つまり、所有主体の他動詞文が〈移動〉〈発生〉〈変化イベント発生〉に関連づけられた〈存在〉の意味概念から生成されるのであれば、当然の帰結として、非対格自動詞だけでなく、使役変化他動詞とも関連づけられるのである。

(対応の詳細は 3.3.4 図 9 を参照) したがって、形態の変化を伴わない非対格自動詞との対応のみに限定するのではなく、使役変化他動詞との対応も含める ( : 形態の変化を伴う場合も含める) ことが所有主体の他動詞文の全体を捉える上では重要であると言える。

#### ■ 「出す」の分析：発生1T型

影山 (2002b) で、形態の変化を伴って自他交替する非対格他動詞として挙げられた「出す」という動詞を取り上げて、3.4.2 に示した理論の枠組みにしたがって、本論文の発生T型の生成プロセスを示しておく。影山 (2002b) では発生でひと括りにされていたものを、本論文では、発生の意味概念を「発生物が母体に随伴するもの」と「発生物が母体から離

れるもの」とに分け、前者を「発生1」、後者を「発生2」と呼んだ。両者の区別は必ずしも明確に線引きができるわけではないが、所有主体の他動詞文を作る「出す」を(222)のように2つに分けておく。なお、「出す」の意味は国語辞典で「生じさせる。発生させる」(小学館『現代国語例解辞典』より)、「ある新しい現象を作って出現させる。ものや物事を発生させる」(大修館書店『明鏡国語辞典』より)、「今まで無かったものを新たに存在させる」(三省堂『新明解国語辞典』より)、「源から生ずる」(岩波書店『岩波国語辞典』より)のような意味をたてているものに相当する。

### (222) 所有他動詞としての「出す」

#### a. 発生1T型

(木が) 芽を出す、(人が) 熱を出す (=熱をもつ)、(人が) やる気を出す (=やる気をもつ)、(作業場から) 火を出す、(事故が) 死傷者を出す、(台風が甚大な) 被害を出す、(会社が多額の) 損失を出す、(人が) 新記録を出す、(作品が微妙な) 味わいを出す

#### b. 発生2T型

(人が) 鼻血を出す、(人が) 涙をこぼす、(この学校から) 政治家を出す、(この売り場から) 当せん者を出す

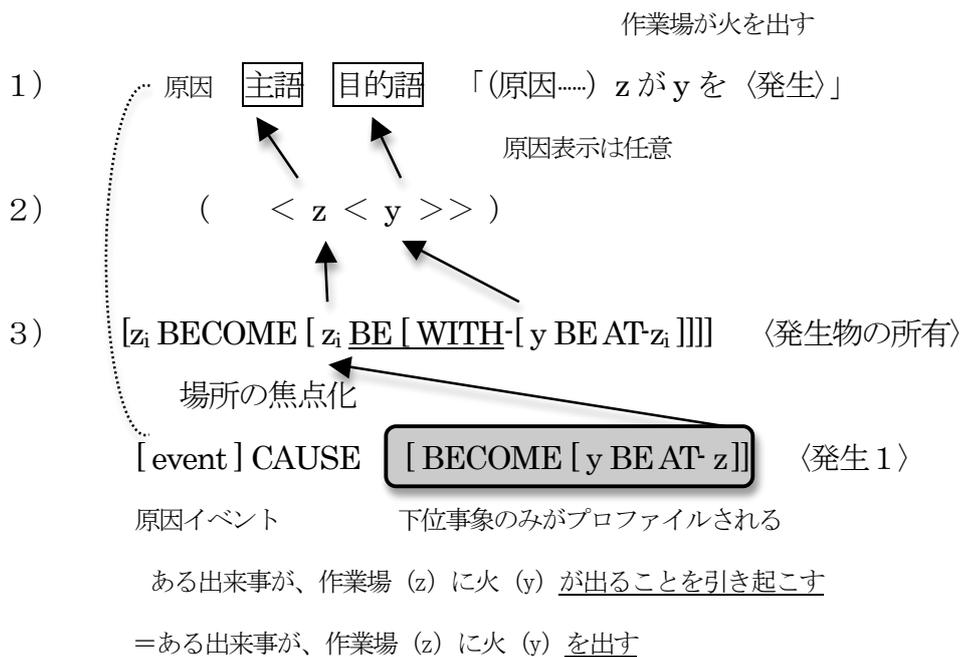
ここでの分析の目的は3つある。1つは第3節で示した理論を検証することである。もう1つは、この「出す」の所有主体の他動詞文を用いて、所有主体として把握されることはどういうことなのかを考察し、(222)に挙げた他動詞文にあるように「～が～を出す」ではなく「～から～を出す」が自然な場合がどのような場合なのかを明らかにする。そして3つ目として、(222b)に挙げた「政治家を出す」「当せん者を出す」がメトニミーを介して解釈されることと、焦点化される「場」が統語上に現れない場合があることを示す。

発生1であれ、発生2であれ、T型は次の特徴をもっている。(224)に発生1T型を、(225)に発生2T型の「出す」の生成プロセスを示す。

(223) T型について (=128)

下位事象のみの自動詞の語彙概念構造が、原因を表すイベントを上位事象に付加することによって使役変化の概念構造となる。これがベースとなり、その下位事象がプロファイルされ、「場所の焦点化」(または「所有者の出来構造化」と「場所の焦点化」)を受け、項構造を経て統語構造へ投射される。

(224) 「出す」(発生 1T型)



例えば「作業場に火災が発生した」という事象は、第一に「作業場に火が出た」という非対格構造の自動詞文として把握される。それに「原因イベント」が付加されると、「ある出来事が、作業場に火が出ることを引き起こす」という把握になる。これによって全体として「ある出来事が作業場に火を出す」という原因イベントを上位事象にした使役変化動詞の語彙概念構造が生まれる。これがベースとなり、下位事象のみがプロファイルされたものが(224) - 3)の下段である。ここから場所の焦点化という構造変換を経て、「作業場が火を出す」という所有主体の他動詞文が生成される。このように、ベースとなる語彙概念構造で「使役変化動詞」の形態をもったまま、プロファイルされた下位事象が構造変換され、使役変化動詞の形態をもつ所有主体の他動詞文が生まれるというのがT型の特徴である。

## ■焦点化される「場」について

それでは、なぜ「作業場が火を出した」とは別に「作業場から火を出した」という言い方ができるのだろうか。これは何が「焦点化されるべき場所」として捉えられるかの違いによるものである。「作業場から火を出した」の場合は、実は文には表れていない「その家」のような、作業場を包含する発生の「場」のセッティングがある。したがって、省略せずに述べるなら「その家が作業場から火を出した」となる。「～から」だけでなく「～に」も同様に考えることができる。日本語は事物よりも人を主語に据える文を好むので、「山田さんの頭がこぶを作った」よりは「山田さんは頭にこぶを作った」のほうがはるかに自然である。

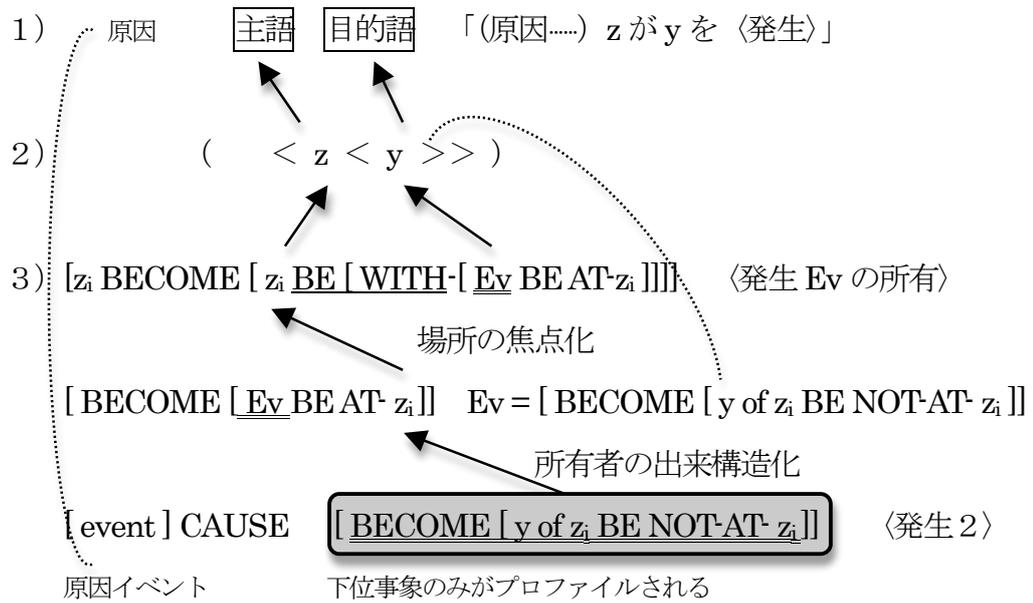
(222) の「出す」の用例は、概ね「～が生まれる」と言い換えができるものである。「中から外へ」という意味概念をもつ「出る」が「生まれる」と近い意味概念をもつことは容易に理解できる。「出る」のこのような意味に対応する形で存在する他動詞文が「出す」の所有主体の他動詞文だと言える。

## ■「出す」の分析：発生2T型

次に発生2T型の生成プロセスを見てみる。発生1T型との違いは、下位事象の概念構造の変換に「所有者の出来構造化」が加わっている点である。例えば「山田さんが鼻から出血した」という事象は、第一に「(山田さんの) 鼻血が (山田さんの) 外に出た」という非対格構造の自動詞文として把握される。それに[原因イベント]が付加されると、「ある出来事が、(山田さんの) 鼻血が (山田さんの) 外に出ることを引き起こす」という把握になる。これによって全体として「ある出来事が、(山田さんの) 鼻血を (山田さんの) 外に出す」という原因イベントを上位事象にした使役変化他動詞の語彙概念構造が生まれる。これがベースとなり、下位事象のみがプロファイルされたものが(225) - 3) の下段である。これが場所の出来構造化によって「山田さんにおいて、イベント [=鼻血を (山田さんの) 外に出すこと] が発生した」という概念に変換される。そして場所の焦点化という構造変換を経て、「山田さんが、イベント [=鼻血を (山田さんの) 外に出すこと] を〈もった〉」に変換され、最終的に「山田さんが鼻血を出した」という所有主体の他動詞文が生成される。

(225) 「出す」発生 2T 型

山田さんが鼻血を出す



ある出来事が、山田さんの鼻血 (y of z) が山田さん (y) の外に出ることを引き起こす  
 =ある出来事が、山田さんの鼻血 (y of z) を山田さん (y) の外に出す

■所有他動詞「出す」のメトニミー的解釈と焦点化される「場」について

3つ目の分析としてメトニミーの解釈を受ける場合を見ておく。(222b) に挙げた「この学校から政治家を出す」と「この売り場から1等の当せん者を出す」は、それぞれ「出る」と「なる」の2つ(または3つ)の出来事の意味を併せ持ち、メトニミーの解釈を受けると考えられる。

(226) a. この学校から政治家を出す。

- ①この学校からある学生が出る (=卒業する)。
- ②その学生が政治家になる。

b. この売り場から当せん者を出す。

- ①この売り場からあるクジが出る (=売り出される)
- ②そのクジが1等の当せん券になる。
- ③そのクジを買った人は1等の当せん者になる。

(226a) では、「出る」は卒業するの意味で使われているが、卒業する時点ではその学

生は政治家ではなく、政治家になるのはその後のことである。ところが、現時点で「政治家である」ことが認知的に際立っており、そこに焦点を当てると、時間的にメトニミー的な解釈が発生して、「この学校から【現時点で政治家になっている】学生が出た」という意味で「この学校から政治家が出る」という言い方が生まれる。このような時間的な隣接関係に基づくメトニミーは日常の表現にも豊富に存在する<sup>116</sup>。メトニミーの解釈を受ける「この学校から政治家が出る」が元になり、場所「この学校」が焦点化され、生成されたのが「この学校が政治家を出す」という所有主体の他動詞文である。ここで「この学校から政治家を出す」のように「学校から」が現れる理由は上で説明したとおりである。この場合は、焦点化される場所としてより広い概念をもつものが選択されているが、それが文に現れていないと考えられる。このより広い概念と言った場合、具体的に人なり組織なりが特定される場合もあるが、その命題が成立する「場」を要素としてもつ集合というような抽象的な場合もある。つまり、「政治家を出す」という命題が成立する「場 (=学校)」を要素としてもつ集合ということになる<sup>117</sup>。このような集合の概念になった場合には具体的な名称として焦点化される場を表示することが困難であり、実際に統語上に表示されることはないと考えられる。

(226b) も基本的には (226a) と同様に考えることができるが、実際に「出た」のは当せん券なのに、それを買った人 (当せん者) と表現する点で、メトニミーが二段階に働いていると考えられる。「この売り場は当せん者を出す」のように「売り場」を焦点化した所有主体の他動詞文が生成される一方で、(226a) と同様に「この売り場から当せん者を出す」と言うこともできる。これも、「当せん者を出す」という命題が成立する「場 (=売り場)」を要素としてもつ集合が (文には現れないが) 想定されていると考えられる。

#### ■複合動詞「～出る」と「～出す」の意味の違い

影山 (2002b) では、「出す」には非対格構造をもつ他動詞の用法があることを示した上で、「～出す」の複合動詞について論じている。そして「出す」を非対格他動詞であると認めれば、V1 が自動詞で V2 が他動詞となる (227) のような複合動詞も「他動性調和の原則」<sup>118</sup>に違反しないという考え方を示した。つまり、(227) の複合動詞は V1 も V2 も外項を欠く非対格動詞の組み合わせ (「非対格自動詞+非対格他動詞」の結合) になっているので、他動性調和の原則に即していると言える」と述べている (同書: 135-139)。その議論の中で、(227) に挙げたような前項が非対格自動詞となっている「～出る」と「～出す」

では意味がどう違うのかについて論じている箇所がある (228)。

(227) 影山 (2002b : 136 = (62)) より

湧き出す、噴き出す、にじみ出す、しみ出す、浮き出す、はみ出す

(228) 影山 (2002b : 136) より

ここで参考になるのが、「はみ出す=中からおされて、すきまから外へふくれ出る。定められた範囲から一部が外へ出る」という岩波書店『広辞苑』の記述である。たとえば、「岩の間から温泉が湧き出す」というのは、「湧く」の部分は温泉 (湯) そのものの動きを表しているが、他動詞「出す」の部分は岩からの押し出しを表現していると考えられる。

そしてこの「出す」がもつ「中から外へ押し出される」という意味が、(229)に見られる「～出る」と「～出す」の適否に影響を与えていると指摘している。この分析が妥当であることを、本論文の所有主体の他動詞文の生成プロセスの面から示す。

(229) 影山 (2002b : 136) より ※適否の判断 (\*?) は原文のまま

- a. 書く欄がいっぱいになって、外に { はみ出している / ?はみ出ている }
- b. 書く欄には十分スペースが残っているのに、欄外に { はみ出ている / ?\*はみ出している }

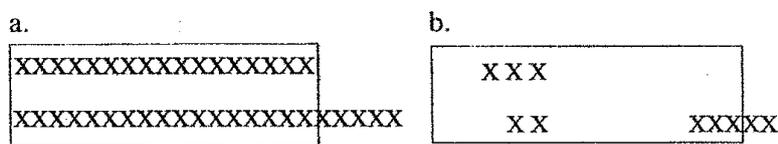


図 21 「はみ出る」と「はみ出す」(影山 2002b : 137 より)

(230) 「出す」発生 1T 型 (=224)



ここで重要なことは「出す」はT型だということである。T型はベースの語彙概念構造に「原因イベント」をもつことで、全体が使役変化動詞のLCSになっている。この原因イベントは焦点化されないため、項構造にはリンクせず、統語構造への表示も「発生型」の場合は任意である。(原因イベントと統語構造とのリンクについては3.3.6を参照)しかし、ベースにおいてこの原因イベントをもつと把握されている点が非対格の自動詞と異なる。後者は変化、発生の出来事をまるごとそのまま描写するのみだが、所有他動詞(※影山の「非対格他動詞」)では、下位事象のみがプロファイルされていながらも、原因イベントの存在が意識されている。このような違いが実際に「～出る」「～出す」が使われる文脈に現れると考えられる。(229a)では、「書く欄がいっぱいになって」という状況が明示されている。これが「原因イベント」と結びつき、「出す」の使用が自然になる。一方(229b)では「書く欄には十分スペースが残っているのに」という状況説明により、「原因イベント」が読み込まれず、「出す」を使うと許容性が落ちることになると言える。

#### 4.1.3 「自発変化他動詞構文」(杉岡 2002) の分析

ここでは第2節の先行研究で取り上げた「自発変化他動詞構文」(杉岡 2002)を所有主体の他動詞文の視点から分析し、その理論の妥当性を検証する。

##### ■ 「自発変化他動詞構文」とは

杉岡は主に形容詞由来の「～まる」と「～める」という動詞を取り上げ、(231b)のように「～める」から脱使役化(影山 1996)によって「～まる」となったものと、(232a)

のように反使役化（影山 1996）によって「～まる」となったものを区別し、後者を「自発変化」の「まる」動詞と呼んだ。「自発変化他動詞構文」というのは、この自発変化を表す「～まる」という自動詞文と同じ意味をもちながら他動詞構文になっているものを指し、「その変化をあたかも変化の対象が主体であるかのように他動詞で表現している」（同書：109）と述べている。そして、自発変化他動詞構文は（232b）のように、「全体・部分」の関係にある外項と内項をもつ使役変化動詞の概念構造を持つと考えている。

(231) 杉岡（2002：106 = (31)）

a. 形容詞+める：

[x/Event] CONTROL [y BECOME [y BE at -( [+Deg] State)]]

b. 形容詞+まる：

[x/Event] CONTROL [y BECOME [y BE at -( [+Deg] State)]]

↓

φ

(232) 杉岡（2002：109 = (39a, b)）

a. まる：[y CONTROL [y BECOME [y BE at-( [+Deg] State) ]]]

例：風の勢い（y）が強まる。

b. める：[x CONTROL [y BECOME [y BE at-( [+Deg] State) ]]]

x-y：全体一部分（x：変化の主体 y：xの属性、部分）

例：風（x）が勢い（y）を強める。

(231) では、「～まる」は使役動作主または原因となるイベントの存在が前提になっており、その動作主または原因のイベント（外項）を抑制すること（＝脱使役化）によって下位事象のみの自動詞「～まる」が生まれる。そして、このタイプの「まる」動詞は、アスペクトの点で限界性をもつので「テイル形」で結果状態を表す<sup>19</sup>。

(233) 脱使役化による「まる」動詞の例

a. 部屋が暖まる。 （←ストーブで部屋を暖める）

b. 車道が狭まる。 （←歩道を造って車道を狭める）

c. 出発時刻が早まる。 （←リーダーの判断で出発時刻を早めた）

(232a) の「まる」は、(231b) のような使役変化の他動詞から自動詞化したのではなく、元々CONTROL の意味述語をもっているが、外項と内項が同定されること（反使役化）によって、自動詞の意味構造をもつ動詞である。この反使役化は、自身に内在する性質によって自身に対して変化を引き起こすことを意味している<sup>120</sup>。（※影山（1996）では「内在的コントロール」と呼んでいる） この「まる」動詞は（231b）とは対照的に限界性をもたない解釈も可能で、「テイル形」で進行中の意味も結果状態の意味も表す。

- (234) a. 風の勢いが強まる。  
b. 列車のスピードが速まる。  
c. （太郎の）視力が弱まる。

#### ■自発変化他動詞構文「～が～を～める」の分析の問題点

「～まる」に二種類のタイプがあることを指摘している点は重要であるが、自発変化他動詞構文を、反使役化の枠組みで捉えることには問題があると考えられる。第2節で指摘した問題点を（235）にまとめておく。（具体的な内容は2.2.1の「杉岡（2002）」を参照）

- (235) a. 自発変化の「～める」の語彙概念構造を（232b）のように考えると、意図的な再帰構文と非意図的な再帰構文の区別ができない。  
b. 自発変化他動詞構文は非意図的な再帰構文になっているが、それと自発変化の自動詞文「～まる」との対応関係が正しく捉えられない。  
c. 再帰構造をもつ構文に（232b）のような概念構造を考えても、それが「～める」以外に適用できるわけではない。再帰構造をもち、非意図的な事象を表す「状態変化主体の他動詞文」（天野 1987b）は、主語がまったく事態の成立に主体的に関与していないため、（232b）の概念構造を設定することには無理がある。

（235）の問題点を突き詰めれば、意図的な再帰構文と非意図的な再帰構文を他動性のスケールからみた自他の交替という構図でしか捉えていないということである。つまり、変件事象に関する自他の交替を（反使役化によるものも含めて）「下位事象のみの自動詞」

対「上位事象+下位事象の使役他動詞」という構図でしか捉えていないことを意味する。このような捉え方では、当然他動詞構文はヲ格目的語をとるものの、主語は「経験者」のような非動作主になっているという分析で終わってしまう。

語彙概念構造は外界の事象をどのように把握して切り取るかを示している点で、外界とのインターフェースになっていると考えられる（影山 1996 : 49）。自発変化他動詞構文の語彙概念構造を (232b) のように考えるということは、認知主体が「風 (の勢い) が強まる」という自発変化の事象を「〈風〉という主体が、自身のコントロール下にある〈勢い〉に対して働きかけその程度を変える」と把握することを意味する。これは一見合理的な説明のように思えるが、実はこの事象の捉え方は、(232a) の自発変化動詞の反使役化の捉え方と同じなのである。なぜ同じ把握の仕方が、一方では自発変化の自動詞構文として表現され、もう一方では他動詞構文で表現されるのか。ここに (232) の分析の問題点の本質があると考えられる。

#### ■所有主体他動詞文としての「～が～を～める」の分析

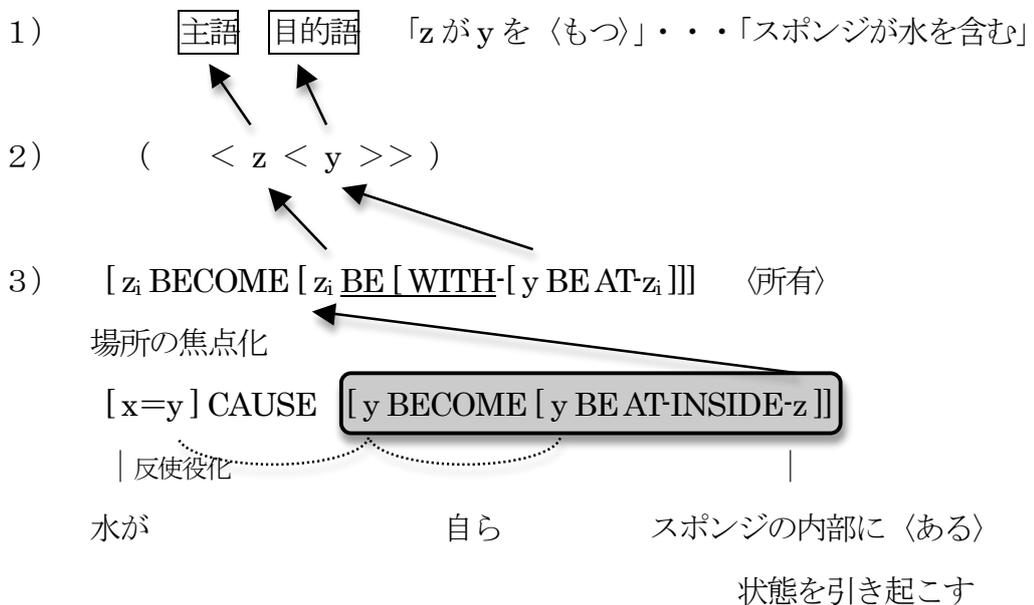
本論文では、(235) の問題を解決するために、自発変化他動詞構文を所有主体の他動詞文として分析する。これは、他動性のスケールに対応する他動詞だけでなく、下位事象のみで成立する他動詞、つまり下位事象の語彙概念構造において、所有主体の出来構造化と場所の焦点化という認知主体の事象の把握の仕方が構造変換を引き起こすことによって生成される他動詞があるという見方である。第3節の理論の枠組みで、所有主体の他動詞文には下位事象の語彙概念構造の変換によってのみ生成されるS型と使役変化動詞の語彙概念構造をベースにプロファイルされた下位事象の語彙概念構造の変換によって生成されるT型があることを示した。そして、限界性を持たない変件事象の所有主体の他動詞文は「変化過程型」(3.4.3を参照)と規定したので、「～める」はこれに分類されることになる。それで第3節では「～める」は変化過程T型の所有他動詞として分類しておいた。しかし、自発変化「～まる」は反使役化を起しているため、下位事象に非対格自動詞の「～まる」を想定している変化過程T型の生成プロセスとは異なるものになる。(変化過程T型の生成プロセスは、3.4.3の(157)を参照)

本論文では、すでに第4節の「含む」の分析において反使役化によって下位事象がプロファイルされて生成されるST-a型と脱使役化によって下位事象がプロファイルされて生成されるST-d型の2つがあることを示した(4.1.1の「含む」の分析を参照)。これを踏

まえて、反使役化が起きている自発変化の「～まる」に対応する他動詞「～める」を「変化過程 ST-a 型」として分析することにする。まず ST-a 型の「含む」の生成プロセスを(236)に再掲する。

ベースとなる (236) - 3) の語彙概念構造で反使役化が起こり、プロファイルされた下位事象が場所の焦点化を経て「含む」の所有主体の他動詞文が生成される。このように [原因イベント] を上位事象にもつ T 型の性質と、(反使役化によって結果的に) 下位事象のみから生成される S 型の両方の特徴を持ち合わせているということで、このようなタイプを ST 型と呼び、より詳しくは「反使役化」によるという意味で ST-a 型と呼ぶことにした。

(236) 基本 ST-a 型：「含む」 (=193)

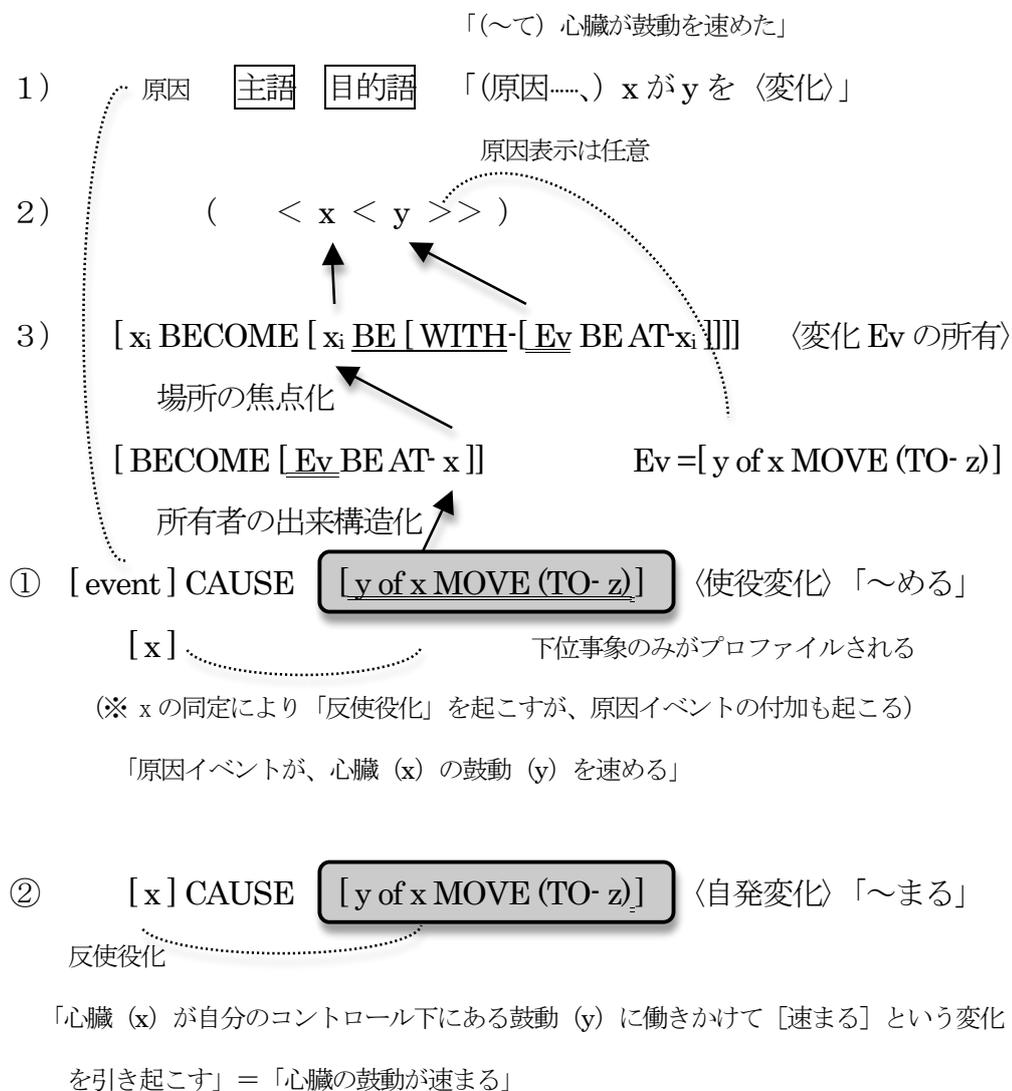


「含む」の場合は、(236) に示したように、反使役化によってベースの語彙概念構造のうち下位事象のみがプロファイルされる。プロファイルされる下位事象の自動詞の概念は〈ある〉で、この〈ある〉から〈もつ〉への構造変換によって「含む」という他動詞が生成される。この点、元々形態上の対応がある「～まる」と「～める」はやや事情が異なるが、基本的な考え方は同じである。「変化過程 ST-a 型」の「～める」の生成プロセスと「～まる」との関係性を(237)に示す。(※状態変化と位置変化の区別はここで問題ではないので、変化過程としておく)

(237) - 3) ②は自発変化を表す自動詞「～まる」の LCS で、外項 x が内項の x と同定され、反使役化がおきて下位事象のみがプロファイルされている。ここまでは LCS の

表示は異なるが、杉岡（2002）の分析と同じである。考え方が異なるのは①の「～める」のLCSである。

(237) 変化過程 ST-a 型：「～める」



(238) 動作主をとる使役変化動詞：「～める」

[ x ] CAUSE [ y MOVE (TO- z) ] 〈使役変化〉「～める」

動作主 「太郎 (x) が日程 (y) を [3日 (z) に] 早める」

4.1.1 の「含む」の分析で示しように、ST-a 型は本来、T 型に想定される [原因イベント] に相当する外項 [ x ] が内項と同定されるために、結果的に S 型と同じように、見かけ上は下位事象のみで概念構造の変換が起こるものである。ところが、「～める」の場合

は、ベースに示した自発変化の自動詞の LCS (=②) をもつのだが、それだけでなく、T 型の特徴である「原因イベント」を上位事象にもつと考えられる。それを示したのが①である。この場合、(238) に示した動作主をとる「～める」の使役変化動詞の概念構造に触発されていると考えられる。このように同じ ST-a 型といっても、「含む」よりはかなり T 型に近いタイプだと言える。

このように考える根拠を「含む」との対比で示す。「含む」は反使役化によって生まれた LCS をベースにもつため、「含む」状態を第三者が引き起こす場合は、(現代語においては主に)「含ませる」のように、統語的な使役を使わなければならない。

- (239) a. スポンジが水をたっぷり含む。  
b. ?お母さんがスポンジに水をたっぷり含めた。  
c. お母さんがスポンジに水をたっぷり含ませた。

(240) の「～まる」はすべて自発変化を表しており、それに使役動作主をつけて、「～まる」と「～まらせる」のどちらが使われるかをみってみる。自発変化の「～まる」は「含む」に見られたような制約が比較的緩いことがわかる。確かに反使役化の構造を持つとは言えるが、自他の交替についてはその統語的な制約がそれほど強くないと考えられる。また事象によっては「～ませる」より「～める」のほうが自然な場合もあるようである (240f)。

- (240) a. ショックを受けて、心臓の鼓動が速まった。  
b. 電気ショックを与えて、心臓の鼓動を {速まらせる/速める}  
c. 本土に上陸後、台風の勢力は弱まった。  
d. 現代の技術を使えば、人工的に台風の勢力を {弱まらせる/弱める} ことが可能だ。  
e. 治療を受けなかったため、死が早まった。  
f. 治療を拒否し、食事もとらなかったことが死を {?早ませた/早めた}。

このような事実から、所有他動詞の「～める」は (237①) に示したように、元々 CAUSE (※杉岡では CONTROL) をもっているのだが、それと合わせて語彙的に (: 統語構造ではなく、語彙概念構造の中に) 原因イベントを上位事象に設定することが可能だと考え

られる。そうすると、「心臓の鼓動が速まる」という自発変化としての把握に、原因イベントを付加した「原因イベントが、心臓の鼓動を速める」という語彙概念構造のベースが成立する。その後はプロファイルされた下位事象が所有者の出来構造化と場所の焦点化を経て「心臓が鼓動を早める」という所有主体の他動詞文が生成されたと考える。

#### ■所有主体の他動詞文としての分析の利点

杉岡 (2002) の分析との違いで重要なことは、使役変化動詞の語彙概念構造をベースにして、上位事象には「原因イベント」を設定しているが、他動詞構造をもつ要因はあくまでも「出来構造化」と「場所の焦点化」という下位事象の概念構造の変換によると考えることである。このように2つの面から動作主をもたない他動詞構文を分析することに本論文の意義がある。

このような分析の利点を先に上げた (235a~c) の問題点に即して示す。所有主体の他動詞文の生成プロセスでは、ベースの LCS の上位事象はあくまでも「原因イベント」であり、使役動作主ではない。したがって意図的な再帰構文のような使役動作主を外項にとる LCS とは区別される (235a の問題)。そして、他動詞構文をとる理由を下位事象の構造の転換と考えることによって、同じ事象を表す自動詞文との「平行性」が容易に理解できる (235b の問題)。つまり、下位事象の LCS において「所有者の出来構造化」「場所の焦点化」が起こるものが他動詞構文で、起こらないものが自動詞構文になるのである。また、原因イベントを上位事象を設定することで、通常の使用変化動詞との接点も理解できる。さらに、この原因イベントが統語上で表示が義務的になるか任意かという視点から分析すれば、「状態変化主体の他動詞文」(天野 1987b) の特異性 (: 使役変化動詞で表現されるにもかかわらず、実際の動作主ではなく、被害の受け手が主語になること) が説明できる (235c の問題)。最後の問題については、次の 4.1.4 で取り上げて分析する。

#### 4.1.4 「状態変化主体の他動詞文」(天野 1987b) の分析

ここでは第2節の先行研究で取り上げた「状態変化主体の他動詞文」(天野 1987b) を所有主体の他動詞文の視点から分析し、その理論の妥当性を検証する。また所有主体の他動詞文と「~は~が」構文の違いを語彙概念構造によって示す。

## ■「状態変化主体の他動詞文」とは

天野（1987b）は、述語が使役変化動詞でありながら、主語が使役動作主ではなく、「状態変化の主体」になっている（241）の文を「状態変化主体の他動詞文」と呼んだ。この他動詞文は（242）の条件のもとで、主語名詞が変化の「事態を所有する」という意味で解釈されると考え、「〈他動性〉を〈働きかけ〉だけでなく〈所有する〉という意味にまで広げ（る）」ことによって、「状態変化主体の他動詞文も、他動詞文の1つの用法として正しく位置づけることが出来る」（同書：左12）と述べている。

### （241）天野（1987b：左2）

- a. 私たちは、空襲で家財道具をみんな焼いてしまった。（＝天野（1））
- b. 勇二は教師に殴られて前歯を折った。（＝同（2））
- c. 気の毒にも、田中さんは昨日の台風で屋根を飛ばしたそうだ。（＝同（3））

### （242）天野（1987b：左5）

条件1：状態変化主体の他動詞文を作る他動詞は、主体の動きと客体の変化の2つの意味を含む他動詞である。

条件2：状態変化主体の他動詞文のガ格名詞とヲ格名詞は、全体部分の関係にある。

またその後、児玉（1989）が「状態変化主体の他動詞文」が「事態を所有する」という意味で解釈されるための3つ目の条件として（243）が必要であることを示した。

### （243）児玉（1989：75）

3つには、ガ格名詞句が、動きの引き起こし手でなく客体変化後の事態を所有するというほどの意味をもつものであるために、主体の「動き」に対する自立性を喪失させるべく、主体以外に、主体からなんらの制御も受けない独自の動きの現象が、述語事態に直接の引き起こし手として（明示あるいは暗示されて）存在していること。

## ■「状態変化主体の他動詞文」の分析の問題点

天野（1987b）の分析の問題点は、先に論じた「自発変化他動詞構文」（杉岡 2002）の問題点と本質は同じである。つまり、自動詞的になった他動詞文をあくまでも他動性のスケール上に位置づけるということである。「事態を所有する」という意味をもつという分析は妥当なものだが、それを他動性のスケール上のみで処理するだけでは、この「所有」という意味概念を正しく捉えられないのである。

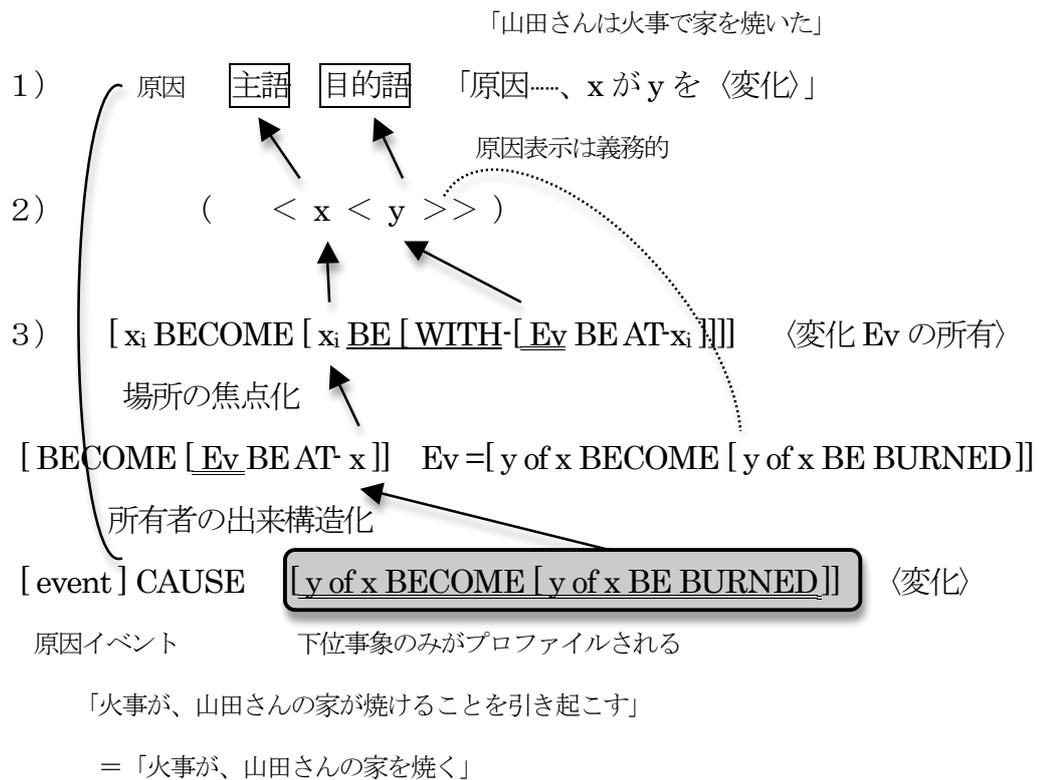
このことは児玉（1989）が指摘した3つ目の条件の意味を考えることで一層明確になる。主語とヲ格目的語が再帰的な関係をもつ構文において、この「状態変化主体の他動詞文」は実際の原因を主語にすることなく、使役変化動詞を述語とした他動詞文が成立する点で、特異な構文だという見方がされてきた。それは他動性のスケール上のみで処理しようと試みるからであり、別の視点で「所有」の意味概念を捉えれば、「状態変化主体の他動詞文」は決して特異な存在ではなく、所有主体の他動詞文の1つのタイプに過ぎないことが浮き彫りになるというのが本論文の主張である。

## ■所有主体の他動詞文としての「山田さんは火事で家を焼いた」の分析

まず「状態変化主体の他動詞文」が所有主体の他動詞文のどの型になるのかを、第3節で示した理論の枠組みに基づいて確認しておく。表している事象は限界性をもつ変化事象なので、「変化到達型」に分類される（3.4.3を参照）。また「焼ける」ではなく「焼く」という使役変化動詞と同じ形態の動詞を用いるのでT型となる。第3節では「（スキーで転んで）骨を折る」を例にして生成プロセスを示したが（154）、これと同じプロセスをもつと考えられる。

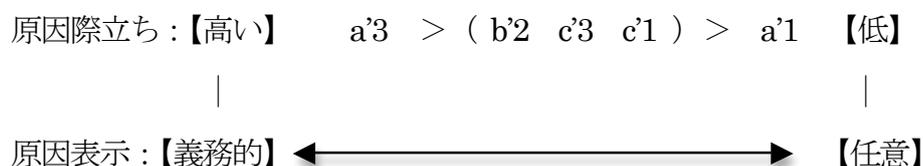
例えば「山田さんの家に火事があった」という事象の場合、まず「山田さんの家が焼ける」という事象の捉え方がある。また、それとは別に因果関係がベースに読み込まれ「火事が起きたことが、山田さんの家を焼いた」という事態の把握の仕方がある。これが(244)-3) 下段の語彙概念構造である。全体として「焼く」の語彙概念構造をベースにして、プロフィールされた下位事象が所有者の出来構造化（「山田さんにおいて、山田さんの家を焼くというEvが発生する」という把握）と場所の焦点化（「山田さんは、山田さんの家を焼くというEvの発生を所有する」という把握）を経て「焼く」の所有主体の他動詞文（「山田さんは家を焼く」）が生成されるのである。

(244) 変化到達型 (T型) : 「山田さんは火事で家を焼いた」



ここで天野 (1987b) の分析と大きな違いは、「事態を所有する」という意味概念は使役変化動詞の LCS がもつのではなく、プロフィールされた下位事象の LCS が事象の認知的な把握が反映された構造変換によって生成される意味概念だという点である。そして、重要なことはベースにあった [原因イベント] が統語構造へ反映されることである。理論の枠組み (3.3.6) で示したように、この原因イベントはその際立ちに応じて統語構造での表示が任意になるか義務的になるかが決まる。これは所有主体の他動詞文が、使役変化動詞でありながら「所有」の意味で解釈されるための条件につながる。本論文では、この原因の際立ちと原因の表示の義務を (245) のように考えた。a'3 はここで扱っている「変化到達型」で、a'1 は「存在」または「移動+存在」を下位事象にもつ「基本型」の所有主体の他動詞文のことである。

(245) 「原因」の際立ちの高低と原因イベントの統語構造上での表示義務 (=137)



(245) に示したように、「状態変化主体の他動詞文」で原因の表示が（暗示にしる明示にしる）義務的になるのは、原因の際立ちが高いことによるもので、それは所有主体の他動詞文の枠組みの中で1つの型として位置づけられる。原因表示の義務の段階性は「変化到達型」で義務的となるが、中でも「状態変化主体の他動詞文」は、主語名詞が事態の成立に主体的にまったく関与していない点でもっとも原因の際立ちが高いタイプであり、原因の表示なしには使役変化動詞の他動詞文が「事態の所有」という意味では解釈されないことになることと分析できる。通常の「変化到達型」は主語名詞とヲ格目的語の再帰的な関係から、働きかけの対象が明示されていない場合、語用論的に「事態の所有」の解釈が比較的されやすいが、それでも原因の表示なしには通常の使役変化の解釈を完全には排除できないと考えられる。逆に所有動詞の解釈を完全に排除し、使役変化動詞の解釈を得るには、働きかけの対象を明示する必要がある。ただし、再帰構造になっている場合は語用論的に事態所有の意味が優先されるため、意図的な意味を明示するために「わざと」のような副詞が必要となる。

(246) 「太郎は前歯を折った」の解釈における対象と原因イベントの表示

① 「折る」が使役変化動詞の解釈を受ける場合

「太郎は、意図的に前歯を折った」の意味

※②の解釈を排除するためには、働きかけの対象を表示する。

自身への働きかけの場合には「わざと」のような副詞が必要。

a. 太郎は、二郎の前歯を折った。

b. 太郎は、自分の前歯をわざと折った。

② 「折る」が所有他動詞の解釈を受ける場合（「変化到達型」の所有動詞）

「太郎は、自分の前歯を折るという事態を所有した」の意味

※①の解釈を排除するためには、原因イベントを表示する。

a. 太郎は、転んで前歯を折った。

b. 太郎は、殴られて前歯を折った。（＝状態変化主体の他動詞文）

このように所有主体の他動詞文の生成プロセスを考えることは、決して「他動性の低下」によって状態変化主体が「事態を所有する」という意味になったことを否定するものでは

ない。この T 型の生成プロセスは、[原因イベント] を上位事象に付加するという認知的な把握において、「他動性の低下」の側面と接点をもっている。つまり、使役変化の事象は他動性の低下と同時に、下位事象において概念構造の変換が起きているという見方をすることが重要であり、それが所有主体の他動詞文を生成するプロセスなのである。

#### ■所有主体の他動詞文としての分析の利点

3つの条件を所有主体の他動詞文の生成プロセスの点から捉え直してみる。先にあげた「状態変化主体の他動詞文」の成立条件は所有主体の他動詞文のプロセスにおいてこそ、その意味が十分に理解できると考える。

まず条件1の「主体の動きと客体の変化の2つの意味を含む他動詞である」は、上位事象と下位事象をもつ動詞、つまり使役変化動詞でなければならないということである。この条件の本質は、所有主体の他動詞文の生成プロセスから見れば、S型もT型も概念構造の変化が起こる下位事象をもつことが「事態を所有する」という意味の他動詞文が生まれる上で決定的に重要であり、さらにT型においては、原因イベントが上位事象に付加されるという点において、上位事象と下位事象をもつことが条件になるといえる。

この下位事象をもつことが所有主体の他動詞文の基本であるという見方は、事態成立をキャンセルできるかどうかとも関係している。稲村(1995)では「状態変化主体の他動詞文」はいわゆる「キャンセル文」が成立しないことを指摘しているが、これは上位事象がプロファイルされていないことを意味している(2.2.1「稲村(1995)」を参照)。所有主体の他動詞文は原因イベントを上位事象にもつLCSがベースとなるが、プロファイルされているのは下位事象だけなので、このようなキャンセル文が成立しないことも説明できる。

#### (247) 稲村(1995: 62)

- a. 芋を焼いたが、焼けなかった。
- b. \*宮地さんは、火事の焰で背中を焼いた。しかし、火勢が弱くて焼けなかった。

次に条件2の「主語名詞とヲ格目的語が全体と部分の関係にある」についてである。所有関係をもつ名詞句「xのy」があることが「所有者の出来構造化」という認知的な把握を可能にするのであり、この出来構造化を前提にした「場所の焦点化」によって所有主体の他動詞文が生成されるのである。したがって「全体と部分」の関係をもつことが所有主

体の他動詞文の生成には不可欠である。

最後に条件3の原因の表示の義務であるが、これについてはT型の生成プロセスにおいてはベースとなる概念構造の上位事象に原因イベントがあり、これが最終的に際立ちの高さによって統語構造への表示が義務的になるという考え方に基づいている。

このように「所有主体の他動詞文」として分析することによって、「状態変化主体の他動詞文」が決して特異な他動詞文ではなく、したがって特別な統語上の規則を立てる必要もなく、所有主体の他動詞文の1つの型として位置づけられることになる。

#### ■プロセスの焦点化と結果の焦点化との違い

ここで「自発変化他動詞構文」(杉岡 2002)と「状態変化の他動詞文」の両方が所有主体の他動詞文の枠組みの中でその生成プロセスが説明できることを確認しておく。杉岡 (2002) では、「自発変化他動詞構文」の意味特徴を「プロセスの焦点化」と結論付けている(同書: 111)。そして、再帰構造をもつという点で「状態変化主体の他動詞文」との共通点を指摘しながらも、これは「結果の焦点化」で「事態の生起に焦点がある」点で異なると述べている(同書: 113 脚注)。(具体的な内容は 2.2.1 「杉岡 (2002)」を参照)

所有主体の他動詞文の枠組みで考えれば、両者の違いは下位事象に限界性をもつ「変化到達事象」の LCS をもつのか、それとも限界性をもたない「変化過程事象」の LCS をもつかの違いにすぎない。それぞれの変化イベント (Ev) を所有するとみるのが、所有主体の他動詞文の考え方なので、「変化到達 Ev」を所有する場合は「結果の焦点化」となり、「変化過程 Ev」を所有する場合は「プロセス焦点化」となると説明できる。

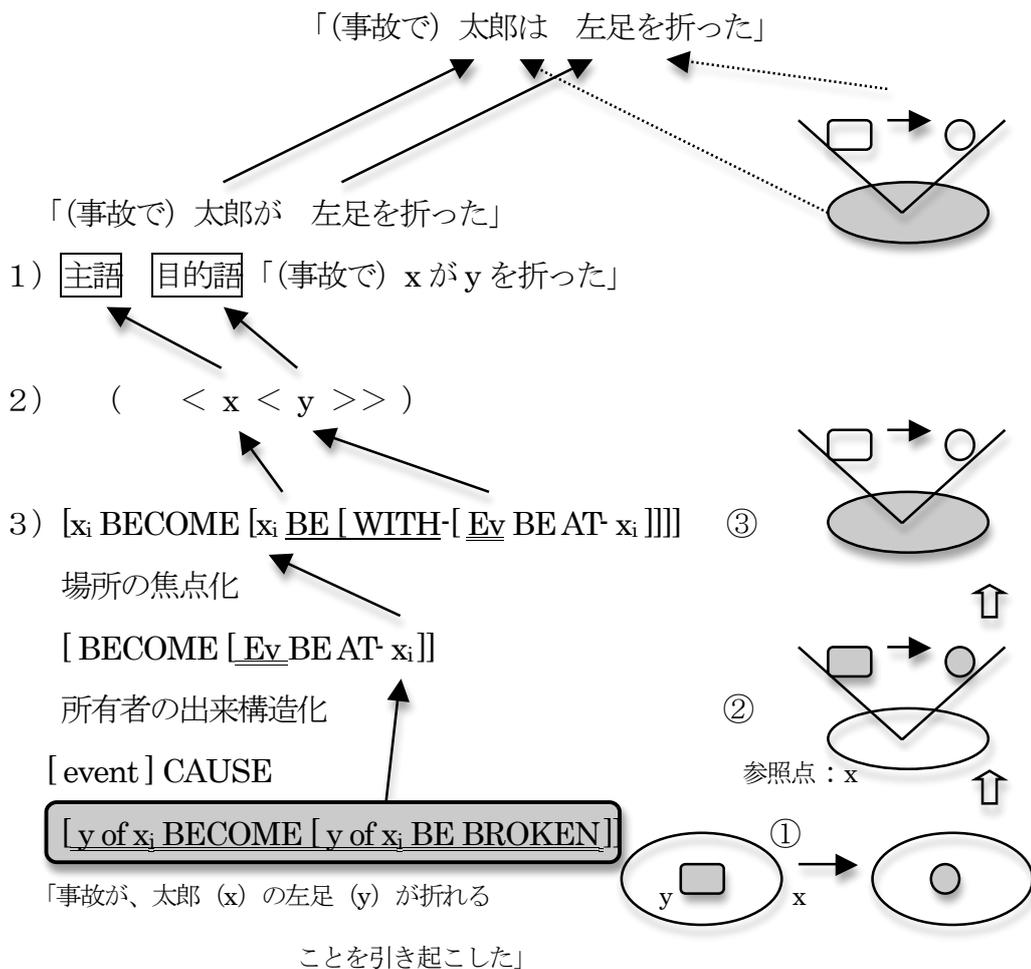
#### ■所有者の出来構造化と二重主語構文

分析の最後に、二重主語構文との違いについて考察しておく。所有者の出来構造化を経て生成される所有主体の他動詞文は、二重主語構文(「～は～が」構文)と接点をもつ。先行研究においても(248)のような文の意味の違いが議論されているが(天野 1987b、児玉 1989 など)、意味に違いがあるのなら、それはどのような要因がかかわっているのだろうか。先行研究ではそれが十分に説明されているとは言えない。

- (248) a. 山田さんは、台風で家の屋根が飛んだ。  
 b. 山田さんは、台風で家の屋根を飛ばした。

本論文では「所有者の出来構造化」を参照点構造の認知プロセスと結び付けて考えた(3.4.2を参照)。所有者が事態の発生する「場」と把握されることは、所有者を参照点にしてその「場」におこる事態をターゲットにした参照点構造になっているという見方である。この参照点構造は、日本語の二重主語構文(「～は～が」構文を指す。以下「ハガ構文」と略す)にも適用できる(Langacker 1993: 25)。そうすると、所有主体の他動詞文とハガ構文は所有者を参照点に据えるという点で一致していると言える。違いは、前者はその後場所の焦点化がおこるのに対して、後者はそのまま主題文として表示されることである。両者の生成プロセスを参照点構造とあわせて(249)と(250)に示す。

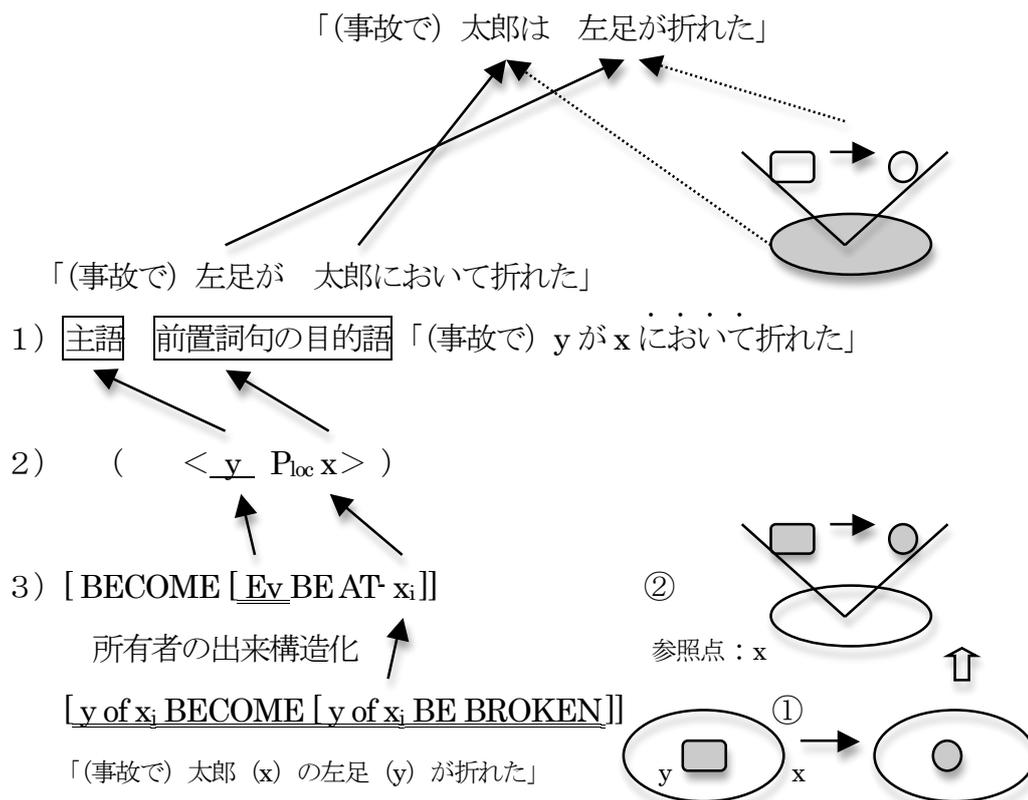
(249) 所有主体の他動詞文 (T型) の生成プロセスと事態の認知的把握



(249①) はプロファイルされた LCS に対応する変理事象の把握を示したものである。「x の y」は一体となって、それが変化すると捉えられる。(■は変化前の対象の状態を、●は変化後の対象の状態を示す) (249②) は「所有者の出来構造化」を受けた LCS に対応する事態の把握を示したものである。「x において、y の変化がおこる」という捉え方である。ここで x を参照点にした参照点構造が成立していると考えられる。(参照点構造との対応の詳細は 3.4.2 図 13 を参照) (249③) は出来の「場」として把握されていた x が焦点化されていることを示している。

(250) のハガ構文は、(249) の所有主体の他動詞文と①と②については同じだが、③がない。つまり、ベースとなる LCS が [原因イベント] を上位事象にもち、かつ「場所の焦点化」を起こしているのが所有主体の他動詞文 (T 型) だと言える。

(250) ハガ構文の生成プロセスと事態の認知的把握



このような両者の違いが意味の違いにどう影響を与えるだろうか。ハガ構文は「その人において何が起こったのか」を述べる文で、所有主体の他動詞文は「その人がどんな事態を所有したのか」を述べる文である。本論文では、所有主体の他動詞文の T 型がそのベースの LCS に [原因イベント] をもつ点で、使役変化 (他) 動詞と接点をもつという考え

に立つ。そこで、主語名詞の意味役割の観点から次のような段階を設定し、両者の構文を位置づけてみたい。

(251) 主語の意味役割からみた構文の位置づけ

主語の意味役割	構文
a. 受影者 (被害の受け手)	受身文 (第三者の受身)
b. 所有者 (事態の所有者)	所有主体の他動詞文
c. ※主題 : 所有者 (出来の場)	※ハガ構文
d. 対象 (変化の対象)	非対格動詞の自動詞文

(251) の主語の意味役割 (※ハガ構文については主題の意味役割) と構文の対応は、「受影度」という視点から捉えれば、a が最も高く、d が中立である。b と c はその中間に位置しているが、相対的には b の「所有主体の他動詞文」はやや「被害の受け手」の意味が読み込まれやすく、c の「ハガ構文」はやや中立に近いと言えるだろう。

- (252) a. 太郎は、(なぐられて) 額を切られた。 (受身文)  
 b. 太郎は、なぐられて額を切った。 (所有主体の他動詞文)  
 c. 太郎は、なぐられて額が切れた。 (ハガ構文)  
 d. なぐられて太郎の額が切れた。 (非対格の自動詞文)

ここで重要なことは、a は統語操作 (受身化) によって、その受影者の役割が確定するが、b は幅があるということである。[原因イベント] とのつながりから「使役変化」が強く意識されれば a に近づき、それがほとんど意識されなければ、中立的な解釈に近づく。つまり、原因イベントの際立ちが高い「変化到達型」(※「状態変化主体の他動詞文」はここに含まれる) は、受影の意味がかなり強く出るが、これはすべての所有主体の他動詞文の性質ではない。(245) に示したように、原因の際立ちがもっとも低い a'1 (=基本型) はもちろん、中間に位置する b'2 (=発生型)、c'3、c'1 (=変化過程型) も、原因イベントの表示は任意で、中立的な意味の解釈が普通で、被害の受け手の解釈を受けるのは、原因イベントが表示されて語用論的にそのように解釈される場合である (253c)。

- (253) a. 次郎は、協調性を欠く。(基本 T 型)  
 b. 次郎は、額から血を出していた。(発生 T 型)  
 c. 次郎は、なぐられて頭にこぶを作った。(発生 T 型)  
 d. 次郎は、運動不足がたたって、体重を増やした。(変化過程 T 型)

このように「所有」の意味概念をもつ他動詞文の意味解釈は文脈によって受影から中立まで幅があるが、確実なことはその「事態を所有した」ということである。なお、受影が必ずしも被害に限らないことは、4.3.1の「介在性の表現」の分析で論じる。

## 4.2 B 自動詞の形態をもつ他動詞文

### 4.2.1 両用動詞の位置づけ

ここで「両用動詞」として扱うのは、第2節の先行研究で、森田(1990 ※1994 所収: 239-240)の「自他両文型が同じ表現的意味のグループ」で、後に森田(2000)が格支配の観点から(「自他同形動詞」と区別して)「自他両用動詞」と呼んだものにほぼ対応する。単に自動詞の用法と他動詞の用法の構文で同じ形態の動詞が使われるだけでなく、自他動詞の交替における形態上の対応を認定するのと同様に(奥津1967など)、自動詞と他動詞で主客が交替するものを両用動詞として扱う<sup>121</sup>。

#### ■両用動詞と所有主体の他動詞文のつながり

第2節では森田(1990)の「自他両文型が同じ表現的意味のグループ」を次のように分類した。(※ここでは例文に連番を振ってある)

#### (254) 両用動詞の意味による分類

- ① 所有(2つの名詞の関係)を表す
  - (1) (仕事が) 危険を伴う / (仕事に) 危険が伴う
- ② 発生・消失を表す
  - (2) (人が) 迷いを去る / (人から) 迷いが去る
  - (3) (噴水が) 水を噴き上げる / (噴水から) 水が噴き上げる
  - (4) (金属板が) 緑青を噴く / (金属板 [の表面] に) 緑青が噴く
  - (5) (火山が) 火を噴き出す / (火山から) 火が噴き出す

- (6) (木が) 実を結ぶ／(木に) 実が結ぶ
- (7) (人が) 眠気を催す／(人に) 眠気が催す
- ③ 非意図的で、再帰的な事象を表す
  - (8) (人が [地面に]) 手を着く／([地面に] 人の) 手が着く
  - (9) (人が) 目を閉じる／(人の) 目が閉じる
  - (10) (花が) 蕾を開く／(花の) 蕾が開く
  - (11) (潮が) 渦を巻く／(潮の) 渦が巻く
  - (12) (川が) 水を増す／(川の) 水が増す
- ④ 授受を表す
  - (13) 「(人が) 子供を授かる／(人に) 子供が授かる

分析に進む前に、(254) の例文の中で他と事情が異なるものを複数あるので、それを確認しておく。まず(13)の「～ガ／ヲ授かる」は「～ヲ授ける」という形態的に対応する他動詞が存在し、物の授受の場合は3項述語の「～ガ～ニ～ヲ授ける」に対して2項述語の「～ガ～ヲ授かる」が対応している。これは「教える・教わる」「預ける・預かる」と同じであり、本論文の分類ではB-3 (単他動詞がヲ格をとる他動詞文) に該当する。ただ、この「授かる」が特殊なのは、「子供を授かる」という意味では「子供が授かる」のようにガ格も使われる点である。この意味では通常「授ける」という他動詞は使われないので、この意味の対応のみ考えれば、「授かる」は両用動詞だと言える。しかし、ここでは「ヲ授ける」対「ヲ授かる」が基本で、「ガ授かる」はその「ヲ授かる」から派生した自動詞の用法とみて、両用動詞としては扱わないことにする。これについては 4.2.3 で改めて取り上げる。

(8)の「着く」は、表記の問題があるが、ここでは「付く」も「着く」も併せて「つく」と考え、「床に手がつく」は「床に手をつける」という使役変化動詞もあると考える。そうすると、「手をつける」「手がつく」「手をつく」の対応関係が認められるので、両用動詞ではなく (有対自動詞がヲ格をとる他動詞文) に分類し、4.2.2 で取り上げる。(9)の「閉じる」も形態的に対応する「閉ざす」という他動詞が存在し「口を閉ざす」「口が閉じる」「口を閉じる」の対応関係があるように見える。「閉ざす」は「閉じる」の意味に対応する部分もあるが、元々両用動詞として存在していた「閉じる」にはない意味を表すために近世以降に使われるようになったと考えられる<sup>122</sup>。そこで「閉じる」は (有対自動詞がヲ格をと

る他動詞文)ではなく両用動詞として扱うことにする。

やや事情が異なる例として、最後に(3)「～ガ／ヲ噴き上げる」と(5)「～ガ／ヲ噴き出す」を見ておく。この2つは「噴く」だけに注目すれば、通常の両用動詞と同じであるが、後項動詞の「上げる」「出す」に注目すると、「～ガ噴き上がる」「～ガ噴き出る」という自動詞が存在する。「噴き上げる」と「噴き出す」にはそれぞれ「ふく」に「吹く」の漢字を当てる「風が砂を吹き上げる」「太郎が煙草の煙を(口から)吹き出す」のように「何かを吹いて、それを上げる／出す」のように分解できる使役他動詞の用法がある。ここで両用動詞として扱う「噴き上げる」「噴き出す」はこれらとは異なり、「中から外へ勢いよく出る」という自発的な事象を表す場合で、「ふく」は通常「噴く」の漢字が当てられる。(※ただし「芽をふく」の場合は「吹く」が当てられる) 「出す」についてはすでに4.1.2で分析し、使役変化動詞とは別に、所有他動詞(※影山1996の「非対格他動詞」)があることを示したが、「上げる」も同様に考えることができる。そうすると、「噴き上げる」「噴き出す」は全体で非対格構造をもつ自動詞になっていると見なすことができる。影山(2002b)でも同類の「湧き出す」「しみ出す」について次のように分析しているが、本論文でもこれを支持する。

(255) 影山(2002b:139)

「しみ出す」などの「出す」は非対格他動詞で、(71)の語彙概念構造(※引用者注:「芽が出る」の場所項が焦点化されて「芽を出す」となった場合の構造のことを指している)を持つものの、形態的には自立性を失って、複合動詞のV2にしか現れない拘束形式になっている。

このように考えた場合、「～ヲ噴き上げる」「～ヲ噴き出す」は「～ヲ噴く」と同様に扱うことができることになる。つまり、「～ガ噴き上がる」「～ガ噴き出る」を元にして生まれた複合動詞だとは考えず、「～ガ噴き上げる」「～ガ噴き出す」を元にして生まれたと考え、両用動詞に分類しておく<sup>123</sup>。以上、特殊な事情をもつ両用動詞を確認したが、これらを踏まえて、所有主体の他動詞文の分類(型)と両用動詞の他動詞文の対応を(256)にまとめる。(両用動詞はS型にしか現れないので、S型のみ示しておく)

(256) 所有主体の他動詞文の分類 (S 型) と両用動詞の対応

A 〈自動詞的な他動詞文〉

- (1) 基本型：〈存在〉の所有主体の他動詞文・・・・・・・・・・ (254①)
  - ・基本 S 型：(1) 伴う
- (2) 発生型：〈発生・消失〉の所有主体他動詞文・・・・・・・・・・ (254②)
  - ・発生 S 型：(2) 去る、(3) 噴き上げる、(4) (緑青を) 噴く、  
(5) 噴き出す、(6) (実を) 結ぶ、(7) (眠気を) 催す
- (3) 変化型：〈変化〉の所有主体の他動詞文・・・・・・・・・・ (254③)
  - ・変化到達 S 型：(9) 閉じる、(10) (蕾を) 開く ※(8) (手を) 着く
  - ・変化過程 S 型：(11) 巻く、(12) 増す
  - ※(8)「着く」は、B-1 〈有対自動詞がヲ格をとる他動詞文〉で分析する。

この分類からわかることは、両用動詞は、所有主体の他動詞文の形態的な分類では B 〈自動詞の形態をもつ他動詞文〉に入るが、意味的に分類した A 〈自動詞的な他動詞〉の観点から見ると、A(1)~A(3)のすべてにわたって存在するということである。

■両用動詞の位置づけ

両用動詞がこのように所有主体の他動詞文の全般にわたって存在することは何を意味しているだろうか。自動詞と他動詞が同形で、自他交替に形態の変化が伴わないというのは、所有主体の他動詞の生成プロセスの基本である。ここで基本というのは、所有主体の他動詞文の型の二分類、S 型と T 型のうち S 型に現れることを意味している。本論文では、S 型と T 型の動詞の形態を次のように規定した。

(257) 〈所有主体の他動詞文〉の動詞の形態に関する規則 (=134)

- a. S 型 (=自動詞の概念構造から直接生成される) の場合は、固有の他動詞の形態をもつ。  
ただし、自動詞と同じ形態のまま使われるようになった動詞もある。  
(つまり自他同形の「両用動詞」は原則として S 型の場合に現れる。)
- b. T 型 (=使役変化の概念構造をベースに、下位事象がプロファイルされて生成される) の場合は、使役変化動詞と同じ形態をもつ。

(257) に示したように、両用動詞は S 型に現れている。S 型というのは下位事象のみの LCS で事象の把握を反映した「場所の焦点化」(型によっては「所有者の出来構造化」も伴う)によって所有主体の他動詞文が生成される型である。つまり、両用動詞は所有主体の他動詞文の根幹をなす動詞グループだと結論づけられる。

森田 (1990) は、自他両用動詞は主に他動詞の意味が自動詞に接近し、自他異形のペアがない場合に生まれると考えているが (同書: 237)、本論文が扱う所有他動詞の観点から見れば、これらの自他動詞は自動詞から他動詞への転換であり、その他動詞は使役変化動詞ではなく、自動詞の語彙概念構造内での変換によって生成される所有他動詞だと結論づけられる。

ここで注意しておきたいことは、(254) に上げた動詞リストには「閉じる」「開く」のように自他の対応が動作主をとる使役変化動詞と非対格自動詞の関係になっている(「人が扉を閉じる／扉が閉じる」「人が戸を開く／戸が開く」など)ものがあるが、本論文ではこれらの動詞も (254) に挙げたように、元々は自動詞の用法に対応する所有他動詞 (非意図的な再帰的他動詞) が、意味の拡張 (語彙概念構造における拡張) を起こしたと考える。また、「結ぶ」「催す」「巻く」のよう使役変化動詞または働きかけの他動詞の一部の意味 (再帰的用法) において両用動詞の関係が成立しているものがあるが、これらについても、他動詞の意味が自動詞に接近したと考えるのではなく、自動詞としての意味 (「目が閉じる」「実が結ぶ」「眠気が催す」「渦が巻く」) に対応して所有主体の他動詞文が生成されたとみる。このように森田 (1990) では「自他異形のペアがない」ことが所与のこととして扱われているが、考え方は反対でなければならない。つまりどのような要因で異形のペアを生むことなく自他が交替しうるのかという疑問に答えなければならないだろう。

#### ■なぜ自他交替に形態の変化が伴わないのか

理論の枠組み (3.4.4) で「事象間の距離」という視点を提示したが、それについてここで具体的に論じることにする。ここでいう事象とは動詞の語彙概念構造における上位事象と下位事象のことを指す。そして距離とは認知言語学的な視点からみた事象間の心理的な距離のことである。

影山 (1996、2002b) では、使役変化動詞の語彙概念構造に示された上位事象と下位事象のあわさった全体が、語彙的に 1 つの動詞が表し得る最大の意味構造であるとした。

(258) 語彙的に1つの動詞が表し得る最大の意味構造

使役変化 : [ x ACT (ON y) ] CUASE [ y BECOME [ y BE AT z ] ]

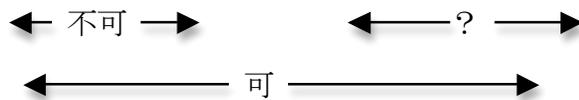
上位事象

下位事象

上位事象のみの自動詞「泣く」に使役動作主を付加する場合は、語彙的なヴォイスでは対応できずに「泣かせる」という使役態を用いる。これは上位事象のみの他動詞「食べる」も同様である。そして、上位事象と下位事象をもつ自動詞「座る」も語彙的なヴォイス (他動詞) は存在せず、使役動作主を付加する場合には、「座らせる」にしなければならないし、使役変化動詞の「燃やす」もすでに上位事象と下位事象をもつので、さらに使役動作主を付加する場合には使役態の「燃やさせる」にする。このような事実から影山の指摘な妥当なものだと判断できる。その上で影山 (2002b) では、(259) の ‘?’ に該当する下位事象のみで自他交替する場合の動詞の形態については、形態の変化を伴わない動詞の存在があると主張した。これが影山の言う「非対格他動詞」に当たるわけだが、これについては、本論文の 4.1.2 で形態の変化が伴わないのは「非対格他動詞」を狭義に考えた場合で、所有の意味概念をもつ他動詞 (所有他動詞) の枠組みで考えた場合、形態の変化の伴わないのは S 型であることを示した。

(259) 影山 (2002b : 122) (=50)

[ x ACT ON y ] CAUSE [ (y) BECOME [ y BE AT z ] ]



つまり、事象間の「距離」という視点で捉え直した場合、上位と下位の距離の伸縮を伴う場合は形態の変化がおこり、伴わない場合、つまり距離が同じ場合には形態の変化がおこらないと考えることができる。所有主体の他動詞文の S 型とはまさにこれに該当する所有他動詞を生成するのである。森田 (1990) が指摘したような、たまたま自他異形のペアが存在しない動詞において、他動詞の意味が自動詞に接近したのではなく、元々形態の変化がおこらないメカニズム、つまり事象の認知的な把握が反映された「場所の焦点化」と「所有者の出来構造化」によって自他の交替がおこったのだと言える。

#### 4.2.2 有対自動詞の両用動詞化

有対自動詞の一部には自動詞の形態をもつにもかかわらずヲ格目的語をとる動詞があり、これらの動詞は他動詞およびガ格をとる自動詞との意味の違いが議論されてきたことは、第2節の先行研究の紹介の中で示した(2.2.2を参照)。このような振る舞いを見せる有対自動詞は数が限られていることもあって、個別に意味の分析がされてきたが、本論文ではこの〈有対自動詞がヲ格をとる他動詞文〉も所有主体の他動詞文の1つのタイプであることを主張する。つまり、「話を終わる」「尻尾を垂れる」「口をあく」などの動詞が自動詞か他動詞かといったレベルではなく、「終わる」「垂れる」「あく」には(使役変化他動詞とは異なる)所有他動詞としての用法があると考えることで、意味も正しく把握できることを示す。

##### ■ 〈有対自動詞がヲ格をとる他動詞文〉の動詞

まず須賀(1981)が取り上げたの6つのペア(260)に2つのペアを追加し(261)、所有他動詞であるかどうか検討した上で、「有対自動詞の両用動詞化」という新しい視点から分析する。

- (260) a. 「(口を) あける / (口が) あく — (口を) あく」  
b. 「(座席を) かえる / (座席が) かわる — (座席を) かわる」  
c. 「(住所を) 移す / (住所が) 移る — (住所を) 移る」  
d. 「(音程を) はずす / (音程が) はずれる — (音程を) はずれる」  
e. 「(尻尾を) 垂らす / (尻尾が) 垂れる — (尻尾を) 垂れる」  
f. 「(仕事を) 終える / (仕事) が 終わる — (仕事を) 終わる」

- (261) g. 「(手を) つける / (手が) つく — (手を) つく」  
h. 「(計算を) 間違える / (計算が) 間違う — (計算を) 間違う」

所有主体の他動詞文における所有者(主語)と所有物(ヲ格目的語)の関係は、高橋(1975)とそれに基づいて整理した稲村(1995)の所属の概念の分類を採用するが(262)、具体的な例の列挙には限界があり、概念としては(263)に示したような再帰構造をもつ2つの

名詞句の関係とみなせるものを含むと考える。そして(260)と(261)の動詞の主語とヲ格目的語が(262)の分類のどれに相当するか確認しておく(264)。

(262) 所有者(主語)と所有物(ヲ格目的語)の関係

- ① 全体と部分 : 太郎一足、花子一目、家一台所
- ② 主体とその側面 : 太郎一体重、台風一勢い、川一水かさ
- ③ 所有者と所有物 : 花子一鞆、太郎一子ども、次郎一仕事、三郎一関心
- ④ 生産者と生産物 : 花子一声、太郎一息、次郎一作品

(263) 所有者(主語 : x)と所有物(ヲ格目的語 : y)の関係の概念 (=143)

yはxを特徴づける要素として、xと密接な関係にあり、具体的か抽象的かを問わず、また直接的か間接的かを問わず、yの変化がxの変化であると認知できるような一体性をもつ関係にある。通常は、対応する自動詞文の主語において「xのy」のように表示される関係にある。

- (264) ① 全体と部分 : a. (口を)あける、e. (尻尾を)垂らす、  
g. (手を)つける
- ② 主体とその側面 : --
- ③ 所有者と所有物 : b. (座席を)かえる、c. (住所を)移す、  
f. (仕事を)終える
- ④ 生産者と生産物 : d. (音程を)はずす、h. (計算を)間違える

①「全体と部分」に入るのは、体の部位を示す名詞が目的語になる動詞である。③の「かえる」「移す」については、「席」「場所」「家」のような具体的なモノや場所だけでなく、「住所」「戸籍」「首都機能」などの抽象的なものも所有物とみなす。また、「仕事」「興味」「夢」「関心」などは「~をもつ」と言えることから、これらも所有物の枠組みに入れることができるだろう。④の「音程」は人が主語の場合は「(生産された)音」と考えることができる。また「計算」は思考活動の結果物という見方である。

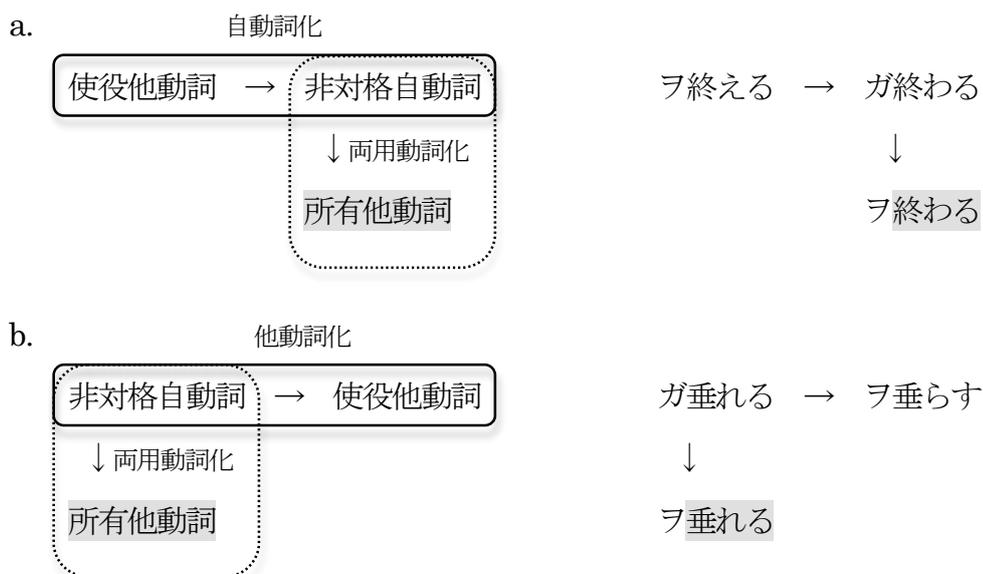
■有対自動詞の両用動詞化という視点

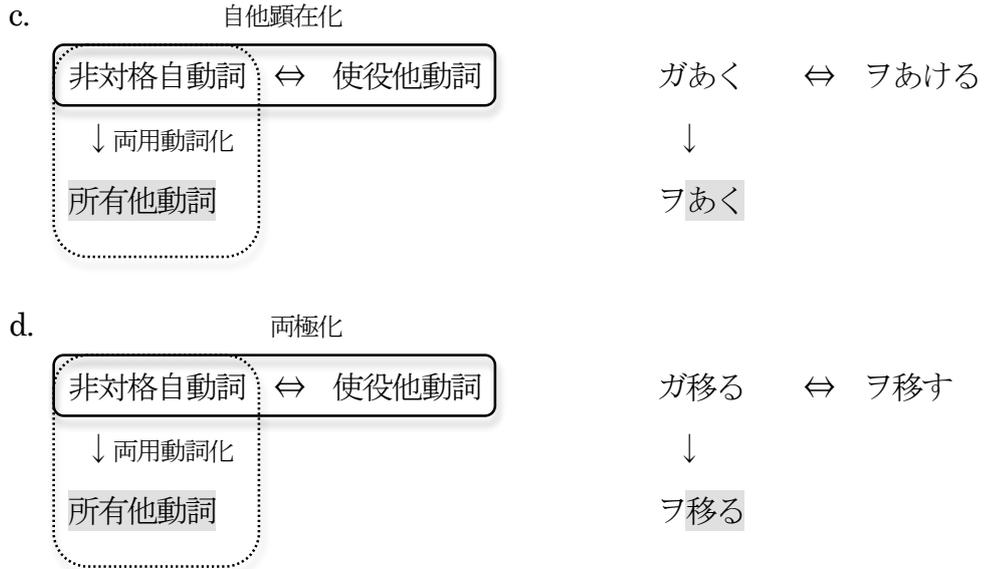
第3節の理論の枠組みでその基本的な考え方を示したが(3.4.4を参照)、有対自動詞がヲ格目的語をとる場合に、元々の自動詞と形態が同じ他動詞が存在するという見方に立ち、そのような他動詞が生まれることを「有対自動詞の両用動詞化」と呼ぶ。これは本論文独自の視点であり、両用動詞を所有主体の他動詞文のS型だという考え方を有対自動詞がヲ格をとる他動詞文に応用したものである。つまり、自動詞と同形の他動詞をもつという点では両用動詞の特徴と同じことから、有対自動詞が形態上、対応する他動詞がありながら、さらに自動詞と同形の他動詞をもつようになったと考えるわけである。この新しい他動詞が所有他動詞であり、所有主体の他動詞文が生成されると考える。

有対自動詞における自他の交替を「-as(u)」による「他動詞化接辞付加タイプ」、「-ar(u)」による「自動詞化接辞付加タイプ」、「-ru」と「-su」による「両極化接辞付加タイプ」、「-er(u)」による「活用型による自他交替タイプ」(＝「自他顕在化辞タイプ」)の4つに分類する<sup>124</sup>と、この有対自動詞の両用動詞化もそれにあわせて(265)のように4つに分類できる。

(265a)のタイプの所有他動詞には「終わる」「かわる」がある。(265b)には「垂れる」がある<sup>125</sup>。(265c)には「あく」「つく」「間違う」が、(265d)には「移る」「はずれる」がある。

(265) 有対自動詞の両用動詞化の4つのタイプ



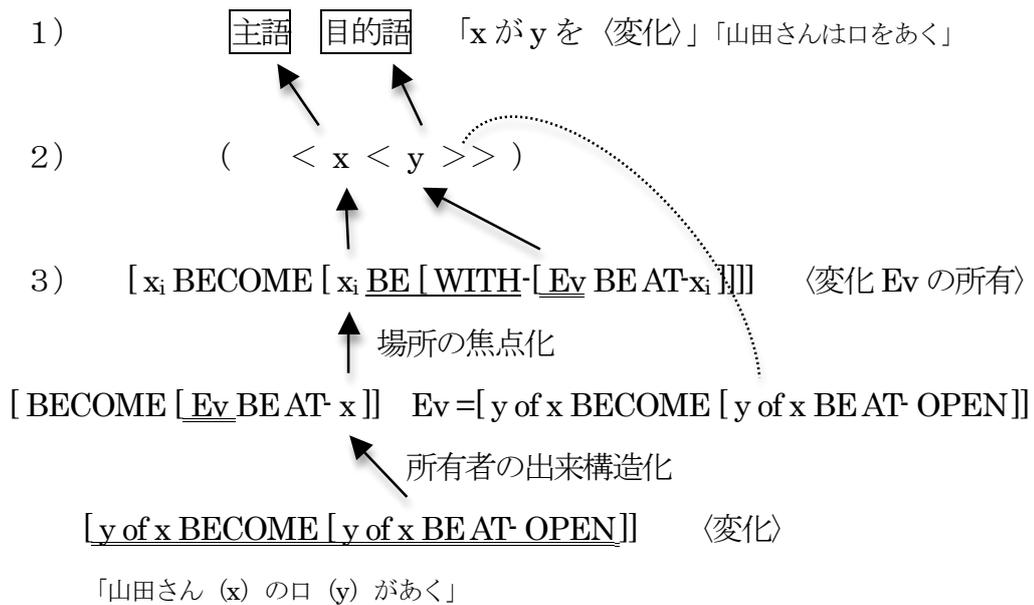


■ 両用動詞化による所有主体の他動詞文の生成プロセス

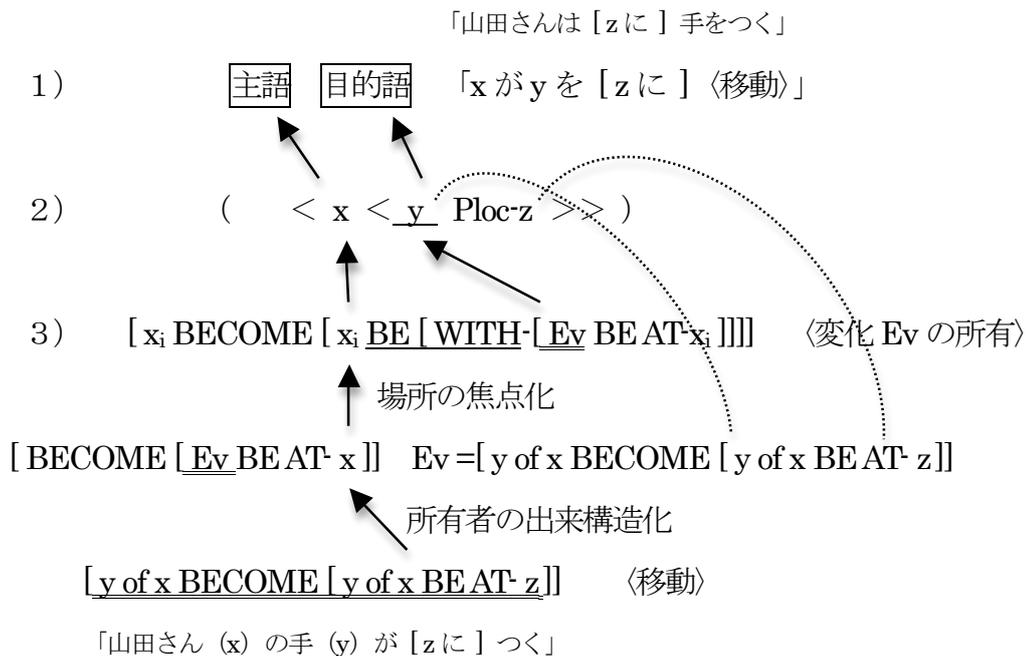
両用動詞化による所有主体の他動詞文の生成プロセスは、S型のそれと同じである。またタイプは「変化到達型」で、限界性をもつ変化事象の語彙概念構造をもつ自動詞から生成され、変化イベント (Ev) を所有することを表す。変化到達型のうち状態変化を表す「状態変化到達S型」に入るのは「あく」「垂れる」で、位置変化を表す「位置変化到達S型」に入るのは「つく」である。「間違ふ」「終わる」「かわる」「移る」はやや複雑な事情があるので別に扱う<sup>126</sup>。なお、「はずれる」については、「(人が音/音程を) はずれる」は不自然で、許容されるとしたら「ヲ格」が離脱の場所を示していると考えられる。したがって、「ヲはずれる」は有対自動詞の両用動詞化には含めないことにする<sup>127</sup>。状態変化到達S型の「口をあく」の生成プロセスを(266)に、位置変化到達S型の「手をつく」の生成プロセスを(267)に示す。

(266)では、ベースとなるLCSにおいて、全体と部分の関係にある「山田さんの口」が一体となっており、それがどのように状態変化したかを表している。これが所有者の出来構造化によって「山田さんにおいて、口があくという変化が発生した」と把握される。これが場所の焦点化をへて「山田さんが口をあくという変化Evを所有した」という語彙概念構造に変換される。最終的には「山田さんが口をあく」という所有主体の他動詞文が生成される。このプロセスは同じ「状態変化到達S型」の「垂れる」「終わる」に共通している。「終わる」は主語名詞とヲ格目的語は所有者と所有物の関係である)

(266) 状態変化到達S型：「口をあく」(両用動詞化)



(267) 位置変化到達S型：「手をつく」(両用動詞化)



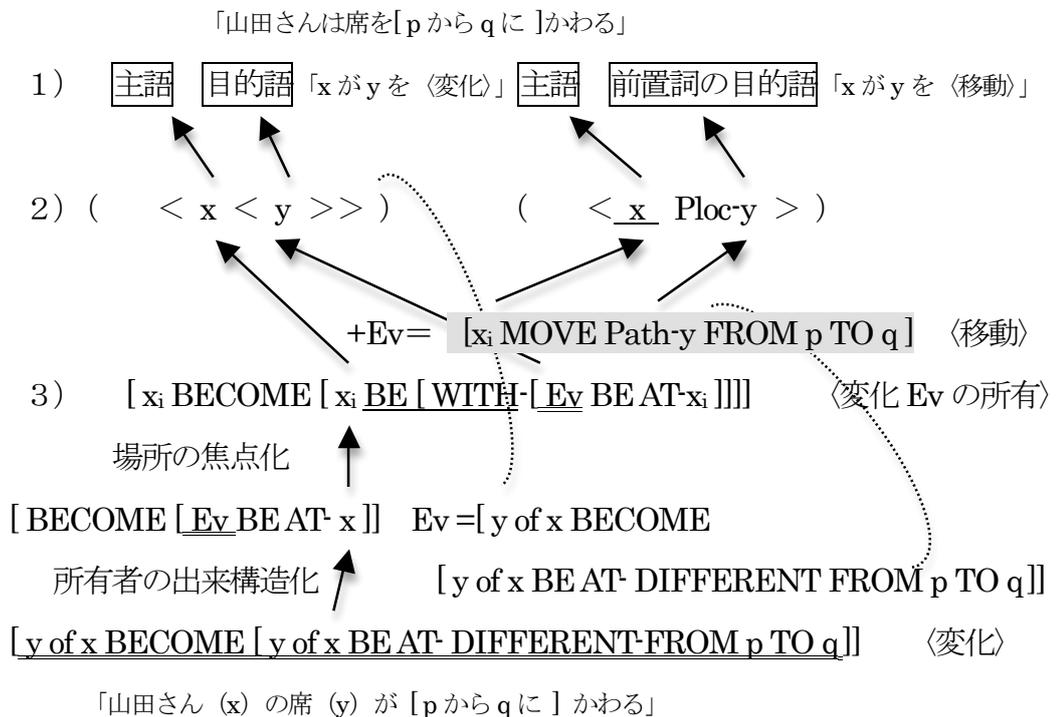
(267) では、ベースとなる LCS において、全体の部分の関係にある「山田さんの手」が一体となっており、それがどのように位置変化したかを表している。これが所有者の出来構造化によって「山田さんにおいて、手が z につく（着く）」という位置変化が発生した」と把握される。これが場所の焦点化を経て「山田さんが手を z につく（着く）」という変化 E<sub>v</sub> を所有した」という語彙概念構造に変換される。最終的には「山田さんが z に手をつ

く（着く）」という所有主体の他動詞文が生成される。

次に所有他動詞のタイプの決定を保留にしておいた「席をかわる」について考える。その生成プロセスを (268) に示すが、これは (266) の「状態変化到達 S 型」の生成プロセスを基本としながらも、その生成過程で所有者の移動の意味概念を派生させ、結果的に 2つの意味概念が合わさった形になる点でユニークである。

(268) では、ベースとなる LCS において所有者と所有物の関係にある「山田さんの席」が一体となっており、それが「p から q にかわる」ことを表している (図 22①に該当する)。これが所有者の出来構造化によって「山田さんにおいて、席が (p から q に) かわるといふ変化が発生した」と把握される (図 22②に該当する)。これが場所の焦点化を経て「山田さんが席を (p から q に) かわるといふ変化 Ev を所有した」という語彙概念構造に変換される (図 22③-a に該当する)。最終的には「山田さんが席を (q から q に) かわる」といふ所有主体の他動詞文が生成される。

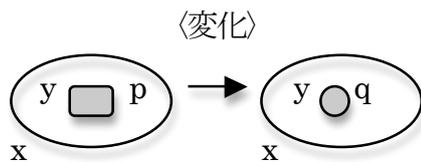
(268) 状態変化到達 S 型：「席をかわる」(両用動詞化)



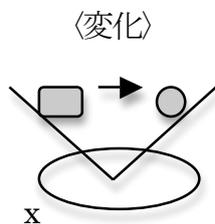
ここまでは他の状態変化到達 S 型と同じだが、「人が席を p から q にかわる」では、対象 (=所有物) の状態変化 (=y が p である状態から q である状態に変化すること) から所有者の p から q への移動の意味概念が派生する。(268) では、[x<sub>i</sub> MOVE Path-y FROM

p TO q ]で表示された LCS が、「x が y を p から q へ〈移動する〉」ことを表している。つまり、[y of x BE AT DIFFERENT-FROM p -TO q]は「所有物 (y) の p から q への変化」を表しているが、ここから所有物 (y) が移動範囲として解釈され、「移動範囲の両端に p と q が存在する」という解釈が生まれることになる (図 22③-b に該当する)。

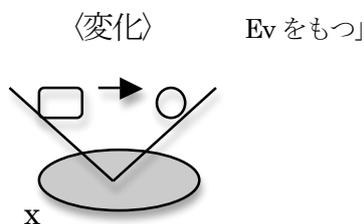
① 「x の y が [p から q に] 変化する」



② 「x において、x の y が [p から q に] 変化する」



③-a 「x が、x の y が [p から q に] 変化する」



③-b 「x が、x が y を [p から q に] 移動する」

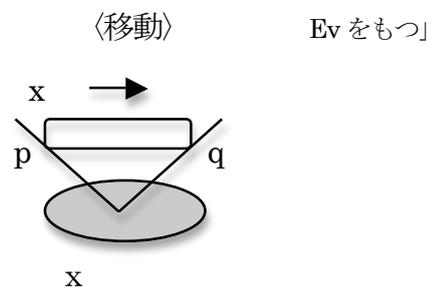


図 22 「所有物の状態変化」と「所有者の位置変化」

ここで重要なことは「山田さんの席が変わる」は (269) に示したように、焦点を当たり方で2つの意味が生まれる。所有主体の他動詞文である「山田さんが席が変わる」は実際に移動することを表す意味が優先されるということである。(269a) は結果として人の移動は含意されるが、意味の焦点は「人の移動」ではなく「対象の変化」である。

(269) 「山田さんの席が変わる」の二義性

a. 対象 (=山田さんの席) の変化に焦点がある場合

例：事前に購入したチケットについて、一度予約した席 (p) をキャン

セルして、別の席 (q) になった場合。形の上では席は p から q にかわったが、実際に人が p から q に移動したわけではない。

b. 実際に所有者 (主語) の移動が伴う場合

例：自分が座っている通路側の席 (p) から隣の窓側の席 (q) に移動した場合

これは見方を変えれば、「～をかわる」という所有主体の他動詞文が成立するためには、所有主体の実際の移動が伴わないといけないということである。事実、(270) のような移動を伴わない場合は非文となる。

(270) a. \*山田さんは髪型をか変わった。

(cf. 山田さんは髪型をかえた。山田さんは髪型がか変わった。)

b. \*木村さんは予定をか変わった。

(cf. 木村さんは予定をかえた。木村さんは予定がか変わった。)

このような制限は「移る」の場合にもあてはまる。使役変化動詞「移す」に対応する自動詞の「移る」は所有物の移動について述べることができるが、所有主体の他動詞文としての「移る」は概念上の所有物の移動 (変化) だけでなく、実際の所有者が移動しないと成立しない。つまり、所有物にあたる名詞が移動の対象となる「場所」を表す概念を持っていないといけないということである。

(271) a. 山田さんは席／部屋／部署を移った。

(Aという席／部屋／部署からBという席／部屋／部署への移動)

b. ?木村さんは本籍を移った。

(Aという本籍からBという本籍への変化)

このように状態変化の意味概念をベースにもちながらも移動の意味概念に焦点が当たっていることから、「かわる」「移る」の所有主体の他動詞文を、「状態・位置変化到達S型」と呼ぶことにする。次に「状態変化到達S型」に分類しておいた「終わる」を検討し、「状態・位置変化到達S型」に分類しなおす。

■ 「状態・位置変化到達S型」における「移動」の概念を考える(1): 「～を終わる」

「終わる」は他の「あく」「垂れる」と意味概念的に異質である。それは「終わる」がアスペクトを表す動詞だからである。同じアスペクトを表しても「始まる」が所有主体の他動詞文を生成しないという事実は、有対自動詞の両用動詞化の特徴を知る上で重要である。

(272) a. 山田さんは仕事を終わった。

b. \*山田さんは仕事を始まった。

「山田さんは仕事を終わる」では、「山田さんの仕事」について「未完了」から「完了」への状態変化を表すと同時に、図 22③-b に示したように、所有主体(主語)が「開始点」から「終了点」への移動というメタファーが働くと考えられる。この場合の移動は「かわる」「移る」に見られたような実際の移動ではないが、メタファーによって所有者の移動が心理的に捉えられることが、「始まる」との決定的な違いである。この心理的な移動を別の視点から見れば、「所有者」とその「行為」が一体性をもつということである。

主体と客体が分化せず一体的に結びついていることについては、須賀(1990)でも指摘されているが、須賀は最終的には「～を終わる」「～をかわる」などを「自動詞形本来の意味する領域を越えるものではない」(同書:27)と結論づけている。本論文は、主語(主体)と目的語(客体)を分化している使役変化(他)動詞と比べれば、所有主体の他動詞文の主語と目的語は、「所有者」と「所有物」の関係にあるという点で一体性は高いと言えるが、所有主体の他動詞文では「所有者の出来構造化」を経て、所有者と所有 Ev に分化している点で、自動詞文とは異なると考える<sup>128</sup>。

「～を終わる」が状態変化だけでなくメタファーとして移動の意味概念をもつことによって所有主体の他動詞文が生成されることを支持する言語現象として、「～を終わりたい」が成立する条件を挙げるができる。須賀(1990)は、「終わる」の意味を行為と対象の一体性と関連づけて(273)～(275)の文の比較検討している(同書:25 例文(20)(21)(22)×?の判断は原文のまま)

- (273) a. ×いやな宿題などは早く終わりたい。  
 b. いやな宿題などは早く終えたい。  
 c. いやな宿題を終わって、遊びに行った。
- (274) a. ?退屈な読書は早く終わりたい。  
 b. 退屈な読書は早く終えたい。  
 c. 退屈な読書を終わって、遊びに行った。
- (275) a. 自己紹介は早く終わりたい。  
 b. 自己紹介は早く終えたい。  
 c. 自己紹介を終わって、席についた。

須賀 (1990) では、(273a) が非文で (275a) が自然なのは、終わるのが「宿題」という「行為の対象」なのか「自己紹介」という「行為そのもの」なのかの違いによると考えている。(274a) はその中間的な存在でやや許容度が落ちるという判断である。この判断は妥当なものだと考えられるが、その理由については本論文の所有主体の他動詞文の生成から次のように説明できる。

(273c) (274c) が示しているように、「宿題」であっても「読書」であっても通常の叙述文では「～を終わる」は問題なく使用できる。これは主語名詞にたつ人が「その人の宿題・読書が終わるといふ Ev を所有している」という意味である。そしてこの所有主体の他動詞文は下位事象のみで外項をもたないため、通常は所有主体の意志表現はできないはずである。「～を終わりたい」「(席を) かわってください」「(席を) かわりましょうか」などの意志表現が成立するのは、所有主体他動詞文の主語 (=項構造では「疑似的外項」になっている名詞) が通常の外項として振る舞うように拡張していると考えられる。このような拡張は無条件におこるのではなく、語彙概念構造において「所有者の出来構造化」と「場所の焦点化」によって所有者が所有物を移動範囲として始点から終点へと移動するという意味概念が生まれることによっておこると考える。つまり、「～を終わる」がメタファーとしてもつ心的な所有主体の移動の概念が明確にもてる場合に拡張を許すのである。それはどのような場合化といえ、所有者の行為が客観的に分離できる対象に向けられたものではなく、所有者がその終了点の設定に対してコントローラビリティをもち、所有者自身が

主体的にその行為を主宰している場合、つまり対象の性質によって終了点が設定されるものではない場合だと言える<sup>129</sup>。このような条件を満たす単語であれば、「自己紹介」だけでなく「話」「授業」なども「～を終わりたい」のような意志表現が成立するのである。なお、所有他動詞の意志表現についてはこのあと改めて取り上げて分析する。

(276) a. このへんで私の話を終わりたいと思います。

b. きょうはこれで授業を終わりたいと思います。

■ 「状態・位置変化到達 S 型」における「移動」の概念を考える (2) : 「～を間違う」

「間違う」は「何らかの結果、生産物が正しい位置 (=正しさの基準) からずれる」ことを表す自動詞で、「その字/計算/答えは間違っている」のように使われる。一方「間違える」は「人が「何かについて間違う」ことを引き起こす」ことを表す使役変化 (他) 動詞で、「山田さんが字/計算/答えを間違える」のように使われたり、「AをBと取り違える」という意味で「山田さんが加藤さんの傘を (自分のと) 間違えた」のように使われたりする。

このような自他動詞の対応の中にあって、近年 (277c) のように「間違う」を「間違える」の意味で使うことが多くなってきた。この「ヲ間違う」は「ガ間違う」の両用動詞化によって生まれた所有他動詞だというが本論文の考え方であるが、ここで「ヲ間違う」はどのようなタイプの所有主体の他動詞文に分類されるだろうか。上の考察では「ヲ終わる」を移動のメタファーとして捉え「移動・位置変化到達 S 型」であることを示したが、「ヲ間違う」も同様に考えることができることを示す。

(277) a. その計算は間違っている。 (間違う)

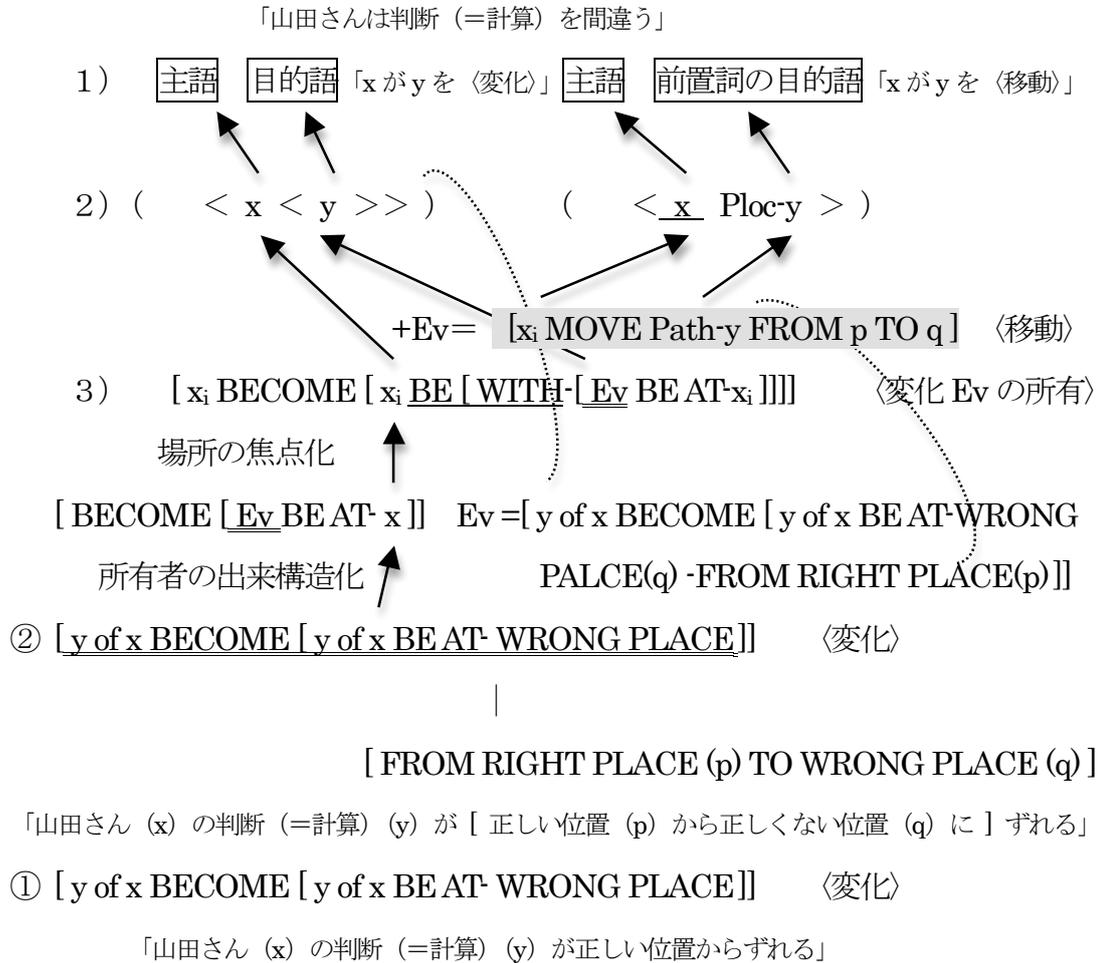
b. 山田さんはその計算を間違えた。 (間違える)

c. 山田さんはその計算を間違った。 (間違う)

(278) に「～ヲ間違う」の生成プロセスを示すが、3)-①は「ガ間違う」の語彙概念構造である。これは状態変化を表しているのだが、その「思考過程」に焦点をあてると、3)-②のように「x の判断 (y) が [正しい位置 (p) から正しくない位置 (q) へ] ずれる」のようになっていると考えられる。この思考過程が移動のメタファーとしてとらえられ、「か

わる」「おわる」と同様に、「xがpからqへ移動する」のように解釈されることによって生成されているのが「～を間違う」という所有主体の他動詞文だと考える。

(278) 状態・位置変化到達S型：「計算を間違う」（両用動詞化）



(279) のように「字・計算・答え」のような思考結果、生産物を表す名詞句がヲ格に来る場合以外でも「対象物 (w) についての判断 (y)」の w がメトニミー的に取り立てられて「xがwを間違う」という所有主体の他動詞文が生成されていると考えることができる。

(279) a. 山田さんは道を間違った。

(cf. 山田さん (x) の道 (w) についての判断 (y) が正しい位置からずれた)

b. 山田さんはシャツの裏表を間違っ**て**着ている。

(cf. 山田さん (x) のシャツの裏表 (w) についての判断 (y) が正しい位置からずれた)

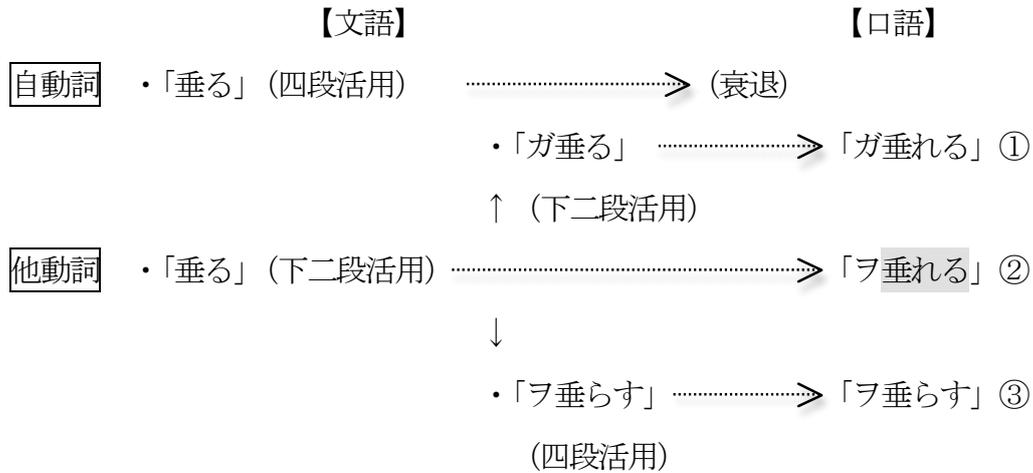
ここで「間違える」との違いを確認しておく。「間違える」も非意図的な事象に使うことができ、所有他動詞の側面をもっているが、「ヲ間違う」と違ってかなり主体的な関与が強い場合にも使うことができる。つまり、「間違える」は判断する主体と判断する対象が分化しており、その対象に対して判断主体が思考するという捉え方になっている。それに対して、「ヲ間違う」は思考のプロセスにおいて誤った位置へ移動するというメタファーになっているのだが、あくまでそれは非意図的であり、そのような誤った位置への移動というイベントを所有するという意味になっている。

「～ヲかわる／移る」「～ヲ終わる」「～ヲ間違う」を所有主体の他動詞文の「状態・位置変化到達S型」に分類したわけだが、「かわる／移る」は実際の移動の意味概念をもち、「終わる」はアスペクトが移動のメタファーとして、「間違う」は思考過程が移動のメタファーとして働いていることをみた。

#### ■ 「垂る」「垂れる」の歴史的変遷

「垂れる」についてその自他の形態上の対応の歴史的な変化をみて、「～ヲ垂れる」は有対自動詞の両用動詞化ではないという判断を下す。現代語では「垂らす（他動詞）」対「垂れる（自動詞）」という形態上の対応をなしているが、歴史的にみると「垂る」という動詞が四段活用で自動詞となり、下二段活用で他動詞となっていた。その後自動詞の「垂る」は衰退し、新たに生まれた「垂らす」という他動詞の形態の影響をうけ（「-as(u)」対「-er(u)」という自他の対応の類推から）「垂る」の他動詞の形態だった下二段活用の「垂れる」が自動詞として使われるようになったと考えられる<sup>130</sup>。つまり、「垂れる」は「活用形による自他交替タイプ」で「あく」対「あける」と同じように「垂る」対「垂れる」という対応関係をもっていたという歴史がある。そして、自動詞化する前の他動詞の「垂る（垂れる）」の時代からその用法の中に所有他動詞の用法を持ち合わせていた。したがって、「ガ垂る」と「ヲ垂らす」の関係は（280）のようになっていたと推察される。

(280) 「垂る」の歴史的変遷



このような変遷を考慮すると、「③ヲ垂らす」「①ガ垂れる」の自他の対応に「②ヲ垂れる」が加わったというより、むしろ元々存在した「②ヲ垂れる」に①と③が加わったとみるべきである。したがって、「②ヲ垂れる」は「①ガ垂れる」の両用動詞化ではなく、元々所有他動詞の用法を持ち合わせていた他動詞「垂る(下二段)」が、「垂らす」という他動詞とそれと形態的に対応する自動詞「垂る(下二段)」を持つようになった後も、所有他動詞の用法を持ち続けていると考えるべきであろう。以上の考察から「ヲ垂れる」は有対自動詞の両用動詞化によって生まれた所有他動詞ではなく、元々所有他動詞の用法を持っていたと考えて、ここでの考察から外すことにする。

■有対自動詞の両用動詞化の位置づけ

有対自動詞がヲ格をとる他動詞文は非常に限られているが、これは本論文の「有対自動詞の両用動詞化」という視点に立てば、そもそも両用動詞は数が少なく、慣習によって固定した動詞句のみで非生産的であることと並行的な現象であると言える。なぜ有対自動詞が両用動詞化して所有他動詞が生まれたかを特定することは困難であるが、現存する動詞または消滅してしまったことが判明している動詞を手がかりに、有対自動詞の両用動詞化を衰退への方向と活性化の方向の2方向のベクトルによって位置づけたいと思う。

鈴木(1985)は自動詞文と意味の違いが意識されなくなれば、2つ形式が存続するのは言語の効率からして「不経済」であり、衰退する方向にあると考えている(同書:108)。明治以降の文学作品を調査した結果、「目をあく」のような用法は衰退の傾向にあることが

わかるという<sup>131</sup> (同書: 109-111)。確かに「不経済」を理由に消滅する流れがあることは否定できないが、それとは逆に次第によく使われるようになった「ヲ終わる」「ヲ間違う」などの事例もある<sup>132</sup>。また、衰退傾向にあるとはいっても、「口をあく」は使用場面によっては決してめずらしい表現ではないと思われる<sup>133</sup>。このような事情を踏まえ、有対自動詞の両用動詞化を衰退と活性化の2つの方向から考えてみる。

まずこれまでの分析を踏まえて、(265) に示した有対自動詞の両用動詞化の4つのタイプを整理する。最終的に両用動詞化であると判断された「あく」「間違う」「つく」「かわる」「終わる」「移る」を、有対自動詞の自他の派生タイプと所有主体の他動詞文の型との対応関係から (281) のように整理する。なお、「つく」はこれまで「位置変化到達S型」としてその生成プロセスを説明してきたが、「姿勢変化動詞」としての側面もあるので「状態・位置変化到達S型」に入れることもできるだろう。比較的新しく生まれた所有他動詞は【 】に入れ、消滅したと思われる動詞は( )に入れて示す。

(281) 有対自動詞タイプと両用動詞化の型の対応関係

- |                          |                                  |       |
|--------------------------|----------------------------------|-------|
| ① 活用型による自他交替タイプ (=265 c) | 「状態変化到達S型」                       |       |
| 「あく」                     | ([腹を] 立つ)                        |       |
| .....                    |                                  |       |
| 「つく」                     | 【間違う】                            |       |
| ② 自動詞化接辞付加タイプ (=265a)    | } 「位置変化到達S型」または<br>「状態・位置変化到達S型」 |       |
| 「かわる」                    |                                  | 【終わる】 |
| ③ 両極化接辞付加タイプ (=265d)     |                                  |       |
| 「移る」                     |                                  |       |

上の整理で重要なことは、大半が「位置変化」(実際の移動・メタファーとしての移動を含む)の意味概念をもつ動詞に分類されるということである。そして、「状態変化」の意味概念しかない動詞の場合、「～ヲ立つ」はすでに衰退し、「～ヲあく」も衰退している<sup>134</sup>。その一方で、比較的新しく生まれた所有他動詞である【間違う】【終わる】は「位置変化」で、かつその移動が実際の移動ではなく、メタファーになっている<sup>135</sup>。

有対自動詞の両用動詞化の位置づけを「衰退」と「活性化」の2つのベクトルで見た場合、状態変化のみを表す動詞の場合は「S型の所有他動詞」は衰退し、「使役変化動詞」と

「非対格自動詞」と「T型の所有他動詞」の組み合わせをもつようになると考えられる。

「(目を) あく」の場合であれば、他の多くの有対動詞と同様に、所有他動詞としては T 型の「(目を) あける」が使われるようになり、S 型の「(目を) あく」は衰退するということである。

「衰退」を阻止する要因としては、「S型の所有他動詞」がもちうる意味概念が関係していると考えられる。それが何かを現段階で断定することは難しいが、上の分析で明らかになった「移動」の意味概念が関係していると考えられる。自動詞の形態のまま両用動詞化によって S 型の所有他動詞が生まれたのは、この「移動」の意味概念があったからではないだろうか。これは移動動詞に現れるヲ格とのつながりがあることは確かだが、これについてはまた稿を改めて論じることにする。

「活性化」の要因としては、所有者の意味役割をもつ主語にたてることによる表現効果が考えられる。「～ガ～ヲ間違える」では、主語が「何かについて間違える」ことを引き起こす原因になっているが、同時に「間違える」という事態を所有する所有者にもなっている。したがって「間違える」は所有他動詞の側面をもっているのだが、原因者としての主体的な関与が認められると言える。そのような主体的な関与がないことを表す動詞として「ヲ間違える」が広く使われるようになったと考えられる。これとは別に、意志表現として所有主体の他動詞文が使われるという側面がある。これについては次のセクションで論じる。

#### ■有対自動詞の両用動詞化の「活性化」の要因：「～ヲ終わる」「～ヲあく」

両用動詞化で生まれた所有他動詞の活性化の要因として「意志表現」に注目して分析してみる。「～ヲ終わる」の分析で少し触れたが、両用動詞化が所有他動詞を生成することだとすると、下位事象しかもたず、外項がないので通常は意志表現が成立しない。ところが、意志表現が成立しない構文を意志表現として拡張して使うことによって生み出すことができる効果というものがある。それは次の2点にまとめられる。「終わる」「あく」はこの要因によって所有他動詞の使用が活性化されていると考えられる。

#### (282) 両用動詞化で生成された所有他動詞を意志表現に使用する効果

そこには使役変化動詞のような「動作主」としての意志ではなく、結果として変化イベントをもつという「所有者」としてのかかわりを示すのみである。そのため、

①自身の行動について使う場合：

自分の意志で行動するにもかかわらず、結果としてそのようなイベントをもつという捉え方になるので、表現が柔らかくなる。願望表現の場合は、結果としてそのような変化イベントをもつことを願望するため、控えめな言い方になる。

- a. それではこれで今日の授業を終わります。
- b. このへんで話を終わりたいと思います。

②他者への働きかけに使う場合：

相手の動作を引き起こすのではなく、結果としてそのような行動をとるというイベントをもつことを期待するため、働きかけが柔らかくなる。

- a. (医者が患者に) それじゃ、大きく口をあいてください。
- b. そろそろ仕事を終わってほしいんですけど。

上記のような語用論的な効果はこれまでも先行研究でたびたび指摘されてきたことだが、いずれも単一の他動性のスケールに「ヲ他動詞」－「ヲ自動詞」－「ガ自動詞」を配置するという考え方だった。誤解を恐れずに簡潔に述べれば、両者の真ん中に位置しているから意味および表現効果がその中間程度になるだろうということである<sup>136</sup>。結果的にそうであったとしても、(282)の表現効果は所有他動詞という他動詞のクラスを設定してこそ、その意義が理解できると考える。

#### 4.2.3 3項述語と2項述語の関係と所有主体の他動詞文

ここでは3項述語と2項述語の関係にある他動詞を取り上げ、2項述語が所有主体の他動詞文になっていることを示す。最初に「複他動詞」と「単他動詞」の関係になっている動詞を取り上げ、次に移動先が場所である他動詞を分析する。

##### ■複他動詞と単他動詞の分類

理論の枠組み(3.4.4)で示したように、複他動詞と単他動詞の関係にある動詞は3つに分類することができる。

(283) 複他動詞と単他動詞の関係にある動詞 (※左が複他動詞で右が単他動詞)

- a. 「教える・教わる」「預ける・預かる」「授ける・授かる」
- b. 「着せる・着る」「被せる・被る」「浴びせる・浴びる」
- c. 「含める・含む」

(283a) は「-er(u)」(文語終止形「-(u)」)という他動詞の形態をもつ複他動詞が、「-ar(u)」という自動詞化接辞をとり単他動詞になったグループである。このような形態の対応をもつ通常の自他動詞には「当てる・当たる」「助ける・助かる」「止める・止まる」など数が多い。(283b) は両極化の自他交替をもつ動詞で、共通する形態に「-ru」がつく自動詞が単他動詞に相当し、「-seru」(文語終止形「-su」)がつく他動詞が複他動詞に相当するグループである。このような形態の対応をもつ通常の自他動詞は少ないが、「寄せる・寄る」「乗せる・乗る」などがある。(283c) の「含む」は文語では終止形が同じで、活用型で自他の交替があった動詞で、口語では自動詞の「-(u)」という形態をもつ単他動詞に対して他動詞の「-er(u)」という形態をもつ複他動詞という関係になっている。このような形態の対応をもつ通常の自他動詞には「進める・進む」「沈める・沈む」「あける・あく」などかなりの数がある。このように自他の交替における形態の対応から見れば、単他動詞は〈自動詞の形態をもつ他動詞文〉を作ると言えるわけである。そしてその自動詞の形態は、「自動詞化接辞」による a、「両極化接辞 (の自動詞化辞)」による b、「活用型自他交替 (の自動詞の形態)」による c の 3つのグループがあるとまとめることができる。

## ■ 「含む」の分析

(単他動詞が「活用型自他交替の自動詞の形態」をもつグループ)

「含む」については、すでに「状態動詞の他動詞文の分析」(4.1.1)で詳しく分析したが、ここでそのポイントを整理しておく。

- ①反使役化によって下位事象のみがプロファイルされ、その LCS から所有主体の他動詞文が生成されるのが「含む」である。(※4.1.1 ではこのような生成タイプを ST 型と呼んだ。詳しくは「基本 ST-a 型」(または「発生 ST-a 型」)である)。つまり、「y が (自ら) z の内部に 〈ある〉 (状態を引き起こす)」から「z が内部に y を 〈もつ〉」という概念構造の変換がおこり、「ある」という存在の動詞から「含む」という所有他動詞が生まれると考えられる。(「スポンジが水を含む」など)

- ② 「含む」における反使役化による外項と内項の同定が解除され、新たに外項と場所項が同定されることによって再帰的他動詞「含む」が生成される。（「山田さんがゼリーを口に含む」など）
- ③ 「含む」における反使役化による外項と内項の同定が解除されることによって、通常の使役変化動詞「含める」が生まれる。（「消費税を価格に含める」など）

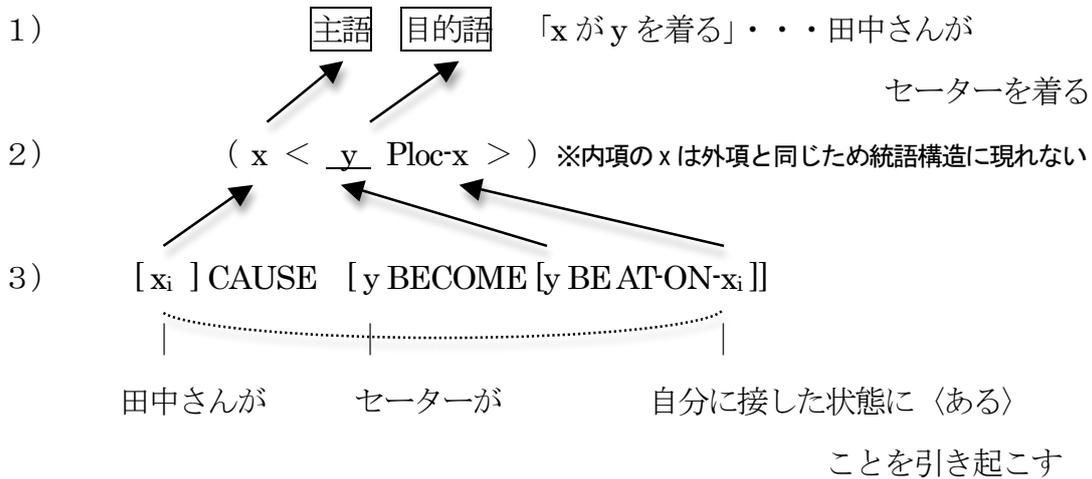
ここでの複他動詞と単他動詞の分析において重要なことは、「含む」は所有他動詞が元々の姿で、そこから同定項の変化によって再帰的他動詞「含む」が生まれ、さらには同定の解除によって使役他動詞の「含める」が生まれるという関係になっている点である。

■ 「着る」「被る」「浴びる」の分析

（単他動詞が「両極化接辞の自動詞化辞」をもつグループ）

3つの動詞を代表して「着る」を取り上げて分析する。これは第一にモノの移動の着点<sub>1</sub>が語彙的に自分自身に指定された再帰的他動詞である。語彙的に指定されていることによって、統語上はわざわざ着点を表示しないため2項述語になる<sup>137</sup>。

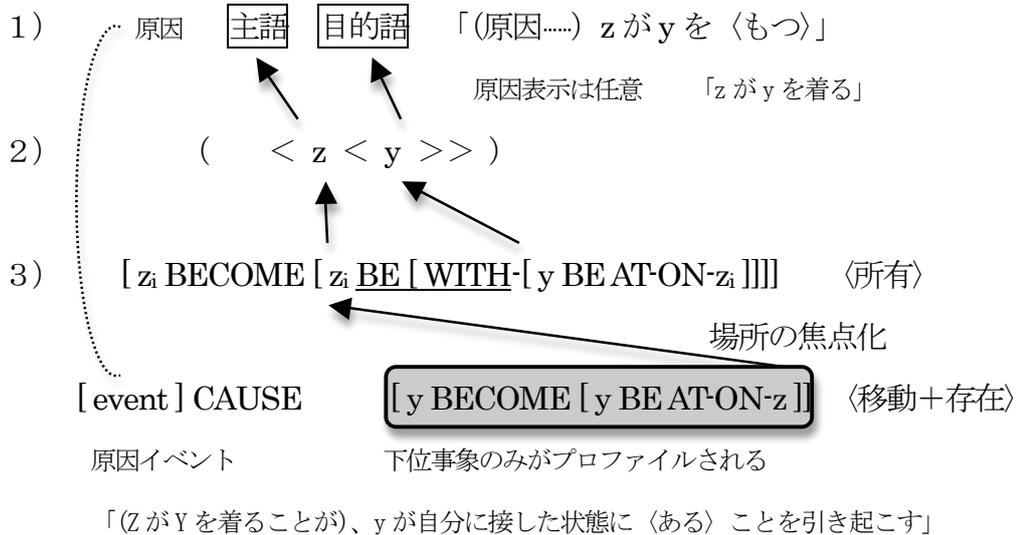
(284) 再帰的他動詞の「着る」の語彙概念構造と項構造、統語構造



次に、基本 T 型の所有主体の他動詞文を考える。この基本 T 型は原因イベントを外項にもつ使役変化の LCS をベースにして、その下位事象のみがプロファイルされ所有主体の他動詞文が生成されるタイプである (3.3.4 を参照)。(284) に示した使役変化動詞の「着る」は「セーターを着るのに 30 分もかかった」のように動作のプロセスに焦点をあてた

解釈が可能であるが、「彼は同じセーターを三日間も着ている」では結果状態に焦点があたっている。同じ人を主語にしてもこのような差が生まれるのは、後者は所有主体の他動詞文になっているからである。

(285) 所有他動詞「着る」(基本T型)



ベースとなる3)下段のLCSは、「zがyを【着る】(この場合の「着る」は再帰的他動詞としての「着る」)ことが、yがzに接した状態を引き起こす」という意味概念をあらわす。T型の生成では所有他動詞は使役変化を表す動詞と同じ形態を持つので、プロファイルされた下位事象は場所の焦点化を経て、最終的に「zがyを着る」という所有主体の他動詞文が生成される。簡単に言えば「zがyを【着る】ことによって、zがyを着ることになる」という関係である。(このような一見冗長な印象を与える生成プロセスを仮定する理由およびメリットについては3.3.4の「持つ」の分析を参照)なお、ここでは原因イベントを「zがyを【着る】こと」としているが、これは「今zがyを自分の体に接した状態にしている」ことを引き起こした原因として最も想起されやすいからにほかならない。

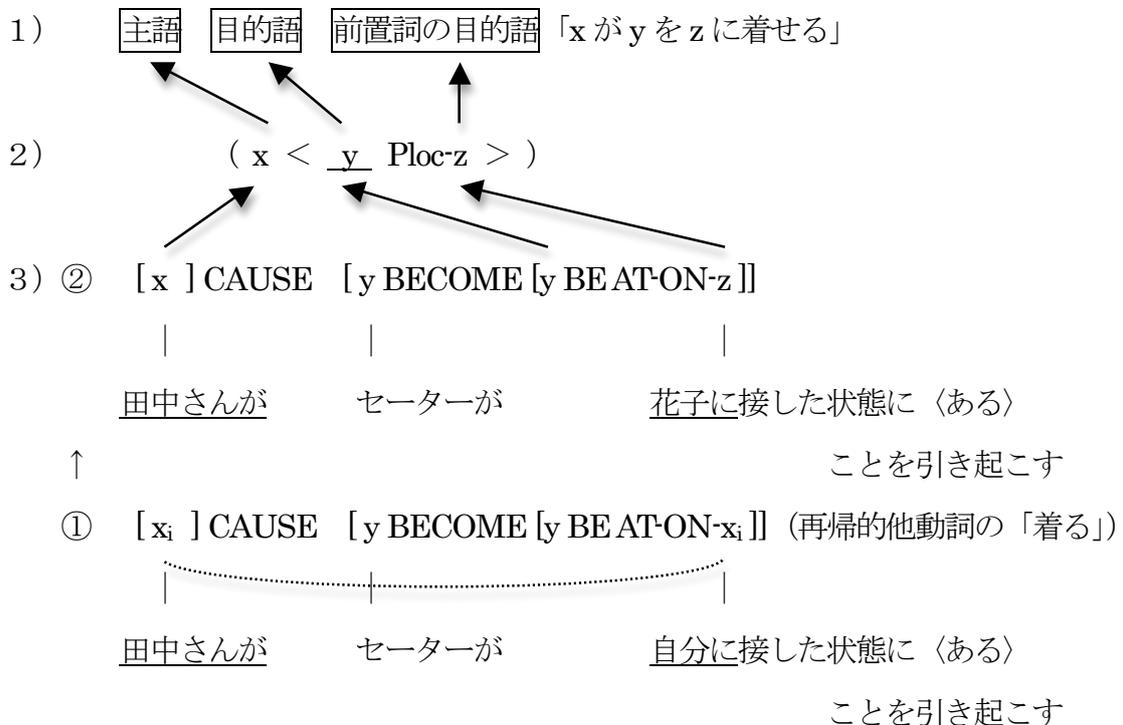
ここで、須賀(2000)が「介在性の表現」(佐藤1994)の事例として「zがyを着ている」を挙げたことについて考えておく。須賀は、例えば「(zがお願いして)第三者(w)がzに服を着せた」場合でも「zがyを着ている」のように実際の動作主(w=被使役者)を無視したかのような他動詞文が成立していることを指して、「介在性の表現」とのつながりを示唆している。しかし、「着る」の2つの他動詞の側面を考えれば、上のように「着せる」に対応する「着る」は再帰的他動詞ではなく所有他動詞で、下位事象のみがプロファ

イルされて生成される他動詞文なのだから、実際の動作主を無視しているわけではないことがわかる。このように他動性のスケールのみ視点で「着せる」対「着る」を見ていたのでは見過ごしてしまうことが、所有他動詞の存在を考えることで正しく捉ええることができるのである。

最後に複他動詞の「着せる」についてだが、(284)に示した再帰的他動詞の「着る」が概念構造において外項と場所項の同定が解除されることによって、自分自身ではなく第三者が移動の着点として指定されるため3項述語になるという考え方があるが(286)、これでは「着る」と「着せる」の形態の変化が説明できない。そこで(287)に示したように、所有主体の他動詞文の「着る」のプロファイルされていた下位事象の語彙概念構造に、新たに動作主が付加され全体がプロファイルされるという考え方をする。これによって下位事象だけの「着る」から上位事象と下位事象をもつ「着せる」への形態の変化が説明できるようになる。

(286) 再帰的他動詞「着る」から使役変化動詞の「着せる」が派生

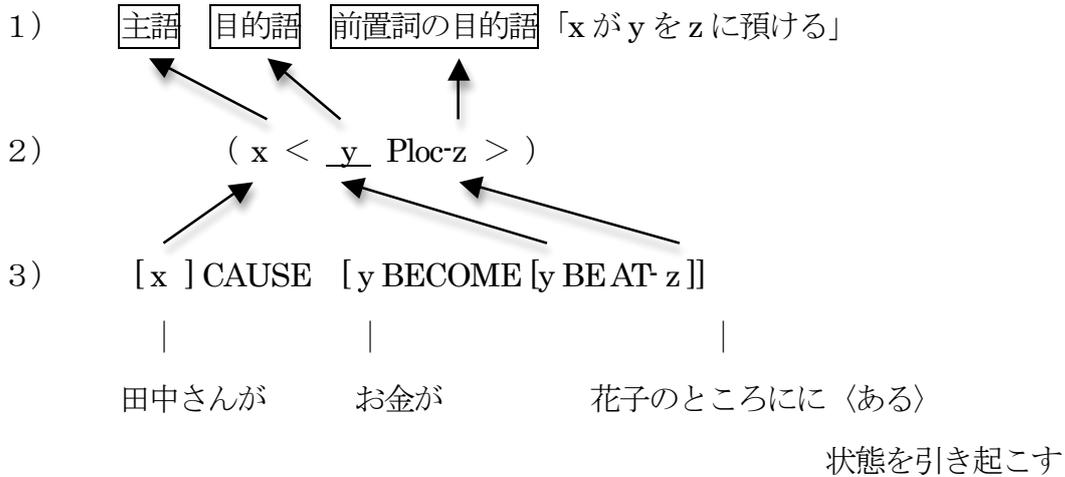
「田中さんが花子にセーターを着せる」





(288) 使役（位置）変化動詞「預ける」の他動詞文の生成プロセス

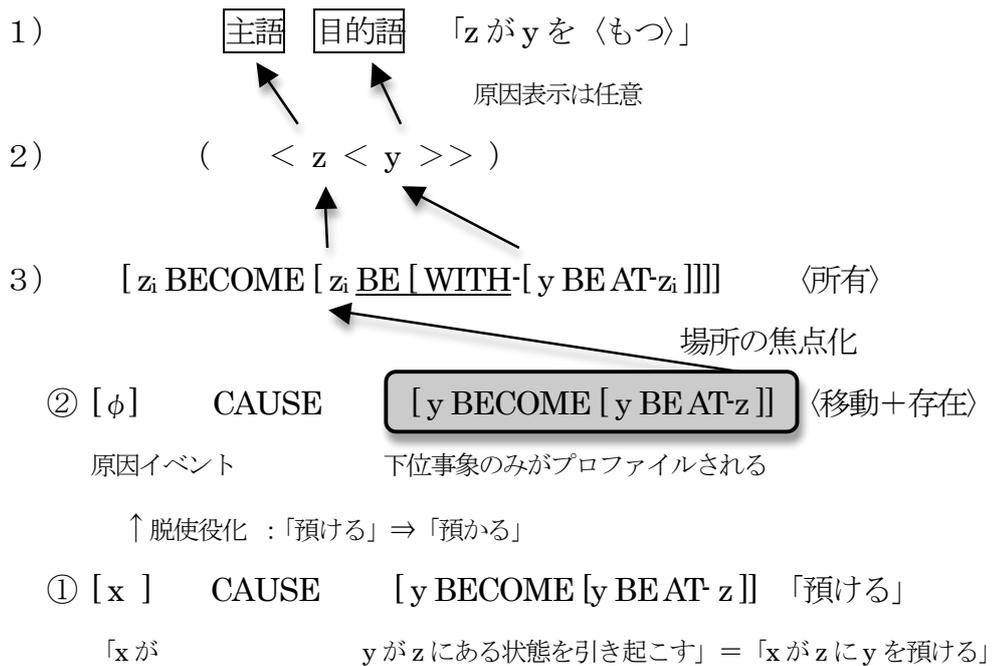
「田中さんが花子にお金を預ける」



そして、この使役変化動詞の外項 [ x ] が脱使役化で項が抑制され、これによってプロファイルされた下位事象において「場所の焦点化」を経て生成されたのが所有他動詞の「預かる」である。脱使役化によって下位事象のみがプロファイルされるタイプは「ST-d 型」と呼んだ (4.1.1 「含む」の分析を参照)。(289) にその生成プロセスを示す。

(289) 所有他動詞文の「預かる」(基本 ST-d 型)

「花子がお金を預かる」



## ■所有他動詞としての単他動詞の分析のまとめ

所有主体の他動詞文のタイプを考慮して所有他動詞としての単他動詞を整理すると、次のようになる。

### ① 「含む」

タイプ：基本 ST-a 型

反使役化によってプロファイルされた下位事象から生成される。

「(移動/発生して内部に) ある」の意味概念から「含む」が生まれる。

### ② 「着る」「被る」「浴びる」

タイプ：基本 T 型

再帰的他動詞の下位事象から生成される。

「(移動して接した状態に) ある」の意味概念から「着る」が生まれる。

### ③ 「教わる」「預かる」「授かる」

タイプ：基本 ST-d 型

脱使役化によってプロファイルされた下位事象から生成される。

「(移動してそこに) ある」の意味概念から「教わる」が生まれる。

## ■移動先が場所である 3 項述語と所有主体の他動詞文の関係

上でまとめた「教わる」(タイプ：ST-d 型)の所有主体の他動詞文は、モノの移動先が人であり、その人を主語にした構文を作る。それに対して (290b) (291b) は、同じモノの移動の意味概念をもつ動詞が移動先に場所を指定して、その移動場所を主語にした 2 項述語の他動詞文を作っている。第 3 節の理論の枠組み (3.4.4) ではこれらも所有主体の他動詞文として分析できることを示した。ここではこの所有主体の他動詞文の生成プロセスを示し、「着る」型、「教わる」型の構文との類似点、相違点を明らかにする。

(290) a. 作業員がトラックに荷物を積んだ／載せた。

b. (その) トラックは (荷台に) 荷物を積んでいる／載せている。

c. 荷物がトラック (の荷台) に積まれている。



(293) 所有他動詞「積む」(基本T型)



「着る」で分析したように、所有主体の他動詞文のベースのLCSは、「zがyを【着る】ことが、yがこのような状態でzに〈ある〉状態を引き起こす」(※【】は使役変化動詞)であり、これによって「着る」という使役他動詞の形態が受け継がれる。非再帰的構文の場合は、「(xが)zにyを【積む】ことが、yがこのような状態でzに〈ある〉状態を引き起こす」がベースのLCSとして存在し、これによって「積む」という使役他動詞の形態が受け継がれると考える。

それでは改めて「教わる」がなぜ脱使役化によって形態が変わるのかについて考えてみたい。この疑問は、なぜ「山田さんは花子に数学を教える」は「花子は数学を教える」にならないのか、ということと同じである。すぐに気がつくように、「花子は数学を教える」は「花子が数学を教えてもらう」の意味には解釈されず「教える行為をするのが花子である」という解釈を受ける。つまり、1つの事象を「与え手」と「受け手」の双方の視点から叙述する動詞が「教える・教わる」「預ける・預かる」なのである。このような特徴をもつ動詞の場合は、脱使役化によって一方の視点にたつ「与え手」の存在を抑制する必要があると言える。

最後に所有主体の他動詞文が成立する認知的な把握について考える。下位事象が「移動+存在」の意味概念をもつ動詞は、理論的には所有主体の他動詞文を生成することができる。しかし、その文が自然かどうかは「場所を焦点化して、場所の特徴として叙述する」ことが自然かどうかによる。例えば一枚の掛け軸が床の間にあるという状況を考えてみよ

う。もしその掛け軸に注目するのであれば、「床の間にはすばらしい掛け軸が飾られていたよ」と表現できる。一方、その床の間の特徴に焦点を当てれば、「床の間はすばらしい掛け軸を飾っていたよ」と表現できるだろう。

#### 4.3 C 実際の動作主を無視する他動詞文

ここでは実際の動作主を無視する他動詞文として「介在性の表現」(佐藤 1994) をとりあげ、所有主体の他動詞文とのつながりを分析する。

##### 4.3.1 「介在性の表現」(佐藤 1994) の分析 (1) : 分析の課題

###### ■ 「介在性の表現」の分析にあたっての課題 (1)

佐藤 (1994) は、「述語のヴォイスの形態が無標であるにもかかわらず、主語が動詞の示す行為の主体ではないという解釈をも許すもの」(同書 : 53) を「介在性の表現」と呼んだ。通常、日本語ではヴォイスの形態が無標 (: 受身、使役の接辞がつかない) の場合は、述語動詞の示す行為の主体が主語になるので、(294a, b) (295a, b) の動作主はそれぞれ別々のはずだが、実際には、同じ事象を叙述することができる。このような特殊な意味特徴をもつ (294b) (295b) を「介在性の表現」と呼び、どのような条件のもとでこのような他動詞文が成立するのかを分析している。

(294) 佐藤 (1994 : 54 = (2))

- a. 医者が患者に注射した。
- b. 患者が注射した。

(295) 佐藤 (1994 : 54 = (3))

- a. 大工が (山田さんの) 家を建てた。
- b. 山田さんが家を建てた。

佐藤は、介在性の表現の基本的な性格として、「使役的状况」としての意味的特徴を有している一方で、「話者が実際には存在する被使役者を無視して、あたかも主語自身がすべての過程を自分で行ったかのようにとらえている」という特徴をもっているため、「表現する事態と言語形式の間に大きなずれがある」(同書 : 57) と述べている。そして、「使役的な

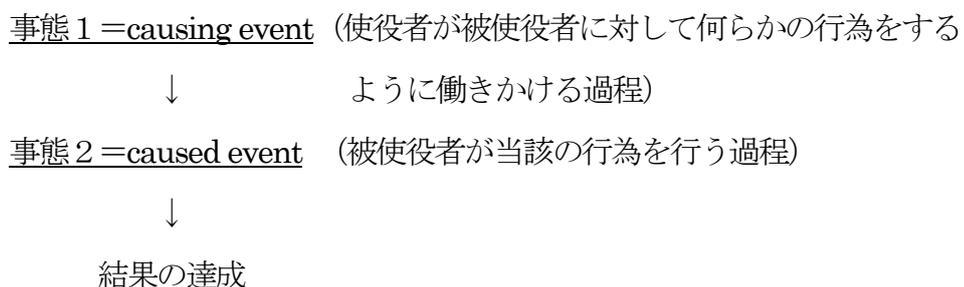
情況」としての意味的特徴を有しているといっても、(296) が示すように、多くの場合はそのような特徴を有していても介在性の表現が成立するわけではないと指摘し、介在性の表現が成立するための条件として「事態のコントロール」と「動詞の意味的焦点」という要因が関わっていると結論づけている。

(296) 佐藤 (1994 : 57-58)

- a. (患者が医師に依頼し、病気の診察を受けた場合)  
\*患者が診察した。 (介在性)
- b. (学生が教師に依頼し、推薦状を書いてもらった場合)  
\*学生が推薦状を書いた。 (介在性)

佐藤は介在性の表現が表す使役的状况を (297) のように考えた。「使役者」は「被使役者」に働きかけ (= 事態 1)、そして「被使役者」は実際に「対象」に対して動作を行い (= 事態 2)、結果が達成される。このような構図において介在性の表現が成立するには、被使役者 (= 実際の行為者) を無視して、あたかも使役者 (= 介在性の表現の主語) がすべての過程を自分で行ったかのように、話者が事態を把握しなければならないと考えた。そして、そのような事態把握には、使役者による「事態のコントロール」(298a)、「動詞の意味的焦点」(298b) の 2 つの要因が関わっていると述べている。(同書 : 58-61)

(297) 使役情況の過程 (佐藤 1994 : 57 = (10))



(298) a. 事態のコントロール

被使役者の [動作行為の過程 (事態 2)] を無視するということは、使役者が事態全体をコントロールしていると認知されなければならない。そのためには、使役者がコントロールできないような事態、つまり被使役の主観によって結果達成が左右されるような事態であってははいけない。

## b. 動詞の意味的焦点

被使役者の「動作行為の過程（事態2）」を無視するということは、動詞が表す意味がそのような過程のあり方に焦点を当てるようなものであってはいけない。

佐藤（1994）は介在性の表現を「他動詞表現の意味的バリエーションの1つ」であると位置づけ、「ボイス転換の面などでも受動化や使役化などが可能であり、通常他動詞表現と同じである」（同書：56）と考えた。これに対して、稲村（1995）は介在性の表現にあたる構文を「主宰者的な主語による使役的再帰構文」（同書：63）と考え、主語とヲ格目的語の関係を再帰構文の枠組みで捉えている。また須賀（2000）は介在性の表現を再帰が関与する場合としない場合に分けて分析している。

介在性の表現の分析でまずカギとなるのは「再帰」であり、本論文が主張する所有主体の他動詞文としての分析も「再帰」は解決しなければならない課題である。第2節の先行研究でも指摘したが、(299)に示したように、介在性の表現は再帰構文ではないが、主語名詞とヲ格名詞句が「所有者」と「所有物」（全体・部分の関係なども含む）の関係にあるものが少なくない。その点はまず認めなければならないだろう。佐藤（1994:61）でも(300a, b)の文を挙げ、「結果を主語が所有する」という関係がある点で再帰性との繋がりを示唆している。（※矢印による例文の言い換えは引用者による）

(299) a. 田中さんは美容院で髪を切った。

→（田中さんが依頼して）だれか（美容師）が、田中さんの髪を切った。

b. 田中さんはスタジオで顔写真を撮った。

→（田中さんが依頼して）だれか（カメラマン）が、田中さんの顔写真を切った。

(300) a. 太郎が胃の検査をした。

→（太郎が依頼して）だれか（医者）が、太郎の胃の検査をした。

b. 田中さんが家屋を取り壊した。

→（山田さんが依頼して）だれか（工務店の人が）山田さんの家屋を取り壊した。

しかし、須賀（2000）が指摘したように、このような再帰的な関係にはない介在性の表現があることも認めなければならない。稲村（1995）の「主宰者的な主語による使役的再帰構文」によれば、(301a) は再帰構造の枠組みでヲ格目的語の「村人」を「所有物」とみなしているので、(301b) のように考えていることになる。本論文ではこの考え方はとらず、(301c) のような意味を表していると考ええる。

- (301) a. 将軍は村人を皆殺しにした。 （介在性）  
b. （将軍が命令して）だれか（部下）が将軍の村人を皆殺しにした。  
c. （将軍が命令して）だれか（部下）が将軍のために村人を皆殺しにした。

このように考える理由は、再帰構造の枠組みにこだわると、(302a) のような介在性の表現も (302b) のように「所有者」と「所有物」とみなすことになり、把握の仕方としてやや無理があると考ええる。もちろん「N1 の N2」という言い方が不自然であっても、そのような関係にあるという見方はできるが<sup>139</sup>、むしろ佐藤（1994）のように「主語が結果を所有する」という見方のほうが (301a) にも (302a) にも合っており、所有主体の他動詞文とのつながりも見えてくると言える。本論文では (302c) の意味を表していると考ええる。

- (302) a. 田中さんは病院で注射をした。 （介在性）  
b. （田中さんが依頼して）だれか（医者）が、田中さんの注射をした。  
c. （田中さんが依頼して）だれか（医者）が、田中さんに注射をした。

以上をまとめると、介在性の表現を分析するにあたってまず課題となるのは、(303) の3つのタイプの介在性の表現の成立する理由が示されなければならないということである。

### (303) 介在性の表現の3つの構文タイプ

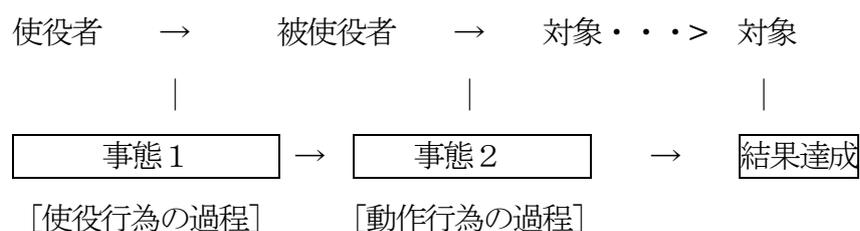
主語 (N1) とヲ格名詞 (N2) + 述部の意味関係によって3つに分類する

- ① 「N1 の N2 を V」型       : 山田さんは美容院で髪を切った。  
② 「N1 に N2 を V」型       : 山田さんは病院で注射をした。  
③ 「N1 のために N2 を V」型: 将軍は村人を皆殺しにした。

■「介在性の表現」の分析にあたっての課題（2）

次に事態の把握の仕方について考える。佐藤は（1994）は「主語が結果を所有する」という見方を示しているが、事態の把握としては、図 23<sup>140</sup>に示したように、〈仕手〉からみた他動性をもつ事態に注目している。そして、その構図の中で実際の「被使役者」が無視（脱焦点化）される条件がそろえば、結果的に「使役者」だけが焦点化されて、介在性の表現が成立すると考えた。しかし、私たちは、介在性の表現を発話するとき、「使役者」としての主語を強くイメージしているだろうか。むしろ「受益者」としての主語を強くイメージしているのではないだろうか。それはすなわち、〈仕手〉からの視点ではなく、〈受け手〉からの視点である。これが再帰と類似した統語的な特徴を有していることと関係しているのである。

a. 【使役事象の参与者と事態の局面】



b. 【介在性の表現が表す事態の局面（話者の認知）】



図 23 佐藤（1994）が考える介在性の表現

須賀（2000）は、「患者が注射をした」のような「再帰性が関わる状況」について、「「介在性の表現」の主体は、行為の主体であり、かつ状況の主体であるとも言える」（同書：29）と指摘した上で、「いわゆる他動詞文であっても、「原因－結果」という認識の枠組みだけでなく、〈受け手〉も行為者であるような、行為を中心とした認識の枠組みがあるのではないか」（同書：29）とまとめている。佐藤（1994）が〈仕手〉の視点から論じてい

たのに対して、〈受け手〉の視点で事態を把握することを指摘したのは重要である。しかし、須賀はその「〈受け手〉も行為者であるような枠組み」が具体的にどんなもので、どのように生成されるのかについては説明していない。

以上をまとめると、第2の課題として介在性の表現があらわす事態を認知主体はどのように把握して、それがどのようにして統語構造に現れているのかを明らかにしなければならないということである。

#### 4.3.2 「介在性の表現」の分析（2）：所有主体の他動詞文の拡張

##### ■所有主体の他動詞文の拡張（1）

まず課題（2）について考える。介在性の表現が意味する事態を図7のような〈受け手（受益者）〉の視点による構図に修正する<sup>141</sup>。

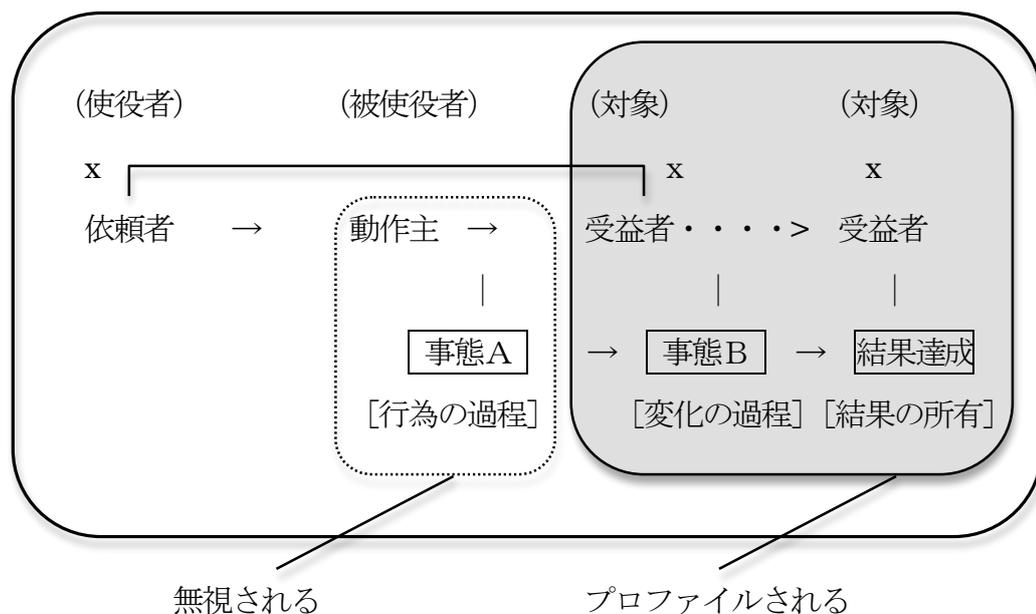


図 24 介在性の表現の参与者と事態の局面の修正案

大きな枠の中が事態を構成する要素の全体である。依頼者 (x) と受益者 (x) は同一である。この修正案は図 23-b と異なり、全体の構図のうち〈受益者〉を中心にした網掛けした部分がプロファイルされ、それが言語形式に反映されると考える。このような構図を想定すれば、介在性の表現は、「被使役者」である〈動作主〉による事態A [行為の過程] が無視されて、〈受益者〉が変化して、結果を〈所有〉する局面に焦点が当てられた表現で

あることがわかる。この[行為の過程＝事態A]は語彙概念構造における上位事象を表し、[変化の過程＝事態B]は下位事象を表している。ここに所有主体の他動詞文との接点があることがわかる。非意図的な再帰構文で、すでに所有主体の他動詞文の1つのタイプであることを示した「山田さんが殴られて前歯を折る」と比べると、構文上は並行的であるように見えるのである。ただし、これはあくまでも接点があるというだけで、同類として処理できないことは、1.3 で詳しく説明したとおりである。本論文では、介在性の表現は所有主体の他動詞文そのものではなく、その拡張であることを示す。

次に課題1を考える。図24の構図は上で説明したように、①「N1のN2をV」型にとっては「接点」があり、受け入れやすい構図だが、②「N1にN2をV」型と③「N1のためにN2をV」型は、どのようにして所有主体の他動詞文と接点をもつのだろうか。②の答えはすぐに見つかる。すでに3項述語と2項述語の関係と所有他動詞とのつながり(4.2.3を参照)で分析したように、「医者(x)が患者(z)に注射(y)をする」は「[yの移動] + [yがzに存在]」という意味概念をもつと考えることができるので、「患者(z)が注射(y)を〈もつ〉」という所有主体の他動詞文が生成されることになる。ここで「注射」はメトニミーであり、実際に移動するモノは「注射の液」である。

残る③「N1のためにN2をV」型は、〈所有〉の意味概念がどのような事態と結びついているかを考えることによって解決する。第3節の理論の枠組みの「BEとHAVEの関係」(3.2)で示したように、所有の意味概念は次のようなイベントスキーマと関連している。

(304) 〈所有〉の表現形式につながるイベント・スキーマとその原型

(Heine1997 : 47 table2.1 より)

<u>Formula</u>	<u>Label of event schema</u>
X takes Y	Action
Y is located at X	Location
X is with Y	Companion
X's Y exists	Genitive
Y exists for/to X	Goal
Y exists from X	Source
As for X, Y exists	Topic
Y is X's (property)	Equation

ここで注目するのは、「Y exists for/to X – Goal」の結びつきである。この結びつきを想定すれば、「N1 のために N2 を V」は「N2 exist for N1」と置き換えることができ、N2 の存在の意味概念から N1 が N2 を所有するという意味概念へ変換できることになる。これは、〈存在〉から〈所有〉の意味概念の変換にあたって、基本的な結びつきである「Y is located at X – Location」「X is with Y – Companion」「X's Y exists – Genitive」だけでなく、「Y exists for/to X – Goal」の結びつきまでその関係を拡張したことを意味する。これが第一の拡張の側面である。次に第二の拡張の側面を考える。

#### ■所有主体の他動詞文の拡張（2）

拡張（1）で示したように、介在性の表現の語彙概念構造の下位事象は所有主体の他動詞文を生成しうる条件が整っていると言えるが、問題は、所有主体の他動詞文は下位事象しかもたないので、動作主（外項）を持たないことである。確かに主語名詞とヲ格目的語が再帰的な関係にある場合は、受身文は同じ意味を保ったまま成立しないので、これをもって外項を持たないとすることも可能だが、これでは③の「N1 のために N2 を V」型が例外となるので統一性に欠ける（305e, f）。また、介在性の表現は意志表現が可能であることも、主語が動作主のような意味役割をもつことを窺わせる（306）。

- (305) a. 山田さんは美容院で髪を切った。（介在性）  
b. #山田さんの髪が山田さんによって美容院で切られた。（行為者が変わる）  
c. 山田さんは病院で注射をした。（介在性）  
d. #注射が山田さんによって病院でされた。（行為者が変わる）  
e. 将軍が村人を皆殺しにした。（介在性）  
f. 村人が将軍によって皆殺しにされた。

- (306) a. 「よし、美容院に行って髪を切ろうと」（介在性）  
b. 「ねえ、今日スタジオに行って子供の七五三の写真を撮りましょうよ」  
（介在性）

そこで本論文は、介在性の表現の成立条件として佐藤（1994）が示した「事態のコント

ロール」と「動詞の意味的焦点」を支持し、これによって実際の動作主（非使役者）は脱焦点化されると考えるが、それだけでなく下位事象で生成された所有主体の他動詞文の「疑似的外項」が上位事象へと拡張されると考える。これは「有対自動詞の両用動詞化」で所有他動詞の「終わる」が疑似的な外項を上位事象へと拡張させ「それじゃ、このへんで仕事を終わらしましょう」のように意志表現ができるようになるのと原理は同じである。これが所有主体の他動詞文の第二の拡張の側面である。

(305) で観察された受身化を許す場合と許さない場合の違いは、以上の2つの拡張の側面から説明できる。いずれのタイプも疑似的外項が上位事象に拡張していると考えられ、所有主体の他動詞文の通常型である①「N1のN2をV」型と②「N1にN2をV」型は、受身化については、統語上操作は可能になる。しかし、この2つのタイプの受身文は元の能動文とは意味的には違う。一方、拡張がおきている③「N1のためにN2をV」型はそのような制限を受けず、統語上の操作ができ、かつ意味的にも同じ内容を表すことができる。つまり、3つのタイプは拡張(2)によって統語上、受身化の操作は可能になるが、意味内容の同一性を保てるのは、拡張(1)によって典型的な所有主体の他動詞文からははずれる③の「N1のためにN2をV」型だけだということである。

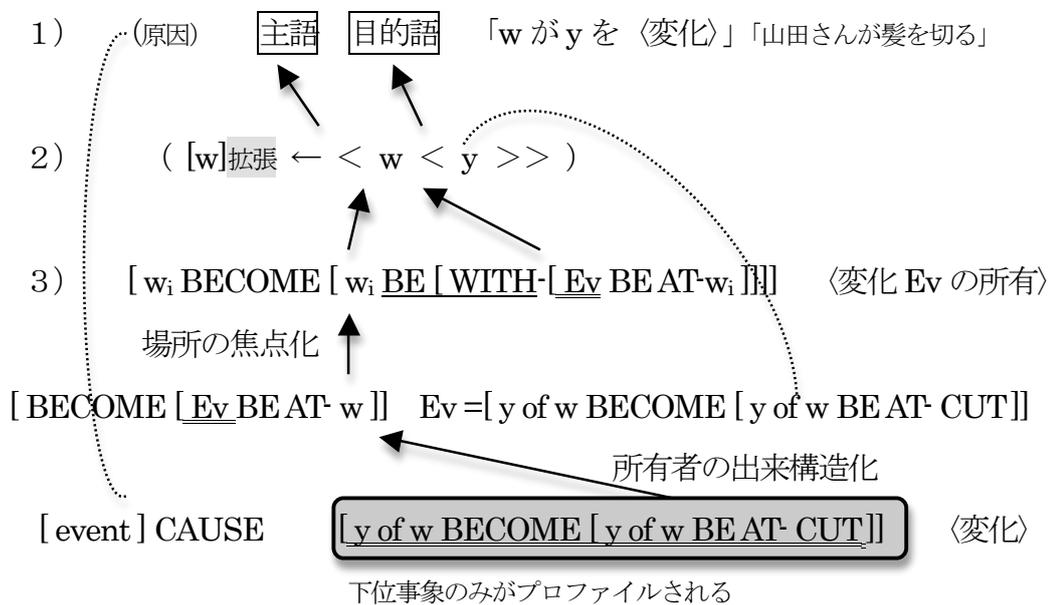
#### ■所有主体の他動詞文としての「介在性の表現」の生成プロセス

介在性の表現の①「N1のN2をV」、②「N1にN2をV」型、③「N1のためにN2をV」型が所有主体の他動詞文のどのタイプに分類されるだろうか。生成プロセスの元をみると、いずれも使役変化動詞の語彙概念構造をもっており、その使役主が「無視」されることによって通常のT型のように上位事象に原因イベントをもつベースが成立し、その下位事象のみがプロファイルされていると考えられる。この「無視」とうのは無差別に起こるわけではなく、佐藤(1994)が示した「事態のコントロール」と「動詞の意味の焦点」によっておこると考えられる。介在性の表現は実際の動作主を「無視 (Ignore) する」ことによって下位事象のみがプロファイルされるので、これを通常のT型と区別して「Ti型」と呼ぶことにする。これは「教わる」「預かる」で示した脱使役化による「ST-d型」ではないので、形態の変化を伴うことはない。「無視」という表現は適切ではないかもしれないが、適当な用語がないのでここでは「無視」として語彙概念構造では「 $\phi$ 」で表しておく。

そうすると、①「N1のN2をV」は「変化到達型」なので「変化到達Ti型」になる。②「N1にN2をV」型は「基本型」なので「基本Ti型」になる。③「N1のためにN2

をV」は拡張タイプなのでこれまで扱った型には分類できない。そこで、Heine (1997) のイベント・スキーマの名称を借りて「拡張ゴール (Goal) 型」と呼ぶことにする。そうすると最終的には「拡張ゴール Ti 型」になる。それぞれの型の生成プロセスを下に示す。各生成プロセスでは、2) の語彙概念構造において、疑似的外項 (w) が通常の外項に拡張していることを示している。このような拡張が生じ得るのは、元をたどれば実際の動作主が「無視」されているからであり、両者は表裏一体の現象だと言えるだろう。

(307) ① 「N1 の N2 を V」型の生成プロセス (変化到達 Ti 型)



「だれかが山田さん (w) の髪 (y) を切ることが、

φ 山田さん (w) の髪 (y) が cut される状態を引き起こす

↑ 無視

[x] CAUSE [y of w BECOME [y of w BE AT CUT]]

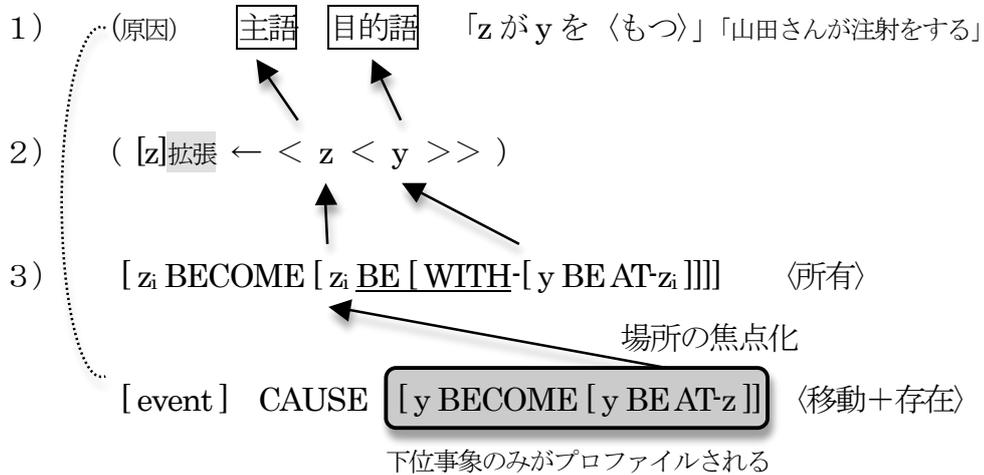
「美容師 (x) が 山田さん (w) の髪 (y) が cut される状態を引き起こす」

(= 美容師が山田さんの髪を切る)

介在性の表現の多くはこの「N1 の N2 を V」型に入る。佐藤 (1994) が挙げた例では「顔写真を撮る」「ドレスを作る」「家を建てる」「時計を修理する」「合い鍵を作る」などがここに入る。これらは佐藤が指摘したように「結果の所有」と考えれば、「(結果) 物の移動+存在」という下位事象をもつ「基本 Ti 型」と接点をもつと言える。ただ、格配列

が「N1 の N2 を」となるのか「N1 に N2 を」となるのかの違いだと考えることもできる。

(308) ② 「N1 に N2 を V」型の生成プロセス (基本 Ti 型)



「だれかが山田さん (z) に注射 (y) をすることが、

φ 注射 (y) が山田さん (z) にある状態を引き起こす」

↑ 無視

**[x] CAUSE [y BECOME [y BE AT-z]]**

「医者 (x) が 注射 (y) が山田さん (z) にある状態を引き起こす」

(=医者が山田さんに注射をする)

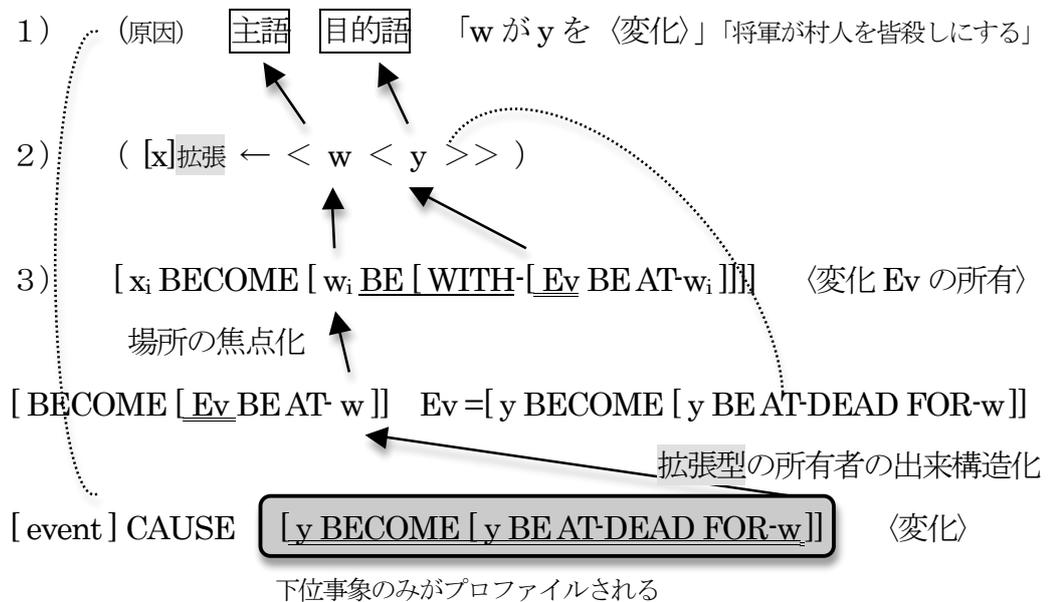
一方 (308) に示した②のタイプは所属する動詞は少ない<sup>142</sup>。これは「人と人」の二者のやりとりの場合には、動作主を無視するための条件である「事態のコントロール」と「動詞の意味的焦点」が働きにくく、仕手と受け手がそれぞれ異なる動詞で表現されたり ( : 「売る・買う」「あげる・もう」「貸す・借りる」など)、複他動詞と単他動詞でみたように形態の変化を伴う自他交替をしたりする ( : 「教える・教わる」「預ける・預かる」など) からだと考えられる。「移動+存在」の意味概念で言えば、「社長はロンドン支社から資料を取り寄せた」などは、実際の動作主が部下の場合にも成立するので介在性の表現になり得るが、「だれかが社長に資料を取り寄せる」とは言わずに「だれかが社長のために資料を取り寄せる」と表現されるところから判断すると、③のタイプだと考えられる。

(309) に示した③の「拡張ゴール型」の生成プロセスでは、プロファイルされる下位事象の概念構造に「FOR」という意味述語を設定した。この変項 (w) が通常の所有者の

ように出来構造化の対象になると考える。つまり、「wのためにVする」が「wにおいてVするというEvが発生した」という捉え方の変換がおこると考える。現段階では仮説ではあるが、このような生成プロセスを考えることによって介在性の表現の3つのタイプが同じ所有主体の他動詞文の生成プロセスの枠内で統一的に説明することができるのである。

(309) は状態変化到達型をベースにした「拡張ゴール型」であるが、②との接点を考えると、上に挙げた「社長はロンドン支社から資料を取り寄せた」は位置変化到達型をベースにした「拡張ゴール型」だと言える。「マフィアのボスは銀行から1億円を強奪した」も意味概念としては「物(金)の移動+存在」であり、同様に考えることができるだろう。

(309) ③「N1のためにN2をV」型の生成プロセス (拡張ゴールTi型)



「だれか将軍の (z) のために村人 (y) を皆殺しにすることが、

φ 将軍 (w) のために 村人 (y) がすべて死ぬ状態を引き起こす

↑ 無視

**[x] CAUSE [y BECOME [y BE AT-DEAD FOR-w]]**

「部下 (x) が 将軍 (w) のために 村人 (y) がすべて死ぬ状態を引き起こす」

(=部下が将軍のために村人を皆殺しにする)

このように3つのタイプの分類の境界は明確に決まるわけではなく、①の「N1のN2をV」も②の「N1にN2をV」も広く捉えれば、③「N1のためにV」と言い換えること

ができる。すなわち、③の意味構造は①と②を包含する、より抽象的な概念だと言える。分類についてはなお検討の余地があるが、見方を変えれば、このようなつながりがあるからこそ、①～③が所有主体の他動詞文という統一的な枠組みの中で処理できると言えるだろう。

## ■まとめ

所有主体の他動詞文の枠組みで介在性の表現を分析したが、これについてはまだ仮説の段階で、さらに検討を重ねる必要があるだろう。しかし、所有主体の他動詞文がどのように構文を拡張していくかを考える上で非常に重要な構文であることは確かである。従来の「介在性の表現」の分析との大きな違いは、「使役者」から「非使役者（＝実際の動作主）」へ、そして「対象（＝受益者）」へという〈仕手〉を中心にした3つの事態の構成を考えるのではなく、通常の使役変化動詞の語彙概念構造の枠内（語彙的ボイスの枠内）で分析している点である。こうすることによって、実際の動作主が無視されることと、受益者を主語にもつ他動詞文が生成されることが、所有主体の他動詞文という枠組みの中で統一的に説明できるのである。

## 4.4 分析のまとめ

所有主体の他動詞文という枠組みの中でA〈自動詞的な他動詞文〉、B〈自動詞の形態をもつ他動詞文〉、C〈実際の動作主を無視する他動詞文〉の3つの他動詞文を分析した。その結果、いずれの他動詞文も所有主体の他動詞文またはその拡張事例であることが明らかになった。

この分析を通して、所有主体の他動詞文の生成プロセスにはいくつかのタイプがあることを示したが、ここでそれをまとめておく。下位事象のLCSのみから生成されるS型と上位事象に原因イベントをもつ使役変化のLCSから生成されるT型の2つに大きく分けられる。そしてS型とT型の2つの特徴を合わせ持つST型というタイプがある。反使役化によるものがST-a型で、脱使役化によるものがST-d型である。これらの分類とは別に、プロファイルされる下位事象の意味特徴と所有の対象が「モノ」か「イベント (Ev)」かによって「基本型」（「存在」または「移動+存在」でモノ所有になっているタイプ）、「発生型」（「発生+存在」でモノ所有になっているか「発生・消失」でEv所有になっているタイプ）、「変化過程型」（限界性のない変件事象でEv所有になっているタイプ）、「変化到

達型」(限界性がある変化事象で Ev 所有になっているタイプ) の4つに分類される。(より詳しくは、「変化」は「位置変化」と「状態変化」の2つに分けられる。) 以上の3つの視点による分類の組み合わせで所有主体の他動詞文の生成プロセスの型が決まる。

4.1 ではA〈自動詞的な他動詞文〉を分析し、所有主体の他動詞文の型の基本となるものを示した。3.4.5で示した「所有主体の他動詞文の全体像のまとめ」に即して、4.1で分析した結果を整理しておく。

4.1.1の「状態動詞の他動詞文の分析」では、2項述語の関係動詞を中心にS型とT型の所有他動詞を示した。その中で「含む」は2つの所有他動詞(ST-a型とST-d型)と再帰的他動詞(「山田さんがゼリーを口に含む」など)の意味概念を持つことを示した。4.1.2の「非対格他動詞の分析」では、影山(2002b)が「非対格他動詞」の特徴であるとした形態の変化を伴わない自他交替は、所有主体の他動詞文の「S型」であることを示し、T型も含めて非対格他動詞を広く捉える見方を示した。4.1.3では、「自発変化他動詞構文」(杉岡 2002)は変化過程ST-a型であることを示した。4.1.4では、これまで特異な他動詞文であると見られていた「状態変化主体の他動詞文」(天野 1987b)は変化到達T型であることを明らかにし、原因が統語上に示されることがなぜ必須なのかを、T型における原因イベントの際立ちの程度によって説明した。

A 〈自動詞的な他動詞文〉

		プロフィールされる下位事象	所有タイプ
(1) 【〈存在〉の所有主体の他動詞文】			} モノ 所有
基本	S型	「存在」	
	T型	「移動+存在」	
	ST-a型	「スポンジが水を含む」	
	ST-d型	「料金が手数料を含む」	
(2) 【〈発生・消失〉の所有主体の他動詞文】			
発生1	S型/T型	「発生+存在」	
	ST-a型	「レモンがビタミンを含む」	
	S型	「非対格他動詞」(影山 2002b)「ミスを生じる」	
	T型	「非対格他動詞」(影山 2002b)「芽を出す」	

発生2 S型/T型・・・・・・・・・・・・・・・・・・「発生・消失」	}	Ev 所有
S型：「非対格他動詞」(影山 2002b)「水を噴き出す」		
(3) 【〈変化〉の所有主体の他動詞文】または【非意図的な再帰構文】		
1) 変化過程型 ※限界性なし		
変化過程 S型/T型・・・・・・・・・・・・・・・・・・「変化」		
ST-a型：「自発変化他動詞構文」(杉岡 2002)		
「風が勢いを強める」		
2) 変化到達型 ※限界性あり		
変化到達 S型/T型・・・・・・・・・・・・・・・・・・「変化+状態」		
T型：「状態変化主体の他動詞文」(天野 1987b)		
「山田さんは空襲で家を焼いた」		

4.2 ではB〈自動詞の形態をもつ他動詞文〉を分析した。これはAの他動詞文を形態論の視点から分析したものである。まず 4.2.1 で、両用動詞がヲ格をとる他動詞文は所有主体の他動詞文のS型であることを示し、なぜ自他の交替で形態が変わらないのかを、事象間の心理的な距離によって説明した。次に 4.2.2 で、有対自動詞がヲ格をとる他動詞文を分析し、形態的に対応する他動詞があるにもかかわらずT型ではなく、S型になっていることから、これを「両用動詞化」であると考えた。ごく限られた有対自動詞が両用動詞化を起こす理由として、「位置変化」の意味概念が重要な役割を担っていることを示した。ここでは状態変化と位置変化が組合わさった語彙概念構造になっており、「状態・位置変化到達型」の所有主体の他動詞文になっていることを示した。最後に 4.2.3 で単他動詞がヲ格をとる他動詞文を分析した。単他動詞は下位事象に「移動+存在」の意味概念をもち、「基本型」との共通点があることを確認し、生成プロセスのタイプによって「含む」型(基本ST-a型)と「着る」型(基本T型)と「教わる」型(基本ST-d型)の3つのグループに分かれることを示した。以上を 3.4.5 で示した「所有主体の他動詞文の全体像のまとめ」に即してまとめると次のようになる。

B 〈自動詞の形態をもつ他動詞文〉

B-2 〈両用動詞がヲ格をとる他動詞文〉

- ・S型 (自他の交替で形態の変化が起きない)

B-1 〈有対自動詞がヲ格をとる他動詞文〉

有対自動詞が「両用動詞化」によって自動詞と同じ形態の所有他動詞が生まれたと考える。(S型である)

- ・状態変化到達S型：「(目を) あく」

- ・状態・位置変化到達S型：

【実際に移動が伴う】「(手を) つく」「(席を) かわる」「(部屋を) うつる」

【移動のメタファー】「(仕事を) 終わる」「(答えを) 間違う」

B-3 〈単他動詞がヲ格をとる他動詞文〉

単他動詞も複他動詞も他動詞だが、前者は所有他動詞で後者は使役変化動詞である。下位事象が「移動+存在」の意味概念をもつ「基本T型」またはそのバリエーションの「基本ST型」である。

- ・「着る」型 : 基本T型 「着る」「被る」「浴びる」
- ・「教わる」型 : 基本ST-d型 「教わる」「預かる」「授かる」
- ・「含む」型 : 基本ST-a型 「含む」

4.3 ではC〈実際の動作主を無視する他動詞文〉として「介在性の表現」(佐藤 1994) を分析した。使役者または被使役者(実際の動作主)といった〈仕手〉の視点からではなく、受益者の〈受け手〉の視点から捉え直した。この〈受け手〉の視点からの捉え直しは、下位事象を構成する受け手の変件事象に焦点を当てることであり、それはすなわち所有主体の他動詞文の生成プロセスであることを示した。そして、所有の意味概念と構文の対応を分析し、「xのyをVする」で示される「全体・部分」「所有者と所有物」の関係、または「xにyをVする」で示される「移動先における移動物の所有」だけでなく、拡張事例として「wのためにyをVする」で示される事象にも、所有の意味概念が認められると考えた。また、擬似的な外項になっている所有者が脱焦点化された実際の主語にかわって、通常の外項の位置にまで拡張していると考え、この2つの側面での拡張をもつことから、「介在性の表現」を所有主体の他動詞文の拡張事例(Ti型)であると位置づけた。

C 〈実際の動作主を無視する他動詞文〉「介在性の表現」(佐藤 1994、2005)

広く捉えれば1) も2) も3) に含まれるが、1) と2) のような二者の関係にならないものを3) に分類することにする。

1) 「N1 の N2 を V」型

変化到達 T<sub>i</sub> 型：「美容院で山田さんは髪を切った」

※ただし、「結果の所有」と考えた場合に2) の「N1 に N2 を V」型と接点あり。

2) 「N1 に N2 を V」型

基本 T<sub>i</sub> 型：「病院で山田さんは注射をする」

3) 「N1 のために N2 を V」型

拡張ゴール T<sub>i</sub> 型

- ・状態変化到達型がベース：「将軍が村人を皆殺しにする」
- ・位置変化到達型がベース：「社長はロンドン支社から資料を取り寄せた」

## 5 結論

### 5.1 まとめ（本論文の意義）

自動詞的な事象を表すにもかかわらず、他動詞文で表現されるのはなぜか。自動詞の形態をもつにもかかわらず、他動詞文で表現されるのはなぜか。そして、実際の動作主を無視して、他動詞文で表現されるのはなぜか。この3つの疑問を〈所有〉の意味概念をもつ他動詞文という枠組みで解決することを試みた。他動詞文の生成には、他動性のスケールに裏づけられたものと、下位事象において起こる「所有者の出来構造化」「場所の焦点化」という語彙概念構造の変換によって生成されるものがあるという作業仮説に基づき、後者の他動詞文を「所有主体の他動詞文」と呼び、その生成メカニズムを示した。そして、具体的に他動詞構文および個別の動詞を分析することによってその理論の有効性を検証した。

本論文の第一の意義は、従来の研究では「経験者」または「所有者」の意味役割を与えられ、他動性のスケール上に位置づけられていた他動詞文を、下位事象において生成される所有主体の他動詞文という枠組みの中に組み込むことによって、状態動詞から発生動詞、変化動詞まで広範囲にわたって自動詞的な意味をもつ他動詞文を統一的に説明できたことである。それだけでなく、これまでは個別に研究されることが多かった「(自他) 両用動詞」「有対自動詞がヲ格をとる他動詞文」、さらには「介在性の表現」(佐藤 1994) も所有主体の他動詞文の枠組みで統一的に説明できることを示した。

第二の意義は、このような所有の意味概念をもつ他動詞文がその存在を無視できないほど広範囲にわかって観察できることを示したことである。それは、語彙的なボイス全体を捉える上で、〈する〉〈なる〉〈ある〉という意味概念の領域に〈もつ〉という領域を組み込むことが必要であることを意味している。メタフォリカルな言い方をすれば、〈する〉・〈なる〉・〈ある〉という水平方向での他動性のスケールでしか見てこなかった語彙的なボイスの構図に、〈ある〉対〈もつ〉、〈なる〉対〈もつ〉あるいは〈なる+ある〉対〈もつ〉という垂直的に対応する意味概念の領域を組み込むということである。

第三の意義は、外界の認知と言語のインターフェースとしての語彙概念構造に注目することによって、所有の意味概念をもつ他動詞文が認知文法で言うところの「図地反転」や「参照点構造」と深く結びついていることを示したことである。自動詞文と所有主体の他動詞文の関係は事象の認知的な把握の違いによるもので、使役変化の他動詞文の関係とは異質である。それがこれまでの先行研究では十分解明されていなかった。自動詞的な事象

を表現しているにもかかわらず他動詞構文を作ること、認知言語学的な視点から分析し、自動詞の下位事象の LCS が「場所の焦点化」や「所有者の出来構造化」という認知的な把握によって変換することで、所有主体の他動詞文が生成されることを明らかにした。また、このように参照点構造と深く結びついている点で、二重主語構文「～は～が」と接点をもつことも示した。

第四の意義は、所有主体の他動詞文に S 型と T 型の 2 つのタイプを認めることによって、従来の研究では特異な他動詞文として扱われていた「状態主体の他動詞文」(天野 1987b) も所有主体の他動詞文の 1 つのタイプにすぎないことを示した。

最後に言語類型論的にみた場合、本論文が主張する所有主体の他動詞文の存在は、日本語が「なる型」言語(池上 1981)であることを示す重要な統語現象の 1 つだと言える。下位事象があらわす「なる」(または「ある」)の意味概念が基本であり、それに依拠して生成される所有主体の他動詞文の「もつ」の意味概念は、日本語の自他動詞の文法体系において 1 つの基盤を形成する重要な概念だということである。そして有対自動詞でヲ格をとる他動詞文(「～を終わる」「～をかわる」「(口)をあく」など)の意志表現と「介在性の表現」(佐藤 1994)を例にとり、日本語には「もつ」の意味概念から上位事象へと構文を拡張するパターンがあることを示した。

## 5.2 今後の課題

本論文は、認知主体の外界の事象の把握の仕方という認知文法の視点を取り入れ、また語彙意味論的なアプローチで、語彙概念構造を用いて所有の意味概念をもつ他動詞文を分析した。その結果、上述の本論文の意義でも触れたように所有の意味概念をもつ他動詞文が広範囲にわたって存在することが明らかになった。しかし、所有主体の他動詞文の存在および生成プロセスの理論は、まだ十分に検証されているとは言えない。語彙意味論の観点、認知文法の観点、そして統語論の観点からもさらに検証をすすめ、理論を精緻化していく必要がある。また分析対象についても、今回まったく取り上げることができなかった心理動詞、そして意図的に除外した移動動詞のヲ格目的語とのつながりも今後検討する必要があるだろう。

所有の意味概念をもつ他動詞文は日本語に限ったことではないので、対照言語学の観点から日本語における所有他動詞の振る舞いがどのような特徴をもっているのかを考察する必要があるだろう。特に参照点構造と深く結びついている「所有者の出来構造化」は日本

語で特に発達している認知的把握なのかどうかは興味深いテーマである。そして、第二言語習得の観点からも、所有他動詞の習得の難易度を調査し、誤用・非用の実態を把握し、日本語教育における自他動詞の指導に役立てることも考えたい。さらに、所有の意味概念をもつ他動詞文は、ヴォイスの体系のみならず、〈所有〉の意味概念をもつ文法形式にも応用されることが期待される。例えば「ある」については、アスペクトを表す「～を～してある」、習慣・経験を「～する／～したことがある」なども〈所有〉の意味概念で分析可能だと思われる<sup>143</sup>。最終的には、日本語の文法体系の中で、所有主体の他動詞文および所有他動詞を正しく位置づけ、その存在意義を明らかにし、文法理論と応用の両面に貢献することが目標である。

## 註

- 1 杉本 (1995)、杉岡 (1996)、森山 (2003) などがある。
- 2 詳しくは、「<他動性>—つまり、動詞によって表される行為が何らかの他者なる対象に向けられているかどうか、そしてもし向けられているならば、行為がその対象にどの程度影響をおよぼすか、という点について話者の認知—が<自動詞>—<他動詞>の区別に深く関わっているということは、現在では研究者の共通の認識である」と述べている。
- 3 述語が項をいくつとるのかについては、明確な基準があるわけではないが、概ね必須補語と呼ばれるものに対応する。ここでは、「必須」という概念を長谷川 (1999 : 22) に従って、述部が表す「情報の完結性」という視点で捉えておく。
- 4 (1) の各文は受動化ができない点では統語論的な他動詞としての条件に欠けるが、ヲ格をとる目的語があるという点で統語論的に他動詞だと判断する。
- 5 ここでいう「主体性」とは、ある事態が起こらないように自分の動作をコントロールするという意味での主体性である。例えば「転んで骨を折る」ことは偶発的な事故ではあるが、それが起こらないように注意することによって主体性を発揮できるということである。
- 6 ヤコブセン (1989 : 225-230) の「他動性を表す異なった文法特徴の間に生じるズレ」とほぼ重なっているが、本論文の主旨に合わせてまとめ直している。なお、池上 (1993 : 36-37) にも同様のズレの指摘がある。
- 7 「含む」と「含める」については 4.1.1 の状態動詞の他動詞文の分析と 4.2.3 の 2 項述語と 3 項述語の分析で取り上げて具体的に論じる。
- 8 奥津 (1967) が「自動化転形」と呼んだペアである。「-er(u) (文語では「-(u)）」と「-ar(u) が他動詞と自動詞になる。「上げる・上がる」「かける・かかる」「決める・決まる」などがある。
- 9 奥津 (1967) が「両極化転形 (1) 」と呼んだペアである。「乗る・載せる」「寄る・寄せる」などがある。
- 10 奥津 (1967) が「両極化転形 (2) 」と呼んだペアである。「あく・あける」「進む・進める」「立つ・立てる」などがある。なお、両極化転形 (2) には二種類のタイプがあるが、歴史的にみると、自他同形で活用型によって自他が交替していたタイプである。小柳 (2008) では、この二種類のタイプに現れる、自動詞化にも他動詞化にも働く「-er-」の働きを考察し、自他頭在化辞として位置づけた。本論文の 4.2.3 でこのことはまた取り上げられる。
- 11 (10) の cf. の言い換えは本論文の筆者の考え方によるものである。
- 12 中村 (1998) では、際立ち (トラジェクターとランドマーク) と参照点構造 (参照点とターゲット) の 2 つのうちどちらがより言語型式に反映するかを考察し、英語は際立ちに、日本語は参照点構造に敏感に反応する言語だとしている。
- 13 「所有者の出来構造化」については、3.4.2 で具体的に説明するが、「出来 (しゅったい)」という用語は、尾上 (1998-1999) の「出来文」という事態の捉え方にヒントを得ている。
- 14 ここで言う「2つ」とは、「使役変化 (他) 動詞」と「働きかけ (= 打撃・接触) 動詞」のことではなく、下にしたように、2 つの動機付けによって生成される他動詞のことを指す。
- 15 眞野 (2004b) は「他動詞と自動詞は一元的に連続しているものとして捉えられる傾向があった」ことを批判し、Croft (2001) の「概念空間」(conceptual space) を用いて非規範的構文を分析しているが、この概念空間における位置づけは、本論文の「自動詞」と「所有他動詞」(所有の意味概念をもつ他動詞文) の関係と重なるところがある。
- 16 意味役割と格の対応は 1対1 ではない。ここでは動作主、原因 (、経験者)、所有者が「ガ格」で表示され、対象がヲ格で表示されるものを取り上げている。対応の多様さについては、角田 (1991 : 177-179) などを参照。
- 17 1.1.1 で取り上げた (1a, b) などは主体的な関与が少なくとも認められるという点において、ここでいう“接点”に位置している事例だと考えられる。しかし、本論文では、対応する自動詞があることから、これらも基本的に所有主体の他動詞文の 1 つの型として分析する。
- 18 図 4 では、M1 のスケールに対応する他動詞を、使役変化動詞に、自動詞を非対格自動詞に限定して表示している。これは本論文の研究対象である「所有主体の他動詞文」の成立に関与するのが使役変化をもつ事象であるという事実に基づくもので、実際には M1 のスケールに対応する他動詞には、「打撃・接触」を表す他動詞が、自動詞には「歩く」「泣く」などの非能格自動詞が存在する。これについては 3.1.1 の「語彙概念構造」の解説を参照。

- 19 水平方向の点線のつながりは、第一には自他の交替を示している。矢印になっていないのは、自他の交替には自動詞化と他動詞化の両方向があるためである（※発生・消失は純粋に非対格性をもつので、自他交替は他動詞化しかない）。そして、[M1] と [M2] の共演に際しての水平方向の点線のつながりは、〈所有主体の他動詞文〉の統語上の振る舞いに影響する。詳細は第3節の「T型」の説明を参照。
- 20 使役変化の意味概念を表すものとして3つを挙げた。「2 使役発生」は造語であり、適当な言葉がないため、これを使用した。自動詞の「発生」の概念に対応する使役他動詞のことである。英語にはこのような自発的な現象に形態上対応した他動詞はないが、日本語の場合には「(事故が) 起こる」に対して「(事故を) おこす」という他動詞が存在する。「生産」は「生産・作成動詞」のことで、対応する自動詞の概念は、ここでは「発生」と考えている。
- 21 理論的には、a0~a4, b0~b3, c0~c3 の12が考えられるが、実際は、「2 使役発生・生産」の他動詞は、自動詞で「発生・消失」のみと対応するので、全部で8になる。
- 22 ‘0’は自動詞から生成されるので対応する「使役変化動詞」はないはずだが、「0\*’ と ‘0+’ は〈有対自動詞がヲ格をとる他動詞文〉の生成プロセスを示すために作ったものである。詳しくは第3章の理論の枠組み(3.4.4)と第4章の構文分析(4.2.2)で論じるが、〈有対自動詞がヲ格をとる他動詞文〉は有対自動詞の「両用動詞化」という見方をとる。両用動詞は基本的に‘0’に分類されるのだが、有対自動詞は対応する使役変化他動詞をもつため、このような変則的な分類項目を設けてある。
- 23 「つける」「つく(着く)」は分類B-1〈有対自動詞がヲ格をとる他動詞文〉に該当する。このB-1がこのa0\*とa'0\*と関係しているというのが本論の考え方である。具体的には第3章の理論の枠組み(3.4.4)と第4章の構文分析(4.2.2)で論じる。
- 24 「垂らす」「垂れる」は分類B-1〈有対自動詞がヲ格をとる他動詞文〉に該当する。このB-1がこのa0+とa'+と関係しているというのが本論の考え方である。具体的には第3章の理論の枠組み(3.4.4)と第4章の構文分析(4.2.2)で論じる。
- 25 「載せる」が‘a1’に分類されることについては、3項述語と2項述語のつながりの中で、第3節の理論(3.4.4)と第4節の分析(4.2.3)で具体的に論じる。
- 26 「嘔く」はB-2〈両用動詞がヲ格をとる他動詞文〉の動詞で、‘0’のところに入る。これは所有主体の他動詞文の理論において重要な意味をもつのだが、これについては第3節の理論の枠組み(3.3.4)と構文の分析(4.2.1)で具体的に示す。
- 27 「増す」はB-2〈両用動詞がヲ格をとる他動詞文〉の動詞で、‘0’のところに入る。これは所有主体の他動詞文の理論において重要な意味をもつのだが、これについては第3節の理論の枠組み(3.3.4)と構文の分析(4.2.1)で具体的に示す。
- 28 理論の枠組み(3.3.3)の解説を参照。
- 29 金田一(1950)では、状態動詞は「ている」がつかない第1種と必ず「ている」がつく第4種の動詞とに分類された。前者には「(3時間を) 要する」、後者には「高い鼻をする」「丸顔をする」などが語例として記述されているだけである。
- 30 金水(1994:56)は「金田一の見逃していたもう1つの類型が存在する」として、それを「第五種動詞の形状動詞」と呼んでいる。
- 31 定まった名称を与えてはいないが、高橋(1975)も、「所有する」「所属する」という動詞が「ル形」でも「テイル形」でもほとんど意味が変わらないことについて、「どうしてこうなるのか」というと、これらの動詞が、動詞ではあるが動作をあらわさず、所有・所属という関係だけをあらわしているからである。(同書:2)と述べている。
- 32 状態動詞の下位分類については、山岡(2000a:104-105)が金田一(1950)以降の先行研究を踏まえてまとめている。
- 33 元々動的な事象を表す動詞が恒常的な属性として解釈されるようになった「連語」はそれ自体が自動詞相当の慣用句となっていると判断し、たとえヲ格をとっていても取り出していない。(例:威力を発揮する、目を引く、など)
- 34 (19)の「数量関係」は「占める」を除いて、空間移動の経路を示すヲ格が数量の標示に拡張されていると考えられる。
- 35 「にーが」の格枠組みは、非規範的構文または「与格主語構文」と呼ばれるものと関係しているが、それについては第4節の状態動詞の他動詞文で少し触れる。詳しくは、柴谷(2001)、久野・ジョンソン(2005)岸本(2005)などを参照。
- 36 稲村(1995)の再帰構文の定義は以下のとおりである。「主語の位置に示されているもの(以下「主語」と略記する)と、補語の位置に示されているもの(以下「補語」と略記する)が所属関係をもつ文を「再帰構

文」と呼ぶ。補語が主語からみて他者ではなく、主語の関係しているもの（身体部分・関係者・全体一部分の関係、など）である場合を「主語が補語と所属関係を持つ」「補語は主語の所属物である」とし、これらの関係を含む文を再帰構文とする。」（同書：56 ※下線は引用者による）

- 37 高橋（1975）と分類項目は同じ。一部用例の差し替えと補充があるが、基本的に同じ内容である。
- 38 この例文は『蟹工船』小林多喜二（新潮社）より。
- 39 “My guitar broke a string.”は中村（1998：255）より。中村はこの文を、英語は主語が無生物であっても、認知的にもっとも際立っているものを主語に据え、次に際立っているものを目的語に据えることの例として出している。
- 40 キャンセル文の詳細は、宮島達夫（1985）などを参照。
- 41 日本語に数多く存在する自動詞と他動詞が形態上、対になっているものが、これに該当する。ただし、本論文がその存在を主張する「所有主体の他動詞文」を作る動詞を考えると、？に入る動詞であっても、形態の変化を伴うものがある。これについては理論の枠組みの「T型」の解説を参照。
- 42 「着る」「かぶる」などの、移動先が自分自身に指定された再帰動詞であるが、「持つ」も同様の意味概念をもつ動詞だと考えられる。本論文では、「持つ」はA（自動詞的な他動詞）で二者の関係を表す状態動詞の1つとして、4.1.1で扱うが、単他動詞と複他動詞の関係をもつ「着る」「かぶる」は4.2.3で扱う。
- 43 [+Deg]は、挿入される形容詞が段階性をもつことを示す。（同書：106）
- 44 坂野自身も「vP-shell 構造は、語彙概念構造とは全く別の統語論的立場から提案された構造であるが、大ざっぱに言えば、上位（外殻）vPと下位（内核）VPが、語彙概念構造の上位事象・下位事象に対応する」（同書：80）と述べている。しかし、異なる部分がある。vP-shell 仮説では、動詞Vの補語で「対象」の意味役割を与えられる名詞句は、構造では下位事象にあたるところに来ているが、語彙概念構造と項構造の対応規則（影山1996）では、下位事象に目的語（＝内項）をもつのは「使役変化動詞」で、「打撃・接触動詞」は上位概念しかもたないの、目的語は上位事象から項構造にリンクされる。どちらが正しいということではなく、アプローチの違いによるものである。
- 45 坂野はX1~3の組み合わせで、（理論的にありえない組み合わせは除いて）6つのタイプに分類している（同書：80）。下位事象しかもたない（＝X1を持たない）動詞のうち、X2だけをもつ動詞が「所動的自動詞」（つまり非対格自動詞）で、X2とX3の両方をもつのが「所動的他動詞」（つまり非対格他動詞）となる。
- 46 存在と所有の関係について、vP-shell 仮説に基づいて分析したものとして竹沢（2000a、2003）などがあるが、分析の中心は動詞「ある」である。授与構文の分析では本論文の対象とする構文とつながりがあるが、それ以外は、「～である」構文を、存在と所有の関係を当てはめて分析している点が注目される。
- 47 坂野は、次のようにBurzioの一般化を再定義している。「基底（二重構造）動詞句の、どちらかの指定部に「項」があれば目的語に対格を与えることができる。」（同書：83）
- 48 「300 ページの本を読む」という場合には、本の属性解釈が優先され、「ページが全部で300である本を読む」と解釈されることと原理は同じである。
- 49 ここでは簡単に「太郎の・・・切れた」から「太郎は・・・切った」になっているが、M1とM2の共演は実際にはこのような単純なものではない。二者の共演の詳細は3.3.4を参照。
- 50 奥津（1967）のいう「他動化転形」である。この場合、自動詞（文語「生ゆ」）「hay-u」が他動詞化接辞「-as-」によって「hay-as-u」（生やす）ができると考える。文語動詞の終止形による自他の対立関係の分類は、小柳（2008）も参照。自然発生的な事象を表す「生える」に対して、「主体が意図的に（切らずに）生えることを阻止しない」という主体のコントロール性が認知されることによって、他動詞化接辞をとり「生やす」が生まれたと考えられる。他動詞の意味が自動詞に接近していると感じるのは、元々「生える」が自然発生的で人間がそれを完全にコントロールすることができないからであって、それをあえて他動詞構文（ヲ格名詞をとること）によって表現する動機付けこそが問われなければならない。
- 51 挙げられた8つの分類を見ると、(3)他動現象の結果が自動現象と同じと見るグループ、(4)他動行為の結果として自動現象が生じると見るグループ、(5)自他両文型で動作主・現象主が入れ替わるグループなどが、一部本論文が研究対象とする両用動詞の特徴を備えていると思われるが、分析対象からははずしている。
- 52 c「手を着く」、d「目を閉じる」は主語にたつ人の意図的な動作に用いることもできるが、ここでは非意図的な動作を表す用法として扱っている。
- 53 「自他両用とは、同じ語形が意味面で自他間に共通性を持ち、文法面でも格に立つ名詞語彙に異同がない場合を指すのが厳密な意味での概念規定であろう。（中略）両用とは、あくまでその語が同じ意義素の範囲の中で自他の両方を兼ねるという意味である。」（同書：左12）と述べている。その結果、本論文で取り上げた森田（1990）の(1)を中心にそれ以外に分類されているものがいくつか追加された。
- 54 須賀は、(イ)については、本居春庭（1828）『詞の通路』、大槻文彦（1897）『広日本文典』などを挙げ、

(ロ)については三矢重松 (1908)『高等日本文法』を、(ハ)については松下大三郎 (1977)『増補校訂 標準日本語法』を紹介している。

- 55 松下大三郎は基本的にこのように「ヲ格をとるものは他動詞である」という考え方である。(松下大三郎 1923-1924)
- 56 佐藤 (2005) では、名称を「介在性の他動詞文」に変更しているが、中身が変わったわけではないので、本論文では、佐藤 (1994) とのつながりを考慮して「介在性の表現」という呼称を用いる。
- 57 天野 (2002) の「基準的な意味」とは「構文類型の持つ意味、すなわち、それぞれの構文類型に属する文ならばどのような文も持っていなければならないような意味のこと」である。(p11)
- 58 構文からのアプローチの意義は認めるが、同じことが語彙意味論からも説明でき、かつ LCS の変換によって生成される〈所有主体の他動詞文〉という枠組みを考えることで、より多くの構文の生成を説明できると考える。
- 59 Vendler (1967) は動詞 (句) をアスペクトによって①状態 ②到達 ③活動 ④達成の4つに分類した。この順番で語彙概念構造の基本パターンに対応している。
- 60 脚注 3 を参照
- 61 内項と名称は、動詞句の内側 (補部) に位置することからで、他動詞では目的語、非対格自動詞では (非対格仮説に基づき) 主語として統語構造に投射される。このような基底構造における位置は外項と比べて動詞との結びつきが強いことを意味しており、それは語彙部門で形成される複合語などにも影響を与えている。(詳しくは影山 (1996)、岸本 (2005) を参照)
- 62 語彙概念構造における構造変換によってその表示位置は異なるが、z は原則としてデフォルトでは間接内項 (典型的には位置か状態を表す項) として使用する。
- 63 ここでは「死ぬ」を下位事象しかもたない非対格動詞として扱っているが、「死ぬ」に限らず、1つの動詞が1つの動詞クラスに固定されているわけではない。もちろん多くの動詞は典型的な意味でいずれかの動詞クラスに属するわけで、その点で言えば「死ぬ」は非対格動詞に分類される。しかし、「自らの意志で自身の命を絶つ」場合にも「死ぬ」が使えることからわかるように、使役変化動詞としての用法もある。
- 64 「格フィルター」とは、「音形のある名詞句には、抽象格が付与されていなければならない」(Chomsky 1981 : 49) という条件である。日本語に即して言えば、名詞句は常に助詞を伴わなければならないという条件である。
- 65 「活格型」は山口 (2003) で使われている名称である。角田 (1991) では「動作格型」と呼んでいる。自動詞の主語が意図性の有無によって「動作格/活格」(active) と「非動作格/不活格」(inactive) が区別されるタイプの言語である。
- 66 「図と地の反転」とは、知覚の対象において、図と地の役割が逆転することで、図として捉えられていたものが背景となり、地として捉えられていたものが前景になることを言う。
- 67 影山 (1991) と三宅 (1996) では、ヲ格を伴って他動詞になっているにもかかわらず、受身化において主語を省略できない「新雪が山頂を覆っている」「深い堀が城を囲んでいる」の特異性に注目している。これは本論文の〈所有主体の他動詞文〉とも関連するので、3.3.7 で取り上げて論じる。
- 68 生成文法の *v* P-shell の二重 VP 構造による分析については竹沢 (2003a、2003b) も存在・所有の統語関係を埋め込みの形になっていると考えている点で、本論文が想定する存在と所有の概念構造の対応と共通したものがあると考えられる。
- 69 原文は以下の通り。All and only the verbs that can assign a  $\theta$ -role to the subject can assign accusative Case to an object. (Burzio1986 : 178) ※文中の subject は external subject (agent) を指している。
- 70 影山 (1996 : 56) では、'BE WITH' と〈所有〉の概念のつながりについて、know = be with knowledge、believe = be with belief という Foley & Van Valin (1994 : 49) の分析、および wight = be with weight、cost = be with cost、last = be with duration という Klooster (1972 : 84-87) の分析を紹介している。
- 71 例えば、三宅 (1996 : 146) は、移動動詞のヲ格の分析でこのような説明をしている。
- 72 移動動詞のヲ格は本論文では扱わないが、経路のヲ格の場合、無生物でも「石が坂を転がる」などが言えることは、説明されなければならないだろう。また、「～をする」のヲ格については、今泉 (2003) が「損をする」などを取り上げて、非対格動詞にもヲ格をとることを指摘しているが、これについては、本論文の〈主体変化の他動詞文〉になっているからだと説明できるだろう。
- 73 ただし、どちらの構文も最初の名詞句は主語の特徴をもち、二番目の名詞句は目的語の特徴をもつという指摘もある。詳しくは、柴谷 (2001)、久野・ジョンソン (2005)、岸本 (2005) などを参照。
- 74 「含む」は 4.1.1 の考察によって「ST 型」に分類されることになるが、ここでは S 型に入れておく。
- 75 本論文では、所有をあらわす「ある」「もつ」の用法の違いには立ち入らない。これについては、角田 (1991)、

澤田 (2003) などを参照のこと。

- 76 「着る」「被る」も移動の着点に自分自身が語彙的に指定されている点では「持つ」と同じだが、こちらは「テイル形」で活動の最中を表すことができる点で、「持つ」とはアスペクト特性がやや異なる。
- 77 所有主体の他動詞文の「基本型」では「場所の焦点化」のみがかかわるが、後で示す他のタイプでは「所有者の出来構造化」もかかわってくる。詳しくは 3.4.2 を参照。
- 78 この「接点」にはこれまで「経験者」として位置づけられていた、非意図的な変化事象が位置づけられると考える。例えば (1 a, b) の「転んで骨を折った」や「期末評価で成績を下げた」など。この接点の位置づけについては、最終的な結論は保留するが、本論文では S 型と T 型の生成理論の統一性を優先し、「経験者」の意味役割は「所有者」に含め、(128) で示のように M1 と M2 によって他動詞文が生成されると考えることにする。
- 79 ここでいう「触発」とは、他動詞文の生成に直接関与するわけではないが、我々が経験からスキーマとしてもっている使役変化事象 (使役者による行為とそれによって引き起こされる変化) の概念が、所有主体の他動詞文の生成に間接的に関与することを意味している。
- 80 126 冊の小説を調査した新居田 (1999) によれば、所有を表す「ある」「いる」「もつ」のうち、未来時制で使われたのは「もつ」だけだった。(同書 : 254 表 4)
- 81 「含む」は 4.1.1 の考察によって「ST 型」に分類されることになるが、ここでは S 型に入れておく。
- 82 「欠く」は後に説明する「発生・消失」の他動詞ともつながっている。「欠く」の生成プロセスについては 4.1.1 を参照。
- 83 原因の際立ちを決める要因に、その比重に応じて次のようなポイントをつけてみる。「位置変化」= 1, 「発生・生産」= 2, 「状態変化」= 3, 「モノ所有」= 1, 「変化過程」= 2, 「変化到達」「発生」= 3。そうすると、a'3=6 ポイント、b'2 c'3=5 ポイント、c'1=3 ポイント、a'1=2 ポイント、という数値が得られる。
- 84 理論上は「a0 移動+存在」に対応する「a0 モノ所有」「基本 S 型」というタイプ、および「a3 移動+存在」に対応する「a3 変化到達 Ev 所有」「変化 T 型」というタイプも存在するはずだが、(139) には入れていない。タイプとしては存在するが所属する所有他動詞の実例は少ないと考えられる。
- 85 原著ではこの分類 f については、c に含めるべきかもしれないとコメントしており、影山 (1996) ではそれに従って f はたてずに、c に含めている。
- 86 例えば、日本語の「死ぬ」と英語の 'die' の分類の不一致については、岸本 (2005 : 109-110) でも指摘されている。また Purlmutter & Postal (1984) の分類にも、'involuntary' という註付きで掲載されている動詞が複数存在する (例 : lie, bend, sit など)
- 87 「BECOME の前に置かれた y は、BE の主語 y と同じ物体であるが、意味的にはそれが状態変化を被る前の姿を表している。このように、変化前の存在が認識されるときには、BECOME の前にも y をつけることにしよう」(影山 1996 : 111)
- 88 影山 (1996 : 51) で前置詞の 'from' にあたる意味述語として 'NOT-AT' を規定している。従って、この (26) の概念構造は、「y が z の外にある状態になる」と解釈される。
- 89 ただし、この 2 つが明確に区別されるわけではない。また同じ動詞でも 2 つの概念をもつ場合もある。「花子が熱を出す」は「熱がある」とほぼ同義で「熱を持っている」ことを意味しているが、「この大学は多くの政治家を出している」は、母体から離れることを意味している。
- 90 図 10 に示したように事象そのものは同じで、違いは視点の取り方だけといっても、「意味」も対照的というわけではない。「消失」には「元々あるべきものがそこから出て行く」という意味があるが、「発生 2」にそのような価値判断はない。
- 91 「山田さんにおいて事故が起こる」と考え、抽象的な意味概念ではあるが、「事故」を山田に付随して発生したとみる。
- 92 この「熱が出る」は実際に体外に熱が放出されるという意味も表すことができるが、病気で熱が出るといった場合は、「熱がある (= を持つ)」の意味で使われている。
- 93 この文では「出た (= 卒業した)」のは学生であって政治家ではないのでメトニミーになっていると考えられる。これについては 4.1.2 の「出る」「出す」で取り上げて論じている。
- 94 原文は以下の通り。"The reference-point phenomenon is so fundamental and ubiquitous in our moment-to-moment experience that we are largely oblivious to it. For the analysis of possessives, it is best described as the ability to invoke the conception of one entity for purposes of establishing mental contact with another, i.e., to single it out for individual conscious awareness."
- 95 日本語の表現としてやや不自然に感じるかもしれないが、これはあくまでも「意味概念」の説明であり、直接この日本語が表出するわけではない。上の「[原因イベントが] 事故を起こす」の意味概念もそうであるが、

重要なのは、上位事象に原因イベントが付加されることによって、ベースとなる語彙概念構造が使役変化動詞の概念構造ももつという点である。この「なくす」の例でも、「なくなる」という自動詞に対して「この地域からゴミをなくす」「この世から戦争をなくす」のような意図性をもった使役変化(他)動詞に触発されて、原因イベントが付加されたベースの語彙概念構造も使役変化動詞と同じ形態の動詞を用いるというのが本論文の主張である。

96 この文での元になっている「政治家が出る」では、「出た(=卒業した)」のは学生であって政治家ではないのでメトニミーになっていると考えられる。これについては4.1.2の「出る」「出す」で取り上げて論じる。

97 意味述語のMOVEは限界性をもたない動詞の意味概念に用いられるが、付加詞が付くことによって限界性をもつ表現に変わる。「TO-z」がそれを示している。例えば「流れる」は動詞の意味概念としては限界性を持たないが、「海に流れる」となれば限界性をもつ表現に変わる。

98 変化過程T型の一部は、後の分析でST型として分類されることになる。(詳細は4.1.3を参照)

99 これについては、構文分析の4.2.1「両用動詞の位置づけ」で詳しく論じる。

100 ここでは「-(u)」(口語では「-er(u)」)が自動詞で「-as(u)」が他動詞化接辞として働いているので、「垂らす」は「垂れる」(文語「垂る」)の他動詞化と考える。(類例:「逃げる・逃がす」「増える・増やす」など)ただし、歴史的な活用型と自他の対応の変遷を考慮し、構文分析(4.2.2)で「活用型による自他交替のタイプ」との繋がりを考え、最終的には両用動詞化ではないという判断を下す。

101 ここでは「-(u)」が自動詞で「-er(u)」が他動詞になっている。(類例:「進む・進める」「沈む・沈める」など)ここでは、単に他動詞化としておろが、構文分析(4.2.2)では、「活用型による自他交替のタイプ」の「自他顕在化」に分類をし直す。奥津(1967)の「両極化転形(2)」の中の他動詞化に相当する。また、小柳(2008)で自他顕在化辞「-er」による自他交替と呼んだもので、「-er」が他動詞を顕在化する働きをしているものに相当する。

102 ここでは「-(u)」(口語では「-er(u)」)が他動詞で「-ar(u)」が自動詞化接辞として働いているので、「終わる」は「終える」(文語「終ふ」)の自動詞化と考える。(類例:「当てる・当たる」「止める・止まる」など)

103 下位分類の「数量関係」に分類されている「上回る」「越える」などは、ヲ格をとるが、移動動詞のメタファーで、対象をスケール上に位置づけるという意味になっており、〈所有〉の概念とは関係がないため、本論文では扱わない。

104 以下では、特に理由がなければ、所有主体を表す変項を‘z’で示し、所有対象を‘y’で示す。これは元々の〈存在〉の概念構造における間接内項を‘z’で示すこととつながりを持たせるためである。

105 「擁する」「誇る」は、山岡(2000a, 2000b)の記述を参考にして、ここに含めた。

106 これは西山(2003)の「絶対存在文」の「ある(いる)」に相当する。例えば、バス旅行でバスに乗っている人を確認する場合に「今いない人がいる」という場合の「いる」がそれに相当する。詳細は西山(2003)の第9章「名詞句の解釈と存在文の意味」を参照のこと。

107 「派生の道筋が想定しにくく、特に現代語において、この意外はほとんど「はいる(這入)」という語形に交替していることからすると、別語である可能性が考えられる。また、「要る」は訓読系の文献には見られず、この点でも「入る」とは異質である。』(『日本国語大辞典』第2版の「いる」の項の語誌より)

108 この位置関係は物理的關係だけでなく、抽象的な位置関係も含む。

109 辞書では「赤子の口に乳首を含める」(『明鏡国語辞典』より)のような用法が記述されているが、現代語の用法としては「含ませる」のほうがよく使われると考えられる。

110 この用例を発生ST型に入れるのは、「とげが生える」という現象のメタファーになっていると考えられるからである。つまり、ある「悪意」はその内在する性質によって、ある「言葉」の中に自らを発生させるという把握の仕方である。

111 「脱使役化」とは上位事象の外項を抑制して項構造にリンクしないようにすることで、使役変化動詞を自動詞にすることである。影山(1996)によれば、使役動詞から自動詞が派生するパターンには2つあり、もう1つは外項と内項の同定によるもので、これは「反使役化」と呼ばれる。なお、この概念と所有主体の他動詞文とのつながりについては4.2.3で改めて取り上げて具体的に論じる。

112 ここでは「痕跡的認知」を、国広(2002)に従い、「本来は変化の結果ではないものも“あたかも変化した結果として今見るような形をしている”というふうには認知すること」(同書:9)という意味で使っている。しかし、広く捉えた場合、「現在の対象の状態が成立した因果関係を類推し、ある事象の結果、その状態が存在すると認知すること」も指す。このように捉えると、本論文の所有主体の他動詞文のT型の生成プロセスにおける「上位事象の付加」は痕跡的認知による把握だと言い換えられるだろう。

113 「まともな受身」とは直接受身のことで、元の能動文と項の数が変化しない受身のことを指す。

114 「第三者の受身」とは間接受身のことで、元の能動文にはない名詞句(第三者)が主語となり項の数が1

- つ増える受身のことを指す。
- 115 「容器のメタファー」とは、具体的なモノでないものをモノとして捉える存在のメタファーの一種で、あるものを容器に見立てて、その中に対象物があるというイメージで捉えることをいう。
- 116 たとえば、「席に着く」は実際には「席のところに到着する」ことではなく、そこに用意されているいすなどに腰掛けることを意味している。また「母の言うことを聞く」では、実際には「言葉を聞くという動作」ではなく、言われたように行動することを意味している。
- 117 これは西山 (2003) の「絶対存在文」の分析に用いられている集合の概念からヒントを得ている。
- 118 「他動性調和の原則」とは複合動詞が語彙部門で形成されるにあたって、他動詞と他動詞、自動詞と自動詞が組み合わせる原則のことである。より正確には外項と内項の有無で考えた場合、外項をもつ動詞同士、または内項だけをもつ動詞同士は組み合わせるが、外項をもつ動詞と内項しか持たない動詞は組み合わせられないという原則である。(影山 1993 : 116-117)
- 119 これは杉岡も指摘していることだが、「部屋が { \* 1時間 / 1時間で } 暖まった」「(工事をして) { \* 半日 / 半日で } 車道が狭まった」のようなアスペクトに関するテストの結果からも「まる」動詞が到達動詞になっており、限界性をもつことがわかる。
- 120 杉岡は CONTROL を持っていると考えた根拠として、「風よ、強まれ！」のような命令形であらわれることも可能であることを指摘している。(同書 : 107) この分析は妥当であり、本論文も自発変化の「～まる」は反使役化が起きていると考える。
- 121 本論文では、両用動詞は和語に限定して分析する。
- 122 「閉ざす」については、「棒状の物を戸に差すの意から。「閉じる」とは別語源(『明鏡国語辞典』大修館書店)であり、『日本国語大辞典』(小学館)で「閉ざす」(他動詞)の初出例をみると、「戸をしめて営業をやめる」の意味では19世紀終わりの坪内逍遙の作品から採られており、「中に閉じこめる」の意味の初出例は20世紀初めの国木田独歩の作品から採られている。
- 123 小型の国語辞典では、『新明解国語辞典』(三省堂)も『明鏡国語辞典』(大修館書店)も『岩波国語辞典』(岩波書店)も「噴き上がる」「噴き出る」は見出し語になく、「噴き上げる」「噴き出す」のみが見出し語にたっている。このことから「噴き上げる」「噴き出る」が非対格(複合)自動詞として定着していることが窺える。
- 124 ここでの「両極化接辞付加タイプ」と「活用型による自他交替タイプ」は、それぞれ奥津(1967)の「両極化転形(1)」と「両極化転形(2)」のことを指す。それぞれの内容は註の9と10を参照。本論文では、「両極化」という用語をは奥津の「両極化転形(1)」にのみ使用し、「両極化転形(2)」(自動詞化にも他動詞化にも働く「-er」接辞)は「活用型による自他交替のタイプ」と呼ぶことにする。(小柳(2008)では「自他顕在化辞」をとるタイプと命名したものに相当する)。
- 125 「垂れる」という自動詞の形態については、歴史的に見ると他動詞の形態であった。これを踏まえて、後の考察で分類を再考する。
- 126 後の考察で「状態・位置変化到達S型」というタイプを設定し、そこに分類されることになる。
- 127 「山田さんは歌の音程をはずす」は非意図的な現象として「山田さんの歌の音程がはずれる」という意味を表すことができる。つまり、「音程をはずす」はT型の所有主体の他動詞文だと考えることができる。しかし、「音程をはずれる」という表現は不自然である。鈴木(1985)でも「音程をはずれる」について「成立しがたい」(同書 : 116)と述べている。「ロケットが軌道をはずれる」の場合は、ヲ格が離脱の場所を表すヲ格になっていると考えられる。この類推から「山田さんが音程をはずれる」という言い方が生まれるとも考えられるが、許容度は低いだろう。
- 128 鈴木(1985)では、「ある行為を、自己の意志・能力でなす「動作主体」に対して、自らは意図せずして、あるいは自己の意志に反してある体験をなすものを「経験主体」と呼ぶならば、「～を終わる」の主格には、経験主体も立ち得るということに、その特色があるのではなかろうか」(同書 : 113)と述べており、主語の意味役割の違いに言及しているが、本論文のように他動詞の意味構造そのものが2つ存在するという考え方にたっているわけではない。
- 129 須賀(1990)では(275a)の「終わる」について、「動作主の行為がまだ行われずに残されている場合でも、自動詞形「終わる」が使える。「自己紹介」とは、自分について説明するという言語行為である。その行為は、話者が自分について述べさえすれば、一応は達成される」(同書 : 25)と、その特徴を述べている。
- 130 鈴木(1985)では、「水がたれる」と「水をたれる」という言い方が成立したことによって、「たれる」⇔「たらす」という自他の対応が意識され、「水」以外にもそれがおよんだのではなかろうか。(同書 : 116)と述べている。また「垂れる」については『大辞林』(三省堂)でも「本来は四段活用の「垂る」に対する他

動詞。四段活用の「垂る」が衰退し、平安末期頃他動詞の「垂らす」が生じて以降、下二段活用の「垂る」が自動詞としても用いられるようになった」という注釈を付けている。

<sup>131</sup> 鈴木 (1985 : 108) によれば、「腹を立つ」という表現もあったが、消滅したという。

<sup>132</sup> 「ヲ終わる」については、鈴木 (1985) が「明治期になってから生まれたものかと思われる」(同書 : 117) と述べている。また水谷 (1964) が示した国立国語研究所 (1956) 『現代雑誌九十種の用語用字』で「終わる」の使用例の調査結果を見ると、「～ガ終わる」が延べ 43 例、「ヲ終わる」が延べ 11 例であった。また 1976 年に出版された文化庁『言葉に関する問答集』(第 2 集) ではこの用法について「現代語では、「終わる」が自動詞にも他動詞にも用いられるようになったと考えざるを得ない」という見方と示しており、使用頻度が高まってきている傾向が窺える。また、「ヲ間違う」についても 1983 年に出版された『言葉に関する問答集』(第 9 集) で「間違う」と「間違える」も、今まさにゆれている言葉の 1 つであると言えるだろう」と述べていることから近年広まってきた用法であることが窺える。

<sup>133</sup> (歯科医院で歯科医が患者に向かって)「は～い。口をあいてくださ～い。」と言う場合など。

<sup>134</sup> 過去にどのような動詞が両用動詞化していたかは定かではないが、「目・口」について「あく」が両用動詞化したのには認知的な際立ちが関係していたのかもしれない。「足が曲がる」は「足を曲がる」という両用動詞化がおきず「目/口をあく」において起こり、現存しているといふとしたら、「目があく」ことは人間が覚醒している状態を示す際立った特徴であり、「口があく」は人間が呼吸をしている状態を示す際立った特徴だったことによるのではないだろうか。

<sup>135</sup> メタファーであることが、ただちに成立の遅さにつながるものではないが、何らかの関係があった可能性はあるだろう。

<sup>136</sup> 『明鏡国語辞典』(大修館書店)の「終わる」の注釈はこのような視点で書かれている。「「～が終わる」は自然のなりゆきとして終了する、「～を終える」は意図的に終了するの意。「～を終わる」は中間的な言い方で、自分の意図にかかわらず終了する意。」(「表現」より)

<sup>137</sup> 着点が語彙概念構造で指定されているので、統語構造で表示しなくても意味は通じるが、表示することも可能である。例：「大きな帽子を頭に被った」「銃弾を全身に浴びた」など。

<sup>138</sup> 「ガ授かる」は「子ども・赤ちゃん」に限って成立する表現である。「移動+存在」の意味概念をベースにした「ヲ授かる」は、例えば「(神様) から (赤ちゃん) を授かる」が自然に成立するが、「ガ授かる」はやや不自然になるのも、意味概念が自然発生にシフトしているからだと考えられる。ちなみに「授かる」を自動詞として扱っている辞書(『新明解国語辞典』『岩波国語辞典』)においても、「ガ授かる」は用例として記述されていないが、インターネットの検索エンジン「google」(<http://www.google.co.jp/>)で検索すると「赤ちゃんが授かる」のような表現は「赤ちゃんを授かる」と同程度にヒットすることから、口語ではかなり定着した表現であることが窺える。

<sup>139</sup> たとえば (301b) では「将軍のコントロール下の村人」、(302b) では「田中さんが受ける分の注射」のように二者の関係の意味が解釈できるように語句を補う。

<sup>140</sup> 図 23 は佐藤 (1994) の「事態 1」「事態 2」「事態のコントロール」についての説明をもとに本論文の筆者が作成したものである。

<sup>141</sup> この図は簡略化しており、動作主と受益者の関係を示すことを主眼としている。実際には、介在性の表現では、主語名詞と目的語が全体と部分の関係ではなく、動作主が受益者本人に直接働きかけるのではない場合もある(「山田さんが家を建てた」など)。しかし、生産動詞にしても、変化を被った対象は主語名詞句となんらかの密接な関係をもつことにはかわりがない。

<sup>142</sup> 実際の動作主が無視できるように、だれがやっても同じような結果が出るもので、下位事象にモノの移動の意味概念をもつ動詞(文)を考えると、「注射する」と類似した動詞で「(山田さんは病院で)点滴をする」がある。

<sup>143</sup> 所有を表す「ある」とアスペクト形式「～である」とのつながりについては、竹沢 (2000a, 2003) が分析している。

## 参考・引用文献

### ■和文

- 阿部博幸 (1990) 「場所的存在の表現をめぐって 一日・英・中の比較による‘場所的存在’と‘所有’存在との関係」『日本語と日本文学』13 筑波大学国語国文学会 (左) 23-31
- 天野みどり (1987a) 「日本語文における<再帰性>について」『日本語の日本文学』7 筑波大学国語国文学会 1-9
- 天野みどり (1987b) 「状態変化主体の他動詞文」『国語学』151 国語学会 左 1-14 (110-97)
- 天野みどり (1991) 「経験的間接関与表現 一構文間の意味的密接性の違い一」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版 191-210
- 天野みどり (2002) 『文の理解と意味の創造』笠間書院
- アラム佐々木幸子 (2001) 「燃やしたけれど燃えなかった」のはなぜ? 一「弱い達成動詞」と「強い達成動詞」一」南雅彦、アラム佐々木幸子編『言語学と日本語教育2』くろしお出版 57-74
- 飯田隆 (2002) 「存在と言語 一存在文の意味論」『西洋精神史における言語観の諸相』慶應義塾大学出版 1-21
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店
- 池上嘉彦 (1993) 「<移動>のスキーマと<行為>のスキーマ 一日本語の「ヲ格+移動動詞」構造の類型論的考察一」『外国語科研究紀要』43 (3) 東京大学教養学部外国語科 34-53
- 稲村すみ代 (1995) 「再帰構文について」『東京外国語大学日本語学科年報』16 55-80
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語・下・意味解釈を中心に』大修館書店
- 今泉志奈子 (2003) 「日本語動詞の分類にもとづく統語論」『日本語学』22(10) 明治書院 24-39
- 大倉直子 (2004) 「所有関係構文と派生的意味解釈」『言語科学研究: 神田外語大学大学院紀要』10 神田外語大学 41-65
- 岡智之 (2002) 「存在構文に基づく日本語諸構文のネットワーク 一日本語文法論への存在論的アプローチ」『認知言語学論考』2 ひつじ書房 111-156
- 奥津敬一郎 (1967) 「自動化・他動化および両極化転形 一自・他動詞の対応一」『国語学』70 46-66
- 尾上圭介 (1998-1999) 「文法を考える5 出来文」『日本語学』17(7),17(10),18(1) 明治書院
- 尾上圭介・西村義樹 (1997) 「国語学と認知言語学の対話1 主語をめぐって」『言語』26 (12) 大修館書店 82-95
- 小柳昇 (2008) 「自他動詞の派生対立の分類再考 一自動詞と他動詞の両方に現れる「-er」の位置づけ一」『言語教育研究』8 拓殖大学大学院言語教育研究科 143-158
- 影山太郎 (1991) 「統語構造と語彙構造のヴォイス変換」『日本語シンポジウム「言語理論と日本語教育相互活性化」』第4回予稿集 49-58
- 影山太郎 (1993) 『文法と語構成』ひつじ書房
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論 一言語と認知の接点一』くろしお出版
- 影山太郎・由本洋子 (1997) 『語形成と概念構造』研究社出版
- 影山太郎 (1998) 「gush 動詞の自他交替と非対格性」『筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究 研究報告書 I 平成9年度』47-56
- 影山太郎 (2000) 「自他交替の意味的メカニズム」丸田・須賀編『日英語の自他の交替』ひつじ書房 33-69
- 影山太郎編 (2001) 『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店
- 影山太郎 (2002a) 「動作主名詞における語彙と統語の境界」『国語学』53 (1) 44-55
- 影山太郎 (2002b) 「非対格構造の他動詞」伊藤たかね編「文法理論: レキシコンと統語」東京大学出版会 119-145
- 影山太郎 (2002c) 「概念構造の拡充パターンと有界性」『日本語文法』2 (2) 日本語文法学会 22-45
- 影山太郎 (2002d) 「動詞意味論を超えて」『言語』31(12) 大修館書店 22-29
- 影山太郎 (2003) 「動作主属性文における他動詞の自動詞化」『市河賞 36年の奇跡』開拓社 271-280
- 影山太郎 (2004) 「存在・所有の軽動詞構文と意味編入」影山・岸本 (編)『日本語の分析と言語類型 柴谷方良教授還暦記念論文集』くろしお出版 3-23
- 川野靖子 (2000) 「主体変化を表す他動詞文の分析」『筑波日本語研究』5 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科日本語学研究室 39-52
- 菊地康人 (2000) 「所有「ある」と「もっている」」『世界の日本語教育』10 国際交流基金日本語国際センター 147-165
- 岸本秀樹 (2003) 「「ある」「いる」の交替現象 一存在・所有の概念と文法形式」『言語』32 (11) 大修館書

店 45-51

- 岸本秀樹 (2005) 『統語構造と文法関係』くろしお出版
- 木村睦子 (1996) 「自他両用動詞の実態」『山口昭徳教授還暦記念国語学論集』明治書院 540-562
- 金水敏 (1994) 「連体修飾の「～タ」について」田窪行則編『日本語の名詞修飾表現：言語学、日本語教育、機械翻訳の接点』くろしお出版 29-65
- 金水敏 (2003) 「所有表現の歴史的変化」『言語』32 (11) 大修館書店 38-44
- 金水敏 (2005) 「歴史的に見た「いる」と「ある」の関係」『日本語文法』5 (1) 日本語文法学会 138-157
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』15 (金田一春彦編 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房、に再録)
- 工藤真由美 (1987) 「現代日本語のアスペクトについて」『教育国語』91 むぎ書房 2-21
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- 国広哲弥 (2002) 「意味とは何か」『国語学』47 (11) 国語学会 6-12
- 久野暉・ジョンソン由紀 (2005) 「日本語の「非規範二重主語構文」について」南雅彦編『言語学と日本語教育4』くろしお出版 13-24
- 熊代敏行 (2002) 「日本語の「にが」構文と分裂主語性」西村義樹 (編) 『認知言語学 I : 事象構造 (シリーズ言語科学2)』243-260
- 倉持保男 (1986) 「「腹が立つ」と「腹を立てる」」『松村明教授古稀記念 国語研究論集』明治書院 706-722
- 児玉美智子 (1989) 「状態変化主体他動詞文の成立と構造」『甲子園短期大紀要』9 甲子園短期大学 67-80
- 櫻井光昭 (1977) 「古代語の再帰的他動詞」『學術研究 (国語・国文学編)』26 早稲田大学教育学部 67-82
- 佐藤琢三 (1994) 「他動詞表現と介在性」『日本語教育』84 日本語教育学会 53-64
- 佐藤琢三 (2005) 『自動詞文と他動詞文の意味論』笠間書院
- 澤田浩子 (2003) 「所有物の属性認識」『言語』32 (11) 大修館書店 54-60
- 柴谷方良 (2001) 「日本語の非規範的構文について」南雅彦、アラム佐々木幸子編『言語学と日本語教育2』くろしお出版 1-37
- 島田昌彦 (1979) 『国語における自動詞と他動詞』明治書院
- 須賀一好 (1981) 「自他違い、一自動詞と目的語、そして自他の分類」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』大修館書店 543-567
- 須賀一好 (1990) 「<終了>の意味と自他の形態 —他動詞形用法に接近した自動詞形用法の分析—」『日本語と日本文学』13 筑波大学国語国文学会 20-27
- 須賀一好 (1999) 「動詞「かわる」の意味と自他」『山形大学日本語教育論集』2 山形大学 69-78
- 須賀一好 (2000) 「行為の主体に関する認識と表現」『山形大学日本語教育論集』3 山形大学 21-30
- 須賀一好・早津恵美子編 (1995) 『動詞の自他』ひつじ書房
- 杉岡洋子 (1996) 「自動詞と共にあらわれる対格表現をめぐる」『慶応義塾大学言語文化研究紀要』28 慶応義塾大学言語文化研究所 243-256
- 杉岡洋子 (1999) 「状態変化動詞の派生をめぐる予備的考察」『先端的言語理論の構築とその多角的な実証 1999 年度報告書』神田外語大学 227-248
- 杉岡洋子 (2002) 「形容詞から派生する動詞の自他交替をめぐる」伊藤たかね編「文法理論：レキシコンと統語」東京大学出版会 91-116
- 杉本武 (1995) 「移動格の「を」について」『日本語研究』15 東京都立大学国語学研究室 120-129
- 鈴木英夫 (1985) 「「ヲ+自動詞」の消長について」『国語と国文学』東京大学国語国文学会 62 (5) 104-117
- 高橋明 (2003) 「ヒンディー語の所有表現」『言語』32 (11) 大修館書店 52-53
- 高橋太郎 (1975) 「文中にあらわれる所属関係の種々相」『国語学』103 1-17
- 竹沢幸一 (2000a) 「アルの統語的二面性 —be/have の比較に基づく日本語のいくつかの構文の統語的解体の試み」『東アジア言語文化の総合的研究 (筑波大学学内プロジェクト (A) 研究報告書)』75-100
- 竹沢幸一 (2000b) 「空間表現の統語論 —項と述部の対立に基づくアプローチ—」『空間表現と文法』くろしお出版 163-214
- 竹沢幸一 (2003) 「「ある」と have/be の統語論」『言語』32 (11) 大修館書店 61-67
- 谷口一美 (2005) 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』ひつじ書房
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 角田三枝 (2000) 「いわゆる所有文型の中の感情、感覚などの表現 —「車のある人」と「恨みのある人」—」『人間文化論叢』3 お茶の水女子大学大学院人間文化研究所 283-292
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 外崎淑子 (2005) 『日本語述語の統語構造と語形成 —意味役割の標示と状態述語、心理述語、使役構文から

- の提言』(ひつじ研究叢書(言語編)第39巻)ひつじ書房
- 中右実・西村義樹(1998)『構文と事象構造(日英語比較選書5)』研究社出版
- 中桐謙一郎(2007)「日本語の所有文に関する一考察」『太成学院大学紀要』9 太成学院大学 65-75
- 中村芳久(1998)「認知類型論の試み: 際立ち vs. 参照点」『Kansai Linguistic Society: Proceedings of the Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society: KLS』18 関西言語学会 256-262
- 中村芳久(1999)「ヴォイス・システム: 態間関係の認知メカニズム」『金沢大学文学部論集 言語・文学篇』19 金沢大学 36-65
- 中村芳久(2000)「認知文法から見た語彙と構文—自他交替と受動態の文法化—」『金沢大学文学部論集 言語・文学篇』20 金沢大学 75-103
- 中村芳久(2001)「二重目的語構文の認知構造—構文内ネットワークと構文間ネットワークの症例—」『認知言語学論考』1 ひつじ書房 59-110
- 新居田純野(1999)「人の所有を表す表現について—「人がある/いる」と「人をもつ」の両形式の分析から—」アラム佐々木幸子他『言語学と日本語教育』くろしお出版 245-258
- 西山佑司(1994)「日本語の存在文と変項名詞句」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』26 慶応義塾大学言語文化研究所 115-148
- 西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味と語用論』ひつじ書房
- 仁田義雄(1982)「再帰動詞、再帰用法—Lexico-Syntaxの姿勢から—」『日本語教育』47 日本語教育学会 79-90
- 仁田義雄(1997)『日本語文法研究序説』くろしお出版
- 長谷川信子(1999)『生成日本語学入門』大修館書店
- 長谷川信子(2002)「非動作主主語他動詞文の分析: Little vの素性について」『筑波大学「東西言語文化の類型異論」特別プロジェクト研究報告書 平成13年 V』801-816
- 早津恵美子(1989a)「有対他動詞と無対他動詞の違いについて—意味的な特徴を中心に—」『言語研究』95 日本語言語学会 231-255
- 早津恵美子(1989b)「有対他動詞と無対他動詞の意味上の分布」『計量国語学』16(8) 計量国語学会 353-364
- 早津恵美子(1991)「所有者主語の使役」『東京外国語大学日本語学科年報』13 東京外国語大学日本語学科 1-25
- 坂野収(2004)「所動詞的他動詞再考」『中田清一教授退任記念論集』青山学院大学大学院国際コミュニケーション学会言語研究部会 75-85
- 福島直恭(1991)「他動性と自動性の対立の解消に関する一考察」『学習院女子短期大学紀要』29 学習院女子大学 107-122
- プラシャント・パルデシ・堀江薫(2005)「「非意図的な出来事」の認知類型論」南雅彦編『言語学と日本語教育4』くろしお出版 111-123
- 文化庁(1976)『言葉に関する問答集 第2集』、(1983)『言葉に関する問答集 第9集』大蔵省印刷局  
(文化庁(1995)『言葉に関する問答集 総集編』所収)
- 細川由起子(1990)「日本語のいわゆる再帰動詞とその直接受動構文について」『アジアの諸言語と一般言語学』三省堂 636-645
- 益岡隆志(1979)「日本語の経験的間接関与構文と英語のhave構文について」『英語と日本語と: 林栄一教授還暦記念論文集』くろしお出版 345-358
- 松下大三郎(1923-1924)「動詞の自他被使動の研究」『国学院雑誌』29(12)、30(1-2) 国学院大学(須賀一好・早津恵美子編(1995)『動詞の自他』ひつじ書房、に再録 13-40)
- 松下大三郎(1977)『増補校訂 標準日本口語法』(徳田政信編) 勉誠社
- 眞野美穂(2004a)「所有関係と非規範的構文について」影山・岸本(編)『日本語の分析と言語類型 柴谷方良教授還暦記念論文集』くろしお出版 109-125
- 眞野美穂(2004b)「非規範的構文と概念空間の予備的考察」『神戸言語学論叢』4 神戸大学文学部言語学研究室 85-106
- 三上章(1953)『現代語法序説』刀江書院(1972 復刊 くろしお出版)
- 水谷静夫(1964)「話を終わる」と「話を終える」『ゆれている文法(口語文法講座3)』明治書院 45-60
- 三宅知宏(1996)「日本語の移動動詞の対格標示について」『言語研究』110 日本語言語学会 143-168
- 宮島達夫(1985)「ドアをあけたが、あかなかった」『計量国語学』14(8) 計量国語学会 335-353
- 村木新次郎(1991)『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
- 森田良行(1990)「自他同形動詞の諸問題」『国文学研究』120 早稲田大学国文学会 331-341(『動詞の意味論的文法研究』(1994) 明治書院に所収 232-252)
- 森田良行(2000)「自他両用動詞から自他同形動詞へ」『早稲田日本語研究』8 早稲田大学国語学会 左(1)~(13)

- 森山新 (2003) 「認知言語学的観点から見た格助詞ヲの意味構造」『台湾日本語文学報』18 291-311
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- ヤコブセン, ウェスリー・M (1989) 「他動性とプロトタイプ論」久野・柴谷編『日本語学の新展開』くろしお出版 213-248
- 山岡政紀 (2000a) 『日本語の述語と文機能』くろしお出版
- 山岡政紀 (2000b) 「関係動詞の語彙と文法的特徴」『日本語科学』8 国立国語研究所 29-53
- 山口巖 (2003) 「「もつ」の言語・「ある」の言語」『言語』32 (11) 大修館書店 30-37
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学言論』くろしお出版
- 鷲尾龍一 (2003) 「もつ・ある・なる —助動詞の体系と非対格性」『言語』32 (11) 大修館書店 69-75

#### ■英文

- Bloomfield, Leonard (1933) "Language" Holt, Rinehart and Winston.
- Bruzio, Luigi (1986) "Italian Syntax: A Government-Binding Approach" Reidel.
- Chomsky, Noam (1981) "Lectures on Government and Binding." Foris.
- Croft, William (2001) "Radical construction grammar: syntactic theory in typological perspective" Oxford University Press.
- Foley, William and Robert D. Van Valin, Jr (1984) "Functional syntax and universal grammar" Cambridge University Press.
- Goldberg, Adele E. (1995) "Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure" University of Chicago Press.
- Heine, Bernd (1997) "Possession: Cognitive sources, forces, and Grammaticalization" Cambridge University Press.
- Hopper, Paul and Sandra Thompson (1980) "Transitivity in Grammar and Discourse" *Language* 56: 251-299
- Jackendoff, Ray (1983) "Semantics and Cognition" MIT Press.
- Jackendoff, Ray (1990) "Semantic Structures" MIT Press.
- Kageyama, Taro (1997) "Denominal Verbs and Relative Salience in Lexical Conceptual Structure," in Taro Kageyama (ed.) *Verb Semantics and Syntactic Structure*. 45-96. Kurosio Publishers.
- Kageyama, Taro (2002a) "On the Role of the Event Structure Argument in Voice Alternation" 『人文論集』52(1): 96-79.
- Kageyama, Taro (2002b) "Conceptual Cloning: The Semantic Licensing of Adjuncts and Nonselected Arguments" *Japanese/Korean Linguistics* 11: 20-33. Stanford, California.
- Klooster, W.G. (1972) "The structure underlying measure phrase sentences" Dordrecht, Reidel
- Langacker, R. W. (1987) "Foundations of Cognitive Grammar. Vol.I. Theoretical Perspective." Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1993) "Reference-point constructions." *Cognitive Linguistics* 4(1): 1-38.
- Langacker, R. W. (1995) "Possession and Possessive constructions" in John R. Taylor, Robert E. MacLaury (ed.), *Language and the cognitive construal of the world*. 51-79.
- Levin, Beth, and Malka Rappaport Hovav (1995) "Unaccusativity : At the Syntax-Lexical Semantics Interface." MIT Press.
- Perlmutter, David (1978) "Impersonal passives and the unaccusative hypothesis." *BLS* 4: 157-189.
- Perlmutter, David and Paul Postal (1984) "The 1-Advancement Exclusiveness Law," in D. Perlmutter and C. Rosen (eds.) *Studies in Relational Grammar 2*. 81-125. University of Chicago Press.
- Rappaport, Malka and Beth Levin (1988) "What to Do with  $\theta$ -roles" in W. Wilkins ed. *Thematic Relations (Syntax and Semantics 21)*. 7-36. Academic Press.
- Vendler, Zeno (1967) "Linguistics in Philosophy" Cornell University Press.

#### ■国語辞典

- 『岩波国語辞典』第六版 岩波書店、2000
- 『現代国語例解辞典』初版 小学館、1985
- 『新明解国語辞典』第五版 三省堂、1997
- 『大辞林』第三版 三省堂、2006
- 『日本国語大辞典』第二版 小学館、2000
- 『明鏡国語辞典』初版 大修館書店、2002

## 謝辞

本論文は、博士前期課程において研究した成果をまとめたものです。指導教授の遠藤裕子教授には、認知文法および認知意味論の基礎から本論文の完成に至るまでご助言、ご指導を賜りました。短期間ながら研究成果をまとめることができたのは、「考えをまず書いてみる」ことの大切さをご教示いただいたおかげです。

また、遠藤研究室の皆様とはゼミの時間を通じて有意義な意見交換ができ、論文の不備を修正するだけでなく、新たな刺激によって論文の質を高めることができました。そして、友人の秋月康夫氏には論文全体に目を通していただき、率直なご意見をいただいたことを感謝いたします。

最後に、博士前期課程を通じて陰ながら支えてくれた家族に感謝いたします。